
掴んだ新たな希望

暁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

掴んだ新たな希望

【Zコード】

N1708V

【作者名】

暁

【あらすじ】

気がついたら、目の前には車のライト。ああ、終わった。

その次に気がついたら、目の前には金髪のお兄さんが立つていて、

こう告げる。

「生きたまま、転生してみない？」

「生きたまま、転生してみない？」

そうして転生した先は、貴族。私は公爵家の末子で、優しい兄と姉がいた。

楽しい生活。家族を愛し、愛される生活。

人生って、こんなに楽しいの？

ものすごく病弱な体ですが。

それでも、生きますよ！ せっかく手に入れた第一の人生。無駄にするつもりはありませんっ！

数日に一度は熱を出すけど、それでも頑張って生きていくのだ！

子の心、親知らず。親の心、子知らず。

それでも、互いに愛し、生きていく家族愛がテーマのお話です。

神との契約

その日は、暇だった。だから、最近あんまり外に出ていないこと

を思い出し、外に出たんだ。

家中用の服から外用の服に着替え、私は久しぶりに買い物に出かけた。

そして、気がつくと、目の前には、白く光る車のライト。

終わった。さよなら、私。さよなら、みんな。

鉄の臭いが、私の鼻腔をくすぐった。

神崎有紗。享年十五歳、か。笑えないなあ。

あつという間だった。気がついたら車が目の前にいて、私は撥ねられた。……つまり、私は死んだ。

「いや、死んでないよ。意識不明だけど

そう思つてみると、どこからか、声が聞こえてきた。何だらう。あたりを見回すと、そこには、白い服を着た、金髪のお兄さんが立っていた。

「君、死んでないよ。まあ、しばらくは意識が戻らないけどね」

「しばらくつてどれくらいか?」

「短く見積もつて、三年位かな」

……長いよ。

「うん、長いよねえ。だからさ、君、生きたままで、転生してみたい?」

曰く、先ほど、「しばらく意識が戻らない」と言つたのは嘘で、本当は、意識が戻つたらそれは奇跡と言えるほどに、私の状態は悪いらしい。

だから、お兄さんは提案した。この世界で生きたまま、ほかの世界に転生することを。

「もちろん、一つの魂が二つの体を持つとするわけだから、丈夫な体でいられるはずも無い。転生したら、君は脆弱な身を持つことになる」

だが、人生を楽しむことは、出来る。メリットも、デメリットもある。だから、ゆっくり決めるといい。お兄さんは、優しく微笑みながら私に告げる。

でも、私の答えは、もう決まってるよ。

「転生させて、お兄さん」

今的人生は、ひどく悪いわけではないが、好きと言える人生じゃなかつた。だから、新しい生をください。今度こそ、人生を好きだと言えるように。

「決意は固いみたいだね。なら、行っておいで、君の新たな家族の元へ」

そして、今度こそ、幸せな人生だと言える暮らしが待つていることを、ここで祈つておるよ。

アリサ
有紗、君の来世に、幸多からんことを。

新たな家族

転生してから、早五年の月日が流れた。私は、幸か不幸か、前世と同じ名であるアリサと名付けられ、幸せな、新たな人生を送っている。ベッドの上で。

あのお兄さんが言っていたように、転生した私の体は、思いの外、脆弱だった。

少し無理をすればすぐに息切れし、それで尚無理をすれば、翌日は間違いなく熱を出した。

でも、それでも幸せだと言える。だって、優しい家族が、私にはいるから。

「アリサ、調子はどうだい？」

「やあ、アリサ」

「にいさまー！」

ベッドに横たわりながら前世と今を比べていると、兄たちが私の部屋を訪れた。訪れたのは、一番上の兄、ルウインと、一番目の兄、セインだった。

ちなみに、今の私には、兄が三人、そして、姉が一人いる。前世では一人つ子だった私としては、とても嬉しい状況だ。

それに、兄も姉も、私とはずいぶんと年が離れているからか、こうやって私の部屋を訪れては、たくさん可愛がってくれるのだ。だから、私は兄と姉が大好きだ。

「ああ、アリサ。無理に起き上がるんじゃない。ほら、横になつて」「だいじょうぶだよう」「だいじょうぶだよう」

「いいから。僕たちを心配させないためにも、横になつていって？」

一人の兄の来訪に、体を起こそうとしていた私だったのだが、二人の兄のその言葉に、渋々諦め、またベッドに横になる。

すると、私の行動を優しく見守つていた兄たちは、私の頭を撫でる。よしよしと、撫でられた。

でも、撫で方が荒いです、にいさま。私は声に出して、一人の手を止める。

「ルウにいさま、セイにいわま、撫でるの、いたい。頭、ぼさぼさになつちやう

私が言つと、一人の手は即座に止まる。そして、キョロキョロと、何かを探し始めた。

ちなみに、ルウにいさまや、セイにいさまとは、私がこの二人の兄を呼ぶときの呼び方である。私しか呼ばない呼び方だ。

子供の舌では、ルウインという名は言づらく、何度も何度も言おうと努力しているうちに、何故かルウにいさまになつた。

セイにいさまは、ルウにいさまだけ愛称で呼ばれるのがイヤだつたらしく、私に直接こう呼んでくれ、と頼みに来た。

……ちなみに、これはほかの兄や姉も同様である。

そんなことを考えていると、突如、部屋の扉が開かれる。上の姉、ジャスリーンが来たのだ。

「探し物はこれかしら？ 兄さん、セイン」

そう言つてリンねえさまがルウにいさまたちに見せたものは、櫛だった。

……先ほど、自分たちが撫でたせいで、私の髪がぼさぼさにな

つたからか。

リンねえさまは、悔しそうな顔をしているルウにいたまとセイにいたまをよそに、私のいるベッドの開いている場所に腰掛けた。

「アリサ、今日は調子はいいみたいね」

「うんっ！ アリサは元気いっぱいだよ！」

私がにっこり微笑みながら答えると、リンねえさまも微笑む。そして、先ほどから持っていた櫛を使って、先ほどいたまたちにやられた髪をきれいに梳き始めた。

そんなリンねえさまと私を、にこにこまたちは悔しそうに眺める。……にこにこ、その目、怖い。

「あーっ！ ルウインにも、セインにも、いじにいたーっ！ 母さんが二人を呼んでるよ」

「つむきこむきこ、カイン。そんなに呼ばなくとも聞こえてる」

「おにーちゃんたちも十分うるさいって。早く行きなよ、お母さん が首を長くして待ってる」

「エルミナ、お前も母さんの手先か」

そうしていると、またも部屋の扉が開かれた。次に現れたのは、私のすぐ上の兄と姉の、カイにいたま、ミアねえさまだ。二人は、双子である。

「誰が手先ですか？ ルウイン、セイン。その、悪の手先のよつな言い方はなんですか」

「あ、母さん。待ちきれなくなつたのか

すると、何だか恐ろしいものが近づいてきていたことが分かる。その恐ろしいものは、かあさまだつた。そして、ルウにいたまとセイ

イにいたまと捕まえたかあさまは、にっこり笑つて私を見て、口を開く。

「今日は調子がいいみたいね、アリサ。いいことだわ
「うん。ねえさまにも言つたけど、アリサ、元気いっぱいだよ
「そう。ほら、あなたたちは仕事の時間でしょう。早く行きなさい
！」

私が言つと、かあさまは一度その笑みを消し、にこさま、ねえさまたちに告げる。その言葉を告げられたにこさまたちは、急いで私の部屋の時計で時間を確認し、慌ただしく出かけていった。

「アリサも、今日は少し、お庭に出来る？」

「いいの！？」

「少しだけならね。太陽の光にたまには当たらなくちゃ、逆に悪くなっちゃうから」

かあさまはそう言つて、私をベッドから起こし、抱き上げる。そしてそのまま、私はかあまと一緒に、庭に出た。

庭には、きれいな花がたくさん咲き誇つていた。以前外に出たときに、かあさまが家の誇りだと言つていた花は、今、きれいに咲き誇つていた。

「かあさま、お花、近くで見たい。おひして」

「転ばないよう、気をつけるのよ」

「うん！」

かあさまはそつと言つながら、抱き上げていた私をゆっくりと下ろした。下ろされた私は、すぐに花の元へ向かい、のんびりと花を眺める。その瞬間。

「きやー、」

「アリサー!?」

花の中に隠れていたらしい虫に、指を刺された。痛い。

かあさま曰く、私の指を刺した虫は、強くは無いが、一応、毒を持っている虫だつたらし。結果、この日の庭の散歩はこれで終了し、家の中に戻ると、すぐに刺された指の消毒をされ、しばらく眠つているよう命じられた。

……大丈夫だと思うけどなあ。

でも、この身が脆弱であることは、生まれる前から分かっていたことだ。だから、休んでおくことにした。これで病気でもしようものなら、にいさまたちが揃つて、家の誇りである花のすべてを刈り取りかねない。

そんなことにならないためにも、今は、ゆっくり休むことにした。むにや。

それから目を覚ましたのは、お昼前だつた。お腹がすいて、目が覚めた。

「おなかすいた……」

私は眩きながらベッドから降りて、食堂へと向かった。

「おや？ 噂の末の姫君ですか？ ドーリス公爵殿」

「ええ、ちょっと失礼」

今日は、お客様が来る日だつたのか。……油断した。

そう思つてはいるが、ドーリス公爵と呼ばれた人、つていうか、どうさまが私の元へ駆けてくる。

「アリサ、寝ていなくていいのか？」ほら、お部屋に戻つてなさい」「だつて、おなかすいたの」

私が言つと同時に、お腹がきゅるるるーっと、子犬の鳴き声のよくな音をたてる。それを聞いたとつとまは笑い、聞こえてしまつたらしいお客様も、同じよつに笑つていた。

それからとうさまはお客様のところへ戻り、私はメイドを呼ばれ、メイドに先導されながら食堂へ向かつた。

「あら、アリサ。どうしたの？　お腹がすいた？」「うん。『飯、まだ？』

私が問うと、かあさまは「もう少しだから待つていなさい」と、微笑みながら告げる。

そして、ふと思つて出したかのように、口を開いた。

「そういえば、お客様に会わなかつた？」「会つたよ？　それがどうかしたの？」

そして、お客様でふと思つて出した。あのお客様が言つていた『尊のつて、何だう。』
聞いたら、答えてくれるだらうか。そう思つながら、私は尋ねてみた。

「アリサはまだ知らなくていいからね。ほら、『飯用意できたみたいよ？　食べようか』

「どうぞまはっ。」

「お父さまはね、せつきのお客様と一緒に食べてくれるんですつて」

ああ、だから一人分しか用意されてないのか。

「あ、いただきます、しようつね」

「うん。いただきます」

私が手を合わせて言いつと、かあさまはにっこりと微笑んだ。そして、私はそんなあさまを見ながら食事に手を伸ばした。だつて、お客様の前でお腹が鳴るくらい、お腹がすいていたんだ。

* * * * * side 父

「では、続きを移動してからにしましょうか」

「ええ」

そう言つて応接間を出、玄関に向かつていると、部屋にいるはずの末娘の姿が見える。

何をしているんだ、あの子は。寝ていなくていいのか。そう思いながら、私は来客者に一言断り、アリサの元へ駆け寄る。

「アリサ、寝ていなくても大丈夫なのか？ サあ、熱を出す前に部屋に戻るわね」

私は、あの子に無理をさせる前に部屋に戻るわとする。が、アリサがソレを阻んだ。

「だつて、おなかすいたの」

そう言いつと同時に、小さな小さな子犬の鳴き声のような音が、あたりに響く。それが、この子のお腹が鳴った音だと氣づくのに、少しの時間を要した。

そして、それがそうだと分かつてしまつと笑いが零れる。それは、来客者である伯爵殿も同じのようだつた。

まったく、この子は。そう思いながら、私はメイドを呼び、アリサを食堂へと向かわせる。

「お待たせして申し訳ない」

「いえいえ。あれが病弱と噂の、末の姫君ですか」

ドーリス公爵家の末の姫は、病弱であるがために、父であるドーリス公爵や、宰相補佐、ルワイン、近衛大隊長、セイン、王宮図書館司書、ジャスリーン、セインと並び、近衛隊長候補筆頭、カイン、そして、王宮薬剤所の天才薬剤師、エルミナによつて、社交界に顔を出すことは、全面的に止められている。

それが、貴族間で広まつてゐる、アリサの噂だ。

ルワインも、セイン、ジャスリーン、そして、カイン、エルミナも、アリサの年の頃には、既に社交界デビューを果たしてゐた。

今のアリサがデビューをしないのは、ひとえに、病弱な体のせいだ。但し、それは表向きの理由である。

本当の理由は、シスコンの兄と姉たちが、アリサの社交界デビューを、父に止めるよう説得したのだ。……五人がかりで。

だが、この本当の理由を知る者は、説得をした子供たちと、された本人、そして妻しか知らない。説得のときは、メイドにも席を外させていたからだ。

そしてもちろん、このことを、アリサは知らない。全員が、アリサの耳には入らないよう、画策していたからだ。

「噂どおり、お可愛らしい姫君ですね」

そして、その噂には、アリサは『超』がつくほどに可愛い姫だと

言つものも含まれている。決して否定はしない。
それほどに、末娘を溺愛している父であった。

兄妹のふれあい

「ご飯を食べて、その後、かあさまからの命令で部屋に戻り、横になっていた私は、玄関が開き、にこさまやねえさまが帰ってきたことに気がつく。

気がついた私は、すぐにベッドから降りて、扉の元へ向かつ。それからすぐ、部屋の扉は開かれ、仕事から帰ってきたにこさまたちが部屋に入ってきた。

その中で、私はルウににこさまをターゲットに、駆け寄り、抱きついた。

「おかえりなさい、にこさま、ねえさま」

「ただいま、アリサ」

「アリサ、僕にも抱きついてよ」

「セイン、私が先よ。そういうのは、年功序列なのっ！」

「そんなもん関係ない。カイン、エルミナ、お前等もそう思つだろう！？」

「いや、僕は単純に、アリサが元気ならそれでいい」

「私もそうだね。……って、アリサ、指、どうしたのー！？」

セインににこまとリンねえさまの言ひ合いを聞いていたニアねえさまが、私の指の怪我に気がつく。

そしてその瞬間、五人全員の目が、包帯を巻かれている私の指に集中した。

「アリサ、この怪我はどうしたのか、にこさまに正直に言つていいらん？」

「アリサに怪我をさせた奴を、僕がやつづけてあげるから、言いなさい」

「セインにい、僕も手伝つ。だから、アリサ。誰にやられたの？……ああ、そういえば、今日は来客があつたよね。その人かな？」

カイにいさま、何だか怖いです。

私が恐怖で少し後ずさつていると、ねえさまたちがこの怖いにいさまたちを止めてくれた。

リンねえさまがルウにいまと、セイにいさまの、ニアねえさまが、カイにいさまの頭に一撃を入れて、黙らせた。

「兄さん、セイン、カイン。アリサが怯えてるからやめなさい」「特に、カイン。落ち着きなさいよ、まだあの伯爵が悪いって決まつてないんだから」

まあ、原因のどこかに伯爵があるのなら、許さないけど。

ニアねえさまは呟くのだが、それも、怖い。私はニアねえさまから少し距離を取り、リンねえさまの腕をしつかり掴んだ。

リンねえさまは、私の言わんとしたことをすぐに理解し、口に出してくれる。

「ホールーミーナつ。アリサが怯てるよ。カインを止めたあんたが怖がらせてどうするの」

「え？ あ、ごめんね、アリサ。もう怖くないから、こめにちひいで」

リンねえさまが言うと、ニアねえさまはあの怖いよく分からぬものを引っ込め、私を呼ぶ。

呼ばれた私は、リンねえさまの手から逃れ、ニアねえさまの元へ向かった、のだが、セイにいさまから妨害が入った。

「アリサ、年功序列なら、僕が先だろ？」「

にいたまの大人気ない一面を見た瞬間。……少し、にいたまをいじめてみる」とした。

「ねんこひじょれつつて、なあに？」

私は、ニアねえいたまの横で、少し首をかしげながら尋ねてみる。かつては、登校拒否の引きこもりオタク中学生であった私は、この仕種がとんでもなく、凶悪的に可愛いものだと言つことを、よく知つている。

オマケに、にいたまはシスコン。勝負は、あつた。

「くうつ」

セイにこたまはそのままそつ語つて、部屋を駆け出で行く。

「セイにこたま、じうしたの？」

「アリサは気にしなくてもいいからね。セインはたまにおかしいから」

セイにこたまの奇行を、理由を分かつていながらも、故意に聞いてみた。すると、返ってきた答えは、知らなくていいといつ答えだつた。

まあ、五歳児にロリコンだ何だつて語つのは、教育に悪いかな。

それからは、セイにこたま抜きで、五人、私の部屋に集まり、話をする。

もちろん、指の怪我のことをじつかりと聞き出されました。

セイにこたまが出て行つた後、四人全員からベッドに寝られ、

それから指の怪我の原因を、しつかりと聞き出された。

「クソ虫が……。可愛いアリサの指を刺すとは……」

「今度、その虫を滅ぼせる薬の材料とかを図書室で、仕事中にでも探しておくれ」

「頼んだ、姉さん。俺は、今度からその虫を見かけたら、即、殺す」
「姉さん、薬の材料が分かつたら教えて。作るから」

……こさま、ねえさま、みんな、怖いなあ。たかが、虫如きにそんな恐ろしことを考えないでください。

だいたい、ちょこつと刺されただけですよ? それだけなのだから、そんなに田ぐじら立てないでください。怖いよう。

そうして、私はいつの間にか泣いてしまっていたらしい。兄姉たちが、急いで私の頬を伝う涙を拭う。

「どうしたの、アリサ? 指が痛い?」

「まさか、具合が悪くなつた?」

「私、お母さん呼んでくる」

「ぼ、僕も行く」

違う。違うよ、こさま、ねえさま。指は痛くないし、調子もいいよ。大丈夫だから。

でも、涙は止まらない。そして、ついに、今まで抑えてきた声が、零れた。

「う、えええええええん」

その瞬間のこさまとねえさまの焦りようが、すこかつた。かあさまはまだ来ないのか、と扉のほうをちらちら見るし、医者を呼んだほうがいいか、とか話してゐるし。

やつしていふと、ミアねえさまとカイにこさまに先導されて、かあさまが部屋にやつて來た。

「アリサ！ やつしたの？ ほーら、もう大丈夫だからね」

二人に先導されてやつてきたかあさまは、泣いている私を優しく抱き上げる。

それからば、思い切り泣いた。何故泣いているのか分からぬま、とにかく泣いた。

かあさまも、にいさまも、ねえさまも心配やつにしてたけど、それでも、思い切り泣いた。

* * * * side 母

ずつと泣いていたアリサがようやく泣き止んだかと思つと、あつと/or/間に眠りに落ちた。

泣き疲れたのやつ。これで、明日熱が出なければいいのだが。母は、そう思いながらほかの子供たちのほうを向く。さて、これからは、アリサが泣くにいたつて、何があつたかを聞き出す時間らしい。

母は、子供たちの名を、上から順に呼んだ。

「ルウイン、ジャスリーン、セイン、カイン、エルミナ。何があつたのか、正直に言いなさい」

「母さん、セイン兄さんはいないよ」

カインに言われ、母はあたりを見回してみる。そこにば、探している人間の姿は見えなかつた。

「あの子がいないなんて珍しいわね。どうかしたの？」

「アリサの可愛さに負けた」

ルウインが言つた瞬間、母は、瞬間的に停止した。が、すぐに分かつたらしい。

そのことはこれ以上気にすることを止め、本題に戻ることにしたらしい。まずは、ルウインに回答を促した。

「僕たちにも分からんのだよ。アリサ、本当にこきなり泣き出しちやつたから。なあ？」

「うん。気がついたら、目に涙が溜まつてて、それからはあつとう間だつた」

それから、アリサが泣き出すに至るまで、何があつたかを一部始終聞き出した母は、深い溜め息をついた。

「あんたたちは、この子の前で、そんな危ない話をしないの。怖かったのよ、多分」

母は、泣き疲れ、鼻を真っ赤に染めて眠る末娘を柔らかな目で見ながら、そう告げる。

同時に、ほかの子供たちに、アリサの恐怖の基準をしつかりと教え込まなくては、と、母は力強く意気込んでいた。

***** side out

私は、いつの間に眠つていたのだろう。気がついたら、いつものように、見飽きるほどに見慣れた部屋の天井が目に映り、そして、顔を動かすと、そばにはかあさまがいた。

「いたまやねえさまたちはどーだろつ。そう思いながら私はキヨキヨ口とあたりを見回すが、部屋には、にいたまたちの姿は見当

たらない。

「 あまたちがじこるんだわ。いつも、夕飯の時間まで私は部屋で、たくさん話を聞かせてくれるの。」

やう思いながら、起き上がり、ここあまたちを探して行いつゝると、今まで黙っていたかあさまが、ようやく答えをくれた。同時に、私をベッドに押し戻す。

「 あの子たちなら、今、お父さまからのお説教を受けているわよ」

だから、あなたは横になつていなさい。私はかあさまにやう言われ、ベッドに完全に固定された。まあ、精神的に、と畜ひつ意味でだが。

でも、お説教つて、どうしてだらわ。…………まさか、私がせつきて泣いたせいだらうか。

「 かあさま、ここあまたち、悪くないよ」

「 どうして?」

「 悪くないの? 一 ひとつを止めなへう? 一 もうまを止めるの? 一

かあさまの静止を振り払い、私はとつやまの書齋へ向かつ。……いや、向かおうとしたのだが、かあさまに軽々と持ち上げられ、止められた。

それでも、私は足搔く。下ろしてもう一度、暴れたのだ。

「 ひら、暴れたら熱を出すでしょ? やめなさい」

「 やあだつ! とつやまを止めるの? 一」

そう言つて、私は足搔き続けた。すると、上から深い溜め息の音が聞こえてきた。…………あれ、何だか、怖いですよ、かあさま。なんとなく、身の危険を感じた瞬間だつた。

父、ご立腹

「何をしてるんだ、お前たちはっ！」

アリサと五人の兄弟たちの父であるドーリス公爵の書斎。そこには、セインとアリサを除く四人の子供たちが集められ、父からの雷を受けていた。

「ルウイン！ お前は宰相補佐として、それでやつていけるのかつ！？」

「ジャスリーン！ 司書は、いろいろな人と関わるんだぞ。それで、いいと思っているのか！？」

「カイン！ 一人前の騎士を目指す前に、妹をもつと大事にすることを覚えろ！」

「エルミナ！ 仕事中にこんな調子だと、いつか、調合に失敗して、とんでもない薬を作り兼ねんことになるぞ！ 気を引き締めろ！」

彼は、心の底から怒っていた。理由は、彼の子供たちにあった。理由は、彼の子供たちが、体の弱い、最愛の末娘を大号泣させたからだ。末娘であるアリサは、生まれつき、体が弱く、ちょっとしたことで、すぐに熱を出す。

そして、アリサは、熱を出すと抵抗力が格段に下がるため、ほかの病気を併発しやすい。だからこそ、彼も、彼の妻も、アリサの病気には、細心の注意を払ってきた。

それは、彼のほかの子供たちも同じのはずだった。

だが、彼の子供たちは、末娘を大号泣させた。それは、熱を出す可能性を格段に高める。

つまり、ほかの病気を併発させて、時に、その命すら危ぶませか
ねないのだ。

故に、彼は、次が無いよう、子供たちをしつかりと叱ることに
たのだ。

彼や、彼の妻にとつてアリサは、ずいぶんと年を取つてから産ま
れた子だつたため、可愛さも一入だつた。

それに、体が弱く病弱となると、可愛さはより一層増した。

だから、彼は、アリサの周辺に關しては、力を入れた。アリサが
健康とは行かずとも、少しでも元気に生きていけるよう。アリサが
アリサが立派に、成長できるようだ。

「ルウイン、ジャスリーン、カイン、エルミナ、返事はビツつした！」

？
『……ごめんなさい』

「謝るのは、アリサにしなやー」

子供たちの心からの謝罪に、父は、よつやく淡く笑顔を浮かべる。
そして、優しく、子供たちに告げた。

「きつく叱つて悪かつたね。まあ、アリサに謝りに行つておいで

『はい』

そして、彼はアリサに謝罪に行く子供たちの後をついて、見守る。
そして、アリサの部屋の前につくと、彼の妻と、末娘のよく分か
らないバトルが展開されていた。

「どうさまのところ行くもん！」

「だから、ダメと、何度も言つていいでしょー！」

「やーだー！ 行くのー！」

「どうしたんだい？」

「どうせまー！」

彼が声をかけると、彼の可憐い末娘は、彼の妻の手を全力で振り払い、彼に飛びついた。そして、叫び。

「どうせまー、あのね、こいつまたひ悪くないの。だから、怒らないで。悪いのは、アリサだから」

アリサは、お願い、と彼を小さな手で、ぎゅっと抱きしめる。最愛の娘のそんな攻撃に敵う者など、そこにほいなかつた。

「アリサ、どうせまは、もう怒つていなーよ」

「ほんとうー？」

「本当。だから、アリサはベッドに戻るつか。無理をすると、熱を出しちしまうからね」

彼は、そう言って必死に弁明をする愛娘を抱え上げ、そのままアリサの部屋に入り、アリサをベッドに下ろした。

そして、アリサが両親の指示に従い、ベッドに横になると同時に、子供たちは口を開いた。

「アリサ、『じめん』

「『じめんね、アリサ』

「こいつまたちが悪かった

「『じめんね、アリサ』

突然の兄と姉たちの謝罪に、アリサは目を白黒させる。今のアリ

サの表情は、アリサが今思つてゐるであつたことを、素直に『して
いた。

つまり、今のアリサの考えは「ここをまともねえかも、どうして、
いきなり謝るの？」と言つてことになる。

今も依然としてその考えに包まれてゐるアリサに、彼は助け舟を
出した。答えを教えたのだ。

「ルウインたちはね、君を泣かせてしまつたことに対する謝つてい
るんだよ」

「ここにわまたち、悪くないよつ……」

そして、彼が言つと同時に、アリサは声を張り上げ、言つ。
そんなアリサを、彼や、彼の妻、そして、彼の子供たちは、よし
よし、と丁寧に頭を撫でる。すると、アリサはまたも、何事！？
と言つ顔をしていた。

彼は、そんな末娘の行動を愛おしく思つ。そして、それは彼だけ
ではないはずだ。それは、この部屋にいる全員が思つたことだらう。
……つまり、セイン以外が。

後に、この話を聞かされたセインは、悔しさと寂しさが入り混じ
つた表情で、その話をした兄弟を見ていたと言つ。 さもありな
ん。

そしてセインは、それ以来、今まで以上にアリサに執着するよう
になり、結果。

「セイにこわま、つづとつじこ」

と、言つアリサの言葉にこまつたつ切られ、それを眺めていた兄弟た
ちに、失笑をいただいたこと。

それからは、セインのアリサ付きまといは、若干だが、マシにな

つたそつだ。

そして、四人の兄弟たちが父からお説教を受けたこの日、アリサは、夕飯を食べた後、一人の姉と一緒に、お風呂に入つていた。それが決まったときの、兄たちの反応は、すごかつた。ジャスリンとエルミナに羨望の眼差しを向け、アリサには、至極、悲しそうな目を向けた。

アリサ自身は、別に、兄と入るのに抵抗を感じてはいなかつた。何せ、まだ体は五歳と、とても幼いからだ。

だが、彼らの両親が、ソレを止めたのだ。

「アリサ。貴族の子女が、いくら兄妹と言えど、異性に肌を見せるのは感心しないよ。君は、公爵家の末子なんだ。貴族なんだよ。だから、一緒にお風呂に入るのなら、ジャスリンや、エルミナと入るんだよ、いいね？」

父のその言葉に、ジャスリンとエルミナは喜び、ルワイン、セイン、カインは落胆した表情を見せた。

だが、彼らの両親の言つことには、筋が通つてゐる。故に、彼らは諦めざるを得なかつた。

そして、彼らは今日も、嬉しそうな顔をして末妹の腕を取り、浴室へ向かうジャスリンとエルミナを見送つたのであつた。

予想を裏切らない展開

昨日、リンねえさまやニアねえさまと一緒にお風呂に入り、きれいに髪を乾かして、いつもよりも若干早く就寝した私ですが、熱を出したようです。

目が覚めてから、どうも、頭が重たくてかないません。こんなことを考えるのも、実際、結構辛いです。

もちろん、起き上がり、食事のために食堂へ向かうなど、夢のそのまま夢です。

そうしていると、私がなかなか起きてこないことに、疑問を抱いたらしい、私の世話長のメイドである、シャーナが、部屋の扉を申し訳程度にノックして、部屋に足を踏み入れる。

そして、目を覚ましているにも関わらず、起き上がらない私を見て、何か悟つたらしい。「少々お待ちください」と一言言ご置いて、部屋を出て行った。

戻ってきたときは、シャーナだけではなく、どうさま、かあさま、にいさま、ねえさまたちと、何故か勢ぞろいだつた。

そして、シャーナと共に部屋に入ってきたかあさまは、急いで私の横たわるベッドに近づき、私の額に手を当てた。かあさまの手、冷たくて気持ちがいいな。

「あなたの熱が高すぎるの。アリサ、どこか痛い所はある？ 頭とか、喉とか」

咳くと、そう返された。

うーん、痛い所。……頭。……は、ほつてするけど、痛くはない。でも、喉は少し痛い気がする。正直にそう告げると、口を大き

く開かされた。

「ああ、喉が少し腫れてるね。……侍医を呼んで、診てもうこましょみう」

かあさまはせつぱりと、ふと時計を眺め、とつまみや、ここをまたちのほみうを向く。そして、口を開いた。

「あなたたちは仕事でしょひ。早く、朝ごはんを食べて、行つてひつしゃい」

……氣のせいでしょうか。実際には聞こえなかつたのだが、頭の中に「邪魔だからとつと消えろ」と言ひ、かあさまの心の声が聞こえたような氣がします。

そして、それはとつさまたちにも聞こえていたらしい。とつさまたちは、なんとも言えないような表情をして、私の部屋から出て行つた。

「アリサは、食欲はある？ 無くとも、少しくらいは食べなさいね」「食べたくない。」はんいらなし」「ダメ。食べたくないても、少しほはべて、栄養を摂りなさい」

そういうこと、ずっと治らないでしょひ。かあさまのその言葉に私は諦めを覚え、用意されたら食べなくては、と言ひ恐怖概念が浮かんできていた。

だつて、この状況で食べなかつたら、多分、かあさまが怖いから。

そして、私はシャーナの持つてきたお粥をのんびりと、少しずつ口にいれ、嚥下する。飲み込むと同時に、腫れているらしい喉が痛んだが、あまり気にしないことにした。

その後、無理やり三分の一ほどを流し込むようにして食べた私は、限界が来て、かあさまにお粥の入った器を返す。

それからは、ベッドに横になり、眠ることにした。熱を早く下げるには眠るのが一番だと言つことは、小さい頃からの経験上、よく分かっているから。

***** side 子供たち

朝食を食べた父や子供たちは、アリサの様子を見に、アリサの部屋を訪れていた。仕事へ向かう前に、アリサの様子を見るために。

「アリサ」
「しいつ」

一度、声をかけて、部屋に入ってきた子供たちは、母からの言葉で、声を潜めた。そして、ベッドに横たわるアリサに目を向けた。眠っている。若干呼吸が荒いが、それでも、気持ちよさそうに寝入つていた。

「アリサは大丈夫だから、あなたたちは仕事に行きなさい。遅れるわよ？」

そして、時計を見た子供たちは、時間の危険を感じ、焦つて駆け出て行くのであった。一人を除いて。

「エルミナ、あなたも急がないと、遅れるんじゃない？」
「今日休み。有給取つてるから」

のんびりとそう告げるエルミナは、すやすやと眠るアリサを、優しく、温かい目で見守っていた。

母が、こつ之間にアリサの部屋を離れ、侍医を連れて戻つてくるまでの間、ずっと。

「アリサ、侍医が来たから起きなさい。起きて、きちんと診てもらいたいさい」

「んう……眠い……のオ」

「いいから起きなさい。診てもういたら、また眠つていいからね」

「むう……」

母とヒルミナが言つて、アリサは既に目をこすりながらも、何とか目を開いた。

そして、開かれたその目は、侍医とぴつたり合ひ。

「おせよ、おせよ、アリサお嬢様」
「おせよ、おせよ、アリサお嬢様」

ちなみに、アリサの言つて「ジー」とは、爺ではなく、侍医のことであると、一応、説明をへれておいた。つまり、アリサはいつも言つてこなしてゐる。「おせよ、おせよ」とます、侍医先生」と。

「アリサお嬢様、本日は、どう調子が悪いか、お分かりになつますか?」

「んー、喉が痛い。」(飯食べるとね、少しずれつてするの)

アリサが言つて、侍医はアリサに口を開くよつて、喉を見る。

侍医には、喉が腫れているのがすぐに分かつたらしい。

そしてその後も診察は続き、終わる頃には、眠たかったアリサの目も、ぱちりと開き、完全に覚醒していた。

「奥様、今回のお薬です。例によつて苦いので、お嬢様が飲むのを嫌がるかもしません。その際は、たくさん水に溶かして、飲ませて差し上げてください」

「ええ、ありがとうございます」

その会話は、アリサに聞こえなによつ、部屋の扉の外でされたのだが、『苦い』と言つ言葉だけは、しつかりアリサの耳に届いたらしい。

エルミナの見ている前で、とつても嫌そうな表情を見せた。エルミナは、そんな妹を宥め、落ち着かせる。「熱が下がるまでの辛抱だからね」と、優しく声をかけてやりながら。

その後、まだまだ体が辛いらしにアリサはあつとこつ間に眠りに落ち、エルミナはその様子を見守るに留まつた。

可愛い妹と一緒に遊びたいが、いかんせん、今の妹の熱は、とても高い。早くまた遊べるよう、エルミナは、アリサの額に置かれたタオルを、ちよこちよこと交換してやるのであつた。

そして、毎。

「アリサ、起きて。おはん食べて、お薬飲まなくつけでしょ?」「ん……」

おはんを持つてきたシャーナの姿を確認したエルミナは、アリサの体を軽く揺らし、アリサを起こす。

そして、アリサの体を起こしてやつたエルミナは、スプーンを取り、アリサの口元へ、お粥の乗つたスプーンを出した。

「アリサ、あーん、して

姉に言われ、アリサは素直に口を開く。が、あまり食べたくないのか、表情は、嫌そうだった。そんなアリサに、エルミナは苦笑しながら言葉をかける。

「アリサ、そんなに嫌そうな顔しないで。『ご飯を食べなきゃ、お薬飲めないでしょう？ お薬飲まないと、いつまでも熱が下がらないよ？』」

「いいの？」と問いかける姉に、アリサは首を横に振った。それを見たエルミナは、優しく微笑み、もういらないと言つ妹の飲むべき薬を取りに向かうのであった。

もちろん、「お薬飲むまでは、寝たらダメだからね？」と、アリサに忠告をした上で。

「お母さん、アリサの薬は？」

「あら？ アリサの部屋に置いておいたでしょう。それにしても、もう食べ終わつたの？」

「うん」

「あの子つたら…………。朝も殆ど食べていないので……」

母とエルミナは、そう言つながら、アリサの部屋へ向かう。そこでは、姉の言葉を忠実に守り、睡魔に襲われながらも必死で起きているアリサの姿があつた。

「まひ、エルミナ。ここに置いてあるかい。シャーナ、水を少し多めに用意しておきよついだい」

母が言つと、シャーナは急いで部屋から出、そして、急いで戻つ

てぐる。

「アリサ、お薬飲みましょいね。たくさんのお水で溶かすから、あんまり苦くないからね」

母の言葉を信用し、その薬を一気に口に呑んだアリサ。

口の辺、口の辺、アリサの部屋では、アリサの絶叫がどどんこった。

「苦こーつー！ かあちゃんの嘘つせーつー！」

嗚呼、妹よ（前書き）

兄姉たち視点です。
主人公、アリサは出てきませんので

嗚呼、妹よ

* * * * * side ルウイン

アリサは大丈夫だらうか。ルウインは、宰相補佐と言ひ仕事の傍ら、そう考へる。

「ルウイン！ ボーッとするなつ！ セツキ言つたこと、聞いてたか？」

「え？ あ、すみません。考え事をしていて、聞いていませんでした。申し訳ありませんが、もう一度お願ひいたします」

いかんいかん。最愛の妹のことを考へ、仕事が疎かになつていたルウインは、気を切り替え、真剣に仕事に励む。

そう、気にかけているからか、今後、大きなミスをすることは無く、宰相である公爵に叱られることも無かつた。だが、何か考へていることは、ルウインや宰相のいるこの執務室の主である王には分かつていたらしい。

宰相である公爵が図書室へ足を向けると同時に、優しく、ルウインに聞いかけた。

「ルウイン宰相補佐、末の妹姫に、何かあつたんですか？」
「お分かりに、なられますか？」

王の質問に、一瞬停止したルウインだつたが、主の質問に答へないわけには行かない。静かに、返事を返した。

「宰相補佐がこうも気を取り乱すのは、末の妹姫が原因だと、誰もが分かつていますからね。ああ、あなただけではありますね。あ

なたの！」兄弟、皆さんがそうですね

「そ…… そうですか……」

そして、少し焦つているらしくルウインに、王は更なる攻撃を加えた。

「何があつたのか、話して御覧なさい。ほら」

「陛下、楽しんでいらっしゃいますね？」

「分かりますか？ まあ、いいじゃないですか、そんな些細なこと

王はそう言つて、アリサの発熱話をルウインに強請り、それを聞いた王は、国で一番だと言われている医者を、ドーリス公爵家に行かせると、ルウインに約束したのであった。

* * * * * side out

* * * * * side ジャスリーン

「ジャスリーンさんつ！ しつかりしてください。お客様が参られてますよつ！」

王宮の図書室。ジャスリーンは、ここで司書として働いていた。のだが、今は、はつきり言つて、仕事のことなど、全く考えられない。

考えられるのは、ただ一つ。彼女の愛する最愛の末妹、アリサのことだけだった。

アリサは大丈夫だろうか。熱は、少しきらい下がつただろうか。辛いだろう、可愛そう。

今のジャスリーンは、とにかくそんな考えに包まれていた。

故に、今自分のいるカウンターの前に、人がいることなど、全

く気がついていなかつたのである。

「あ、宰相様。申し訳ありません、本日はどのよつな本をお探しで
しょうか」

「ジャスリーん殿、あなたまでこいつこいつとは、末の姫君に何か
あつたんだな?」

カウンターの前で眉を顰めながら告げる宰相に、ジャスリーんは
焦る。こうも簡単にバレてしまうとは、と。

ちなみに、彼女は気がついていなかつた。アリサの熱によつて、
普段どおりの仕事が出来ていなのは、自分だけではないと言つこと

「ジャスリーん殿、妹姫が大事なのはよく分かる。が、仕事だけは
きちんとしなさい。いいね?」

「はい、申し訳ありませんでした。といひで、本日はどのよつな本
をお探しですか?」

「この国の歴史が事細かに書かれた本を頼もつ。殿下の勉強用でな」

宰相の言葉に、ジャスリーんはどれがいいか少し考え、そして、
ちようどいい本が頭の中を見つかったのか、カウンターから出、本
を取りに向かう。

そして、貸し出し処理を行つたジャスリーんは、再度の謝罪と共に、宰相に本を手渡すのであつた。

ちなみに、この後で、彼女が同僚に叱られたことは、最早説明す
るまでも無い。

* * * * * side セイン カイン

今日は、セインの所属する近衛第三隊と、カインの所属する近衛第五隊の合同訓練日だった。

が、セインもカインも、集中できているはずもない。理由は、彼らの大事な末妹アリサにあつた。

ああ、僕たちの大事な妹、アリサ。高熱を発して、辛いだらう。苦しいだらう。代わるものなら、代わつてやりたい。

そんなことをずっと考えているから、全く集中など出来ず、二人は揃つて、上司からのお叱りを受けることとなる。

「ドーリス兄弟！ 集中しろつ！」

「集中できないなら、隅つこ行つて見学してろつ！ 訓練に参加するなつ！」

そこまで言われて、ようやく一人は集中する。そして、集中した二人は、訓練用の剣を持ち、互いに切りかかった。

この二人の実力は、近衛隊の中でも、かなり上位に当たる。故に、セインは大隊長の位を持ち、カインは、そんな要職には就いていくても、出世コースにきつちり乗つていてるような人間だった。

そして、この二人の実力はひつ迫している。故に、この日の訓練の責任者は、模範試合をこの一人にやらせようとしたのだが、二人は集中しておらず、どこからどう見ても、剣が乱れていた。

結果、二人はお叱りを受け、そこでようやく集中するに至つたのである。

二人の激しい剣戟の音が、あたりに響き渡る。刃を潰してあるといえど、重たい金属の剣を紙のように扱い、激しい剣戟を繰り広げる一人に、新人の兵たちは釘付けだった。

一人の剣戟を見慣れているほかの兵も、参考にするところがあるらしく、二人の剣戟を真剣な眼差しで見つめ続ける。

「全く、この家族は、末の姫君がかかると、途端に弱くなりますね」「それだけ、姫を愛しているんだろう。まあ、実戦で腑抜けたことしなければ、大丈夫だろ?」

「それもそうですね」

二人は、上司のそんな言葉をBGMに、尚も激しい剣戟を続け、最後は、セインがカインの首元に瀆された刃を当て、終了した。

「カイン、降伏しろ」「くつ……、参りました」

そして、カインが降伏の言葉を告げると同時に、セインは上司のほうを向き、口を開く。

「隊長、本日の僕の役目、これだけでしたよね？ でしたら、僕は帰させていただきますね」

「え？ あ、ああ……」

「セインにい、ざるい！ 隊長、僕も帰らせていただいてよろしいですか？！？」

そして、妹大好きな一人は、隊長の許可を得て、愛するアリサの待つ家へと急ぐのであった。

* * * * * side out

考える」とは、皆一緒に

そしてこの日、普段よりも早く、兄弟全員が帰宅した。帰宅した兄弟たちが向かつるのは、アリサの部屋である。

『アリサっ！』

「あ、おかえり、兄さんたち。今日は早くたんだね」

アリサの返事を期待して扉を開いた兄弟たちだが、返ってきた声は、アリサのそれではなく、エルミナの声だった。

兄弟たちは、首をかしげる。何故、エルミナが仕事場ではなく、ここにいるのかと。

「エル、お前、仕事は？」

「今日休み。ついでに言つなら、明日も休み」

カインに問われたエルミナが、あつたりと答えを返した瞬間、聞いていた子供たちが、大声を上げた。

その声で、アリサが目を覚ましてしまつほどだ。

「にこねま、ねえさま？」

目を覚ましたアリサは、まだ寝ぼけ眼で、声の主の予想をする。そんなアリサを、そばでずっと見つめていたエルミナが、再度、眠りを促した。

「アリサは、夕飯まで休んでいようね」

そう言ってアリサの小さな顔を手で覆い、アリサの視界を奪う。

視界が塞がれ、真っ暗になつたアリサは、再び、眠りに落ちていった。

そして、エルミナの怒りは、叫び声をあげた兄弟へ向けられる。

「兄さんも姉さんも、眠つているアリサの枕元で大声を出すなんて、何を考えてるの？」

せつかく気持ちよさそうに寝てたのに。また寝たからよかつたけど……。

エルミナは、声のボリュームを落として、兄と姉に文句の言葉を投げる。無論、ルウインをはじめ、ほかの兄弟たちは、エルミナのその言葉に、何も返せない。

そして、四人はエルミナと眠つているアリサに謝罪の言葉を告げ、そのまま、アリサの寝顔を眺め続けていた。

朝と比べると、熱が下がったのが、少しマシになつてている呼吸。それでも、その寝顔は穏やかで、とても気持ちがよさそうで。

兄弟たちは、そんなアリサに安堵の息をこぼしつつ、ただただ、誰も口を開くことなく、アリサの寝顔を眺め続けるのであった。

帰つて来た父が、アリサの部屋を訪れ、偶然にもアリサが目を覚まし、父に抱きつくまでは。

「ただいま、アリサ。調子はどうだ？ 少しは善くなつたか？」
「おかえりなさい、といつたま。アリサ、もうだいじょうぶだよ」

だから、お薬飲まなくてもいいよね？ そう言つアリサの熱は、アリサが大丈夫だと言つほど下がつてはいない。

つまり、これは苦い薬を飲みたくないアリサの、必死の抵抗だと、父と兄弟たちは、すぐに理解した。

そして、それを聞いた父は、優しく微笑みながら、アリサの額に手を当てる。そして、溜め息をついた。

「アリサ、まだ熱は高いよ。もう少し、お薬は飲まなくてはね
「やーだあ。お薬苦いもん。飲みたくないよお
「ちゃんと飲まないと、熱は下がらないだろ。とつさまたちを心配させないためにも、薬はきちんと飲んで、しっかり休んでおくれ
？」

父の言葉に、アリサはむう、という顔はするものの、それ以上の反論はしなかった。

そして、父によつてベッドに横にされ、毛布をきれいにかけられる。もう一度休め、と言つことらしい。
だが、アリサは一日中眠つていたからか、眠れないりじく、一向に眠ろうとしない。

横になつて、きちんと毛布は羽織つてゐるのだが、眠らないアリサに、兄たちは優しく声をかける。

「アリサ、眠れないのかい？」
「うん。だつて、ずうつと眠つてたもの」
「でも、頑張つて休みなさい、アリサ。そのほうが早く元気になれるからね」
「そうそう。ほら、僕たちに心配をかけないためにも、目を開つて
？」
「……はあい

兄と姉に続けて言われたアリサは、泣ながらも、目を開つた。
それから、アリサが眠りに落ちるまでは然程時間はからなかつた。

それを確認した父は、持ち帰ってきた仕事を済ませるべく、自らの書斎へ足を向ける。

父は、末娘が予想以上に元気にしていたことに、ひどく安堵していた。

アリサが熱を出すと、ひどい時は何日も寝込み、時には話す余裕もないほどに衰弱していることもあった。

それと比べると、この日の熱は、然程ひどいものとは言わず、元気なアリサを見れたことに、父は心から喜び、神に感謝していた。

そしてこの日の夕飯時、母はアリサにつき、子供たちは、父と共に、急いで夕飯を取っていた。

理由は、早くアリサの元へ行くためだ。兄弟たちは、アリサの食事を見守り、アリサが眠つてから夕飯を取るつもりだつたのだが、それは、母に反対を受けた。

結果、母がアリサにつき、兄弟たちは父と共に食事を取ることになつたのであった。

「アリサ、もう食べないなら、薬を飲みなさいね」

「お薬、苦いからヤだ」

「苦くても、飲みなさい」

母はそう言つて、アリサの言つ苦い薬を水に溶かしていく。それを見たアリサは、心の底から嫌そうな顔をするが、飲まないと言つ選擇肢はない。

母から薬の溶けた水の入つたカップを受け取ると、アリサは少し躊躇いながらも、一気に飲み干した。

「うえー、苦いー」

「はい、普通のお水」

「ありがとー、かあさま」

そして、受け取った水を、アリサは一気に飲み干した。それほどに、口の中に苦味が広がってしまったらしい。

そして、一気に飲み干したからか、依然として、口の中には苦味が広がっているようだ。舌を出して、少しでも苦味を薄めようと努力していた。

そんな愛娘に、母は、先に用意してもらっていたものを差し出す。それは ホットミルクに蜂蜜とレモンの絞り汁を入れたものだった。

「ほら、甘いのを用意してもらつたから飲みなさい。熱いから、気をつけのよ？」

母が言い、カップを手渡すと同時に、今まで苦味で辛そうな表情をしていたアリサが、嬉しそうな表情をする。

そして、アリサは「あちつ」と言いながらも、口の苦味を消すために、甘い飲み物を口に含んでいくのであった。

そして翌日。どうしても仕事を休めなかつた長兄、ルウェインを除き、全員が仕事を休み、アリサについているのであつた。

示し合わせたわけでもないのに、休みの日程を合わせることになつた兄弟は、目を合わせ、溜め息をついていたそつな。

必死の抵抗

翌日、ルウインを除く子供たち全員が仕事を休み、最愛の末妹、アリサの部屋で、優しくアリサを見守り、看病をしていた。

その、肝心のアリサだが、この日は、昨日と比べて熱が上がったのか、兄弟たちの言葉に、何か返すことも億劫らしく、ただ、黙つてベッドに横たわっているか、眠っていた。

もちろん、食事もどううとしなかった。食事のために体を起こすことすら億劫だったらしく、兄弟たちが食べさせようとしても、首を背け、一切食べなかつた。

食事をとらなくては、薬は飲めない。薬を飲まないアリサの熱は下がることなく、アリサの苦しみは増すばかりだつた。

「アリサ、少しでもいいから、食べて、薬を飲もう？」
「そのほうがアリサも楽になるから。ね？」

兄弟たちは、ベッドから起き上がるごとすら辛いらしいアリサに優しく告げるのだが、アリサは、悉く拒否した。完全に口を閉ざしたのだ。

そんなアリサの様子に、兄弟たちは揃つてため息をつく。そして、兄弟の一人が立ち上がり、部屋を立ち去る。

それから戻ってきたときは、横に、母が立つていた。末妹の説得を母に託したらしい。

「アリサ、一口だけでも、食べなさい」

いや。そう言つかのよつに、アリサは首を小さく横に振る。

兄弟たちは、妹のその反応だけで諦めるのだが、母は諦めなかつた。続けて告げる。

「食べないと、薬が飲めないでしょう。アリサは、ずっと辛いまま
でいいの？」

いや。アリサは再び首を横に振った。

「なら、一口だけでも食べなさい」

いや。アリサは再び首を横に振る。そしてその瞬間、母の雷が落ちた。

「アーリーサ！　いい加減になさい！　わがままばっかり言わない
のー！」

がみがみがみがみ。母の、アリサへのお説教は続く。アリサは辛そうにしていても、それでも母の言葉を聞いていた。
そうしていると、不意に扉がノックされ、メイドが顔を出す。

「奥様、王宮医師の方が、お見えになられていますが、如何いたしましょう」

「王宮医師？　どうしてそんな方が、家に？」

「その方の仰ることによると、陛下がルウイン坊ちやまとお約束な
れつていたそうです」

母は、ならばと、医師をアリサの部屋へ通す。それと同時に、王宮医師の言葉に従い、侍医も呼び、アリサの部屋には、母や兄弟たち以外に、王宮医師と、侍医が揃つた。

「では、失礼しますね、アリサお嬢様」

医師はそう言つて、熱の辛さで何の反応も返せないアリサの服を捲くり、肌を露出させ、診察を始める。ドーリス公爵家の侍医にも話を聞きながら、診察を進めていった。

体力の尽きているアリサは一切の反応を見せないが、依然として、辛そうだった。

「やはり、熱が高すぎますね。……注射をしておきますか？」

これは、アリサではなく、母に言われた言葉なのだが、その言葉には、アリサが一番に反応した。

辛い呼吸の中で、必死に、声をあげる。

「注射、……いやっ！ アリサ、だいじょぶ、だもんっ！」

だが、母はこじりと微笑み、アリサのその言葉を、完全に無視した。

「お願いします」

その瞬間、兄弟たちは固まり、アリサの表情は、泣きそうなそれになる。

王宮医師は、そんなアリサを見、苦笑しながら注射のために、腕を取る。アリサの目には、次々に涙が溜まり始めていた。

そして、医師が注射の支度をするために、一時的にアリサの腕を放すと、その瞬間、アリサは腕を毛布の中にしまつ。僅かながらも、抵抗らしい。

そのアリサを再び絶望に突き落としたのは、公爵家の侍医であった。侍医は、苦笑しながらアリサの腕を毛布から出し、引っ込められないよう、押さえる。

「お嬢様、我慢していれば、すぐに終わりますから。下手に動くと、変な場所に針が刺さるかもしだせんから、大人しくしていください」

「やーあ……っ！　注射、いや、だもっ！」

アリサは、苦しそうに、それでも必死に抵抗の意思を見せる。が、その抵抗は、王富医師が完全に打ち碎いた。

アリサは、医師が注射を見せた瞬間に、気を失ったのだ。兄弟たちは、注射がトラウマにならないだろうか、本気で思案していた。だが、医師や母は、これ幸いと抵抗のないうちに注射をうち、そのままアリサを休ませておくことにした。

そして、王富医師は、普段アリサが飲んでいる薬と一緒に使つても問題ない薬をリストアップし、処方していく。

「もし、食事をとれないほど弱っていたら、まず、これを飲ませて、それから少し時間を置いてからこの薬を飲ませてください」

王富医師はそう言つて錠剤を母に手渡し、ほかの薬は侍医の出したものをそのまま使うよう指示して、公爵家を出て行つた。

その間、アリサは気を失つたままである。

そして、気がついたアリサは、知らないうちに注射をされていたことにひどくショックを受け、それからは医者を呼ぶと言つと、本気で嫌がるようになつた。

同時に、注射をされたことになつた原因が、ルウインが王と話をしたせいだと分かると、アリサは、ルウインにはつきつづけた。

「ルウにこわま、きらー」

それからアリサはしばらくの間、ルウインと一切口を聞かず、
しかけられても無視し、ルウインに多大な被害を与えたそう。
そのせいで、ルウインの仕事に、ますます熱が入らなくなり、
相や王に叱られる事になるのは、どうでもいい話である。

宰

話

夢のまた夢

「じゃあ、アリサも、そろそろお勉強したい」

「いやまも、ねえまも、アリサの年の頃には、かで一きょーしに、お勉強教えてもらつてたんでしょー?」

アリサが言うと、父は、少し渋るような表情をする。そして、母に顔を向け、田で会話を始めた。どうすべきか、一人で考えているのだろう。

「アリサ、そのことは考えておく。今は、答えを返すのは出来ないからね」

「でも、勉強をしたいって言つ心意気は、かあさま、いいと思つわ

アリサの言葉に、両親は続けてそう告げた。だが、両親は本氣で考えていた。何故、今になって家庭教師や勉強と言つ言葉が出てきたのだろうか、と。

以前も、アリサからは、何度も勉強がしたいといつ頼みはあった。だが、その度に、「アリサは体が弱いから、お勉強はもう少し大きくなつてからにしようね」と言って、黙らせてきていたのだ。

そして、そのお願いが以前されたのは、そこまで前ではない。強いて言うならば、最近だ。

その短い期間に、アリサが何を考えたのか、本氣で思案する両親であった。

「にいさま、ねえさま、ダメだったよ?」

「うーん、父さんと母さんなら、アリサの心からのお願いで受け入れると思つたのにな」

「まあ、何かあつたら私たちが少しづつ教えてあげるから」

アリサが両親に勉強を強請つた理由は、彼女の兄と姉にあつた。アリサは、ずっと勉強がしたいと思つていたため、どうすれば両親とうさまとかあさまが勉強をさせてくれるか、兄たちに相談したのである。

もちろん、注射をする羽目になつた原因であるルウインを除いて。あれから、ずいぶんと時が流れ、アリサの熱も下がり、元気になつたのだが、アリサは依然として、兄を、ルウインを許していなかつた。

「ア……アリサ……」

ルウインは、控えめにアリサに話しかけるのだが、アリサは、ルウインが話しかけてくると同時に、ルウインから目線をはずす。アリサの怒りは、まだ消えない。

そして、ほかの兄弟たちは、そんな兄の様子を、哀れむような目で見ていた。可愛そうに、兄さん。でも、自業自得だよね。

いろんな意味で腹黒い、ドーリス公爵家の子供たちであった。

だが、そんな腹黒い考えも、数日後には消え去つた。理由は、兄が仕事中も呆けていて、文句が自分たちに飛んでくるからである。

「ジャスリーン殿、ルウインに何があつた？ 呆けていて使えん。何とかならないのか？」

「セイン、カイン。君たちの兄に、何があつたんだい？ セつき見かけたのだが、完全に茫然自失のような状態だつたよ？」

「エルミナ。宰相様から、あなたの兄を正気に戻せる薬を作るよう、依頼があつたんだけど……」

何とかする方法は、ある。薬を使わずとも、簡単に治す方法はある。

アリサがルワインを許し、今までのよつて兄に懐いていればいい。そうすれば、兄は以前の、バリバリの仕事人である兄に戻る。だが、どうすれば、アリサが兄を許すだろうか。

アリサは、心の底から、兄に、注射に対し、恨みを抱いている。そこまで深いものを、どうすれば治せようか。

そして子供たちは、ルワインとアリサを除き、ジャスリーンの部屋に集まり、何とかするための相談会を行つのであつた。

「注射のことを、忘れさせられれば話は簡単なんだがね」

「あの子が、どうやつたらそれを忘れるのさ？ 根深く、覚えてるよ？」

「アリサに変な薬は使いたくない」

セイン、ジャスリーン、エルミナが揃つて話をする。カインは、ついていけず、置いてけぼりだ。

だが、三人はそんなカインに一切気がつくことなく、話は伯仲していった。

「どうか、エルミナ。忘れさせる薬自体、あるのか？」

「あるっちゃあるけど、人によつては副作用出るから、アリサには使えないよ

その答えを聞いたセインは、むう、と、頭を搔ませる。どうすれば、アリサが兄を許すだろうか。

その話し合いは、母が、ジャスリーンの部屋を訪ねるまで続いた。

「あら？ みんな、ここにいたの。もう遅いから、いい加減休みな

れこ

「休もうとも休めないよ、母さん」

「うん、この問題が解決しないと、眠れないね」

子供たちの言葉を聞いた母は、首を傾げる。子供たちがそこまで
言つよくな問題とは、なんだろ？

「何があつたのか、言つて御覧なさい。何か、手伝えること、ある
かもしれないわよ？」

母の言葉に、子供たちは笑みを浮かべ、そして、事情を話した。
アリサが、兄を嫌つていてこと。兄が、その影響で仕事にかなり
悪影響を及ぼしていること。そして、いろいろな場所で、その兄を
何とかするよう頼まれたこと、などだ。

「……あの子つたら。いいわ、明日、かあさまが説得してあげるか
ら」

「本当ー？」

「ええ。だから、早く休みなさい。明日、寝坊しないよつこね」

母の言葉に安心した子供たちは、それから、ぞろぞろと自分たち
の部屋へ戻つていぐ。

これで、心から安心して眠れるだろ？ そう考えた母は、アリサ
の部屋へ向かう。

気持ちよく眠つている娘の寝顔を眺め、そして、脱ぎ出してしまつ
てこる毛布をきれいにかけ、自身も寝室へ足を向けるのであった。

そして、翌日は、母による、娘の説得の時間となつた。

兄想う一時

「アリサ、今、ルウインを嫌っているんですつて？」

その日、娘の部屋を訪れた母は、率直に話を切り出した。理由は、昨夜子供たちから聞いた話で、長兄があまりにも不憫に感じたからだ。

アリサを思つて取つた行動だったといつのに、逆に嫌われるなんて、不憫すぎる。今の母は、そんな思いに縛られていた。だから、率直に話を切り出したのだ。

「どうして、ルウインが嫌いなの？ かあさまにだけ、教えて？」
「だって、ルウにいさまが、あのお医者様呼んだんじょ？ アリサ、注射嫌いなのに……」

愛娘のその言葉に、母は、深いため息をつく。それだけで、ここまで怒つて、根に持つていいのかと。

そして、ほかの子供たちとの約束どおり、説得に励むことにした。「アリサ、ルウインだつて、わざと注射をする先生を呼んだわけじやないでしょ？ 注射は、アリサの調子が悪かつたからなんだから

「でも、アリサ注射きらい。その原因のルウにいさまも、いや」

全くもつ、この子の頑固さは誰に似たのかしら。母は、アリサに聞こえないよう、小さく呟く。

私じやないわよね、なら、あの人かしら。母は、アリサが何を考えているのだろう、と不思議そうに見守る中で、その考えに縛られ続けた。

ちなみに、アリサのその頑固さは、神崎有紗であった、前世からの継承物である。

それを知らない母は、ずっと、何が原因だったのか、真剣に考え続ける。だが、いつまで経っても答えは出ない。それも、当然ではあるが。

結果、考え込み、黙り込んだ母を、彼女の小さな愛娘は心配し、声をかけることになるのであつた。

「かあさま、どうしたの？　だいじょうぶ？」

「え？　ああ、ごめんね、アリサ。かあさまは大丈夫だからね」「ほんとう？」

そう尋ねるアリサの瞳は潤んでいて、よつぼり耐性のある人でなくては、その目には勝てないであろうほどに、アリサのそのときの表情、目は、凶悪的であった。

本人は、全く意識せずにしていたが。

「本当に大丈夫だからね。アリサは気にしなくてもいいの」

心から心配しているらしいアリサに、母は大丈夫だと告げ、そして、話を元に戻す。何故、ルワインをそこまで許さないのか、再度聞き出そうとしたのだ。

そして、アリサがルワインを許すよつならば、許した途端にルワインの部屋へ連れて行き、謝らせようと考えていたのだ。

ルワインは、この日、休みを取っていた。否。正確には、宰相命令で休ませていた。

宰相曰く、「元に戻るまで、仕事に復帰するな。元に戻つたら復

帰しin」とのことで、今は、元に戻るどころか、おかしいままであるルウインは、宰相命令に従い、休んでいたのだ。

もちろん、アリサはそんなことは知らない。今日は、全員きちんと仕事を行つていると、思つている。

まあ、母の、説得の時間だ。

「アリサ、そろそろ、ルウインを許してあげる気にならない?」

「いや。アリサ、ルウにいたま、きらいだもん」

「どうしてそんなに、根に持つの? アリサ」

「だつて、注射きらい」

アリサの恨みの原因は、ビヒキで遡つても、注射にしか戻ることはないのであった。

それを聞いた母は、戦略を変えることにした。理由を知り、そこからアリサの考えを変えさせるつもりだったのを、どこまで行つても注射にしか行かないため、そこから、同情作戦に切り替えたのだ。

「そういえば、アリサ。ルウインが、今城でどう言われてるか知つている?」

「ルウにいたま? 知らない」

「あの子はね、今、腑抜けつて言われてるのよ
「にじさまが? どうして?」

ちなみに、腑抜け云々は、母の考えた嘘である。だが、純粹素直な五歳児アリサは、母の言葉を、しっかりと信じている。

「どうしてつて、それはアナタが一番分かっているでしょ? あの子が腑抜けるのは、どんなとき?」

母に問われ、アリサは真剣に考える。だが、答えは出ないらしい。

天然とは、かくも面倒なものか。

しばらく考え、答えが出ず、頭から湯気を出さうとしている娘に、母は淡く微笑みながら答えを教えてやる。
同時に、湯気の出そうなほどに熱い頭に手を置き、冷ましてやりながら。

「あの子が腑抜けるのはね、あなたに何があったときよ。今回は、あなたに嫌われたのが、辛かつたようね」

「……………そうなの？」

「ええ。……………ねえ、アリサ。本当に、ルウインが嫌い？」

母が問うと、アリサは、目に涙をため、首を横に振る。

「きらいじゃない。アリサ、ルウにいたま、本当は好きだもん……」

そして、そんな末娘の言葉を聞いた母は、にっこりと微笑んだ。
そして、泣いているアリサの涙を拭い、抱きかかえる。

抱きかかえた娘としつかりと目を合わせた母は、にっこりと微笑んだままで、口を開く。

「アリサがルウインのことを好きなら、謝りに行きましょうか。嫌いだなんて嘘だって、『めんなさい』って」

「うん、行く。アリサ、ルウにいたまにあやまる」

でも、にいたま、今仕事じゃないの？尋ねるアリサに、母は微笑んだ表情を崩すことなく、答えを返した。

今日は、（強制的に）休みだと。それを聞いたアリサは微笑み、そのまま兄の部屋へ足を向けるのであった。

そして、ルウインの部屋の前につづくと、母はアリサをおろし、部屋の扉をノックする。

返事が聞こえると同時に扉を開く。すると、開いた瞬間に、アリサが兄の下へ駆け寄つていった。そして、飛びついた。

「ルウにいさま、ごめんなさい。きらいなんてうそだから！ アリサ、ルウにいさま大好き！ だから、にいさま、アリサのこときらいにならないでえ！！」

「うえーん。兄に飛びつき、抱きついたアリサは泣きながらそう告げる。そんな愛妹の様子に、ルウインは戸惑いながらも、それでも、また好きだと言われたことが嬉しかつたらしい。微笑んでいた。

そして、泣き続ける妹を下に下ろし、目線をあわせ、にっこりと微笑みながら、告げる。

「アリサ、僕は、アリサのことを嫌いになんて、ならないよ。僕も、アリサのことは大好きだから」

そうして泣き続けるアリサと、嬉しさに微笑むルウインを見ながら、母は、「手のかかる子供たちだこと」と思いつつも、微笑んでいた。

そしてその日、アリサとルウインの仲直りを記念して、ルウインとアリサを除く兄弟四人と、母による祝杯が挙げられたことを、アリサとルウインは知らない。

そして、泣いた翌日の定番として、アリサは、熱を出したのであつた。

災厄再び

***** side ルウイン

「先日は」迷惑をおかけしまして、大変申し訳ござりませんでした、陛下、宰相閣下」

「もう、大丈夫なんですね？ 宰相補佐殿」

「今度バカをやつたら、父君に協力してもらひからな」

アリサが泣いて、謝罪をしてきた翌日、ルウインは仕事に復帰します、主である王と、自分の補佐すべき対象、宰相に謝罪の言葉をこぼしていました。

「先日は私情で迷惑をおかけいたしましたこと、深く反省しております」

「いえいえ。末の妹姫からは、許していただけましたか？」

「はい。泣いて、謝罪をしてきました。おかげで、今日もまた寝込んでいますが」

なら、また王宮医師を派遣しますか？ にっこり笑つてそう告げる王に、ルウインは遠慮の言葉を返す。何せ、今回、ルウインがアリサに嫌いだと言われた原因は、王の派遣した王宮医師にあつたのだから。

これで、仮に再度診察を受けさせ、再び注射をうつようになれば、恐らく、次はそう簡単には許してもらえないだろう。彼の妹は、恨みに関しては根深く持つタイプなのだ。

「遠慮しなくてもかまわないんですよ？ 宰相補佐殿。王宮医師のほうが、妹姫の熱が引くのも早くなるでしょう？」

「いえ…………」

ルウインはそう言つて、今回、自分が妹アリサに嫌いだと言われることになった原因を、宰相と王に、簡単に話す。
そして、それを聞いた宰相と、王は声を揃えて笑い声を上げることになった。

「可愛らしい姫君ですか、宰相補佐殿」

「ククツ……。注射で根に持つあたり、まだまだ小さな姫君だな、ルウインの末の姉姫は」

笑い事ではありませんよ。ルウインは、真剣な表情で、続ける。

「大体、小さいのは当たり前です。アリサは、まだ五歳ですよ?」

「おつと、まだそんなに小さかったか」

「五歳とは、可愛い盛りでしきつ」

それはそれは可愛いですとも。ルウインが力強く言つて、またも、王と宰相の口からは、笑い声が零れる。

今回の笑いは、ルウインのシスコンぶりへの笑いらしい。

だが、シスコンに関しては、ルウインもひどいが、ほかの兄弟も同様にひどいことは、王は知つても、宰相は知らない。

宰相は、後に実際自らの目で見て確認することとなり、本氣で、ドーリス公爵家の行く末について、思案したそうである。

* * * * * side out

この日のアリサは、先日、兄に泣いて謝罪をしたことが原因の一端となり、現在、熱を出して寝込んでいた。

しかも、今回の熱は最初から思いの外高く、侍医も、早い段階で、

強い薬を使う方法を、選択した。

そして、熱を出したアリサは、何度も何度も、魔されては泣いて目を覚まし、その場にいる母に宥められ、そしてもう一度眠り、そしてまた魔され、泣いて目を覚ますと、いつ、あつてほしくない無限ループにはまり込んでいた。

眠りなくては、熱は下がらない。だが、眠ると魔され、大泣きし、目を覚ましたときにはまた、熱が上がっている。

そんな状態の繰り返しに、母も、どうすればいいのか分からなくなっていた。

寝かせたほうがいいのか、魔されることを避けるためには、起きておいたほうがいいのか。

「こちらからお呼び立てして、本当に申し訳ございません」
「いえいえ。陛下から、ルヴィン殿から頼みがあったときは、よっぽどのことがない限り、行くつづきじりわておつりますから、お気になさりなさい」

それは、侍医に相談しても解決せず、結果として、王宮医師を呼び、見てもう方向に走ったのであった。

「寝るたびに、魔されて目を覚ます？」
「ええ。本当に、寝るたびに魔されるので、寝かせるべきか、魔されないよう、起きておるべきか、悩んでしまいました……」
「……失礼」

王宮医師はそつまつと、何とか起きたままのアリサの元へ向かい、質問を始めた。

熱が高いせいで頭が良く回っていないであろうアリサは、答えて少し時間がかかりはするが、それでも、医師の質問に、少しづつ答

えていった。

そして、アリサの診察を終えた医師の判断は、結局、注射を使って熱を下げることであった。

が、前回のアリサの嫌がりようを覚えている医者としては、その方法には、若干の抵抗があった。結果として。

「お嬢様、これから何度も怖い夢を見て、泣いて目を覚ますのと、注射をうつて、嫌な夢を見なくなるの、どちらがいいですか？」

「ちゅうしゃ…………いや…………」

「なら、嫌な夢を見ますか？ 注射が一番早く熱が下がるんですよ

医者は、アリサに決断を迫る。嫌がるのを無理やりするよりは、同意を得た上でするほうが、医者としても、気分がいいからだろう。なかなか決断を下さないアリサに、医者は、ふと思い出したのか、もう一つの方法を提案した。但し、それは、基本的に子供だろうが大人だろうが、よっぽどではない限り、絶対にイヤと言う方法ではあつたが。

「…………それとも、座薬にしますか？」

「…………ザヤクって、何？」

「座薬というのはですね…………」

そして、やはり座薬を知らなかつたアリサに、医者は、簡単に説明をする。

それを聞いたアリサは、本気で嫌そうな表情を見せた。それは、注射のことを話したとき以上に嫌そうな顔で、注射と座薬どちらを選ぶかと問われると、間違いなく注射を選ぶだろうと想像が出来るほどに、両者の反応の差は、歴然だつた。

「どうなりますか？」

医師は、アリサがどちらを選ぶか、大体想像をつけた上で、問う。そしてアリサは、医者の予想通り、注射を選び、注射の最中に動かないよう、そばで見守っていた父や母に抑えられ、注射を打たれ、何とか魔されないようになつたのであった。

安堵の心（前書き）

すいません。
本日一度田の更新です。

ルワインが王に頼み、王宮医師をドーリス公爵家に呼んで数日後、アリサの熱は大体下がり、あとは微熱が完全に下がるのを待つだけとなっていた。

そして、今回は、アリサがルワインを嫌いとは言わなかつたため、ルワインは心の底から喜んでいた。

彼は、両親から、アリサが注射をうつてもうつて、大分熱が下がつてきている、と聞いたとき、また自分は嫌われるのだろうかと、怯えていたのだ。

故に、王宮医師が公爵家に来た日、家に帰つて来たルワインは、アリサから嫌いという言葉を聞かされるかもしれない、と思いつつ、アリサの部屋を訪れていた。

だが、アリサから向けられた言葉は、純粹なまでな思慕の心。熱で辛いだろうに、アリサはいつものように微笑み、彼に声をかけた。

「おかえり……なさい、ルウにいさま」

その言葉が、どれだけ彼を喜ばせただらう。

その一言で、彼はどれだけ救われただらう。

嫌われていない。そう思えることが、どれだけ幸せなことか、アリサは、ルワインに教えることとなつた。

今回の注射の件は、アリサは、医師を恨んでなどいなかつた。それが、仕方のないことだと、割り切つていたから。

注射は嫌でも、仕方のないことならば、抗つても、恨んでも何も変わらない。だから、アリサは恨むこともなく、ただただ、熱を下げることに集中していたのだ。

座薬が嫌だつたと言つこともあるが。

ただ、これはアリサは知らないことだが、医師は、母に、「また熱が高くなるようでしたら、お嬢様が眠っているときにも、この座薬を使用してください」と言つて、渡していたのだ。

今回は、使用されることはなかつたが、次に高熱を発したときは、アリサの知らないうちに座薬を使われていた、と言つこともあるだろつ。

仮に、使われていることがアリサにバレれば、またも、ルウインはアリサに嫌われかねない。よつて、彼は母に、「使うときは、絶対にアリサに知られないように使ってくれ」と頼んでくるのであつた。

バレたらその瞬間、アリサの嫌いな人ランキング一位は、間違いなくルウインになることは、確実である。

そして、数日間寝込み、元気になつたアリサは、いつものように、仕事から帰つて来た兄弟たちと戯れ、可愛がられ、遊ばれたりしているのであつた。

「ほら、アリサ。今日、街に出たときに見つけたんだよ。アリサに似合つと思つて買つてきた」

「うわあ、きれいなリボン。ありがとうございます」

エルミナが買つてきたリボンを見たアリサは、嬉しそうな顔をし、声を出す。そんな妹を見たエルミナは、買つてきたリボンで、アリサの髪を結ぶ。

そして、結んだ後は先に持つておいた鏡をアリサに見せる。自分の買つたリボンがアリサに良く見えるよう、角度をしつかりと調整したうえで。

「ほら、アリサ、似合つてるよ」

「ほんとう？ にいさまたちも、そう思ひ？」

「ああ、よく似合つてゐる。エルミナ、いいのを選んだな」

ルウインや、ジャスリーン、セイン、カインは、揃つて親指を上に突き上げる。そして、その皿は、じつ語つていた。“Good Job！”と。

大好きな兄たちにもほめられたアリサは、そんな兄たちの様子には一切気づかず嬉びを隠せずにいたが。

「ニアねえさま、大好き」

但し、兄たちがエルミナにそつした皿を向けるのは、アリサがそう言つて、エルミナに抱きつくまでだつた。その瞬間、先ほどまでは賞賛の眼差しだつた目からは、嫉妬の炎が見え隠れしだしている。翌日から、兄弟たちは全員がアリサの好きそうなものを買つてきて、あまりにもお土産が溜まつたアリサが母に相談し、母が子供たちに雷を落とすまで、そのお土産合戦は続いたそうな。

だが、結局、一番喜ばれたのは、最初に買つてきたエルミナのリボンだつたりする。

「アリサ、ねえさまのくれたリボン、だあいすき」

アリサが、数々のお土産を広げた前でそついた瞬間、エルミナは喜び、ほかの兄弟は一様にして、しょぼーんとしていたそつた。ともりりなん。

但し、それも一時のこと。ある日、父が、お土産にカチューシャを買つてくると、アリサのお気に入りはそのリボンからカチューシャに変わり、エルミナを悲しませ、父を喜ばせた。

父は、「そんなに喜んでもらえると、どうせま嬉しいよ」と、相好を崩し、同時に子供たちは、「もつとアリサの気に入るものを探索さなくては」と、心意気を新たにさせた。

無論、兄弟たちの心意気を、アリサが知る日は、来ない。

「アリサ、ほら、可愛いぬいぐるみを買つてきたよ。一緒に寝るといいよ」

「かわいいー。ありがとう、リンねえさま」

「アリサ、僕の買つてきたこれも使って」

「……ルウにいさま、これ、なあに？」

「兄さんはアリサにはまだ難しいよ。僕のは気に入つてくれるよね？」アリサ。本を買つてきたよ。今度読んであげようね

「ほんとう？ ありがとう、セイにいさま」

「え？ セイんにいも本？ 僕も本買つてきたの。ま、いつかアリサ、僕も今度読んで聞かせてあげるからね」

「うん！ やくそくだよ、カイにいさま」

「私はこの間のリボンの色違いを買つてきた。このぬいぐるみに、つけておく？ そしたら、ぬいぐるみとアリサ、お揃いだね」

「うわあい。ニアねえさま、だあいすき」

そうして再び白熱したアリサの好きそつなお土産合戦は、母からの雷が再度、以前より激しくなつて落ちてくるまで、行われたと言つ。

ちなみに、このバトルには途中から父も参戦し、父も同様に母に叱られたそうな。オマケに、父は、子供たちと一緒に怒られたのみならず、寝室で、父個人だけでも叱られたそうな。

もちろん、そんなことも。アリサは全く知らない。兄弟たちも、父も、母も同様に、アリサに知られないよう画策していたのだから。

初めての外出

「の日、アリサのわがままが、父や母、兄弟たちを襲っていた。

「とつさま、かあさま、にいさま、ねえさま。アリサ、お庭以外の
お外、行つてみたい」

その言葉を聞いた家族は、皆揃つて硬直する。理由は、外に出たアリサに襲い掛かる、危険の数々を考えていたからだ。

アリサは、停止している家族の様子を、不思議そうに、眺める。何を考えているのだろう、大丈夫なのだろうか。アリサの頭の中は、そんな考えに縛られ始めていた。

結果、耐えられなくなつたらしいアリサは、横に座る母の服をちよいちよいつと引き、自分に関心を向けさせる。

「あ、『めんなさい、アリサ。考え方をしていたわ……』
「うん。…………で、ダメ?」

アリサは、母が正気に戻ると同時に同じく正気に戻つた家族に向けて、田を潤ませ、尋ねる。その田に、家族はたじろいだ。これは、ダメだというと、間違いなく、泣く。全員がそう実感した瞬間だった。

結果。

「アリサ、明日、僕が休み取るから、一緒に出かけようか

セインが、アリサのその田に負けた。

「アリサ！ 僕も休むから、僕も一緒に行くよ！ セインにいだけ

じゃ、頼りない！」

セインの言葉に、カインが続く。その一人の言葉に、父は、「騎士である一人がついていれば、危険は薄いだろ？」そう考へ、許可を出した。

但し、「アリサに何かあつたら、どうなるか、考へた上で行動するんだぞ？」と、脅しをかけた上でだが。

ちなみに、脅しをかけたのは父のみではない。休むことが出来ないルウインやジャスリーン、エルミナも、父同様、脅しをかけていた。

「アリサに何かあつたら、宰相補佐権限で、お前等、クビ」「ま、そのときは、私が図書室で呪いの本でも探してあげるから」「私は、今作つてる薬の実験体にしてあげるから」

三人とも、なかなか怖いことを考へている。一番怖いのは、エルミナだろうが。薬の実験体つて、一体何の薬だ。セインとカインは、心の中で、同時にそう突つ込んだそうな。

もちろん、そんな会話は、喜びに打ちひしがれているアリサには、聞こえていない。この末娘大好きな家族が、そんな危ない会話を聞かせることなど、絶対にありえなかつた。

そして翌日。初めて庭以外の外に出るアリサは、母の手によつて、きつちりと外用の服に着替えさせられ、リビングで、兄たちの準備が完了するのを待つっていた。その日は、キラキラと輝いていた。

それから数分後、騎士の正装ではなく、動きやすい服を着て現れたセインとカインは、腰に剣を下げ、アリサに害を成すものには手加減しないと、オーラが語つていた。

母は、そんな二人に恐れることなく近寄り、アリサに聞こえないよう、小さな声で、二人に告げる。

「アリサに何かあつたら、分かつてるわね？」

あなたたちも、無事ではいられないんですからね？ 母は、田で、
その言葉を告げた。

母のその言葉に、セインとカインは、一ぐぐくと、頷く。それほどに、母は怖かった。

それから、嬉しそうに微笑んだまま、兄たちの用意がまだかまだ
かとそわそわしながら待つてゐるアリサに、セインたちは微笑みな
がら近寄り、手を取る。

そうして外に出ると、そこには馬車が待つてゐた。高くて自力で
馬車に乗り込めないアリサに、カインがアリサを持ち上げ、馬車に
乗せる。

そして、セインがアリサに続いて馬車に乗り込み、馬車は動き出
した。 カインを乗ることなく。

「カイにいさまは？」

カインを乗せることなく動き出した馬車に、アリサはセインに尋
ねる。そんなアリサの質問に、セインはいやーな笑みを浮かべた。

……アリサが不安になる笑みを。

だが、アリサが本気で不安がつてゐることに気がついたセインは、
すぐにその表情を消して、答えを返してやる。

「カインは、外で馬に乗つてゐよ。もし、変な人が襲つてきたとき、
一人とも馬車の中だと、アリサを守れないからね」

「……そうなの？」

「うん。中から外に出るときに、何かあつて、変なのが馬車に入つ
てきたら、アリサが被害に遭つちゃうだろ？ まあ、そんなバカ

は、僕が倒すんだけど」「

セインのその言葉に、アリサはおお、といつ顔をする。……セインが最後に呟いた言葉を聞いていなかつたが故に、出来る表情だろうが。

走してしばらく走ると、馬車は街に着く。そして、そこにま、いるべきでない人が、彼らの兄、ルワインと共に立っていた。

「どうして、こんなところにいらっしゃるんですか、陛下…」

その姿を確認したカインは、急いで馬から下り、跪き、臣下の礼を取る。そして、そんなカインの声が聞こえたのか、セインも急いで馬車から降りて、カイン同様、臣下の礼を取つた。

「ああ、セイン殿も、カイン殿も、妹姫が馬車にいらっしゃるのでしうう？　お守りして差し上げてください」

ああ、でも、私も一曰くらいは、ドーリス公爵家の尊の姫君のご尊顔を拝したいですねえ。

王が言うと、その瞬間に、セインとカインは馬車へ走り、アリサを宥め、馬車から降ろす。

「アリサ、この方は、この国の王であらせられる方だ」

「ほら、陛下にご挨拶して」

「あ、アリサ、です。よろしくお願いします、へーか

陛下と言つ言葉の意味が分からず、とりあえず言つてみる。そんな様子のアリサに、ルワインやセイン、カインはおうか、王すらも微笑ましげに眺める。

そして、王は、アリサと目線を合わせるために、しゃがんだ。その瞬間、兄たちが静止の声をかけるのだが、それを黙らせた。

「初めまして、ドーリス公爵家の末のお姫様。私は、この国の王です。普段は陛下と呼ばれているが、言い辛いようだから、名前で呼んでくれると嬉しいですね」

王は、そう言つて皿らのファーストネームをアリサに告げる。それを聞いたアリサは、小さな声で、告げた。

「ジーモズ、わあ？」

「うん。君は本当に可愛いですね。君の兄君たちが、君に執着する理由がよく分かりますよ」

王の言葉に、首を傾げ、執着の意味を尋ねるがどうか考えていたアリサだったが、それは、ルウインが止めた。

「陛下、もうよろしいでしょ。城に戻りましょう。まだ、執務は終わっていないんですから」

「宰相補佐殿は厳しいですねえ。分かりました、戻りましょう。では、姫君。またいつか会えることを祈っていますよ」

「いいから戻りますよ、陛下。僕たちの可愛いアリサに、変な毒を蒔かないで頂きたい！」

「本当に宰相補佐殿は厳しくていらっしゃる。毒なんて、蒔いてないではありますか」

「無意識に蒔いていらっしゃるんです！ 僕たちのアリサが考えすぎで、熱を出したらいつも責任を取つてくださいるんですか」

アリサは、そんな言い合いで、城へ戻る兄と王と、本気で、王の言った言葉を考えながら、見送る。

そして翌日。ルウインの言つたように、アリサは赤面で、熱を出した。

このことで、ルウインが王を責めたのは、最早、説明するまでもない。

オマケに、これに關しては、宰相すらもルウインの味方と化し、王を責めたため、王は、じきじきに謝罪の文を認め、王直属の医師の派遣と共に、言付けたのであった。

外出の対価

「熱いー、毛布いやあー」

初めて外出をした翌日、アリサは、王の言葉の意味を考えすぎたせいか、再び高熱を発していた。

熱いと言いながら毛布を剥ぎ取らうとするアリサ。だが、そばで看病をする母は、それを許さない。アリサが毛布を脱ぐと、すぐにまた着せ、脱ぐと着せるを繰り返していた。

「きちんと着ていないと、治るものも治らないでしょ？ 熱くても、きちんと着ていなさい」

「だつて、熱いよお」

「熱いからつて毛布を着ずにいたら、熱が上がるでしょう。熱が上がつたら、また注射か、座薬よ？ いいの？」

「いやつー！」

母は、アリサに言い聞かせるための方法を、しっかりと持っていた。アリサの嫌がることを方法として、しっかりと毛布を着させる。そして、熱い熱い言いながらも、注射や座薬の使用だけは避けたいアリサは、しっかりと毛布を肩まで掛ける。

すると、突然アリサの視界は、真っ暗になった。何故か。母が、アリサの額に、濡れタオルを置いたからだ。その際、タオルが目元にまでかかり、アリサの視界は奪われたのである。

「ほら、眠たいでしょう？ 早く元気になるためにも、休みなさい

「ん……」

「いい子ね。ゆっくり休みなさい」

そうして、アリサは夢の世界へと旅立つた。そして、アリサは夢を見た。

それは、前世。

彼女は、ドーリス公爵家の末娘、アリサではなく、神埼有紗という、どこにでもいる、普通の少女だった。

彼女は、普通の人生を、普通に楽しんでいた。

十歳までは。

彼女が十歳の誕生日を迎えた日、彼女は家族でドライブを楽しんでいた。

いつもより少し遠くにお出かけをして、誕生日プレゼントに彼女が欲しかったものを買ってもらい、幸せだった。

なのに。なのに、その日の帰り、彼女は家族と一緒に、事故にあった。

両親は、彼女を庇つて命を落とし、彼女だけが、生き延びた。

何故、一緒に連れて逝ってくれなかつた。何故、自分だけ残した。目を覚ました病院で、両親の訃報を聞かされた少女は、何度も死のうとした。両親の元へ、逝こうとした。

でも、死ねなかつた。何度死のうとしても、場所が病院である以上、すぐに処置がなされ、彼女は生き延びた。

それからしばらくして、彼女の前に、後の両親となる人が現れる。それは、彼女の母の妹で、彼女も、何度も会つたことのある人だつた。

「有紗ちゃん。一緒に、暮らそう？ 姉さんの代わりにはなれないけど、叔母さんの家の子になつて？」

それを聞いた彼女は、泣きじやくり、叔母にしがみついた。一人じゃないことに安堵し、ただただ、泣いた。

「有紗ちゃん、彼は、私の旦那。有紗ちゃんのお父さんになる人ね」「……よろしく」

彼女の父となる人は、仏頂面ではあったが、優しい人でもあった。思いがあまり顔に出ず、分かりづらい人ではあったが、それでも、彼は有紗を娘として愛していた。

学校で両親が実の両親ではないことでいじめてくる人がいると、有紗から話を聞けば、「そんな学校、行かなくていい」と、いつものように仏頂面で告げ、そして、有紗が学校へ行つていない日に、学校へ抗議に向かった。

いじめていた子が教師に叱られ、いじめがなくなつても、それでも怖いから学校に行きたくないと有紗が告げれば、「有紗の好きなようにすればいい。勉強は、教えてやる」と、やはり仏頂面で告げていた。

だが、いつだつてそうして甘やかしてばかりではなかつた。叱るときは徹底的に叱り、有紗を泣かせてでも、とにかく反省させていた。彼は、彼なりに、有紗の父になろうとしていた。

だから、有紗も、血の繋がらない父である彼を、愛していた。本当の親のように、慕つていた。

そんな日が、ずっと、続いていけると思つていたのに。

車のライトが、田の前で光る。

避けきれない位置で、車が急ブレーキを踏んでいる音をたてながら、近寄つてくる。

車体が、彼女の体に触れる。

そして、彼女は吹き飛ばされた。

「アリサ！　アリサ、どうしたの！？」

『嫌だ死にたくない助けて叔父さん！　死にたくない！　助けて叔母さん！』

魔されていいるアリサを母が起こすと、アリサはこの世界の言葉ではない言葉で、何かを叫ぶ。それは、必死で、何かを求めているようだった。

「アリサ、どうしたの？　大丈夫よ」

『やだやだ！　死にたくない！　連れて行こうとしないでえつ！　お父さん、お母さん！　私はまだ生きたいんだよつ！』

必死で叫び続けるアリサを、母は、優しく抱きしめる。大丈夫だと伝わるように、アリサに、安心を伝えるために。

「怖い夢見たの？　アリサ。もう大丈夫だからね。かあさまがいるから」

「か……あさま？」

そうして抱きしめていると、よつやく聞き覚えのある言葉が聞こ

えてくる。母がアリサから少し離れ、顔を見てみると、さっきまでは合つていなかつた焦点が、しつかりと合つていた。

「怖い夢見たのね、アリサ。でも、大丈夫。それは、夢だからね」「ゆめ…………？」

「ええ、夢よ。だから、安心して、もう一度休みましょうね」「やだ。…………こわい」

「大丈夫。かあさまがそばについててあげるからね」

母が優しく告げると、アリサはようやく眠る気になつたのか、目を瞑る。そんな愛娘の額を、母は、安心できるよう、撫で続けていた。アリサが健やかな寝息をたてるまで、ずっと。

そうしてアリサが眠つて、母は考える。この子は、一体どんな夢を見ていたのか。あの時叫んだあの言葉は、一体なんだつたのか。彼女の生家も貴族であつたため、彼女も大体の教養はある。その中で、この国以外の言語にも学び、彼女は、言語に関しては、かなり詳しいほうのはずだった。

そんな母でも、先ほどアリサが叫んだ言葉は、耳覚えのないものだった。発音も、その言葉自体も、何もかもが、母には分からぬものだった。

この子には、一体どんな不思議が隠されているのだろうか。親として知りたいような、知らないほうがいいような、複雑な気分に、母は襲われていた。

そしてその日の晩、大分熱が下がり、楽そうになつたアリサを横に、父にこの日のアリサのことを話し、相談する母の姿が見受けられたそうな。

喪失の恐怖

何故、この子までもが。有紗の事故の連絡を受けた叔母であり、今は母親である彼女は、心からそう思った。

姉夫婦を事故で失い、今現在、その姉夫婦の忘れ形見であり、自分たち夫婦の子となつた姪までも、交通事故で失いたくない。彼女はそう思いながら、知らされた病院へ向かう。

「加奈、こつちは用意できた。行くかい？」

「うん、行こう、たつちゃん」

彼女は、急いで出発の支度をし、夫である達也と共に、車に乗り込み、病院へ向かう。

彼女たちが病院に着いたとき、有紗はまだ処置中で、ずっと、危ない状態が続いていた。

「大丈夫だ。あの子は、強い」

「分かつてゐる。……分かつてゐるけど、怖いの

姉さんたちが、あの子を連れて行つちゃいそうで。彼女の言葉に、達也は彼女をきつく抱きしめる。そして、祈る。神に、有紗の本当の両親に。

『あの子を、連れて行かないでください』

あの子は、僕たちがずっと守つていきます、育てていきます。だから、僕たちから、あの子を奪わないでください。加奈を、まだ絶望の淵に追い込もうとしないでください。

達也は、心からそう祈る。有紗の無事を、加奈から、失う怖さを

奪うこと。

「神崎さんの、『J両親ですか?』

そうしていると、警察らしき人間が、彼女たちのそばへやつて来る。今は反応が出来ない妻の代わりに、達也が返事を返した。

「そうですが、何か」

「いえ、一応、状況の説明をさせていただこうかと思いまして。お時間、大丈夫でしょうか?」

「今は、遠慮させていただけませんか? セめて、あの子の無事が、分かるまでは」

「……そうですね。失礼いたしました」

それから、どのくらいのときが流れたのだろう。彼も、彼女も、時間の感覚が分からなくなるほど、ずっと、手術室の前に置かれた椅子に座り込んでいた。

どれだけ時間が流れても、有紗のいる手術室の扉は開かれない。その時間の長さが、どれだけひどい状態なのか、嫌でも彼らに知らせることになる。

そこで響く音は時計の針の音だけで、それが、更に時間間隔を痺させた。どれだけ時間が経つたのか分からないまま、彼らはそこに座りつくす。

そして、ようやく、手術室の扉が開かれた。彼も、彼女も、一同散に医者の元へ向かう。

「先生! 娘は!?」

「一命は、取り留めました。詳しい説明は、後ほど。今は、娘さんについていてあげてください」

そう言われ、医者の田線の先に田を向けると、そこには包帯でぐるぐる巻きになつた有紗が横たわつていた。

その包帯が、傷のひどさを物語り、体中に繋がれた「コード類」が、彼女の命の危険性を、激しく語つていた。

でも、生きている。そのことが、救いだつた。どれだけひどい怪我でも、有紗は、生きている。

だが、その喜びも、医者からの説明を受けるまでだつた。

「娘さんは、今後一生、意識が戻らないかもしません。現状では、生命維持装置を使って何とか、命をつないでいる状態です」

一生、意識が戻らない。それは、生きていながら、死んでいるようなもの。それでは、一度と、あの子の声は聞けない。あの子の笑つた顔は見れない。

その言葉が、彼女に、加奈に、かなりのダメージを与えた。

「う……そよ。あの子は、田を覚ます。絶対に、田を覚ますの！
姉さんたちみたいに、失つてたまるものですかっ！」

そしてその日から、彼女は、有紗の意識を戻すために、いろいろなことをやつた。有紗の怪我の様子を見ながら、出来る範囲でやれることをやつていった。

しばらくはそんな妻を傍観していた達也も、一月も経つころには、一緒に有紗の意識を戻すために、奮闘するよつになつた。

だが、一年経つても、有紗の田が開かれることはない。

事故から早一年もの年月が流れ、有紗は十六歳になっていた。だが、依然として、有紗は眠りっぱなしだった。

事故のときの怪我も殆ど治り、包帯が巻かれている場所など、一箇所としてなかつたとしても、有紗は目を覚まさうとしなかつた。それでも、彼も、彼女も、諦めなかつた。一年くらいで何とか出来るのは思つていなかつたらしい。まだ時間をかけ、ゆっくりと起こううと考えていた。

二年の月日が流れた。依然として、有紗は目を覚まさない。

それでも、彼らは頑張り続けた。西でいい方法を聞けば、それを試し、東にいい方法があると聞けば、東へ駆けて行き方法を聞いて、試したりしていた。

三年経つた。まだ、有紗は目を覚ます気配を見せない。

この頃になると、起こそうと頑張つてはいても、少しづつ、諦めの色が見えるようになり始めていた。

四年経つた。有紗の体が、少しづつ限界を訴えるようになり始めた。

それでも、まだ有紗は生き続けた。眠りっぱなしでも、それでも、生きていた。

五年経つた。ついに、有紗の体に限界が訪れた。

ある日、有紗の生命維持装置が、警告の声を上げた。駆けつけた医者が診てみると、有紗の呼吸は既に停止し、心臓も、止まりかけていた。

医師が必死で命を繋げようと努力するのだが、その努力は、無駄に終わるうとしていた。有紗の心臓は、止まつた。

「心臓マッサージだ！ 早く！」
「はいっ！」

医師たちは、有紗を蘇生させようと、頑張る。だが、それを、彼女たちが止めた。

「もひ、楽にしてあげてください。有紗を、本当の両親の元へ、逝かせてあげてください」

泣きながら告げる有紗の母の言葉に、医者は手を止めた。そして、

有紗の心臓は、完全にその鼓動を止めた。

片羽の喪失

「アリサ。神埼有紗は、死んだよ」

驚されて目を覚まし、その後、再び眠ったアリサの夢で、あの日、有紗に生きたままの転生を促した青年は、静かに告げる。

それに、アリサは目を真ん丸にする。そして、静かに、尋ねた。

「叔父さんと叔母さん、悲しんでた？」

「ああ、とても、悲しんでいたよ。守つてあげられなくて」めん、と、葬儀で言つていたな

そう言えば、私が叔母さんの家の子になつたばかりの頃、何度も「有紗ちゃんは叔母さんが守つたげる」つて、言われてたつけ。アリサは、のんびりとそう考える。

あれは、叔母さんのせいじやないのに。同時に、いつも考えた。

あの事故は、アリサの叔母には全く責任などなかつた。アリサが外出したのが夜だつたとしても、まだ六時半くらいで、大して暗くはなかつた。

だから、叔母も「気をつけて行つて来るのよ」とだけ告げ、アリサも「分かつてるよー」と返して、外出した。

それが、叔母とアリサの、最後の会話となつた。

「叔母さん、悪くないのになあ

アリサは、視界を滲ませる原因である涙を、服の袖で拭いながら告げる。その声は、泣くのを我慢していると、すぐに分かる。

だから、青年はアリサを抱き寄せ、告げた。

「我慢するな。泣きたいんだろう？ 泣けばいい、思い切りな

「……でも」

「気にするな。泣け。どうせ、これは夢だ」

その言葉が、アリサの涙腺をくすぐった。アリサは、思い切り泣き出した。青年の胸を借りて、盛大に泣いた。

「叔母さんにあんな言葉、言わせたくなかつたよ！ 死にたくなんて、なかつたよ！ 事故なんて、一度と遭いたくなかつたよ！」

アリサは泣き続ける。そんなアリサを、青年は優しく抱きしめ続けた。

僅か十歳で、事故で両親を亡くし、その五年後、再び事故に遭い、遠くない未来に、命を落とす運命（さだめ）だった少女。

それをかわいそうだと思ったから、彼は、彼女が死ぬ前に、転生するかどうか、選択肢を与えた。まだ死んでいない魂を、転生させるという荒業をやってのけた。

本来、やるべきではない荒業。否、かつて、どの神ですらもしたことのない荒業。彼女のためだからこそ、彼は、やってのけた。

一つの魂で二つの体を共有するが故に、病弱な肉体になり、そして、本来の肉体の衰弱スピードは速くなることは分かつていたが、それでも、彼は、アリサに人生の楽しさを知つてもらいたいが故に、転生させた。

そんな、自分の行動を、彼は少しずつ、後悔し始めていた。

自分が転生させなければ、彼女は、いつか目を覚ましたかも

しない。

そつやつて目を覚ましていれば、優しい叔父叔母の元、人生を楽しめていたかもしない。

彼女ならば、運命を自力で変えることが出来たかもしない。ならば、今、彼女がここで泣いているのは、自分が悪いんだ。

「じめんね、アリサ」

「へ？ なんで、おにーさん、あやまるつ、の？」

彼が、アリサに素直に謝罪の言葉を告げると、アリサはわけの分からないと、顔で、何故謝るのか、彼に尋ねる。

彼は、アリサとしつかりと目線を合わせて、先ほど謝った理由を告げた。

「僕が、君を転生させなければ、君は自力で運命を変えていたかもしれない。」
「うして、今泣いていなかつたかもしない」

だから、君が今泣いているのは、僕のせいなんだよ。彼は、自虐的に微笑みながら、アリサに告げる。

「違う！ お兄さんが転生させてくれなかつたら、私は、にいまたちに会えなかつた！ お兄さんが転生させてくれたから、私はにいさまやねえわま、といつても、かあさまに会えたんだよつー！」

だから、謝らないで！ アリサの言葉に、彼は優しく微笑み、アリサをぎゅっと抱きしめた。

自分が転生をさせたが故に、以前会つたときと比べ、格段に小さくなっている少女。そんな小さな少女を、彼は壊さないよう、慎重に抱きしめた。

そして、耳元で小さく囁く。「ありがとじつ」と。

「さあ、もうお戻り？ 君は、神埼有紗であつて、そうではない。君は、ドーリス公爵家の末っ子のアリサだ。……楽しい人生を送りなよ、アリサ」

彼のその言葉をBGMに、アリサの意識は少しづつ薄れしていく。そして、聞き覚えのある声が、アリサの耳に届く。それは誰の声だつただろ？ 少し考えて、答えが出た。この声は、

「おかえりなさい、にいさま、ねえさま」

「ア……リサ？」

「魔されてたから起こしたんだけど、大丈夫なのかな？」

その声の持ち主は、彼女の愛する兄弟たちの声だった。アリサが魔されていたため、起こそうと、声を掛けていたらしい。

「だいじょぶです。心配させて、ごめんなさい」

「ああ、謝らなくていいよ、アリサ。大丈夫なら、よかつた」

アリサの兄弟たちは、そう言って、アリサの額に手を置く。そして、優しく微笑んだ。

「大分熱は下がってるみたいだね。よかつたね、アリサ」

有紗の大切なものは、叔父と叔母。

アリサの大切なものは、彼女を心から愛しいと言つてくれる、家族。

この日、アリサは、神埼有紗から、アリサ・クライシス・ドーリ

スとなつた。

夢で、たっぷり泣いて目を覚ますと、そこには、目を真っ赤に染めたかあさまやねえさまたちがいて、横には、泣きそつだが、泣くのを我慢しているとうさまやにじたまの姿が見えた。

「よかつた……アリカ」

「心配したんですから……」

とうさまもかあさまも、そう言って私を抱きしめるが、どうして、そこまで心配するのだ？「私が熱を出して寝込む」となんて、いつものことじゃないか。

なのに、どうして、そんなに目を真っ赤に染めているの？ 泣くのを我慢しているの？ 私は、大丈夫だよ。

一人に抱きしめられながら、私はそんなことを考える。だつて、本当に大丈夫なんだから。

すると、とうさまとかあさまの手が離れ、次はにいさまたちの手が伸びてきた。私はにいさまたち五人に、ぎゅうっと抱きしめられる。

「アリサ、五日間も眠りっぱなしだったんだ。少しくらい抱き方が強くなつても、我慢してくれ」

「本当に心配したんだから」

「呼びかけても全く反応は見せないし」

「王宮医師に見てもらつても、目を覚まさないし」

「どれだけ、私が薬の研究に没頭したと思つてゐるの」

…………どれだけ心配をかけていたのかが、よく分かりました。

確かに、娘が五日間も目を覚まさず眠りっぱなしなら、心配するよ

ね。

オマケに、私のこの体は病弱。それなら、命の危険性すらもあつたかもしない。

とうさま、かあさま、にいさま、ねえさま。心配をかけて、本当にごめんなさい。でも、もう大丈夫だよ。

ああ、何だろう。さつきまでずっと眠っていたはずなのに、まだ眠たいんだ。眠つてもいいかな、いいよね。

おやすみなさい、とうさま、かあさま、にいさま、ねえさま。旦が覚めたら、何があつたのか、話してくれると嬉しいな。

* * * * side 家族

現在のドーリス公爵家は、パニックに陥つていた。原因は、末娘、アリサ。熱を出して寝込むまではいつもと同じなのだが、この日のアリサは、眠つたままで、何度呼んでも、体を揺らしても、何の反応も見せなかつた。

それをメイドから聞いた家族は、急いでアリサの眠る部屋へと駆けつける。眠つているアリサは、熱のせいで若干呼吸は荒いものの、それでも、ぱつと見では、眠つているようにしか見えなかつた。

だから、兄弟たちは呼ぶ。彼らの最愛の妹の名を。

「アリサ」

だが、愛する妹は、眠つたままで何の反応も見せない。だから彼らは、幾度でも呼ぶ。彼らの心から愛する、小さな妹の名を、呼び続ける。

だが、彼らの愛する妹は、田を覚ます気配を、微塵として見せることはない。

「眠っているだけのよう」、見受けられます。恐らく、体が体力を回復させるために、強制的に深い眠りについておられるのだと……」

自分たちが何度も挑戦し、起こせなかつた彼らは、侍医を呼んで、どこかに異常がないか確認をしてもらつ。

だが、返ってきた答えは、『眠っているだけ』。ほかに異常は見られない。とにかく、眠っているだけ。

その日から、家族は全員が仕事を休み、アリサに付きつ切りになつた。

アリサの目を覚ますために。

早く、彼らの可愛いアリサの笑顔を見るために。

そのために、彼らは奔走する。すべては、小さな小さなアリサのために。

それから五日後、彼らの可愛いアリサは、唐突に目を覚ました。目を覚ますと同時に、全員が部屋にいるのが意外なのか、目をまん丸にしている。

そして、目をまん丸にしているアリサを、まずは両親が抱きしめた。

「よかつた……アリサ……」

「心配したんだから……」

それは、心からの想い。彼らは、目を覚まさない娘を、この五日間、ずっと心配し続けてきた。

何故目を覚まさないのか、明確な理由が分からぬ、小さなアリサ。

一つ目を覚ますのが、分からぬ、彼らの小さな末娘。

田を覚ますことなく、そのまま死んでしまった。そのうなほびにて、弱りきっていた、兄弟たちの小さな姫。

だから、アリサが田を覚ましたときは、みんな喜んだ。泣いていた母や姉たちも、涙を拭つて、アリサに微笑みかけた。

父や兄たちは、誰かの前で泣くのもなんなので、必死で泣くのを我慢し、アリサに優しく微笑んだ。

すべては、可愛いアリサのため。アリサに余計な心配をかけないよつこ。

だから、彼らは両親の手から離れた小さな妹を、きつく、抱きしめた。

「アリサ、五日間も眠りっぱなしだったんだ。少しくらい抱き方が強くなつても、我慢してくれ」

ルウインが、そう言つながらずもつと抱きしめ、

「本当に心配したんだから」

ジャスリーンが、兄の隙間を縫つて、愛する妹を抱きしめ、

「呼びかけても全く反応は見せないし」

「王宮医師に見てもらつても、田を覚まさないし」

セイインとカインが、兄や姉」と、アリサを抱きしめ、

「どれだけ、私が薬の研究に没頭したと愚つてゐるの」

エルミナは、そんなアリサを抱きしめることは諦め、アリサと田

線を合わせて、そう告げた。

その後、久しぶりに起きて話したのが疲れたのか、アリサは再度、眠りについた。

それと同時に、久しぶりに安心した家族も、眠りにつく。アリサの部屋で、椅子に座つたまま、そのまま眠つていた。

母は、ソファーの上で、父に寄り添い、眠りにつき、父は、ソファーの上で、妻の温もりを感じながら、眠り、ルウインとセイン、カインは、椅子に座つたまま寝入り、ジャスリーとエルミナは、アリサのベッドに突つ伏しながら、眠つた。

そんな彼らに、メイドたちは風邪を引かないようにと、毛布をかける。

安心した笑顔で、気持ちよさそうに眠る主一家を起しきれないよう、気をつけながら。

彼らは、田を覚ますと同時にほつとする。可愛いアリサは大丈夫だろ？か。彼らは、そう思いながらまだ起きていない家族を起こし、アリサが田を覚ましたことを確認する。

そうしなければ、アリサが田を覚ましたことが、夢のように感じられて、怖かったのだ。

「ルウイン！ ジャスリーン！ セイン！ カイン！ エルミナ！
起きなさい」

先に田を覚ました父と母は、真実を確認するためにも、アリサ以外の子供たちを起こす。

そして、子供たちがしつかりと田を覚ますと、次はアリサの番だつた。父たちは、ゆっくりとアリサの肩に手を置き、ゆっくりと揺らす。

「アリサ、起きてくれ。アリサ？」
「アリサ、お願ひだから起きてちょうだい」

両親が声をかけ、体を揺らすと、アリサは「んう～」と言にながら、寝返りをうち、再度眠りだした。

そんなアリサの様子に、彼らはホッとする。アリサが田を覚ましたのは、夢ではなく、現実であったと。

そのことに安堵しながらも、彼らはアリサを起こさうと努力する。起こして、何か胃に入れさせつもりだつた。

「アリサ、起きなさい。少しくらい、何か食べておこうね？」

「食べたらまた眠つてもいいから。だから、起きてちょうだい？」

「ん……ん……」

そこまで言われたアリサは、眠たい瞼をこすりこすり、目を開く。それを確認した父たちは、いつの間にやら用意をさせていたお粥を、スプーンで掬い、アリサの口元へ運んだ。

まだはつきり覚醒できていないアリサは、無意識に口を開き、お粥を受け入れる。

「おいしい？」

「んー」

そうして食べさせている間に、ようやくアリサの頭は覚醒し始めたらしい。少しづつ、目がパチチリと開かれていく。器に盛られたお粥を、珍しく完全に食べ終える頃には、アリサの目はしっかりと開かれていた。

ただ、それは良かつたのか、悪かつたのか。

「うえええ」

食事を終えて少しすると、突然の食事に驚いたらしいアリサの胃が、悲鳴を上げた。起き上がった状態のまま、まず、アリサの小さな手に吐き戻し、それは、布団へと落ちていった。

それを見た父たちが焦つたことは、言つまでもない。

結果、アリサの戻したものは、アリサのベッドのマットレスまでも汚し、しばらくベッドが使えなくなつたアリサを、父が抱きかかえ、自らの部屋へ運ぶ。

両親の部屋のベッドは、アリサが五歳になる前まで、つまり、つい最近までは一緒に寝ていたベッドだ。両親は、アリサのベッドがきれいになるまで、自分たちの部屋で、昔のよつて一緒に寝ること

を選んだのだ。

但し、ほかの子供たちから反対の声は飛んできたが。

「父さんたちと一緒に寝るなら、僕たちだっていいじゃないか」

「兄さんたちより、私が、エルミナがちょうどいいでしょ？ お父さん」

「何を言つ、ジャスリーン。僕たちだって、なんの問題もないはずだろつ」

「僕、どーでもいい。アリサが元気ならそれで」

「私もそう思うわー」

そうして子供たち（上三人に限る）は言い争いを続けるも、両親は、自分たちの部屋からアリサを動かすつもりはなかつた。

それに、子供たちの部屋に移動しようものなら、子供たちのアリサ争奪戦が起こることは、目に見えていたため、それは避けるべく、彼らは自分たちの部屋にアリサを置いたのであつた。

それに、アリサ自身も、両親の部屋は、つい最近まで自分が眠っていた部屋であるため、何の違和感も感じず、眠れる場所となつている。

つまり、アリサとしては、兄弟たちの部屋よりは、両親の部屋のほうが、安心して眠れる部屋なのである。

それを、兄弟たちに言つことは、決してしないが。言えば悲しまれることが、分かつてゐるためである。

そして、両親の眠るベッドの、嘗ての定位置、真ん中に寝かされたアリサは、家族の視線の中で、再び眠る。

先ほど戻すのに体力を使ったのか、父に運ばれている時点で、既に眠たそうにしていた。

そして、ベッドに下りると同時に、完全に、墮ちた。

そんなアリサを見ながら、父は、ほかの子供たちを、部屋から追い出す。

「明日から仕事に行かねばならんだろう? 用意をしておきなさい」

やうじょう口実をつけて、父は子供たちを部屋から追い出し、そして、妻と共に、彼らの可愛い愛娘の寝顔を、ただただ、ずっと眺めていた。

アリサが、「どうれま、かあさま。アリサ、おなかすいた」と言つて、潤んだ瞳で、彼らを見つめてくるまでは。

彼らの小ちいなアリサは、ベッドに横たわったまま起き上がりつとせず、そのまま空腹を訴える。その日の可愛さは、最早凶悪的だった。

それとじめを刺すよつこ、アリサのお腹は、空腹を訴える小さな子犬の鳴き声のような音をたてる。

その日と、子犬の鳴き声のような音には、父も、母も勝てやしかつた。彼らは、メイドを呼び、先ほどよつもとひとひとさせたお粥を用意させる。

今度こそ、戻さなくてもいいよつこ。アリサが、満足できるようにな。

そして、食事を終えたアリサは、今まで寝込んでいたのが嘘のように、元気いっぱいに兄たちの元へ、遊んでもらうために、向かうのであった。

そしてアリサが遊んでもらうために兄たちを訪れたことで、兄たちが喜び、仕事の用意をほつたらかして、遊んであげたことは、最早言つまでもない。

アリサは、夢を見ていた。それは前世で、彼女が神崎有紗という名の人間であつた頃の思い出だった。

彼女は、小さなアパートの一室で、両親と共に暮らしていた。貧乏ではあつたが、それでも、彼女には両親がいれば、楽しかつた。彼女の両親は、休みの日には、いつだつて彼女と遊んでくれた。

「有紗、明日は公園で遊びましょうか」

「うんっ！ お父さんも一緒に？」

「当たり前だろ？ 有紗。お父さんが、有紗の頼みを聞かなかつたことなんて、あつたか？」

いつだつて、彼女は両親と一緒にだつた。学校へ入り、遊びに行く時間が減つても、それでも、休みの日はいつだつて両親と一緒にだつた。

両親は、彼女の誕生日は、いつだつて手作りのケーキで祝つてくれた。そして、その数日後には、必ずどこかへドライブに出かけた。それが、いつまでも続いていくと思つていたのに。

どうして、あんなことになつたんだろう。有紗は、考える。あの日、帰り道での事故は、どうして起つたんだろう。お父さんは、制限速度内で走り、きちんと、車道からはみ出るところなく走つていた。

なら、どうしてお父さんたちは死んだの？

それは、相手方のトラックが、中央分離帯を乗り越え、彼女たちの乗つた車に突つ込んだからだ。

運転席に乗つていた父は、即死。

後部座席に、有紗と一緒に乗つっていた母は、有紗に覆いかぶさる

ようにして、亡くなっていた。

彼女は一人、残された。齡十歳にして、一人だと黙つことを、実感させられた。

「やだ！… お父さん！ お母さん！ 私もお父さんたちのところ行く！ 死なせて！ 死なせてよおつ！」

それからの彼女を待つていたのは、絶望の日々だった。両親共に親戚と言う親戚が見つからず、それが、ますます一人だと黙つことを、彼女に知らしめた。

だから、彼女は何度も死のうとした。何度も何度も手首を切り、医師による処置によつて生かされ、屋上から飛び降りようとして、偶々居合わせた看護師や患者に止められた。

何度も失敗しても、彼女は諦めなかつた。一人で生きる」とは、そこまでも、彼女にひどいダメージを与えた。

そんな彼女の自殺未遂が止まつたのは、彼女の母に、妹がいることを知つてからだつた。彼女も会つたことのある人ではあつたが、その人が、母の妹であることは知らなかつたらしい。

「有紗ちゃん。有紗ちゃんは、一人じゃないから。叔母さんがいるから。だから、死なないで」

その言葉が救いになつたのか、その日から、彼女は死を選ぼうとしなくなつた。生きることに必死になつた。

その様子を、医者は温かい目で見守り、彼女の新たな親となる叔父と叔母も、同様に優しい目で見守つた。

そうして、彼女は退院し、両親と一緒に暮らしていたアパートを

出て、彼女の叔母夫婦の住む家に移り住んだ。

それと同時に、学校も転校した。転校に伴い、有紗は新たな友達を作ろうと、必死で頑張った。

なのに、世間の風は冷たかった。子供たちは、本当の両親と暮らしていない有紗を迫害し、無視という名のいじめを行つた。子供は、自分たちと違うものを排除する生き物だと言えど、両親を失つたばかりの有紗に、この仕打ちはあんまりだった。

結果、有紗は少しづつ、学校をサボるようになつていった。いじめのことを、叔父叔母に話すことはしない。引き取つてもらつた上に、余計な心配を掛けたくなかつたからだ。

だが、それはバレた。あまり学校に来ない有紗を心配した担任が、家に連絡を入れたのだ。

そして、帰ってきた有紗は、叔父叔母から、何故学校へ行かないのか尋ねられ、そして、そこで初めていじめのことを話した。

怒られる。反射的に身を硬くする有紗を、叔父と叔母は、優しく抱きしめる。それが、有紗を驚かせた。

「早く相談してくれればよかつたのに……。辛かつたでしょ？」
「そんな学校、行かなくていい。好きなだけ、休むといい」

その言葉が、有紗の涙腺を緩めた。有紗は、叔父と叔母にすがり付いて、大声で泣いた。

叔父と叔母は、有紗が泣いてすがつてくれたことを、心から嬉しく思つていた。やつと、自分たちを頼つてくれている、と。

それからは、有紗と叔父叔母は、本当の親子のように暮らしていく

つた。

有紗はいつまでも学校へは行かなかつたが、家で勉強はきちんとしていた。

教科書を見ながら、自力で勉強をし、分からなくなつたら叔父や叔母に聞きにいく、と血の形で、頑張り続けていた。

叔父も、叔母も、それでもいと思つていた。

ただでさえ辛い思いをした子なのだから、有紗には幸せになつて欲しいと思つていた。

楽しかつた。叔父と叔母は、甘やかしてくれるし、有紗が悪いときは、きちんと叱つてくれた。

だから、有紗は一人を本当の両親のよつて慕つていた。

なのに、どうしてあんなことになつちゃつたんだらう。有紗は、思つ。

あの日、外に出なければ良かつたのかな。
久しぶりだからって、外に出ず、家に籠もつぱなしのまゝが良かつたのかな。

でも、それだと、どうせまやかあわせ、ここにわせ、ねえさまに会うことは出来なかつた。
どうちがいいんだらう。

でも、会いたいよ、叔父さん、叔母さん。私の、第一の両親。

アリサがふと田を覚ますと、田の前が滲んで見える。小さな手で田元に触ると、そこには、涙が浮かんでいた。

「どうしたの？ アリサ。怖い夢でも見たの？」

「大丈夫だ、アリサ。アリサはひとつおたちが守つてあげるからね」

そして、そんなアリサの様子に気がついた第三の両親である彼らは、優しくアリサに告げる。そして、服の袖で、アリサの目元を濡らす涙を拭つてやる。

すると、アリサが突然、母に抱きついた。

「どうしたの？ そんなに、怖い夢を見た？」

「かあさま、とうさまも、絶対にアリサのそばにいてね。いなくなつたりしないでね」

アリサが言つと、両親は、アリサの頭を優しく撫でる。そして、優しく告げてやる。

「どうせまたちが、アリサのそばからいなくなつたりするわけないだろ？ ずっと、アリサが望むまでそばにいるよ」

「ほんとう？」

「当たり前でしょ？ 親は、子のそばにいるものよ。」

母が言つと、アリサは、ホッとした表情をする。

そして両親は、そんなアリサを再び寝かしつけるのであった。

「どうでも、かあさま。アリサ、またお外に行きたいな」

アリサの攻撃に、彼らは、半端ではないほどのダメージを受ける。
それほどに、アリサのお願いは、強烈だった。

そして、そんな中で見つめられた両親を、子供たちは悔しそうな
目をしながら眺める。

「どうでも、かあさま、…………ダメ？」

父は、元来娘をこよなく愛する生物。つまり、父がアリサのこの
お願ひに、首を横に触れるはずもなかつた。

父は、母や公爵家の私兵と共に行動をすることを条件に、アリサ
に外出の許可を出した。

「まあ、王都で公爵家のものに手を出す馬鹿はいないだろ？が」

父はそう言つが、用心に越したことはない。よつて、彼らは公爵
家の私兵に、アリサの護衛について街へ行くよう命じる。
すると、私兵の中で、バトルが勃発した。

「お前は、今日は屋敷の護衛だろ？が。俺が行く！」

「お前こそ、今日は休みじゃなかつたのか？ せっかくの休みを無
駄にさせないためにも、俺が行こ？」

等々。

つまり、私兵が普段からあまり外に出ることがないため、見かけ
ることのないアリサを一目見ようと、護衛の任を、争つてるのであ

る。

まあ、その争いは無駄に終わったのだが。

「セシル、ロザンナ、頼んだぞ」

父は、男どもの馬鹿な争いを冷めた目で見つめていた女性の兵に、アリサの護衛を任せる。その瞬間、無視された男どもは、発狂に近い叫び声をあげたと言う。

まあ、その声が聞こえる範囲内にアリサがいたため、さりげなく控えていたセインとカインが瞬時に黙らせたのだが。

それ、時に延髄落しとも言つ。

そのおかげか、アリサは男どもの醜い争いの結果の声を聞くことなく、母と共に、嬉しそうに外出の用意をするのであつた。

兄弟たちは、そんなアリサを微笑ましげな瞳で見つめながら、後ろ髪を引かれる思いだが、仕事へ出かけていった。

兄弟たちの考えは、皆同じである。アリサと一緒に出かけたい。

だが、それは不可能な話だ。この田舎、全員どつ足搔いても仕事は休めなかつたらしい。

結果、子供たちは、仕事に行く前に、揃つてアリサに声を掛けていった。

「アリサ、絶対に知らない人についていつたりするなよ」

「お母さんから離れたら、絶対に、ダメだからね」

「無理をして、熱を出さないよつにな?」

「転んだりしないよつ、気をつけるんだよ」

「とにかく、無茶をしないでね?」

アリサの肩を優しく掴み、視線を合わせて兄弟たちは告げる。それに、アリサは「分かってるよお」と、へんやと笑つて答えた。

その笑顔にホッとしたのか、兄弟たちは家を出、アリサが見ていなくなつた瞬間に、駆け出す。実は、時間が危なかつたらしい。

それからしばらくして、用意が出来たらしい母とアリサは、護衛の兵であるセシルとロザンナと共に、馬車に乗り、街へ向かう。その馬車の中で、楽しそうに景色を眺める愛娘に、母は質問をする。

「アリサ、街で、何か見たいものはある？」

「おしる。ルウにいわまと、リンねえさまがそこにはいるんでしょう？」

「そうね。でも、ルウインやジャスリーンには会えないわよ？」

「いーの。中に入るつもりはないよ」

アリサが言うと、母は「なら、外からお城を見ましようね」と言つてアリサに微笑みかける。そんな母に、アリサは元気いっぱいに頷いた。

そして、そんな会話を馬車の外で馬に乗り、聞いている護衛一人は、微笑ましい親子の会話に頬を緩めていたそくな。

それも、一時のことではあるが。

そうして走つていると、馬車は王都の中心部に着いたらしい。止まり、セシルとロザンナが、「ここからは人が多いので、馬車は無理です。お降りください」と言つて、二人に下車を促した。

アリサの場合は、自力で降りられないでの、護衛一人に抱えてもらい、降りることになつたのだが。

そして、馬車を降りた母は、横に立つていた娘の手を掴み、しつかりと手を握る。そうしていれば、はぐれる心配もない。

「さ、まずはアリサが見たいって言つたお城を見に行きましょうか」「うん！」

一人はそう言つて、城の方向へテクテクと歩いていく。母は、アリサが疲れないよう、アリサのスピードにあわせ、ゆっくりと歩いてやる。

そうしてしばらく歩くと、大きな城の外観が見えてきた。だが、城までは、まだまだ遠い。

「アリサ、あそこに見えるのが、この国の王様たちの住む、お城よ」「うわあ、おつきいねえ」「近くに行くと、もつともつと、大きいわよ？ アリサはびっくりするでしょうね」

そう言つて、二人と護衛一人は、城への道を、テクテクと進んでいく。

そうして、城の間近へついた。アリサは、母の予想通り、驚いていた。上を見て、ずっと上のほうを見て、首が痛そうなくらいに上を見て、驚いていた。

ちなみに、アリサたちの住む家も、十分に大きい。公爵家故に、体面を考え作られたこともあるが、それでも、十分に立派な家である。

だが、城はその何倍も立派な建物である。王が住む場所であるが故に、果てしなく大きい建物となっている。

「陛下！ ダメだと言つていいでしょ！ 宰相殿、あなたも止めてください！」

そうしていると、アリサたちにとつてはようく聞きなれた声が聞

こえてくる。それは、ルウインの声だった。それと同時に、アリサたちの前には、この国の国王が現れる。

「お久しぶりですね、ドーリス公爵夫人、アリサ嬢」
「陛下」

王を見た瞬間、母は、反射的に跪いた。同時に、アリサも無理やりしゃがみこませる。

「ああ、そんなに畏まらないでください、公爵夫人。アリサ嬢も、立つてください。……私の名は、覚えていりますか？」
「んつと、ジエームズさま、ですよね？」
「正解です。覚えておいていただけて、嬉しいですよ。 ぐえ
つ」

王がそう言って、アリサの手を取り、微笑みかけた瞬間、蛙の潰れたような声が、アリサの耳に届く。

それは、宰相に服を引かれ、首が絞まりかけた国王の発した声だった。

「何をするんですか、宰相殿？ 一瞬息が止まりましたよ？」
「陛下が執務を放置して、ドーリス公爵家の末の姫君に会いに来られるからです。きちんと、執務を終わらせてからにしてくださいね？」
「陛下」

さあ、戻りますよ。宰相はそう言って、王を引きずつっていく。

「公爵夫人、アリサ嬢。今度は、城の中にも遊びに来てくださいね」「陛下、僕たちの可愛いアリサに、毒を蒔かないでくださいと、頼んだ覚えがあるんですが、お忘れですか？」

「嫌だなあ、覚えていりますよ、宰相補佐殿。これは毒ではなく、ただのお誘いですよ」

王ヒルワインは、そうやつて話をしながら、城の中へ戻つていく。その様子を、呆然とした母ヒアリサが見送つたのであった。

「陛下、あなたは、何を考えていらっしゃるのです

僕たちの可愛いアリサに毒を散々振り撒いて下さって。

執務室へ戻った王に、ルウインは進言する。それは、可愛いアリサを守るための進言だ。

だが、王はそんなルウインの言葉を無視し、少し遠くを見ながら口を開く。それは、爆弾と同レベルの威力を持つ、言葉だった。

「宰相補佐殿は、末の妹姫のことになると、性格が変わりますね。大体、変なことは考えていませんよ？」ただ、アリサ嬢に、私の可愛い王子の婚約者フィアンセになつてもらいたいと考えているだけで

王がそう言つた瞬間、ルウインが完全に停止した。否、ルウインだけではなく、宰相すらも停止している。

それから、先に我に返つたのは、宰相だった。宰相は、未だ呆けたままのルウインの頬を軽く叩き、正気に戻す。

「こら、ルウイン、しつかりしろ。逃げたいのは分かるが、しつかり受け止めるんだ」

「…………っは！」

そして、正気に戻つたルウインは、即座に、王に雷を落とした。

「陛下！ アリサは、まだ五歳ですよ…？ 婚約者など、無理に決まつているでしょ！ 何を考えていらっしゃるのですか…！」

「おやおや、私は本気ですよ？ 第一王子は、今九歳。五歳のアリサ嬢とは、年齢的にもちょっとどうぞ…？」

「よくありません！ アリサは病弱なんです。子を残すことも、今段階では、難しいと言われているんですよー？」

「成長につれて、丈夫になるかも知れないじゃないですか」

王は、諦めない。そんな王を見ている宰相は、溜め息をつく。最近妙にルウインの末の妹姫にこだわっていると思えば、そんなことを考えていたのかと。

だが、ルウインの言いたいこともよく分かる。ドーリス公爵家の末の姫君は、体が弱い。

しおりちゅう熱を出し、寝込み、ドーリス公爵をはじめ、家族を中心配させていた。

確かに、成長に伴つて今よりは丈夫になるかもしれないが、今段階では、王子の婚約者としてアリサを発表するのは、不可能だろう。

例え、それを王が決めたとしても、世継ぎの関係上、ほかの貴族からの反対は避けられない。

それに、まず、アリサの父であるドーリス公爵が、反対派の筆頭となるだろう。

全ては、彼らの大変なアリサを守るために。

アリサを守るためならば、絶対に、ドーリス公爵家は、家族ぐるみで、反対派につくだろう。

それを避けるためにも、ほかの公爵家の姫を婚約者にすればいいだろうと、ルウインや宰相は説得するのだが、王は聞き入れない。

「私は、宰相補佐殿、あなたの妹姫を気に入ったのです。アリサ嬢以外を、息子の婚約者とは認められません」

「他国から姫を娶ればよろしいでしょ」

「嫌です。アリサ嬢という立派なお嬢様を知った以上、他国の姫な

ど、必要ありません」

王のその言葉に、ルウインと宰相は溜め息をついた。宰相は今後この国の行く末を考えて溜め息をつき、ルウインは、中々諦めない王に呆れ、溜め息をついた。

「とにかく、アリサは陛下には差し上げません。アリサは僕たち、ドーリス公爵家の姫ですからね」

大体、そういうものを決めるのは、父ですから、勝手にお答えすることは出来ません。

ルウインが自信たっぷりに言つと、王は、にやりと笑つて、次の言葉を告げる。それは、悪の微笑みでもあった。

「 王妃が、アリサ嬢の輿入れを楽しみにしていてもですか？」

その瞬間、ルウインと宰相は、再び停止した。その様子に、王はしてやつたりと言つ顔をする。

この国の王妃は、普段は温厚だが、芯が強く、いつも決めると、絶対に変えることはしない、悪く言えば、頑固な王妃だと、国中に知られている。

自分の決めたことを否定されたりすると、その瞬間、普段の温厚なほどこへ行つたのかと言いたくなるくらいに、怒るのだ。

王妃が決めたとなれば、この国の貴族は、全員が逆らえない。逆らうと、後からどうなるか、知っているものは口を閉ぢし、知らないものは、知らないほうがいいのだろうと、知らないようにしている。

ちなみに、そんな恐怖の対象である王妃は宰相の姉でもある。

「……ルワイン、姉上が決めたのならば、諦める。悪いが、姉上まで楽しみにしているのならば、これ以上協力は出来ない」

それを聞いたルワインは、家に帰つたら本気で父さんと母さんと相談しなくては、と考えたそうな。

「さて、宰相補佐殿も認めてくださつたようですし、そろそろ執務に戻りますか。宰相殿、次の書類はどれですか?」

「え、ああ、これです」

そうして王は執務に戻り、アリサの輿入れの話のせいで使い物にならなくなつたルワインは、宰相命令により、暖かい眼差しと共に、「ルワイン、今日は帰れ。帰つて、父君たちと相談して来るんだ」という優しい言葉に背中を押され、家に帰ることになつたのであった。

そして、家に着いたルワインは、帰つてくる時間の早さに驚いているアリサを、黙つて、ぎゅうっと抱きしめた。アリサが不思議そうな顔をしていても、その表情を見ることもせず、ただただ、抱きしめ続けた。

その後は、相談の時間らしく、ルワインはアリサと別れ、父の書斎へ足を向ける。

「父さん、相談があるんですけど、いいですか?」

「ああ、ルワインか。お前が相談」と珍しいな。……どうした?」

父に問われ、ルワインは、執務室で王が言つた言葉を、余すことなく父に伝える。

それを聞いた父は、ルウイン同様、固まつた。完全に停止した。

「父さん、大丈夫か？」

そんな父に、ルウインは慎重に声をかける。すると、父はいきなり正気に戻つた。そして、立ち上がる。

「城へ行つて来る！ ルウイン、お前はアリサについている」

そして、その日。城では、第一回、ドーリス公爵 VS 国王のバトルが勃発したそうな。

その様子は余すことなく、王宮勤めの侍女が見ていたそうな。

次の日の噂は、その話で溢れ返つていたそつだ。

若干短めです

国王からルウインへ、衝撃の告白があつたこの日、子供たちは翌日の休みを取り、夜のうちに、家族会議を開いていた。もちろん、アリサは抜きだが。

「何で、そんなことになつたわけ？ セイン、カイン。あの日、何があつたのか包み隠さず言こなさい」

そして、そんな中で、事情を全く知らなかつた両親と、ジャスリーン、エルミナは、事情を知つてゐるセインとカインに、説明をさせる。

しつかりと、隠し事無しで話をさせるために、彼らは、威圧感を出した。全では、可愛いアリサのため。アリサがいないからこそ、出来る方法である。

「セイン、カイン」

とつとと吐け。そんな心の声が聞こえてきやうな中で、話題の中心となつていた二人は、ようやく口を開いた。

「前、アリサが街に出ただろう？ そのときに、陛下も町にいらしてたんだ」

「アリサに会いに行くと、駄々をこねたからな」

「それで、アリサの顔を見たつて仰るから、アリサを馬車から降ろして、会わせたんだ」

カインの言葉にルウインが補足をいれ、それに、セインが続ける。結果、王はその一目でアリサを気に入り、息子の婚約者にしたい

と決めたわけだ。あのおどおどした状態で、どこの気に入ったのか
真剣に思案する一人だつたりする。

「今日、陛下と話をしてきたが、アリサを気に入った理由は、静か
で可愛いからだそうだ」

『アリサ嬢を気に入った理由ですか？ 一つは可愛らしさ」と、
もう一つは、静かで大人しいこと。で、これが肝心ですが、家族が
反対していることですね。『家族が反対していると、逆に落
とすのに燃えますよね』

そんな王の言葉は、父は家族には話さない。反対が逆に燃えると
言つことは、この子供たちの反応は、間違いなく王を燃えさせるこ
とになる。

そうなると、王はますますアリサを王子の婚約者として公に発表
し、彼らを黙らさせようと画策するだら。

「発表などして、アリサがほかの貴族などに狙われたら、どう責任
を取つてくださるんですか」

王がそうして話しているとき、父は、心から思つていたことを告
げた。それは、アリサの安全。王族に名を連ねると言つことは、命
を狙われることと同義となる。

それは、アリサを愛する父としては、賛成できなかつた。

だが、王の考えは単純だつた。

「王妃の歓迎する王子の婚約者に、害を成す馬鹿がいますか？」

「いないだろ？ 王妃に逆らひ」と、少即ち、精神的死と同義だ。

田の前でアリサの安全について熱く語る家族に、このことを話すべきか黙つておくべきか、父は真剣に思案したそな。

「大体、アリサを王子の婚約者として発表なんてさせたら、アリサが王子の婚約者を狙う馬鹿な貴族に狙われるじゃないか」

「そうよ。ただでさえ、アリサは体が弱いんだから」

「それに、婚約者として発表なんてさせたら、今まで僕らが必死で社交界への出席を反対してきたのが、意味を成さなくなる」

『なら、何が何でも、阻止しなくては』

この日、家族の意見は、反対方向で完全に一致した。

翌日から、彼らは王へ、絶対的な反対の意思を見せることになる。

それが、たとえ王妃の逆鱗に触れる行為であるとしても。

『我ら、ドーリス公爵家は、末娘、アリサを王子の婚約者（ファインセ）にするのは、絶対に反対です』

ある日、王に直接そう告げたドーリス公爵とルウェインを見て、王はこう呟いたそうである。

『王妃に喧嘩を売るとは、ドーリス公爵家のみなさんは、挑戦者（チャレンジャー）ですね』

アリサと王子の婚約騒ぎは、まだまだ続くのであった。

王妃からのお誘い

ある日、ドーリス公爵家に、一通の招待状が届いた。それは、ジヤスリー・ンとエルミナ、アリサ宛で、差出人は、王妃。目的は女子お茶会のお誘いだった。

『女性だけで、お茶を楽しみ、会話を弾ませましょう』

招待状にはそう書かれており、目的は、どう考へても、アリサと王子の婚約騒ぎの話をしたいのだろうと、招待状を見た両親や兄たちは、考へた。

もちろん、アリサはそんなことは微塵として考へておらず、両親や、兄姉に、「おうひさまって、どんな人?」と尋ねていたが。ちなみに、その質問に対する家族の回答は、「アリサがもう少し大きくなつたら教えてあげようね」だった。

貴族たちの恐怖の対象である王妃は、アリサの教育には悪いと、家族は判断したようだ。

それに、アリサをこのお茶会に出席させるつもりはないのだから、わざわざアリサに王妃の話をする必要もない。

「お父さん、お母さん。これ、私とエルミナだけで行つて、王妃様に話を伺つてくるわ」

「そうだな。頼んだぞ、ジャスリー・ン、エルミナ」

父の言葉に、二人の姉は、大きく頷く。

そしてその直後、アリサの小さな手が、父の服の袖を引っ張つた。

「どうせま、アリサは?」

アリサは、自分にもお誘いがかかつていて「ことを知つてか知らずか、父に期待の目を向ける。外に出れるのならば、行きたい」と。だが、父はそんなアリサを、微笑んで退けた。

「アリサはかあさまと、一緒にお留守番だ」

「えーっ！ アリサもお出行きたいーっ！ とつさま、行かせてほしいな」

そんなアリサの言葉と瞳に、父はたじろぐ。だが、そのお茶会の目的をアリサに知らせないためにも、しつかりと、アリサを説得する。

全員で、全力で。

「アリサ、無理は禁止」

「王妃様に聞きたいことがあるなら、私たちが代わりに聞いてあげるから」

「アリサがお茶会に出席すれば、熱を出すかもしれないじゃないか」「大人しくお留守番していて？ 僕たちを心配させないでよ」

「アリサはいい子だから、聞いてくれるよね？」

「おいで、アリサ」

そうして、母がアリサを呼ぶと、アリサは素直に母の元へ駆けて行く。そして、母の胸に飛び込んだ。

母は、自らの胸に飛び込んできた末娘を優しく抱きしめ、髪を撫でながら、告げる。

「アリサはかあさまと一緒にお留守番していようね。そうだ、本を読んであげようか」

「ほんとうに？」

「ええ。だから、アリサは大人しくお留守番していようね」

「…………わかつた」

渋々ながらも頷くアリサに、彼らは揃って安堵の息をつく。だが、アリサはやはり、おもろくなさそうだ。

今現在自分の置かれている立場を知らぬと言つことは、かくもよいことか。家族は揃つてそう考へるのであつた。

まあ、全員が全員して、アリサにこのことを知らせんつもりは全くないのだが。アリサのために、アリサを守るためにも。

だから、彼らは少くすべき日に喧嘩を売る。全ては、可憐いアリサのために。

故にアリサは、王妃からのお誘いであるこのお茶会が、ジャスリーン、エルミナ姉妹と、王妃の勝負の場になることは、全く考えていない。

ただ純粹に、お茶会とだけ信じている。純粹素直なアリサ。そんな小さなアリサを、彼らは守るために戦う。敵わぬ相手だとしても、それでも彼らは戦うのだ。

そしてお茶会当日。ドーリス公爵家には、緊張で固まるつとしているエルミナと、要是度胸だと開き直つて居るジャスリーンがいた。

「じゃあ、行つて来るね、アリサ」

「うん。いつてらっしゃい、ねえわま」

そして、大好きな姉を見送つた後、母の本を読んでくれると誓つ約束をしつかりと覚え、母に無言で強請るアリサがいた。

「アリサ、分かつたからそんな潤んだ瞳で見るめるのは、止めてくれるかな？ ほら、どの本がいいか、選んでおいで」

母が言つと同時に、アリサは笑顔を浮かべる。そして、メイドと共に、家の書庫へと走つていった。否。走り出さうとしたのだが、それはメイドが制した。

「お嬢様、急がなくても大丈夫ですから。無理をなさらず、ゆっくり行きましょう」

メイドの言葉に、スピードを緩め、歩き出すアリサ。母は、そんな愛娘とメイドを、優しく見守りながら、見送るのであった。アリサがどんな本を持ってくるのか、勝手に想像をしながら。

そして、アリサの持つてきた本は、神話の一つだった。いくら子供用に要約してあると言えど、まだアリサには早いような気もする母は、アリサにほかの本にしないか相談するのだが、アリサは聞かない。その本がいいと、はつきりと言い切る。

そんなアリサに負けた母は、アリサの持つてきた神話の本を開き、少しづつ、アリサにも分かるよう読み進めて行くのであった。

* * * * * side アリサ

かあさまが本を読んでくれると言つことで、メイドと共に図書室へ向かう。今の私は本のタイトル、大体の話等、全く読めないため、メイドに頼み、説明をもらつ。

そこで、私はいいものを見ついた。この国の神話だ。神話、これ即ち、神の話。それならば、あのお兄さんのことも少しくらい分かれるかもしれない。あのお兄さんも、神のはずだから。

「お嬢様には少々難しい話だと思いますが……」

「でも、それがいいもん」

「まあ、お嬢様がどうじともと仰るのでしたら…………」

メイドはそう言って、私の選んだ神話の本を取り、そして、あまた片手で私の手を掴み、かあさまの待つ部屋へ戻る。

そして、その本をかあさまに見せた結果、かあさまからも、「これは、まだアリサには難しいわ。ほかの本にしましょ?」といふ、さりげない反対は飛んできたが、意地でもそれがいいと言ひ張り、結局、かあさまは私のその頑固さに負け、神話の本を開く。

本によると、この国では考古元来、神の存在は崇められており、時折、生まれる前に神に会つたという者もいるらしい。

そして、この国では、生まれる前に神に会つた者は魔力が強いものが多く、國から重宝されているらしい。…………この場合、私つてどうなるんだ?

私は、転生前に神に会つてゐる。だが、魔力なんてもの、全く分かりやしないし、第一、私の体では、勤めること自体が不可能だろう。

もう少し成長したら、子供用じゃなくて、もっと詳しくそういうものが書いてある本が読みたいと、心の底から思つた瞬間だつた。

そういうえば、ねえさまたちは、お茶会楽しんでるのかな?
私も、行つてみたかった。

優雅なお茶会

「本日は、お誘いくださいまして、ありがとうございます」「ああ、二人とも顔を上げて。今日は、そんな罪まつてもうつためにお誘いを出したのではないのだから」「

ところで、末の姫君はどちらかしら？」にこやかに問いかける王妃に、固まっているエルミナをさりげなく隠したジャスリーンは、同様についつりと微笑みながら告げる。

「あの子でしたら、体調面を考慮して、欠席させていただいております」

「あら、そうなの。残念だわ」

（本当は、私に会わせたくないだけでしょう？）

「あの子は体が弱いですからね」

（アリサに、王子殿下との婚約云々の話を聞かせるわけにはいかないんですよ）

「…………」王妃とジャスリーンの、水面下のバトルは続く。

「今日は、体調はいいのかしら？」

（いいのなら、連れて来ればいいのよ）

「いいほうではありますが、油断は出来ませんからね」

（無理をして、熱を出したりしたら、私たちが心配のし過ぎで変になるんですよ）

「人間、元気が一番ですからね」

（王宮は医療設備も万全ですから、アリサ嬢が体調を崩しても大丈夫よ？）

「そうですね」

（アリサを王子殿下に嫁がせたら、元気じゃなくなるのが目に見えているでしょう）

ちなみに、二人とも表情だけは笑顔だが、あたりを覆うオーラは、とんでもなく冷たく、恐ろしい。

事実、お茶の用意をしていた王宮勤めの侍女は、支度が済むと同時に、「失礼いたしますっ！」と黙つて、急いで逃げていった。

つまり、現在この冷たいオーラの被害に遭っているのは、エルミナだけである。

子のバトルは、いまだ終焉が見えない。

「今度、アリサ嬢の調子のいいときに、アリサ嬢に会つてみたいわね」

（将来の義娘の顔くらい、見せてもらひえるでしょう？）

「アリサは簡単に調子を崩してしまいますからね。お約束しても、寸前で反故にしてしまうかもしれませんので、遠慮させていただきたく存じます」

（アリサの顔を見たら、間違いなくハマリこむから、絶対ダメです）

王妃と姉が立つて（表情だけは）こじやかに談笑している中で、エルミナは勝手に座ることなど出来やしない。体力無きエルミナに、限界は少しづつ襲い掛かっていた。

体力が無いのは、エルミナだけではなくジャスリーンもなのだが、ジャスリーンは、王妃との水面下でのバトルに意識を向けているからか、疲れを感じていないらしい。依然として、バトルを続けていた。

「あら、そんなこと、気にしませんよ？ 体調など、いつ変わるか

わかりませんからね」

（だから、アリサ嬢を今度連れてきてけりょうだい）

「いえいえ、王妃様がお気になさらずとも、私たちが気にしますから」

（だから、アリサを王子殿下の婚約者にするだなんて戯言、一度と吐かないでいただけます？）

「ココロ。ジャスリーンは笑みを浮かべながら、そう告げる。その瞬間、王妃は溜め息をついた。そして、自分たちが立つたままであつたことに気がつき、ジャスリーンとエルミナに、座るよう促す。王妃とのバトルをやめ、一気に疲れが襲つてきていたジャスリンは素直に席に着き、姉と王妃のバトルが終わるのを待つていたエルミナも、席に着いた。

そしてそれと同時に、どこに隠れて見ていたのか、あまりにもちよつどいいタイミングで侍女が現れ、給仕に徹する。

その際、エルミナと田のあつた次女は、分かりやすいほどに、エルミナに同情の眼差しを向けていた。　さもありなん。

そして、お茶が入つた後は、先ほどの水面下のバトルもなりを潜め、今度こそ、純粋なお茶会となつた。

「ジャスリーン嬢、エルミナ嬢、あなたたちは、まだ結婚の予定はないの？」

「残念ながら、アリサがもう少し大きくなるまでは、結婚は遠慮させていただいております」

「あら。相手の方は、何も仰らないの？」

につこりと微笑みながら、そつ告げる王妃。その田は、笑つていなかつた。

ちなみに、ジャスリーンもエルミナも、家と同じ爵位の家の子息

と、婚約はしている。だが、アリサの体を考え、まだ結婚はしないようにしているのだ。もちろん、それは先方も承知の上である。

「アリサ嬢はまだ幼いからね。まだ、姉が恋しいだろうから、アリサ嬢が大きくなるまでは、結婚は止めておこつか」

これは、ジャスリーンの婚約者、エドアルド公爵家次男、シャーリットの言葉である。

「エルミナが結婚を躊躇つ理由がよく分かる。だから、アリサ嬢が大きくなるまで、僕は待つよ」

そしてこれが、エルミナの婚約者、ジャカルテッド公爵家長男、ガイアスの言葉である。

一人して、結婚はまだ先でもかまわないと考えているらしい。ガイアスやガイアスの両親にいたつては、長男なのだから、早く跡継ぎが欲しいだろつて、アリサのことを考えて、まだ待つてくれている。

そんな両家に、ジャスリーンやエルミナのみならず、父も母も感謝していた。家と同じ爵位を持つている一人の婚約者。時々しか会えないが、二人は、婚約者を心から愛していた。

だが、だからとつて、そう簡単に結婚をするつもりは無いらしい。全ては、アリサをそばで見守るために。

彼女たちの今の生きがいは、アリサの成長を見守ることなのだから。

「ジャスリーン、エルミナ。明日、シャーリット殿と、ガイアス殿が来るそうだ。用意をしておきなさい」

王妃のお誘いから数日後、仕事から帰ってきた一人に、父は静かに告げる。その言葉に、ジャスリーンとエルミナは、嫌な予感を感じていた。

そして、その予感は、当たることになる。

「申し訳ない、ジャスリーン。王妃様に、君たちの説得を頼まれてすまないね、エルミナ。僕もシャーリットと同じなんだ」

二人の婚約者であるシャーリットとガイアスは、一人に居心地の悪そうな表情で、まずは謝罪の言葉を告げる。

そして、そんな一人に、ジャスリーンとエルミナは笑顔を見せた。その瞬間、冷たい言葉が一人の口から出てくる。

「そんな馬鹿なことをするなら、帰つてもられる？」

「ガイアス。あなたもよ」

その言葉を告げたジャスリーンとエルミナの表情は、先ほどの笑顔はどこに行つたのかと問い合わせたくなるほど、冷たかった。

ドーリス公爵家の客間に、冷たい空気が流れれる。

その冷たい空気を取り払つたのは、将来の義兄に挨拶をしにきたアリサだった。

「こんにちは、シャルにいとま、ガイアにいとま。久しぶりに会え

て、うれしいです」

アリサがそう言って入ってきた瞬間、ジャスリーンとエルミナは、今この今まで纏つていた冷たい空気を取り払い、彼女たちの小さな可愛い妹を部屋に招き入れる。

そして、二人の間に座らされたアリサに、将来の義兄となる二人は、にこやかに挨拶の言葉を告げた。

「久しぶりだね、アリサ。今日は調子がいいみたいで、何よりだ」

これは、アリサにシャルと呼ばれた、シャーリットの言葉だ。

「まだその呼び方を覚えていてくれたんだね、アリサは。久しぶりにそう呼ばれて嬉しいよ」

これは、ガイアと呼ばれたガイアスの言葉である。

この呼び方は、アリサが三歳くらいの頃に初めて会ったときに、シャーリットやガイアスと言えず、二人から提案された呼び方である。

今のアリサは、きちんとシャーリットやガイアスと言えはするのだが、ずっとシャルとガイアなので、いまさら呼び方を変えられないらしい。

二人も、それを嬉しそうに受け入れた結果、アリサの一人の呼び方は、シャルとガイアという、愛称になつているのだ。

「シャルにいさまと、ガイアにいさまは、今日はどうしたんですか？」ねえさまたちに会いに来たんですか？」

「あー、うん。そうだねえ。……そうだよね、ガイアス？」

「ああ、そうだよ。ところでアリサ、寝ていなくていいの？ お願

いだから、無理はしないでね？」

ガイアスが言つと、アリサは「だいじょうぶです！ 今日のアリサは元気なんです！」と力強く言つのだが、これ以上の無理は、姉である彼女たちが許さなかつた。

ジャスリーンとエルミナは、シャーリットとガイアスに一言断り、メイドを呼び、アリサを預ける。

「きちんと、部屋で休ませておいてね」

「畏まりました。行きましょう、アリサお嬢様」

メイドは言つと、アリサの手を握り、アリサの速度にあわせて歩き始める。少しば抵抗の意思を見せていたアリサだったが、メイドが歩き出すと諦めたらしく、シャーリットとガイアスに「またきてくださいね」と声をかけ、メイドと共に、部屋へと戻つていつた。

そして、それと同時に、ジャスリーンとエルミナの纏う気配は、アリサの来る前のそれに戻る。

「さて、シャーリット、ガイアス。あなたたちは、そろそろ帰りますか？」

「なら、馬車を呼んではげますよ」

今の一人の雰囲気には、絶対的に逆らえない。そう悟つたシャーリットとガイアスは、二人の言葉に従い、呼んでもらつた馬車で自分の屋敷へ戻るのであつた。

そして翌日。

「すまない、ジャスリーン。王妃様に、説得できるまで通いつめると命令が下つてしまつて……」

「お……怒らないでくれ、エルミナ。僕もシャーリットと一緒に呼び出されて、同じ命令を下されたんだよ」

ドーリス公爵家の客間には、この日もジャスリーンとエルミナの婚約者である二人がいるのであった。

それを知ったアリサは喜んでいたが、

「シャルにいたま！ ガイアにいたま！」

一人の来訪を知らされたアリサは、走る。走って一人へ駆け寄る。そして、それについているカインは、面白くなさそうだ。

「お久しぶりです、シャーリット、ガイアス」
「久しぶり、カイン。今日はアリサの付き添いかな？」
「ええ、まあ」

カインはそう言いながら、早めにアリサを部屋に戻そうと、タイミングを計っていた。

アリサに、二人の目的である説得の内容を、アリサを王子の婚約者にしようという、王と王妃の考えを聞かせないためにも。そして、タイミングよくアリサがくしゃみをすると、すぐにカインはアリサの手を取る。そして、額に手を当てた。

「ああ、熱は無いみたいだけど、用心に越したことは無い。アリサ、部屋に戻つて、安静にしていよ」
「だいじよぶなのに」

「そう言って、アリサは熱を出すじゃないか。ほら、戻るよ」

カインは、アリサの手を引き、客間から出て行く。少し渋ったアリサだったが、自分の体のことを一番よく知っているのは自身であ

るが故か、大人しくカインと一緒に部屋を出て行つた。

その後は、もちろん、カインの手によつてベッドに横にされ、毛布をかけられる。

「だいじょうぶなのに

意外なところでしつこく根に持つアリサであった。

最近、どうせまやかあさまのみならず、にいわま、ねえさままで一緒になつて、私に必死で隠していることがある。それが何か分からぬが、何故、そこまで必死で隠すのだろう。

私が幼いから? でもそれなら、別に私が来た瞬間に話を止めなくてもいいと思う。どうせ分からぬだろう、と言つ考えで話を続けそうなのに。

どうせ私たちが私に隠れていろいろと話をし始めたのは、王妃様から、ねえさまたちに招待状が来た頃からだ。

その頃から、ねえさまたちの婚約者でもあるシャルにいさまや、ガイアにいさまが家によく来るようになつた。今まで、たまに顔を出しに来るくらいだったのに、最近は毎日のようになってる。

どうせ私たちとは、何を私に隠しているのだろう。知りたい。でも、教えてもらえない。

ねえさまたちが行つた、王妃様主催のお茶会で、何かあつたのかな? でも、それなら私が聞いても問題はなさそつだから、却下。

じゃあ、シャルにいさまたちが最初に来たときに、何か言われたのかな? ……でも、それも私が聞いても何も分からぬだろうから、問題ないよね。

……むー、何があつたんだろう。元、登校拒否引きこもりのオタクには分からん。

何か悩んでいるのならば、五歳児の体ではあるが、少しくらいは相談に乗りたい。

何も分からぬいフリをして、愚痴くらいは聞いてあげたい。

だつて、とつとまちは、私にそつ思わせるまじこ、無償の愛を注いてくれた。

病弱な子供など、公爵と言つ立場の家では、迷惑ではないだらうか。

公爵家の子供は、いいところに嫁ぎ、子を生す役目があるだらうに、今の私の体では、恐らく、子を生すことは敵わない。このまま成長すれば、間違いなく、子を産むことは私の命を削り、下手をすれば命を奪つていぐだらう。

だから、それを考えれば、私は使えない子供のはずだ。結婚によつて関係を深めていく貴族。そこで、私はどう生きていけばいいのか。

ねえさまたちは、一人とも公爵家へ嫁ぐことが決まつてゐる。だが、私は何も決まつていない。決められない。子を生せるかも分からぬ使いない子供は、誰か貴族と婚約など、させられるはずも無い。

だから、私は貴族としては出来損ないだらう。

でも、とうさまも、かあさまも、にいさまたちも、ねえさまたちも、そんな私に無償の愛を注いでくれる。

体調を崩して寝込めば、付きつ切りで看病をしてくれる。

みんな、優しい。だから、わがままを言いたくなる。わがままを言えば、受け入れてくれることもあつたし、それが馬鹿なわがままなら、心から叱つてくれた。

ねえ、私は、この国のことや貴族社会についてはよく分からぬけど、話を聞くだけなら出来るよ。

だから、思いつめないで。

私が邪魔だと言うのならば、私は喜んで姿を消すから。
無償の愛を注いでくれたあなたたちには、幸せになつて欲しい。
だから、邪魔なら邪魔だと言つて。出て行くから。
でも、邪魔じやないのなら、邪魔になるまでは家にいさせて欲しい。

私は、あなたたちを、心から愛しています。

前世の本当の両親のように、私は心から家族を愛している。

失いたくないけれど、あなたたちの幸せのためならば、私は喜んで失う悲しさを受け入れる。

だから、早く大きくなりたい。一人で家を出ていても怪しまれな程度に、成長したい。

今の私は幼すぎる。私が一人で外に出れば、兵に怪しまれて、家に戻されるることは必須。

だから、早く大きくなりたいよ。

そして、私はあなたたちに迷惑を掛けないよう、いつの日か、姿を消すことにする。

公爵家息女と言う立場なんていらない。

前世で一般人だった私は、市井に馴染むことは、そう難くは無いだろう。

ねえ、神様。私、選択肢を間違えたかな。

生きたまま転生つて、早まつたのかな。

死ぬのを待つて転生していれば、丈夫な体を持って生まれてこれ

たのかな。

そうしたら、私、出来損ないじゃなかつたかな。

いまさら後悔しても、遅い。

あの日、私は選んだはずだ。第一の親となつた叔父叔母を泣かせてでも、新たな人生を生きると。

そうして、私は死んだんだ。

違う。私じゃない。神崎有紗は死んだ。

私は、アリサ・クライシス・ドーリス。神崎有紗とは違つ。

もう、神崎有紗という少女はいないのだから。

それが、私の選んだ道なんだ。

私は、自らの意思で転生する道を選んだ。

ならば、この道を精一杯行こう。

たとえそれが、自分の首を絞める行為であらうとも。

可愛いアリサが、最近ずいぶん思いつめているよつた気がする。元気に振舞つてゐるけど、どうみても、元気がないよ。ある日、アリサの様子を見ていて気がついたらしいエルミナは、アリサ以外の家族全員にそれを告げる。何かあつたとき、家族全員でサポートに回れるように。アリサを不幸に突き落としたりしないために。

可愛いアリサ。生まれながらに病弱と言つ榎を背負つた、可愛いそな愛妹（娘）。

故に、家族は全員アリサを愛していた。アリサは自分たちが守るべきものだと、彼らはアリサが生まれてすぐに理解していた。

病弱で、何があるとすぐに熱を出してしまつ、可愛い妹。熱が無いときは、遊んで欲しそうに、潤んだ瞳で見つめる可愛い妹。

そうして遊んであげると、とっても嬉しそうに微笑む、愛らしい妹。

故に、彼らはアリサに害を成すものを、絶対に許さない。

今のところはアリサは基本、家に閉じこもつてゐるため、アリサに害を成そうとするものはいないが、仮に、アリサに何かあつたら、ドーリス公爵家総出で害を成したものの排斥に向かうだろつ。

ちなみに、この総出の中には、家族や騎士以外に、メイドたちも含まれる。

メイドも、病弱な主の末娘を、心から愛しているのだから。

だから、彼らは今日もアリサの部屋へ向かう。アリサから少しで

も不安を取り除けるようだ。

その思いつめているものを、じこかく追いやれるようだ。

「アリサ」

「かあさま、にこさま、ねえさま」

母や兄弟たちがアリサの部屋を訪れるとき、アリサは微笑みながら彼らを受け入れる。

だが、その笑みは若干無理やり作つてこようだった。

アリサをよく知らない者が見れば、普通に笑つてこるように見えただろうが、アリサが生まれてから五年間、ずっと見てきていた家族の目を「まかすこと」は出来なかつた。

「アリサ、何を無理やり笑つているの？ 辛いんでしょう？ 辛いなら、無理に笑わなくていいの」

母は、やう言つてアリサの小さな体を抱き寄せ、ぎゅっと抱きしめた。

抱きしめられたアリサの目には、少しずつ涙が溜まつていいく。そして、しばらく抱きしめられ続けていたアリサの涙腺は、ついに決壊した。

アリサの瞳からは、止め処無く涙が溢れ落ちる。

「ずっと泣きたかったんでしょう？ 我慢しなくていいの、たくさん泣いちゃになさい」

母が告げると同時に、アリサは声を上げて泣いた。どれだけ我慢していたのか、母たちが考へるほどに、アリサは思い切り泣き続けた。

それこそアリサの体力が切れて、泣き疲れて眠りにつくまで、アリサは母の胸で延々と泣き続けていた。

そんなアリサを見ながら、母は明日は待医を呼ぶ用意をしておかなくてはと考えていた。そつた。

アリサにとつて、泣くことは時に、命を縮めてしまうことだと、ドーリス公爵家の者たちは全員よく知っていた。

だが、時には思い切り泣くことが、いい治療法になることだってある。

それを分かつていてるから、母は、アリサを泣かせた。泣かせて、アリサをその胸で受け止めた。

そうして泣き疲れて眠るアリサをベッドに横たわらせ、毛布を掛けた母は、子供たち全員に体質を促し、自身はアリサについておく。仮に、魔されいたら、起こすために。

この子は、一体何をそんなにも思いつめていたのだろう。何が、この子にあれだけ溜め込ませたのだろう。

母は、眠るアリサの寝顔を眺めながら、真剣にそう考えていた。

「本当に、何があったの？ アリサ」

母は、返事が返ってくることの無いのを分かつていながらも、静かにアリサに問いかける。

そうでもしないと、母には、五歳児がここまで思いつめる原因など、想像もつかなかつたのだ。

それに、アリサは基本的に外の世界を知らない。外出の機会がほ

とんどないため、当たり前だが。だから、外の世界で何かを感じたわけではないだろう。

それ故に、何故そこまで思いつめるのか、母の思案は続く。

母は、娘の不安の種は、とことん取り除くつもりだった。それが、アリサを順調に成長させることになるのならば。

それは、母のみならず、父も、兄弟たちも一緒だ。だから、彼女たちはアリサを王子の婚約者にしようとした王に、とことん逆らつた。

アリサを王子の婚約者などにして、精神的ダメージを受け、死期を早めないよう。幸せに生きていけるように。

そうして秘密を抱かれていると言ひ「」とが、アリサに不安を与えていることを、母は知る由も無い。

そして翌朝。アリサは消えた。

抗えぬ別離

私の考えていたことは、かあさまや、じこさま、ねえさまに筒抜けだつたらしい。

知られたのならば、消えなくちや。いなくならなくちや。このまま私がドーリス公爵家にいたら、迷惑をかけるだけだ。

だから、出て行かなくちや。

熱のせいで重たい体を引き摺りつつ、私はドーリス公爵家の私兵の目を盗み、屋敷を抜け出した。

体がだるい。でも、行かなくちや。迷惑になる前に、姿を消さなくちや。

少し動いただけで、かなり息が切れる。でも、早く、屋敷から離れなくちや。

ああ、視界が霞む。相当熱が高いのか。でも、それでも。それでも、私は。

わよなー、といつれま、かあさま、じこさま、ねえさま。

これは、抗えない別離だ。

「旦那様つ！ 奥様つ！ 坊ちゃん方つ！ お嬢様方つ！ 大変ですつ！ アリサお嬢様の姿が、どこにも、見当たらんんですね！」

その日の朝、いつものようにアリサを起こすと部屋に向かったシャーナが、まず、アリサのいなこと気に気がついた。

そして、ほかのメイドたちにも話し、屋敷中を探したのだが、アリサの姿は見当たらない。

結果、シャーナは急いで主たちに報告をして走ってきたのであった。

「何故だ!? 何故アリサがいない!?

「シャーナ、あなた、心当たりは無いの!?

「その辺、探してくるつ!」

「兄さん、私も行く!」

「僕も行く。カイン、剣を持って来い。お前も一緒に行くんだ

「当然。アリサは僕たちが見つけ出してみせる

「なら、私も行かなくちゃ。行こう、兄さんたち!」

そうして、子供たちは揃つてアリサの搜索に、街へ出て行く。そして、父は登城の用意をし、子供たちの職場にそれぞれ連絡をいれ、休みを取るのであった。

すべては、可愛い愛娘、アリサを見つけるために。

「ドーリス公爵殿。アリサ嬢は、将来の王妃です。國の兵を使って、アリサ嬢の搜索を行います。かまいませんね?」

「……お願い、します」

苦渋の決断だった。それは、アリサが王子の婚約者であると公に発表するような行為ではあったが、私兵のみで探すよりは、國兵を投入してもらつたほうが、アリサを見つけるのは容易くなるだろう。急がなくては、手遅れになりかねない。アリサの今の体では、外の世界で生きることなど、絶対に出来はしない。

アリサに何かある前に、見つけなくては。取り戻さなくては。

ああ、お願ひだから、無事でいてくれ、アリサ。

家を出て、家族との別離を果たした私ですが、今、熱がちょっとやばいみたいです。

今は街をふらふらしながら歩いているときに声をかけてくれた夫婦のお元にお世話になり、ベッドを使わせてもらい、休んでいます。

「突然、ごめ、なしゃい。おじやま、して」

「ああ、あんたみたいな子がそんな言つんじやないよ。といひで、あんたはどこの子だい？ 一人で街を出歩くのは危ない。親御さんに連絡を入れてあげるから、言つてごらん」

「あの……えと……」

言えない。私がドーリス公爵家の末子だとは、口が裂けても言えない。なら、どう言つべきなのだらう。焦る。

そんなしていふと、おばさんは優しく微笑んでくれる。

「ああ、言つて辛いんだね。でも、親御さんも心配していふと思つから、早めに教えてもらえると嬉しいね」

「あつ……。ごめなしゃい」

「いっよこいよ。今は、とにかく眠つて、熱を下げるんだ」

「ありがと、「じります」

「うう、熱のせいだらうか、何も考えたくない。だるい。辛い。だから、今は眠つて。お言葉に甘えて、ゆっくりと。」

「あの服、どうみても貴族の子女だ。うまくいけば、身代

金をがつぽり取れるかもしれないよつ

「しかし、あの子はどこの子か分からぬだりつ

「*ijo*の辺のあんないい服を着れる貴族は、公爵家しかないだりつ。

年的に、ドーリス公爵家の末っ子だ」

「そ、そつか。なら、公爵家に手紙を出そつか。娘の命が惜しければ、つてな」

身代金？ 何で？

私は、それ用當てどりつやつて、ベッドで寝かされているの？

そのせいでの、どうもまた方にまた迷惑をかけるの？

イヤダ。

逃げナクチャ。

私は、迷惑をかけるために家を出たんじやない。幸せに生きて欲しいから、家を出たんだ。

逃げよつ。私は、熱に麿され重たい体を引き摺つて、あの夫婦にバレないよつ、外に出る。

バレたら、ひとまたちに迷惑をかける。だから、逃げなくちや。

「あ、おいー ガキがいなぞつー」

「逃げたんだよつ！ 探しておいでつー」

私がこいつそり抜け出して、家を離れた頃に、あの夫婦の叫び声が聞こえる。もう、気づかれたか。

なら、急いで逃げなくては。見つかる前に、*ijo*を離れなくては。そう思つのに、体はうまく動いてくれない。…… *ijo*の病弱な体が憎い。

それがたとえ、自分の選んだ道だとは言つても、こんなときへりいは、*ijo*のへりの悪態をつこてもいいでしょつ？ お兄さん。

「いたつ！」

その瞬間、そんな声が聞こえてくる。　ああ、終わった。私は、
いつもまたちに迷惑をかけることになる。

「めんなさい、いつも、かあさま、にこさま、ねえさま。

「おつと、騎士様。私の知り合いの子が、何かしましたか？」

「貴殿の知り合いの子？　この子か？」

「ええ。ですから、私が連れて帰りますよ」

「ほつ」

気がついたら、私の後ろには騎士の人がいて、あのおじさんは、
その騎士に、私が知り合いの子だと告げて、引き取ろうとする。
だが、騎士の人は、私をそのおじさんに渡そうとはしなかった。

「貴殿と我が妹の関係を、我が家で詳しく尋ねたいといひですね。
捕らえろ！」

その瞬間、どこからか騎士の人がたくさん現れ、おじさんを捕ま
える。

そして、私の後ろにいた騎士の人は、しつかりと顔が見えるよう
に制服を調べる。

そこにはいたのは。

「探したよ、アリサ。帰ろいっ！」

「セイ、にこさま？」

何でにこさまがこいつって、言つまでもないか。にこさまは騎
士。市民の平和を守る、立派な騎士だ。

「心配した。外は危ないことがたくさんなんだよ、アリサ。だから、
帰ろうね？」

にいさまは言つ。だけど、戻れない。だつて、私は私の意思で、
貴族としての地位を捨てた。家族を捨てた。

そんな私が、大手を振つて家に戻れるはずも無い。

なのに。それなのに。私の体は、私の命令を聞かず、深い闇に沈
んでいった。

発見の喜び

セインがアリサを見つけ、優しく抱きしめて帰りを促すと、安心したのか、アリサは彼の腕の中で気を失う。

「その男を家へ連れて来てくれ。僕は、アリサのために馬車で早く家へ帰る。家の私用に巻き込んで、すまなかつたな」

「いいえ。妹姫が見つからないと、いつまでも隊長は使えませんからね。隊長を使える状態にするためには、必要な任務ですよ」

隊員は、頭を下げる隊長に笑いながら告げる。

セインの所属する近衛第三隊は、夕しゆりの休養日だった。いつも忙しい近衛隊。その中で、隊士は一時の急速を楽しんでいた。血相を変えたセインが駆け込んでくるまでは。

「聞いての通りだ。アリサがいなくなつた、頼む、一緒に探してく
れええええ！」

「わわ、分かりました！ 分かりましたから、落ち着いてください

!

そうして自分の隊の隊員を味方につけたセインは、隊員を導入し、アリサを捜索し、そうしてようやくアリサを見つけたのであった。
あのおじさんが、アリサを連れて行こうとしたときは、本
気で殺そうと思ったらしげ。

セインは、アリサを抱きかかえたまま馬車に乗り、早馬を飛ばし、家に、アリサの発見を伝える。

それと同時に、王にも連絡をいれ、国兵の導入は必要ない旨を伝えた。

それに、家族一同、ホツとしたことは、最早言つまでもない。王に借りを作らなくてよかつた。アリサを王子の婚約者と、暗に認めることにならなくてよかつた、と。

そして、セインが家に帰ると、玄関には家族と、メイド、執事など、全員が揃つていて、アリサの無事を確認していた。

「母さん、侍医呼んで。アリサの熱が高い」

「もう、来ています。ああ、確かに、かなり熱が高いようですね。セイン坊ちやま、アリサお嬢様をお部屋へ」

セインは侍医の指示に従い、アリサを抱きかかえたまま、アリサの部屋へ向かう。その後ろには、家族やメイドたちがぞろぞろと続く。

そして、アリサの部屋に着いたセインは、アリサを起さないよう、そつとベッドに下ろした。

「では、診察をさせていただきますので、申し訳ございませんが、男性の方々はしません、部屋の外でお待ちください」

侍医の言葉に、父や、ルウイン、セイン、カイン、そして執事は部屋を出て行く。部屋に残ったのは、母と、ジャスリーン、エルミナ、シャーナだけだ。

シャーナ以外のメイドたちも残りたがっていたのだが、父が多くいすぎて、邪魔になる。そう言って、下がらせたのである。

そして、男性が完全にいなくなつたことを確認した侍医は、アリ

サの服を捲り、肌を露出させる。そしてその後、怪我などはないかしつかりと調べて行くのであった。

「怪我をしている様子もありません。ただ、相当無理をしたのでしょ。熱が高いです」

確かに、ベッドに横たわるアリサの息は荒く、熱が高く、辛いことが見て取れる。そして、それを聞いた母は、思い出したかのように、侍医に告げた。

「以前王富医師の方に頂いた座薬、まだ使えますか?」

「ああ、そんなものがありましたね。まだ、そこまで経っていませんから大丈夫でしょう。……入れましょうか?」

「お願いします」

母はそう言って、メイドを呼び、座薬を持ってくるよう指示する。同時に、心からアリサが目を覚まさないことを祈った。

恐らく、今田を覚ますと、具合が悪からうがなんだらうが暴れることは必須だ。

しばらくして。

薬が効いてきたのか、アリサの呼吸が先ほどと比べると、若干マシになつていて。それを確認した侍医は、いつものように薬を置いて去つていった。「容態が急変しましたら、お呼びください」と言い置いて。

それからは、父や兄もアリサの部屋に戻り、ずっとアリサを見守つた。時折額に置かれたタオルを交換してやりながら。

それから、アリサが目を覚ましたのは翌朝だった。

「ん…………う…………」

『アリサー』

「え…………？ といひをま、かあわま、ここわま、ねえわま？」

田を覚ましたアリサに、徹夜で付きつ切りだつた家族は、嬉しそうに声をかける。

最初は寝ぼけ眼だつたアリサだつたが、不意に、今まで家族の見たことのないような表情に変えた。それは、有紗の表情だつた。

「アリサ、どうしたの？ まだ辛い？」

「…………『じめんなさい』」

「アリサ、謝らないで。かあさまたちは怒つていなか。ね？」

「…………『じめんなさい』」

『じめんなさい』、『じめんなさい』。アリサは、ずっと謝罪の言葉を重ね続ける。

家族が、何度も謝らなくていいと言つても謝罪を続ける。その表情は、やはり家族の誰もが見たことのない表情で、何を考えているのか読めない表情だつた。

そして、いつまでも謝ることを止めないアリサを、母が無理やり黙らせた。母は娘をぎゅっと抱きしめたのだ。

「アリサ。謝らなくていいから、じつして出て行つたのか、教えてくれる？」

「私が…………邪魔だつたから」

アリサが言つと、家族たちは全員、何のことだ？ と首を傾げる。

「どうせ私たちが幸せに生きるには、私は邪魔だから、出て行つた」

出来損ない

「アリサ、誰が、君に出来損ないなんて言つた？ 言つて、アリサ。殺す」

アリサの言葉に、まずカインが切れた。それにセインが続き、二人揃つて剣を抜き、今すぐにでもアリサを陥れようとした馬鹿を殺しに行きそつた。

ここでは、アリサがいるので剣を抜く」とはしないのだが。

「誰にも言われてない。私が、一人で考えた」

「アリサ、どうしてそういう考えに至つたのか、教えてくれるかい？」

父の問いに、アリサは静かに口を開く。今まで、ずっと溜め込んできていたことを、静かに吐き出す。

「だって、貴族は結婚で、家同士のつながりを強くするんでしょう？ でも、私は結婚しても、子を生せない。ならば、結婚 자체出来ない。つまり、つながりを作れない。これを、出来損ない以外に、何ていうの？」

これが、アリサがずっと悩んできたこと。家族が自分に隠し事をしている理由を漁ろうとして、分かつてしまつたこと。

それが、今までアリサを苦しめてきた。自分の存在が、家族の幸せを奪つていると。

だから、逃げだした。これ以上、邪魔にならないよう。

「だから、出て行つたのに」

アリサが言つた途端、母の、アリサを抱く力が強まる。アリサの目に、涙が溜まり始めていた。

「かあさま……、痛い……」

アリサが訴えても、母はアリサを抱く力を弱めようとしなかった。ただただ、もう離さないよう、強く抱きしめ続けた。

娘の心

アリサの告白を聞いた家族は、真剣に思案していた。何故、五歳のアリサがそこまで考えていたのだろうかと。

彼らの娘、アリサは、まだ生れ落ちてから五年少々しか経っていない。普通の子供なら、そんな考えを抱くこと自体、ありえないはずだ。

事実、彼らの上の子供たちが五歳の頃は、兄弟年が近かつたので、勉強のないときはとにかく遊んではかりだつた。

ショッシャウ問題を起こし、叱つてばかりだつた。

だが、アリサにはそれが殆どない。体が弱く、遊んだり勉強をしたりと言つことが出来ないせいだつたと、今まで考えていたのが、先ほどのアリサの言葉を聞いて、考えを改めた。

アリサは、自分たちが思つてはいる以上に賢く、優しい。優しすぎるくらいに、優しいのだ。

現在、アリサは再び眠りについている。母が力強く抱き続けていたせいで、疲れ果ててしまつたためだ。

故に、彼らはそんなアリサを見守りながら、話をして、思案していた。

「アリサは、賢すぎるんだね」

「だから、何度も勉強を強請つてたのか」

もつと、学を得て、早く自立するために。家族の枷にならないため。

それでも、彼らにとつてアリサは可愛い愛娘で、可愛い妹で。た

とえアリサが自分の意思で離れる」とを選んだとしても、彼らがそれを許すことはなかった。

次に、アリサが家を出たとしたら、彼らは全力で捜索し、そして、見つかった後は完全に家に閉じ込めるだらう。それこそ、軟禁だ。

彼らは、そつまでするほどに、アリサを愛しているのだから。当のアリサは、自分がそつまでされるほどに愛されているとは思っていないが。

「とにかく、これからはアリサが出て行かないよう、アリサは必要な存在なんだって、分からせなくちゃ」「でも、どうするのや?」

「今まで以上に、かまって、可愛がればいいんじゃない? そうすれば、私たちがアリサを愛していくこと、分かってもらいたい」という

家族は、ジャスリーのその言葉に、心から同意した。

そして、この日から家族はアリサとふれあう機会を増やし、アリサを愛し続けていくのであった。

そして、お昼。アリサを起すのときから、先ほどのジャスリーの言葉は、実行されていた。

「アリサー、お昼だよ。朝、はんも食べてないんだから、お昼は食べようね? ほら、起きて」

「アリサ、起きなさい。」はんを食べないと、お薬飲めないでしょう?」

「ん……ん?」

アリサが目を覚ますと、そこでは、家族全員が揃つていて、アリ

サの食事の補助をしようとしていた。

それを見たアリサが、びっくりして田を丸くさせたのは、最早言うまでもない。

「はい、アリサ。あーん」

「かあさま。自分で食べるから、いいよ」

「いいから。はい、あーんして」

今のお母に何を言つても無駄だと判断したアリサは、大人しく口を開く。

すると、母は微笑みながらアリサに食事をさせ始めた。その笑みは、嬉しそうだ。

そして、薬を飲んだ後、アリサは、家族のほうを見て、告げる。

「どうせま、かあさま、にこさま、ねえさま。私の話を、聞いて欲しい」

それは、いつものアリサの話すスピードとは違い、子供速度ではなく、大人速度だった。家族は、まずそのことに驚く。だが、次にアリサの口から放たれた言葉は、その驚きを遙かに凌駕した。

「私は、前世の記憶を持った転生者だ」

私の前世の名前は、神崎有紗。名前は、今と同じだね。前世では、身分制度のない日本つて言つ国に住んでた。

楽しかったよ。 十歳までは。

「十歳までは、って、十歳のときに何かあつたのか？」

カインが尋ねると、アリサの、いや、有紗の表情は歪んだ。そのまま、告げる。

「実の両親を、事故で亡くした」

「……ごめん、アリサ。無神経だつた」

「いいよ、カイにいたま。紛れもない真実だから」

その後、私は十五歳のときに、事故に遭つた。十歳のときの事故よりも、タチの悪い事故。

私は、事故に遭い、意識不明の重体まで陥つた。そのとき、神様に会つた。

「生きたまま、転生してみない？」

軽い雰囲気で言われたから、最初は冗談かと思つたけど、彼は本気で、私も新しい人生を送れるのなら、転生するつて答えた。

でも、生きたまま転生するわけだから、対価もあつた。それが、この病弱な体。

一つの魂が二つの体を持つてゐるわけだから、自動的に、この体は弱くなつた。

「そのときに、死ぬのを待つていたら、出来損ないじゃなかつたかもしれないね」

そう告げるアリサの表情は悲しげで。それを聞く家族の表情も悲しげで。

みんな、悲しそうで。

「でも、私がアリサ・クライシス・ドーリスであることに代わりはない。でも、……どうさまたちが、こんな子供イヤだつていうなら、

私は出て行くから。そのときは、遠慮なく言つて

アリサがそう言つた瞬間、家族は動いた。みんなで争つよう、アリサを抱きしめたのだ。

そして、次々に口を開く。

「馬鹿なことを言つたな、アリサ。アリサは、一生私たちの子だ。いらないなんてこと、あるはずがない。大切な、私たちの宝物」
「どうさまの言つ通りよ、アリサ。私たちは、あなたを心から愛している。どこにも行つてほしくない。もちろん、出て行くなんでもつてのほかですかね」

「今まで、ずっとそりやつて悩んできたのか？ 相談してくれればよかったですのに。僕らは、君の兄なんだからね」

「兄さんの言つ通りよ、アリサ。今度からは、行動に移す前に相談してちょうだいね」

「全くもつ。アリサ、僕が君を見つけたとき、どれだけ安心したと思つてゐる。今度からは、あんな心配、かけないでくれよ？」

「セインにいの言つ通りだ。君が見つかつたと聞いて、どれだけ安心したと思つてる？」

「だからね、アリサ。私たちは、アリサを使って身代金を取つとした馬鹿、絶対に許さないからね？」

父や母、兄たちの言葉に涙ぐんでいたアリサだったが、最後のエルミナの言葉を聞いて、その涙は引っ込んだ。
自分に親切にして、家に連れ込み、身代金を奪おうと話していた夫婦のことを思い出したのだ。

「どうでも、かあさま、あのおじじしゃ……、おじさんたちね？」

舌歯んだ。痛い。やつぱり、こつもみたいたゆつべりが話しあす

いや。そう言つアリサの頭を、家族は全員で撫でる。やはり、そのまゝがいつものアリサのようでいいと。

そうして、アリサを誘拐しようとした馬鹿のことは、アリサに話そうとしない家族だった。

アリサの告白を聞いて、数年のときが流れた。ある日、父は城へ行き、査問会へ出席していた。その席には、宰相補佐であるルワインも同席している。

その査問会から帰ってきた父の表情は、暗い。

「どうれま、どうしたの？ 大丈夫？」

アリサが問い合わせると、父は、優しく微笑みながら己の心配をするアリサの頭をくしやりと撫でる。そして、口を開いた。

「それは、『飯の時間に話してやる』。全員に、聞かせねばなるまい」

そして、その日の夕飯時、父は、査問会のことを告げた。 査問会で起じた、問題を。

「謀反の疑いがかかつっていた伯爵が、召喚術を使い、召喚獣ではなく、人を召喚した」

父のその言葉に、その場で召喚された少女を眺めていたルワイン以外の人間が、驚きに目を見張らせる。

但し、アリサは回りに合わせて驚いただけで、実際は何のことかよく分かつていなかつたが。

「謀反自体が大罪だといつのに、召還と言う大罪まで重ねれば、伯

爵は死罪は免れんだわ。まあ、それはビリでもいいとして

いいのか。瞬時にアリサは心中で突っ込む。

一応、仮にも元平和な国、日本国民であるアリサは、死刑とか、そういう危ない言葉に縁はなく、はつきり言って、そんな言葉を聞くのが、嫌いである。

故に、父のそのあつさつとした物言いに、少し引っかかりを覚えたアリサであった。

「問題は、召喚された少女にある。彼女は、この国ではありえない魔術を使って、伯爵を捕らえるのに貢献してくれた。だが」

「だが、何です？」

「 今現在、生死の境を彷徨つている」

父のその言葉に、またも、ルウイン以外が目を見張らせた。そして、子供たちは同時に「何で？ どうして？ 伯爵が何かしたのつ！？」などと、父につめかかる。

そんな子供たちに、父は、静かに答えた。

「少女は、召喚されたときは、既に胸元が血まみれだつた。アレグラ殿曰く、あの状態で動き回り、魔術を使っていたこと自体、奇跡だと」

またも止まつたドーリス侯爵家の人们たち。その中で、比較的早くまともに戻つたのは、エルミナだった。

「ああ、だから、アレグラさんから魔力増強剤の作成注文が来たのか」

「その通りだ」

ちなみに、アレグラとは、王室医師であり、今はアリサやエルミナ、ジャスリーの主治医として働いている侯爵家の息女である。数年前まで、アリサの侍医は公爵家付きの医師だったのだが、成長に伴い、医者とは言えど、異性に肌は見せないほうがいいだろうという父の判断の元、医者が代えられた。

まあ、その侍医は今も父やルウイン、セイン、カインに何かあつたときに、すぐに駆けつけ処置をしているが。

「それで、その少女が無事だつた場合だが、もしかしたら、家が後見人になるかもしね。 かまわないか？」

「かまいませんよ。 ところで、その少女はいくつなのですか？」

「正確な年は分からぬが、見た目で考えれば、アリサと同じくらいだろう」

父がセツヒ言つと、アリサは目を輝かせる。そして、父を見て言つ。

「なら、その子、私の友達になつてくれるかな？」

「ああ、年も近いだらうしな。 そのときは、仲良くなさい」

「うん」

そう答えるアリサは、本当に嬉しそうだ。そんなアリサに、家族もほんわりとした気分になる。

そして、それに耐えかねたジャスリーが、アリサを思い切り抱きしめた。

「あーもう。アリサってば可愛いんだからー。」

むぎゅー。ジャスリーは、最愛の妹を抱きしめ続ける。アリサもそれが嬉しいのか、にこにこにここと笑いつぱなしだ。

それを見つめる兄弟の目が、優しいものであることは、絶対にあ

りえない。

「アリサ。僕のところもおいで」

「ルウにこわま」

ルウインが言つと、アリサはジャスリーンの腕から逃れ、今度はルウインの腕の中に納まる。そして、ルウインはそんなアリサに頬ずりをする。

「ルウにこわま、お髪、痛いよ」

アリサはそうは言つてゐるが、顔は笑つてゐる。痛いというよりは、こじょぐつたいのだろう。

それでもちるん、それを眺める兄弟の田は、剣呑である。

「アリサ。次、僕ね」

「セインにいづるい。アリサ、僕だよね？」

「つるわー。アリサ、こつちおいで」

結果、まだアリサを抱きしめていない下三人で、アリサ争奪戦が始まつたのであつた。

家族は、アリサが前世の記憶を持つたままで転生したからといって、態度を変えることをしなかつた。

寧ろ、今まで以上にかまい、可愛がるよつになつた。まあ、これはジャスリーンが言つたことでもあるが。

アリサは、それが嬉しかつた。自分の精神年齢が見た田よりも上であることを知られ、今までどおりには過ごせないだらうと考えて

いたのに、家族は、いたつていつもおり、今までどうぞ過ごしててくれた。
それが、どれだけ嬉しかつただろうか。

私は、神崎有紗ではなく、アリサ・クライシス・ドーリスだと、しつかりと教えてくれた。

だから、アリサも態度を変えず、今までどおり、小さい子供として振舞う。たとえ、それが振舞いではなく、本氣だったとしても。だから、アリサはいつものように兄弟に抱きつく。優しく抱きとめてくれる腕に、安心して飛び込む。

『アリサ』

「にいさま、ねえさま。だあいすきつ」

だから、ずっと一緒にいてね。アリサは、兄たちには聞こえないよつ、小さく呟くのであった。

「ぬとなさい。
やつれやござました

虹の葉のチカラのキャラが出てきます。
同様に、虹の葉のチカラの方ではアリサたちが出てます。

これはアリサ主体の話、
あるいはアキラ主体の話となつておつます。

よければ、虹の葉のチカラのまつもどり。

召喚獣との対面

謀反人^{愚者}が人間を召喚した数日後、その召喚された少女は、ドーリス公爵家で引き取るのではなく、クレメンス侯爵家で引き取られることが決まった。

それを聞いたアリサはつまらなさそうな顔をしていた。やつと、同じくらいの年の友達が出来ると思ったのに。侯爵家に召喚された少女が引き取られることが決まって以来、アリサはしおちゅうそう咳いている。

そんな、連日の気の沈みが原因だったのだろうか。突然、アリサは高熱を発した。

「アリサ、大丈夫？ 今アレグラを呼んだからね」
「かあさま…………、熱い。脱いでもいい？」
「だめ。きちんと着ていなさい。いいね？」

熱い熱いと咳くアリサ。だが、母の許可を取らずに脱いだという考えには至らなかつたらしく、今は、きちんと着込んでいる。

その後、つまらなそうな顔をしたアリサの基に、アレグラと、その後ろにアリサと同年代くらいの年頃の少女が現れる。

アリサの部屋を訪れたアレグラは、まず、アリサの診察を始めた。

「今日は、どんな調子ですか？」
「熱い。だるい。何もしたくない。……ところで、後ろの子が」「それは診察が終わってからにしましょうね。で、胸を出してくださいね」

アレグラの質問に答えながらも、アレグラの後ろの少女に興味を隠せないアリサ。だが、アレグラはそんなアリサをあっさりと黙らせて、しっかりと診察にかかる。

「はい、いいですよ。では、いつものように薬を出しておきますから、きちんと飲んでくださいね？ 飲まなかつたらいつまでも熱は下がりませんからね」

「分かっています。で、後ろの子は？」

熱に麁されていながらも、アレグラの後ろの少女への興味は一切薄れなかつたらしい。アリサは田を輝かせて尋ねる。

アレグラはそんなアリサに苦笑しながら、少女をそばに呼んだ。そして、紹介をする。

「この子は先日よりうちの家族になつた、アキラです。アキラ・モガミ・クレメンス。年は同じですね。アキラ、自己紹介を」

「アキラ。よろしく」

「初めまして、アキラ。私はアリサ・クライシス・ドーリス。横になつたままの紹介で悪いけれど、調子が悪いから容赦して欲しいな」「気にしてない」

「ありがと。で、年、同じなんだよね？ 私、今まで年が同じ友達つていなかつたから、仲良くして欲しい」

アリサが言つと、アキラは完全に黙り込む。そんなアキラの代わりに、アレグラが返事を返す。もちろん、アキラの口を、アリサに分からないように塞いだ上で。

「もちろんです。私からもお願ひします。仲良くしてあげてください」

「うん。ありがとうございます、アレグラ。よろしくね、アキラ。私のことは

アリサって呼んでね

「…………」

「さあ、そろそろお休みください。元気になりましたら、またアキラを連れて遊びに来させていただきますから」

「ホント!? 約束だよ、アレグラ」

アリサが嬉しそうに言つと、アレグラはにっこりと微笑み、そして、アリサの診察に使用したものを片付ける。

その後は、始終無表情だったアキラの手を引っ張り、ドーリス公爵家を出て行つた。

そして、それからアリサはアレグラの言つことに従い、休むことにしたらしい。目を瞑り、呼吸を落ち着ける。

その数十分後、母が様子を見に来てみると、そこには健やかな寝息をたてて眠る末娘の姿があつたそうな。

母は、そんな娘の寝顔を眺めに、静かに部屋に入る、のだが、その僅かな音で、アリサは目を覚ましてしまつたらしい。そこには、寝ぼけ眼の娘がいた。

「かあしゃま? ビ、したにょ? も、じひやん?」

完全に寝ぼけているアリサの舌は、回つていない。母は、そんなアリサを可愛いと思いつつも、「何にも無いから、アリサはもう一度休もうね」と言つて、娘を寝かしつけるのであつた。

「ほーら、アリサはいい子ね。だから、しっかり休んで、早く元気になります」

「ん……、すう」

そうして再び寝入つた娘の寝顔を、今度こそ母はゆっくりと眺め

るのであつた。

数時間後。

シャーナが控えめにアリサの部屋の扉をノックし、昼食の支度が完了したことを伝える。それを聞いた母は、容赦なくアリサを起こした。

「アリサ。お皿(いは)はんの用意が出来たらしごから起きなさい」

「むー……」

「きちんと食べて、お薬飲んだらまた寝ましょ(う)うね。だから、今は起きなさい」

母のその言葉に、アリサは目を一瞬(いすみ)ながら、ぼんやりと起き上がる。その目は、まだ開かれていないが。

「アリサ？ きちんと起きてる？ 目が開いてないよ」

「んー、だつて、眠たいもん」

アリサはそう言しながらも、フラーっと横向きに倒れかけている。そんなアリサを急いで支えた母は、アリサを無理やり起こす手段に出たらしい。

母は、アリサの額に乗つっていたタオルを、再び水に浸し、絞り、そして、それをアリサの首筋にべつたりと当した。

「ひやつー！」

冷たいタオルが首筋に当たられた瞬間、アリサは変な声を出し、体を起こす。その目は、しっかりと開かれていた。

「よし、きちんと起きたわね。さ、じ飯食べましょ(う)うね

「かあさま、強硬手段に出すぞ」

「アリサが起きないのが悪いの。はい、お腹」

アリサは礼を言つて昼食の入った器を受け取り、スプーンで掬い、食べ進めていく。

だが、今回もやはり、半分も食べることなく、もひいと言つて母に器を返した。

ちなみに、アリサがいつも食べないからと言つて、量を減らすことはしない。何故か。量を減らせば、減らした分の半分すら食べなくなるからだ。

以前、母の指示で量を減らしたときがそつだつたのだ。

よつて、それ以来ドーリス公爵家のメイドたちは、アリサの体調が悪いときの食事の量は一定とするようにしているのであつた。

「はい、お薬飲みなさい
「うえー、やつぱ苦こー」

こいつになつても苦い薬。そんなものも、あるだろ。アリサの飲む薬が、実際そうである。成長に伴い味覚も変わつてくるため、少しくらいは苦味が抑えられるかと思えばそつでもなく、アリサの風邪薬は、今尚一定の苦さを保つていた。

そうなつたアリサが、次に甘いものを求めたことは、いつまでもない。

そして母は、そんなアリサのために、あらかじめホットハチミツミルクを用意しておいてやるのであった。

そしてアリサの熱が下がってから数日後、父や母に頼み、クレメンス侯爵家に連絡を取つてもらつたアリサは、自分と同い年他と言う少女 アキラ の到着を今か今かと待つていた。

その日は、輝きに満ち溢れている。そして、母や、この日ちょうど休みだつたジャスリーンは、そんなアリサを微笑ましげに見て、そして、心配そうな目で見つめていた。

微笑ましげな視線は、アリサを可愛いと思うが故に、心配そうな視線は、興奮したアリサが、熱を出さないかと言う、心配からだつた。

そうしていると、メイドが来客を伝える。来客は、アリサの待ちに待つた客だつた。

「お招きに預かりまして、クライシス侯爵妹、アレグラとアキラ、貴家を訪問させていただきました」

「そんな堅苦しい挨拶はやめてちょうどいい、アレグラ。今回は家が呼んだんだから」

そう言つた母は、その後、アリサの方を見て、口を開く。

「アリサ。アキラ嬢と、アリサの部屋で遊んでなさい
「うん！ 行こ！、アキラちゃん」

アリサは母の言葉に目を輝かせ、アキラの手を取り部屋へ向かう。そんなアリサに、母やジャスリーンは、「無理はしないようにねー」と、後ろから声をかけるのであつた。

そして、アキラを連れて自分の部屋に来たアリサは、前置きも吹っ飛ばして、自分の疑問に思っていたことを問い合わせた。

それは、アキラにも衝撃を与えるもので、ほかの人に聞かれれば、ほかの人もかなり驚くことであつた。

「アキラちゃん。日本って書いた国、知らない？」

アリサの言葉に田を見張らせ、動きを止めたアキラ。それが、アリサにどうしては答えとなつたらしい。

「やつぱりね。じゃあ、王ガニっていう漢字はいつかな？」

アリサはそう書いてそばにある紙を取り、漢字を書く。『最上』と。

そして、少しだけ正気に戻つたアキラは、剣呑な田つきでアリサを睨む。そして、口を開いた。

「何で、それを知ってる」

「……私が、前世の記憶を持った転生者だから」

私の前世の名前は神崎有紗つて書いて、どこにでもいるような子供だったよ。

で、十歳のときに事故で両親を亡くして、私は十五歳のときに事故で死んだ。

本来は意識不明で、生きている状態で転生を果たしたのだが、アリサはそこは伏せるつむづらじい。そのまま続ける。

それで、この世界に転生したんだよ。見ての通り、アリサ・クライシス・ドーリスにね。まあ、体は病弱だけど。

ねえ、アキラちゃん。本当の年齢は、いくつ？　日本では十歳はそんなに大人びてないよね。本当はいくつなの？

アリサが問い合わせると同時にアキラを見てみると、アキラは涙を流していた。その様子に、アリサが焦ったことは言つまでもない。

「あ、アキラちゃん？　どうしたの？　えっと、一応ごめん？」

泣き出すアキラに、アリサはおろおろしながら、とりあえず謝り、そしてタオルを差し出す。アキラは何も言わずにそのタオルを受け取り、目から伝う涙をしつかりと拭つた。

その後、ゆっくりと口を開いた。

「謝らなくていい。いや、違う。寧ろ、私が悪い。で、何で、分かった？」

「言つたでしょ？　私は、元日本人。日本人の年くらい、大体予想はつくよ」

「なら、いくつくらいに見える？」

アキラが尋ねると、アリサは淡く微笑みながら、思案する。そして、少しづつ答えが出たらしい。口を開いた。

「うーん、私の死んだときがそんな感じだったから、十四・五つとこるかな？」

「あたり。十五だ」

アキラが答えると、アリサは自分の考えがあたつていたことが嬉しいのか、優しく微笑む。そして、アキラの手を、優しく握る。

そんなアリサに、アキラは反射的に手を引くのだが、アリサは引かれた手を追いかけて、しっかりと手を握つた。

「……つ離せ！」

「やーだ 精神年齢お姉ちゃんである私の言つことば、聞いてね？」

ちなみに、アリサの精神年齢（アリサの勝手な判断）は、事故に遭つたときの年齢プラス今の年齢。つまり、一十五歳となる。

つまり、現在進行形で十五歳であるアキラよりは、確かに姉となり得るのである。まあ、実年齢は十歳であるため、アキラよりは年下となるのだが。

「そんなもん、知らない！ 離れる！」

「……ねえ、アキラちゃん。日本で、何があつた？ 私の死んだ後に、日本は何か変わつたの？」

特に、子供に対するまわりの接し方とか。そう続けるアリサに、アキラは目を見張らせる。

アリサは、日本で私に襲いかかつたことを、知つてているのだろうか、と。もちろん、アリサは知らない。単純に、アキラの反応を見て予想をしているだけだ。

それでも、アリサはアキラの反応を見て、その予想は当たつていたと考へる。

「本当に、何があつたのさ」

アリサはそう言つながらアキラを抱き寄せた。アキラは嫌がるのだが、アリサは無理やり抱きしめた。

アキラが本気で抵抗すれば、病弱なアリサなど、簡単に振り扱えり得るだろうに、アキラはそうしなかつた。

アキラは、アリサを信用し始めていた。

そして、それ故か、アリサの胸の中でアキラは思い切り泣き始めた。そんなアキラを、アリサは優しく見守る。

何かを言つわけではなく、何かをするわけでもなく、ただただ、見守り続けた。

そしてしばらくすると、泣き疲れたアキラは寝入つてしまつ。そんなアキラをベッドに運ぼうとするのだが、アリサの力では、それは出来ない。

誰かを呼びに行こうにも、今アリサがアキラの元を離れると、アリサに寄りかかっているアキラは、倒れ落ちることになる。
……どうしよう。本気で考えるアリサだった。

そうしていると、ちゅうぶん帰ってきたルウインがアリサの部屋を訪れる。

ナイスタイミング！ 本気でそう心の中で呟くアリサに、ルウインは不思議そうな顔をする。

だが、妹の腕の中で眠る少女を見て、合点がいったらしい。何も言わず、静かにアキラを抱き上げた。

「で、客間に運ぶかい？」アリサ

「ううん。私の部屋に寝かせてあげて

そうして寝かされたアキラの寝顔を、アリサはしばらく微笑みながら眺めるのであった。

その結果、放つておかれたルウインが分からぬように拗ねたそ
うな。何とも言えない兄である。

家族とのふれあい

そして、アキラが戻つてこないことに心配したらしいアレグラが、母やジャスリーンと共にアリサの部屋を訪れると、アキラはアリサのベッドに寝かされていて、その横で、アリサがベッドに突っ伏して眠っていた。そんなアリサには、毛布がかけてある。

毛布をかけてやつたのは、ルウインらしい。アリサが眠つたのに気づくと同時にメイドに指示を出し、毛布を持つてこさせ、アリサに掛けたのである。

ついでに、そのルウインも、椅子の上で眠っていた。仕事で疲れたせいなのか、アリサがかまつてくれなかつたのが面白くなかったのか、眞実を知るのはルウインただ一人である。

そして、アリサの部屋に足を踏み入れた母とジャスリーンは、まではアリサを起こすことにしたらしい。優しく声をかけ、体を揺らす。

「んう　　っ

起こされたアリサは、そんな声を上げるのだが、完全に起きてはいない。一度頭が上がったのだが、またすぐに落ちた。

母とジャスリーンは、そんなアリサを起きるまで、徹底的に起こそ。起こし続ける。

「アリサ、起きなさい」
「ほら、起きて」

そうやって起こされたアリサは、目をこすりながらも、何とか目

を覚ましたらしい。 またすぐに寝そいつではあるが。

そしてその後、今度はアレグラがアキラを起します。

「アキラ、起きてください。帰りましょう。アキラ？」

そうして、アレグラの手がアキラに触れた瞬間、アキラは飛び起きた。完全に熟睡しているときは、ルウインが抱き上げても何の反応も見せなかつたといふのに、半覚醒状態では、見事なものである。

「起きましたね、アキラ。 ああ、そんなに殺氣を放とうとしないでください。帰りましょう」

「……いきなり、触るな。 気持ち悪い」

アキラはそう言しながらも、起きた後はアレグラが触れても何の問題も無いらしい。そのまま、支えられたまま、アレグラが母に礼を述べ、そして、帰つていった。

そしてその後は、ドーリス公爵家、家族団らんの時間である。ジャスリーンと母は、ソファーに腰掛け、アリサにも座るよう促す。もちろん、席は一人の間、真ん中である。

「アリサ、クレメンス侯爵家の養子はどうだった？ 仲良く出来やう？」

「うん。 可愛かったよ」

「可愛かった？ アリサ、あの子と何してたの？」

「お話」。いろいろ話したよ。で、途中で疲れて寝ちゃつたの

何をしていたのか尋ねられ、しつかりとまかし、アキラが泣いたことを一人にバレないよう、しつかりと画策するアリサであった。

そして、背顔の裏にあるアリサのそんな考えに、アリサ大好き一人は全く気がついていない。してやつたり。心の中で呟くアリサであつた。

そうしていると、椅子に座つたまま眠つていたルウインが目を覚ます。目を覚ましたルウインは、一度二度左右を見渡し、それでここがどこか合点がいったのか、につこりと微笑む。

そして、ルウインは母やアリサ、ジャスリーンの座るソファーの対面の席に腰掛ける。ルウインもアリサと話がしたいのである。

「おはよー、ルウにいさま。よく眠れた？」

「ああ。久しぶりによく寝たよ」

「兄さん、最近ずっと遅くまで起きてるでしょ？ そのせいだよ」

「最近は仕事が多くてな」

ちなみに、その仕事とは、アキラを召喚した伯爵のしてきたことの洗い直しや、アキラのこれからのことまとめられたものをクレメンス侯爵家から回収し、それを見直すこと、などだ。

この仕事は、王にも同様に割り振られているし、宰相にも割り振られている。つまり、今現在、国のトップスリーは、全員無駄に忙しい状態である。

王は、宰相や宰相補佐であるルウインが目を通し、まとめたことに再び目を通し、大丈夫そなうならサインをし、宰相は、王命に従い、伯爵の領地を調べ、伯爵と繋がつていたものを調べたりとしている。ルウインはその補佐である。

そして、ルウインはそれとほかに、アキラのこれからについてのことを、任されていた。その結果が、遅くまで仕事をする、ということになるであつた。

「ルウにいたま、無理しすぎたらダメだからね

アリサは嬉しそうに微笑む。いつも、自分が言われている言葉を他人にいえるところが、何となく嬉しかったのだろう。そんなアリサに母やジャスリーン、そして、ルウインは微笑ましそうな目で見つめ、頭を撫でる。ルウインは、「分かっているよ」と言いながら頭を撫で、ジャスリーンは、「アリサは本当にいい子だね」と言いながら撫でてやり、母は、何も言わず、ただ微笑みながらアリサの頭を撫でていた。

アリサがそれにさらに喜んだことは、言つまでもない。

そうしていると、いつの間に帰ってきたのか、セイン、カイン、エルミナが揃つてアリサの部屋を訪れる。エルミナは迷うことなくジャスリーンの横を陣取り、セインとカインは、アリサの座る席の対面である兄の横へ座る。

そしてメイドにお茶やジュース（アリサに限る）を持ってきてもらつた後は、完全に談笑の時間となる。

「ん？ 今日僕たちがしたこと？ んー、僕は今日訓練日だったな。もうひょっとで隊長に勝てるところだったんだけどねえ」

アリサに、今日何をしたのかと尋ねられたカインは、のんびりと思いつ出しながら話を進める。

「お前じゃまだ無理だ。体の返し、まだ改善して無いだろう。」

「あー、それ、隊長にも言われた

「だらう？ 強くなりたいんなら、まずはそれを直せ」

そんな会話をしながら、ドーリス公爵家の時間が過ぎて行くのであつた。

またまた街に出よう

この日、両親を説得したアリサは、一人の兄を護衛に、街に出てきていた。

ちなみに、アリサが街に出るのは、以前家を出たとき以来になる。あれから何年もの年月が流れているのだが。この日まで、両親の許可が下りなかつたのである。

アリサがその両親に何度も何度も何度もお願いをし、ようやく今日の外出の許可が下りたのであつた。但し、護衛である兄たちの田の届かないところには行かない約束で、ではあるが。

ちなみに、両親がアリサの外出に反対した理由は、多々ある。一つは、外に出たアリサが、またいなくなりそうで怖いため。

一つは、外が危険であるため。

一つは、アリサを王子の婚約者にしようとしている王が、本腰を入れてきたため、だ。

まあ、本題は、三つ田の王の攻撃を避けるためなのだが。

王ならば、どこからかアリサの外出を聞き入れて、アリサを王子の婚約者とするための行動を取ることくらい、容易いだろう。

両親は、それを避けるために、この数年間アリサの外出を徹底的に回避してきたのである。今回は、アリサの潤んだ瞳に勝てなかつたのだが。

「アリサ、そんなに急いでつとしなくとも、街は逃げたりしないから

「ほら、落ち着いて」

かなり久しぶりの外出に、はしゃぎ、まだ用意のできていない兄

たちに「まあだ？まあだ？」と田で問い合わせるアリサに、セインとカインは微笑みながらそう告げる。

そんな二人に、アリサも分かっているとは答えるのだが、それでも興奮は冷めないらしく、期待の目は止むことがなかつた。

ただただ、田を潤ませ、出発の用意をするセインやカインを眺め続ける。

「うかはばつぐんだ。

セインとカインの用意の速度が若干早まる。

そして数分後、しつかりと用意が完了した兄一人は、可愛い末妹の手を取り、馬車に乗り込み、街へ向かうのであつた。

「で、アリサは街に出て、何が見たいんだ？見たいのを言つてくれれば案内するよ」

「今日は、お店を見て回りたいな、って思つて。にいさまたち、よくお土産買つててくれるでしょ？それを見て、そのお店はほかにどんなのが置いてあるのか、興味があつたんだ」

「そつかそつか。なら、今日は店巡りだね。聞こえたか？カイン」

馬車の中からセインが問い合わせると、馬車の外で馬に乗つて走つているカインが反応を見せた。

「聞こえた。案内する店、僕も考えておくから」

そして走つていると、あつという間にアリサたちの乗つた馬車は、降りるべき場所へと到着する。この先は、人が多くて馬車では行けないのだ。

まずは、アリサはカインの手を借りて馬車から降り、それに続い

てセインが馬車から降りる。そして、一人はしっかりと剣が腰に佩いてあることを確認し、そして、アリサの手を取り、歩き出すのであつた。

「こじが、以前僕たちがアリサに本を買つた場所だね。あの本は面白かった？」

「うん。にいさまたちが買つてくれた本は全部面白かったよ」

「そか。なら、今日も何冊か買つていこうか？ 僕が買つてあげるから」

セインが微笑みながらアリサに語りつと、アリサは喜びに目を輝かせる。そして、買つてもらう本を探しに、店をうろつき始めた。もちろん、セインやカインの目の中の届く範囲内で。

「にいさま、この本、買つて？」

そうしてアリサに見せられたのは、大人用の、この国の神話が書かれた本だった。

二人の兄たちは、アリサにはまだ難しいと考え、止めにかかる。

「アリサ。アリサにはまだ難しい。ほかの本を持つておいで？」

「それはアリサがもうちょっと大きくなつたらにしようね」

私、これがいいのにな……。一人から同時に止められたアリサは、悲しそうに、下を向き、俯く。そんな姿に罪悪感を感じた二人は、どうしたものかと目を合わせる。

この本を買つてやり、アリサの機嫌を直すか、買わずにほかの方法でアリサの機嫌を直すかのどちらにするか、目で話し合いをしていた。

そして、結果はと言つと。

「仕方ないなあ。でも、アリサには難しいと思つよ？」

「なら、にいさま、読んで」

で、説明してくれると嬉しい。またもアリサは、潤んだ瞳で兄たちを見つめる。兄たちがその瞳に籠絡したことは、最早言つまでもない。

その日から、この一人の兄や、話を聞いた兄姉たちにこの本を読んでもらい、説明をもらつアリサの姿が見受けられたそうな。

そして、次に来たのは、その一軒隣の店、小物屋だつた。以前、エルミナやジヤスリーンがお土産にリボンを買った店である。ちなみに、父の買つてきたカチューシャも、この店で取り扱つてている。店内に入つたアリサの行動は、早かつた。いろいろな商品を見て回り、自分がもらつたものを見つけ、はしゃぎ、ほかのものも見て回つた。

そんなアリサを、一人の兄たちは心配そうに眺めていた。はしゃぎすぎているアリサ。熱を出さないかどうか、それだけが心配だつた。

そうしていると、小物屋に新たな来客が訪れる。その人を見た瞬間、セインとカインは、焦つた。アリサを早く連れ出さなくては。だが、その前に二人はその人に、この国の第一王子に見つかり、つかまつた。

「おや？ ドーリス公爵家のセイン殿とカイン殿ですか。
どうしてこんなところに？」

につこりと微笑みながら問いかける王子に、一人はどう答えるか、真剣に考える。

アリサに会わせてはならない。アリサに、王子の婚約者云々の話は、聞かせてはならない。

一人の兄は、真剣に思案し、結論を出した。

「お土産を買いに来たのです。とにかく、殿下こそ、どうしてこんなところに？」

「あなた方と同じですよ。少し城を出たので、せっかくだから王女にお土産を買つていってあげようかと思いまして」

では、失礼。そう言って店内を巡る王子は、すぐにアリサを視界に入れた。

「初めまして、ドーリス公爵家の末の姫君。僕はこの国的第一王子ですが……、父君たちから、何か聞いていらっしゃいますか？」

「王子、殿下？ えっと、何のことでしょうか？」

王子の問いに、正直に答えたアリサ。その後ろで、一人の兄は完全に焦っている。

そして、最後の手段として、一人はアリサを強制的に店から出した。

「アリサ、そろそろ次の店に行かなくては時間が無くなる。出よう」「殿下。失礼いたします」

そうして、店を通り、家路に着くアリサ。

店を巡っている間、一切王子の発言については兄に尋ねなかつたアリサだったが、馬車の中では違つちじい。しっかりと兄の目を見て尋ねる。

「にいたま。殿下が仰られていたこと、何のことなの？」

家に着くまで、何と返事を返せばいいのか分からず、右往左往しているセインの姿が、馬車の中で見られたそうな。

そして、家についてアリサと分かれるとき、父や兄に相談に走るセインの姿が屋敷のメイドたちに目撃されたと言つ。

振り返りし過去

「ねえ、お母さん。産まれてくるの、弟かな？妹かな？」

「僕も気になる。どっちだる」

「さあ、ねえ。カインとエルミナは、どっちがいいの？」

昔のディーリス公爵家。そこでは、数年ぶりの奥方の出産に、屋敷はほんわかした空氣に包まれていた。

おそらく、最後の子供になるであろう、奥方のお腹の中にいる子供。公爵家の人間は、ただただ、無事に産まれてくることを祈っていた。

「順調ですから大丈夫ですよ。安心してください」

往診に来た医者は毎回そう言つてはいるのだが、年が年である。母が、以前子を産んだとき、つまり、カインとエルミナを出産してから、ゆうに十年以上が経過していた。

その間に、母もずいぶんと年をとった。その中で、もう子を生むことはないだらうと思つてはいる時に判明した妊娠だった。

父や母は、この年での出産の危険性をしつかりと学んだ上で、産むことを決意した。

少しずつ大きくなつていいくお腹。それを見たカインやエルミナは、弟か妹が産まれるのを、楽しみに待つていた。

それまでは自分たちが一番下であつたため、自分たちよりも下の兄妹が出来ることが嬉しいのだろう。

母の腹の膨らみが目立つようになつてからは、ショックであつて産ま

れてくる子供は弟なのか妹なのか、気にしていた。

そしてある日、母に陣痛が来た。それは、予定よりもずいぶんと早いものだった。

「田那様とお坊ちゃん方は、部屋の外でお待ちになつていてください

い

メイドは母の出産の用意をしながら、部屋の外で心配やうに待つ父や子供たちに告げる。

そしてメイドが部屋に入つていいくと、やいはすいぶんと静かになつた。

それからは、待つた。時間の感覚が分からなくて、あまり時が経っていないのか、かなりの時が経つているのか分からぬほどに、待つた。

そうしていると、部屋の中から慌ただしい声が耳を掠める。何事かと思つた父や子供たちは、同時に耳を澄ませた。

「先生… どうやつても泣きません!」
「貸しなさいつ!」

医者やお手伝いの人の、焦つた声が聞こえる。それで分かったことは、既に子は産まれていてこと。

そして、もう一つ分かったことは、産まれた子供がいまだ、産声をあげないということだ。

そこで父や兄弟たちは、黙つていられなくなり、部屋へ入り込んだ。

それと同時に、それに驚いた声が響くが、父たちは一切気にしな

かつた。とにかく、産まれた子供の下へ向かう。

そして、子を受け取り、思い切り引つ叩いた。早く産声をあげるよ！」。

生きて、この世界を楽しんでもらうために。普通よりも小さな可愛い赤子を、死なせるつもりなどさらさら無かった。

「おぎやあ、おぎやあ」

その願いが届いたのか、産まれたての子供はよつやく元気な産声を上げた。

それと同時に、産まれた我が子を医者の手に戻す。そして、赤子を見た医者は告げる。

「ああ、女の子のようですね。カインくん、エルミナちゃん、妹が出来てよかったです」

『はいー。』

元気いっぱいに返事をするカインとエルミナ。そんな二人を、ルウインやジャスリーン、そして、まわりの大人たちが微笑ましげに眺める。

そして、父は再び医者から渡された我が子を抱き、妻の下へ向かう。そして、産まれたての小さな赤子を、妻の胸に抱かせた。

「お疲れ様。よく、頑張ってくれた」

「ああ、この子はあなた似かしら？」

赤子を抱き、しっかりと顔を見た母は、息を切らしながらも、微笑みながら告げる。

「いや、お前似だわ。」の子は将来、きっと美人になるわ」

そんな会話を展開させる両親に、しつかりと妹の姿を見たい兄弟たちは集つてくる。母は、そんな子供たちに、産まれたての小さな娘をしつかりと見せてやる。

泣き疲れてぐっすり眠る我が子の姿を。

「かわいいー」

「ね、名前もう決めたの？」

「ホント、かわいいなあ」

「何だか、サルみたい」

「うん。私もそう思う。ねえ、この子、本当に育つの？」

カインとエルミナのそんな言葉に、両親は吹いた。思い切り吹いた。

そして、笑いが収まつた頃に説明をしてやる。

「お前たちだつて昔はこうだつたんだ。大丈夫だよ」「で、名前の話だつたかしら？ 実は、もう決めてあるの」

この子の名前は、アリサ・クライシス。だから、正式名称はアリサ・クライシス・ドーリスになるわね。……嫌？

尋ねる母に、子供たちはぶんぶんと首を横に振る。そして、再び眠つているアリサの顔を見て、次々に告げた。

「ルウインお兄ちゃんだよ、アリサ。」これからよろしくね

「ジャスリーお姉ちゃんですよー」

「セインお兄ちゃんだよ。僕がいっぱい可愛がつてあげるからね」

「カインお兄ちゃんだよ。よろしくね、アリサ」

「エルミナお姉ちゃんだよー。これから仲良くしようね」

五人がそう言つて自己紹介をしたとき、微かに笑つたような気がする。これは五人の言つた言葉なのだが、産まれたての子供に笑うこと言つことはありえない。つまり、幻覚だった。

子供たちがその話を蒸し返すたびに、そつ告げる父と母なのであつた。

そしてそれ以来、彼らは病弱ですぐに病氣をするアリサに振り回されていいくことになる。

赤子とは泣くものではあるが、アリサの場合、泣く時間が長くなると、必ず発熱し、医者のお世話になつた。

はいはいを覚え始めるど、好き勝手に動き回り、無理をして熱を出し、医者のお世話になることになつた。

言葉を覚えてからも、必ず一度は無茶をして熱を出し、歩き出しへからも同様に無理をして熱を出した。

そんなことが繰り返されたため、父たちは、アリサをより一層可愛がるようになつた。体の弱い末娘。無理をするとすぐに熱を出す可哀想な子。

だから、たくさんかまつてやろう。外に行けない分、たくさん話ををしてやろう。アリサの欲しいものは、出来るだけ揃えてやろう。それが、アリサの体調に異変をきたす物でない限り。

アリサ。君は、死なないで。無事に、大きく成長して欲しい。

体の弱い、小さなアリサ。そんな小さなアリサも成長した。兄弟たちのアリサくらいの年頃と比べると体は小さいが、それでも成長していた。

そして、アリサが片言ながら話すようになると、兄弟たちの争いが激しくなった。

「アリサ、ルウインだよ、ル・ウィ・ン」

「あら、最初にアリサに呼んでもらったのは私よ、兄さん。アリサ、ジャスリーンって、言つてみて」

「姉さんの名前は長いから無理だよ。アリサ、僕の名前なら簡単だから、呼んでくれるよね。セインだよ、セイン」

「なら、僕の名前も呼びやすい。だから、僕だ！」

「カイン」「アリサ」。ねえ、アリサ。最初はすぐ上の私だよね？」

兄弟たちは、自分が一番最初に名を呼んでもらったために、日々鬭っていた。肝心のアリサは、依然として兄弟たちの名を呼ぶ気配は無いが。

ただ、その代わりに父と母を呼ぶことは、覚えた。

「ちよーちやま、ちやーちやま」

まだうまく舌が回らないため、きれいにとうやま、かあさまと呼ぶことは出来ないが、そう呼ばれるのに、父とは母喜んでいた。

事実、アリサがそう呼ぶと二人は相好を崩し、「どうしたの？アリサ」とアリサを抱きかかえていたのだから。

「ほーら、アリサはいい子ねー」

「あーうー」

「アリサつたら、今日はずいぶんと『機嫌なのね。もー、本当に可愛いんだから』

抱きかかえられ、いい子だとほめられたアリサは、分かつてはないだろうが、雰囲気が何だか嬉しいのだろつ。二ツ二ツと微笑みながら奇声を上げる。

そんなご機嫌なアリサのおかげで、それを見ていた家族やメイドたちも「機嫌だ。

「母さん、僕もアリサを抱っこさせて。アリサ、じつちおいで」

ルウインが母に駆け寄りそうに、アリサは嬉しそうにルワインの腕の中に移動する。

アリサを抱いたルウインは、アリサの目を見て微笑み、そんな兄の姿を見たアリサもまた、嬉しそうに微笑む。

そして、その喜びを腕をぶんぶんと振り、行動で示す。ルワインにとって、アリサのその行動は、自分に拳が飛んでくる危険なものではあつたが。

まあ、実際アリサの拳が当たつたところで、まだまつたく痛くないでの問題はないのだが。

「兄さん、次私ね。ほーら、おいで、アリサ」

「あー」

「その次、僕だからねー！」

そうして兄弟たちは、自分も順に抱っこし、並ぶ。

次々と大好きな兄や姉に抱かれていくアリサは始終嬉しそうにしていた。そしてその後、爆弾を落とした。

「るーいーまつ？」

アリサはルウインを見て、そう告げる。そしてその瞬間、ルウインは語った。アリサは自分を呼んでいると。つまり、先ほどのアリサの言葉を訳すと、「ルウインにいさまとなる」と。

「こよつしゃあつー」

そして、それを完全に理解したと同時に、彼は拳を突き出し、ガツツポーズをする。

そんな兄の行動が理解できない弟妹たちは、目を完全にまん丸にしているが。

「アリサが僕を呼んでくれたんだ。そ、うだらつ？ アリサ」

「あー るーいーまつ。るーいーまー」

兄に尋ねられたアリサは、兄が喜んでいるのが嬉しいのか、それとも覚えた言葉があることが嬉しいのか、ルウインを呼ぶ言葉を連呼する。

もちろん、それを聞き続ける弟妹たちの機嫌はどんどんと悪くなつていき、そんな兄や姉の顔をふと眺めたアリサが、恐怖で泣き出すまでになつてしまつた。

そしてその後、ルウイン含み兄弟たちは母によつてアリサのいる両親の寝室から追い出されこととなつた。原因は、彼の弟妹たちの、表情の怖さだった。

母は、アリサが泣き出すと同時に彼らからアリサを奪い取り、泣き止ませようとあやしていたのだ。

そして、その途中で彼らは追放宣告を受けた。

「あんたたち、邪魔。出て行きなさい」

「え？ アリサが泣いたの、僕のせいじゃないよ！？」

ルワインが訴えると、母は厳しい顔をして、ルワインたちに告げた。もちろん、その顔はアリサには見せない。

「間接的に関わってるでしょうが。いいから出て行きなさい、邪魔」

そうして可愛い妹のいる部屋を追い出された兄弟たちは、追い出された扉の前で、見事なバトルを展開させていた。

「大体、お前たちが怖い顔をするから、アリサが泣き出して、何の関係もない僕まで部屋を追い出されるんだ」

「だつて、兄さんばかり、ずるいもの」

「僕もそう思う。兄さんよりも、僕たちのほうがいっぱいがまつてるので」

「そーだそーだ。不公平だ。僕やエルミナは、ショッチャウアリサと一緒に居るのに」

「カインの言うとおり。おもしろくなーい」

アリサ、早く私の名前も呼んでくれないかなー。兄弟たちは、小さく囁くのであった。

一方その頃、母はと言つと。

「アリサ、もう怖いのいないからね。大丈夫よー」

「ひぎやああああああああああああああ」

未だに大泣き中のアリサを、必死であやしていた。

「うああああああああああああん」

「大丈夫。大丈夫だからね、アリサ。もう怖くないよー」

ほーら、いい子いい子。母はそう言いながら、アリサのお気に入りのぬいぐるみをアリサの目の前に差し出す。いつもならば、それで泣き止むのだが、今日は何故か泣き止まなかつた。

「ああああん、ああああああん……けひょ」

そして、泣きすぎて、噎せた。

その後、父が帰ってきて父に抱いてもらい、アリサはようやく泣き止んだのだが、この日は、あまりにもアリサは泣きすぎていた。

結果、翌日は高熱を発し、再び泣き続けることになつたのであつた。そしてそれ故に、熱も中々下がらず、家族を心配させる日々が続いたそうな。

幼き日々（後書き）

明日からは本編に戻ります。

「この田のドーリス公爵家の目標、それは、『アリサを王子に会わせない』ことである。

ことの始まりは、数日前、突然仕事で城に出ていた父が、王に捕まり告げられた一言にある。

ドーリス公爵殿。実は、第一王子が先日アリサ嬢を見かけたらしく、一目で気に入つたらしいんですよ。ですから、今度、王子を公爵家に遣りますね。アリサ嬢とふれあわせてあげてください

爵家に遣りますね。アリサ嬢とふれあわせてあげてください

「恐れながら陛下、我々ドーリス公爵家一同、皆一様にして、アリサを殿下の婚約者とすることに反対しております。 その状態で、

会わせたいと思ってですか?」

父が黙つと、王は面白がつて微笑む。そして、「お好きなみつで」と答えを返してきた。

「早く、アリサ嬢を手に入れたいのならば、自分で父である公爵や、兄君たちを何とかしなくてはいけませんよ?」と、王自ら王子に説いていたらしい。

結果、王子は父や兄たちの田をかいぐり、アリサとふれあう機会を作ろうと頑張っているそうだ。

そしてこの日、その王子がドーリス公爵家を訪れていた。

「公爵殿、ルウイン殿。アリサ嬢はどこに？」

公爵家についた王子は、あいさつもそこそこにアリサの居場所を尋ねる。だが、両親は教えるつもりは無かつた。それは、兄姉たち

も同様である。

ちなみに、アリサは今両親の寝室で休まされていた。

体調を崩すのはいつものことだが、今回の熱は、アリサを激しく寂しがりにさせたらしい。アリサが自ら両親の休むベッドに来たのである。

「どうさま、かあさま。何だか、寂しいの。……一緒に寝てもいい？」

アリサは、そろそろ寝ようかとしていた両親の元に、枕を抱きながらそう言つてやつてきたのだ。もちろん両親はそれを受け入れ、嘗ての定位置である真ん中にアリサを寝かせた。

そのおかげか、アリサはあつさりと眠りにつき、朝から少し目を覚ましたのだが、今もまた眠りについている。

そして、目を覚ましたときに寂しくないよう、エルミナをつけているのであった。

父や母、ルウインたちは、完全に体調を崩し、寝込んでいるアリサを王子に合わせるつもりなどさらさら無かった。

何とかして、王子にアリサを諦めさせるつもりだつた。

だが、父も母も、ルウインたちも知らなかつた。王子が諦めが悪く、しつこく男だと言つことを。

「先に言わせていただきますが、私は諦めませんよ。アリサ嬢本人に嫌と言われようとも、必ず首を縊に振らせてみせますー。」

その瞬間、ルウインは「王族は変なのはつまりなのか？」と本気でそう考えたそな。

「殿下。アリサは体調を崩して休んでいるのです。無闇に年頃の女性の寝室に足を踏み入れるのは、ご遠慮いただきたいですね」

「おや？ 将来の奥君なのですから、かまわないでしょう？」「まだそうとは決まっていません。遠慮していただきましょ」

父の言葉に、一いつ口ひと口と言葉を返し、そばにいるメイドを捕まえて案内をさせようとする王子を、ルウインはそう告げて、「失礼」と、後ろから羽交い絞めにした。

そんなルウインに王子のそばに仕えていた騎士たちは剣を向けるのだが、王子本人がそれを止めた。

「かまいません。確かに、まだ本決まりではありませんでしたね」

そう告げる王子に、父やルウインはホッと息をつく。だが、すぐにその安堵の心は吹き飛んだ。

「ですから、今、ここで決めてください。私がアリサ嬢の婚約者であると」

「ダメですっ！」

「認めません」

「却下です」

順に、母、ルウイン、父である。全員、見事に反対の言葉を返した。そんな三人に、王子は面白そうに微笑む。

「母上も賛成してくださっているといつのに、ドーリス公爵家のみなさまは、頑固でいらっしゃいますね。認めてくださつてもよろしいでしょ。アリサ嬢は、私が絶対に守りますよ？」

「アリサを守るのは、僕たち家族の役目です。殿下は、立ち入らないでいただきたい」

一方、そのままられる立場のアリサはとことこ、田を覚まし、エルミナとしばし談笑していた。

田を覚ましたときに一人ではなかつたからか、アリサは泣くことなく落ち着いており、それがエルミナを安心させた。

泣かれたらどうしよう。エルミナはそんなことを考えていたからだ。

だが、アリサは泣き出すことなく、純粹にエルミナがいることを喜んだ。結果、眠れないとアリサとエルミナで、少し話をしているのである。

「アリサ、いい加減眠らなくちゃ。そつしないと、いつまでも熱が下がらないよ？」

「だつて、ずっと眠つてたから、眠たくないもん。といひで、かあさまたちは？」

「お母さんたちはね、お客様の応対をしてるよ。アリサは気にしなくて大丈夫。だから、ちゃんと休んで、早く元気になろうね」

「お客様つて、だあれ？」

「アリサは知らないでもいいんだよ。アリサが関わるのは、成人してからにしようか」

エルミナはそつ言つて、アリサを寝かせるために、手を田の上に置いて視界を奪う。

小さい頃のアリサならば、いくら眠たくないと言つていてもそつすればあつという間に眠りについた。だが、大きくなつてからはそう簡単には眠らなくなつた。

「ねえさま、暗いよお。手、離して？」

「アリサが眠るんならね。休まないと熱も下がらないでしようが」

お客様が帰るまではアレグラも呼べないし……。エルミナは呟く。アリサもその呟きはしっかりと耳に入っていた。

「どうして呼べないの？ お客様、偉い人？」
「まあね」

エルミナの言葉に、アリサは真剣に思案する。アリサの家は、公爵家。公爵家よりも偉いのは、王族のみだ。

そして、アレグラの家は侯爵家。侯爵家よりも偉いのは、アリサの家である公爵家と王族のみ。つまり、客は公爵家か王族とことになる。

まあ、いつか。

はつきり言つて熱が高く、あまり物を考えたくないアリサは、そこで考えを中断させた。このまま考えていれば、また熱が上がつて苦しみ、そして家族に余計な心配を掛けることになる。

アリサは火照った頭でそう考え、そして、そんな頭を冷ますためか、静かに目を瞑る。

それを見たエルミナは、妹の眠りを妨げるのも悪いと考え、黙り込み、音を立てないよう努力した。

そして数分後。部屋にはアリサの規則正しい寝息が響くことになつた。

ちなみに、この口は王子はアリサに会つことは、かなわなかつたそうだ。

アリサに会おうとするとい、父であるドーリス公爵や宰相補佐であるルウインのみならず、母の反対までも飛んできたからだ。

結果、王子はまた来てもいいかという約定を結び、この日は大人しく城へ戻つていった。

王子が帰つた後、家族が「王子殿下がアリサ日当てで家を訪れる」と、一度とありませんように」と希つたのは、余談である。

「お忙しい中、こんな時間にわざわざ時間をとつていただき、感謝いたします。陛下」
「いえいえ。私も執務室から逃れられる分、嬉しいですからお気になさりや」

王子がドーリス公爵家を訪れた一日後、父であるドーリス公爵は、ルウィンを通して、王に一人きりで話が出来る時間を作つてもうつていた。

結果、今、父と王は護衛の兵もなく、一人で部屋で話をしているところとなる。

「ところで、お話とは先日の王子の来訪のことについてですか？」
「ええ。我々は、アリサを王子殿下の婚約者と認めたわけではありません。ですから、殿下には行動を考えていただけるよう、陛下から伝えていただきたいのです」

先日王子が来訪した際、王子は（今の時点では）何の関係もない異性の寝ているところに押し入つとしたのである。それは、問題だ。

だが、彼らは仮にも自分たちの主のお子に、強く進言できるはずが無い。故に、強く命じることの出来る、父である王に直接頼みごとに来ているのだ。

ちなみに、一人きりにしてもらつたのは、アリサが王子の婚約者だと言うことを、他人に聞かれたくなかったからである。何せ、自分たちはまだ認めていないし、アリサ自身も知らないことなのだから。

「あつはつは。積極的ですね、私と王妃の愛し子は」「笑い事ではありません。アリサは、その前日から熱を出して寝込んでいたんです。そんな女性の寝室に向かおつなど、失礼でしょう」

父は王にそう告げるのだが、王は自身の笑い声が勝り、聞こえていない。王は腹を抱えて笑い続けていた。

そんな王に、父はそれのどこがそんなに笑えるのか、真剣に思案していたそうだ。

そうしてようやく王の笑いが収まつた頃、父は、笑いすぎで喉が渇いているであらう主のために、侍女を呼び、お茶の支度をさせる。そうして、お茶の支度が整つた侍女が部屋を出た後、父は再び静かに口を開いた。

「陛下。アリサは、ただの子供です。王子殿下の婚約者でも何でもない、ただの貴族の子供に過ぎません。アリサが不安になるようなことを、しないでいただきたい」

「不安になるようなことなど、していないでしよう」

「陛下がアリサを殿下の婚約者にしようと言つ、その行動がアリサを不安にさせるんです。アリサに負担をかけるんです。あなたは、アリサの寿命を削りたいのですか」

それは、悲痛な声だった。幼い頃から体の弱いアリサ。このまま成長すれば、命はそんなに永くは無いと宣告を受けていた、小さなアリサ。

幸いながら、アリサの体は昔と比べると、少しほは丈夫になつた。だが、人並みには遠く及ばない。アリサは、弱い。

そんなアリサの体調は、精神状態にかなり左右される。アリサの気分がいいときは体調がいいことが多いし、アリサが不安になつたりすると、体調も崩れる。

アリサが王子の婚約者になつたと知ると、アリサは絶対に不安が
る。自分は王子の婚約者としては生きていけないと。

それは、昔アリサが家出したときに、本人が言つた言葉。

『私は結婚しても、子を生せない。ならば、結婚自体出来ない。つまり、つながりを作れない。これを、出来損ない以外に、何ていうの?』

あの日の娘の自虐的な言葉を、父は一言一句違わず覚えていた。
あのときのアリサの悲しげな表情も覚えている。

泣きそだと言うのに、泣くのを堪えていた五歳の小さな娘。五
歳の子供に出来ない、悲しげな表情を浮かべていた娘。
熱が高くて辛からうに、それでもしつかりと理由を述べた、可愛
い愛娘。

彼は、あの日改めて決意したのだ。 絶対にアリサを守ると。
アリサをきちんと成長させて見せると。

だが、アリサを王子の婚約者にすれば、アリサは間違いなく子を
生せないことを悔やみ、精神状態を悪化させるだろう。そうすれば、
アリサの体は間違いなく崩れる。寿命を削ることになる。

そんなこと、許さない。それは、彼の家族も同じだ。彼らの共通
する思考の一つは、アリサを守ること。

彼らは、そのためならば何だつてした。それが、王に、王妃に楯
突く行為であつとも。

「陛下。アリサを王子殿下の婚約者にするといったその言葉、撤回
していただけませんか?」

少しでも、アリサを大事に思つてくださるのならば、撤回してく

ださい。

そういつ父の表情は悲しげで、王もそんな父の言葉に、少し居心地の悪そうな顔をする。

深く、頭を下げ、懇願した父。全てはアリサのために。アリサを守るために。そのためならば、父は名誉など必要なかつた。

「ド、ドーリス公爵殿。頭を上げてくださいませんか？ 私が公爵殿をいじめているみたいではありませんか」

「陛下が殿下とアリサの婚約を破棄していただけるのであれば、すぐには頭を上げます」

「し……しかし、アリサ嬢と王子の婚約は王妃も楽しみにしていまして……。私の一存では……」

「ならば、王妃様とお話し合ひの上、後日、また時間を取つてくださいこますか？」

父が言つと、王は「わ……分かりましたから、頭を上げてください……」と、焦りながら告げる。そんな王に、父は「ありがとうございます」と礼を一つ言つて、そしてようやく頭を上げた。

その後、父は帰途につく。

「どうれど、お帰りなさい」

そして、家について愛娘のそんな言葉を聞いた父は相好を崩し、アリサの頭をよしよしと何度も撫でた。

そして、改めてまた決意した。この子は、絶対に自分たちが守るヒ。守つてみせる、ヒ。

やるべきもの（一）

これは、決意。ドーリス公爵家の、父、母、兄、姉たちの決意だ。

『絶対にアリサを守る』

そのためならば、彼らは手段を選ばない。アリサを守ることが出来るのであれば、どんな手を使つてもかまわない。

同時に、アリサに害を成したものに対する制裁に対する手加減は、一切無い。

この日、アリサはアリサを王子の婚約者にすることに反対する貴族に誘拐されていた。

この始まりは、数ヶ月前。突然、公爵家に雇つて欲しいと言つメイド候補が来てからだつた。そのときは、何の違和感も感じていなかつた。

その候補のことを調べても埃は一切出ない。ならば、問題ないだろつと思つて雇つた人間だつた。

だが、そのメイドは今回の犯人の仲間だつた。

犯人は、どこからかドーリス公爵が末の姫君を王子の婚約者にしようと画策していると言つ嘘の情報を手に入れ、それを阻止するべく、アリサを誘拐したのだ。

「大事な大事なお嬢様を返して欲しいのならば、このお嬢様を王子殿下の婚約者にしようなど、考えず、陛下に辞退の言葉を述べに言っていただきましょうか」

これが、アリサの誘拐された後に届けられた、犯人からの声明。それを見た父はすぐに、その手紙を出した人間を探し出した。

こんなとき、公爵家というものは便利だった。父には、思い通りに動く手足があったため、すぐにそれにアリサを探させた。

そして、父はそれと同時に、犯人に下す制裁の内容を考えていた。

「あなた、だあれ？」

一方その頃、誘拐されたアリサは「公爵家の末の姫」という立場からか、拘束などはされず、見張りがいるだけの部屋のベッドに横たわらされていた。

アリサの体が弱く、ちょっとしたことですぐに体調を崩すのは、貴族のみならず庶民の中でも広まっている周知の事実。故に、誘拐犯は一応、体調を崩したときのために、とべッドに寝かせ、同時に医師も用意しているのであった。

アリサに何かあれば、交渉もへつたくれもない。その瞬間、自分たちが社会的に抹殺されるだけだと、彼らは分かっているからである。

但し、ここで問題が一つ。アリサは、今まで一人で知らない人と遭遇したことは全く無い。

つまり、アリサは人見知りである。そして今は、頼れる人間が誰もいない。結果としては、不安による発熱へと繋がるのであった。

「大丈夫だよ、おじさんたちは怖くないから」「や……、怖い……。どうさまは？ かあさま、にいさま、ねえさまは？」

「うわーん！ 助けて、どうさまあ つ！！ アリサはそう

言つて大泣きし始めた。その様子に、犯人が焦つたことは、言つまでもない。

助けてにいわま、ねえさま つ！！ アリサの泣き声はまだまだ続く。

「あー、ほら、泣かないで。おじさんたち怖くないからね。泣き止んでくれたら、お嬢さんのお父さんを呼んであげるから」

誘拐犯はアリサを泣き止ませるために、必死でいろいろと話すのだが、アリサは聞いていない。ただただ、泣き叫び続けていた。

だが、それが救いとなつた。外にまで響くアリサの泣き声。それを、父の手足が聞き届けたのだ。

手足は、急いで主にそのことを伝えるべく、馬を無理させてでも急いで屋敷へ戻り、犯人の名、いる屋敷の場所を伝える。その後は、家族の役目だ。

「ご、ご主人様！ ドーリス公爵家のみなさまがっ！」

「な、何っ！ 絶対に屋敷に入れるな！ 入れるんじやないぞっ！」

そう言つが早いか、それとも否か。突如、どおおおおんと言つ音が響く。

それは、セインとカインの騎士コンビが誘拐犯の屋敷の扉を破壊した音だった。

そして、屋敷に入った彼らは、アリサの泣き声を頼りに、あつという間に犯人の下へたどり着いた。

「さて、家の可愛い娘を返していただけますか？ 男爵殿」

そう告げる父の田は冷たく、逆立つとの場で切り捨てる、その田が語っていた。

そして男爵が父の田に射抜かれている間に、母やジャスリーン、エルミナは部屋の中に入る。そして、大泣きしているアリサを抱きしめた。

「うわーん！ かあさま、ねえさまああああー！」

アリサはよつやく会えた家族に、思い切り抱きついて泣きじやぐる。母や姉も、そんなアリサを優しく抱きしめた。『もう、大丈夫』と。

よほど怖かったのか、母や姉が抱きしめても、アリサは中々泣き止まない。それが、父や兄たちの怒りを増幅させた。

「さて、男爵殿。家の可愛い娘に、何をなさいました？」

「内容によつては、この場で切り捨てますので、言葉は、よく考えてから発してくださいね」

「僕と兄の二人でしたら、あなたの『家族すべてを切り捨てる』ことも容易であるということも考えた上で、発言してください」

「それと、この件に関しては、我々が処断を許されておりますので、『安心を』

父やセイン、カイン、ルウインが完全に男爵にとどめを刺していく。

そして、男爵は観念したのか、静かに口を開いた。

「特に、何もしていませんよ。ここに連れてきてからは、ずっとベッドの上ですし、着替えたりもさせていません。突然泣かれたんです」

男爵がそう言つた瞬間、いつの間に剣を抜いたのか、セインがその剣を男爵の首元に宛がう。

男爵の首からは、少量の血が流れていった。

「それだけで、可愛いアリサが泣くはずがないでしょう。正直に言
いなさい」

【やるべやかの（～）（縦書き）】

分離したので夜もコロコロ。

そう告げるセインの瞳は冷たく、正直に答えなければその瞬間、男爵の首が飛ぶことは明らかであつた。

そうしてみると、よつやく泣き止んだアリサが、母や姉たちと手をつないだ状態で、男爵や父、兄たちの元に近づいてくる。だが、セインの剣を見た瞬間、再びアリサの目に涙が溜まる。

そんなアリサを見たセインは、急いで剣を仕舞つた。男爵に「変なことをしたら、何が何でも切り捨てますので」と静かに告げた上で。

そして、兄たちはにっこりと微笑み、アリサを不安にさせないよう気にかけながら、優しくアリサに話しかけた。

「アリサ。あのおじさんに何をされたか、言える？ 言えるのなら、教えてくれるかな」

「えとね、気がついたらベッドに寝かされててね、近くにあの人がいたの」

「うん、それで？」

「あの人、私知らないでしょ？ だからね、怖くなつたの」

あたりを見回しても、とうたまも、かあさまも、にいさまも、ねえさまもないし。だからね、怖かったの。アリサは告げる。

アリサは基本的に、ずっと誰かがそばにいた。熱が無いときは母と一緒にいることが多かつたし、熱を出せば、母のみならず、父や兄、姉もそばについていた。

だが、今回は誘拐されたため、そばに見知った人間はいない。い

るのは、知らないおじさんだけ。それが、アリサの恐怖を増幅させたらしい。

その結果が、あの大号泣だったわけである。

それを聞いた兄たちは、優しく妹の頭を撫でる。「不安にさせた悪かったね」と謝りながら、頭を撫でた。

それに安心したのか、唐突にアリサの瞳は、落ちた。父たちが焦りに焦つたことも、最早言うまでもない。

「父さん。アリサ、一度連れて帰るよ。アリサを寝かせたらまた戻つてくるから、それまではよろしく」

「ああ、頼んだぞ、カイン」

そうして寝入ったアリサをカインが背負い、母や姉たちと共に男爵の屋敷を出て、止めてあつた馬車に乗り込む。

そして、公爵家の屋敷に着くと同時に、母はアレグラに連絡をいれ、カインとエルミナはアリサを部屋に寝かせに向かう。

メイドたちはアリサの着替えを用意し、カインを部屋から追い出して、体を拭いて着替えさせた。

その間、アリサはずつと眠りについたままである。よほど、泣き疲れたらしい。

カインとエルミナ、そしてメイドたちは、そうして眠り続けるアリサの寝顔をしばし眺めていた。母がアレグラを連れてやつてくるまでの間。

「失礼します」

アレグラがそう言つて入つてくると、カインは自分が邪魔であることを理解し、そのまま部屋を出て、扉の前で、扉に背を向ける。それを確認したアレグラは、診察の用意をし、診察を始めた。

「怪我をしている様子など、いざいましたか？」

「いいえ。先ほどお体をお清めしたときは、怪我をしている様子も、癪なども見当たりませんでした」

「そうですか。でしたら、問題はこの熱ですね」

アレグラはそう言つと、鞄から注射器を取り出した。アリサが眠つてゐる今なら、反対は飛んでこない。

それを幸いとし、アレグラはアリサの腕を取り、注射を入れた。これならば、少し休めば熱も下がるだろう、と。

その後はいつものように母たちに薬を渡し、帰つていく。そして、カインが部屋に戻つてくることになつたのであつた。

「もう、大丈夫かな？」

「ええ。だから、カイン。あの男爵の屋敷に戻りなさい。絶対に許さないから」

「任しといて。大体、許す人間がどこにいるのぞ。許すはず、無いじゃないか」

カインはそう言つて、再び剣を持ち、男爵の屋敷へ戻るべく、馬の支度をして戻つていつた。

その後、母とヘルミナは一緒にアリサの寝顔を見つめていた。若干荒い呼吸。それでも、今ここにいると証明してくれる確かな証。母たちは優しい瞳でアリサを見守り続けた。これからは、絶対に手を離さないように。こんな恐怖を、一度と味わわせないためにも。

一方その頃の男爵家の屋敷では。

「さて、どうする？ 父さん。ここで切り捨てる？」

「まあ、それでもがまいはしないな。処断の権利は僕たちにあるのだから」「ひとまず、ほかにこんな愚考に走りそつた馬鹿の名を聞くのが先だな。もう少し待て、セイン」

父と息子たちによる恐ろしい会話が展開されていた。

この四人に裁かれれば、間違いなく男爵の命は無いだろう。今の怒り具合からして、この場で切り捨てられるか、ほかの場所で切り捨てられるか、だ。

男爵に出来ることは、聞かれたことに正直に答えて、家族に対する罰を何とかしてもう一つことだけだ。

結果としては、父や兄たちの深い温情の元、処断の権利は王や王妃に委ねられた。

が、どのみち死は免れないだろう。なにせ、アリサは王のみならず、王妃、王子のお気に入りなのだから。

その後、貴族の中では絶対にドーリス公爵家に喧嘩を売つてはならない。喧嘩を売るのならば、自身の命を失つ覚悟で売るべきだ。そういう言葉が広がったそのである。

國中で危険一家認識されているドーリス公爵家であった。

守られる立場

犯人の行動は素早かつた。気がついたら、誰かが私の後ろにいて、私に何かをした。その瞬間、私の意識はとんだ。

その後、気がついたら知らない場所にいて、知らない人がいた。怖かった。とっても怖かった。

だから、思い切り泣いた。恐怖で、思い切り泣いた。

「大丈夫だよ、おじさんたちは怖くないから」

そんなの、嘘だ。とうさまも、かあさまも、にいさまも、ねえさまもいなくて、こんな知らないおじさんだけの場所なんて、怖い以外に何も無い。

怖いよ。助けて、とうさま、かあさま、にいさま、ねえさま。だから、泣き叫んだ。父や母、兄と姉を呼び続けた。

私がそつやつて泣いていると、その変なおじさんはまたも怖くないからと告げるが、怖いものは怖い。

そつやつてしばらく泣いていると、突然大きな音が響き渡った。何の音だろう。泣きながらそう考へていると、聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「さて、家の可愛い娘を返していただけますか？ 男爵殿」

とうさまだ。とうさまが助けに来てくれた。そう思つていて、扉と知らないおじさんの隙間から、またも見知った顔が現れる。

「うわーん！ かあさま、ねえさまー！」

私がその姿を視認すると同時に、涙が激しく溢れ出てきた。安心からの涙だろうか。

でも、それもどうでもいい。私は駆け寄つてくるかあさまやねえさまたちに、ベッドから降りて思い切り飛びついて、泣きじゃくりた。

「よしよし。怖かつたね、アリサ。もう大丈夫だからね」

「遅くなつてごめんね、アリサ。怖かつたよね」

「かあさま、ねえさまああああ」

かあさまやねえさまたちは、私を優しく抱きしめ、優しい言葉をかけてくれる。それが、さらに涙を誘つた。

私は、かあさまたちに抱かれたままで、思い切り泣いた。それが、兄たちの怒りを增幅させていることになど、まったく気づかずには。

「さて、男爵殿。家の可愛い娘に、 何をなさいました？」

「内容によつては、この場で切り捨てますので、言葉は、よく考えてから発してくださいね」

「僕と兄の二人でしたら、あなたのご家族すべてを切り捨てることも容易であるということも考えた上で、発言してください」

「それと、この件に關しては、我々が処断を許されておりますので、ご安心を」

……処断つて、何だっけ。私は泣きながらもそんなことを考える。でも、今はどうでもいい。

今は、とにかく母や姉たちに甘えていたい。離れていた分、知らない人と一人つきりでいた時間の分、母たちと一緒にいたいんだ。そうして、あの恐怖を振り払いしたいんだ。

それからしぶしぶ泣いて、よつやく涙は引っ込んだ。本当に、思い切り泣いた。

その後は、母や姉たちと共に、そのおじさん 男爵 の元へ向かう。その際、私はかあさまの手をぎゅっと握った。もう、離れたくないから。

そうすると、ねえさまたちも開いている反対の手をしっかりと握ってくれる。これなら、もう離れなくていいよね。私は安心して男爵の元へ向かつた。

そうして男爵の元につくと、セイにいさまが男爵の首に剣を当っていた。男爵の首からは血が流れている。怖い。

そんな私の様子に気づいてくれたのか、セイにいさまは急いで剣を仕舞つてくれた。

その後は、にいさまたちが揃つて、優しく微笑みながら私に質問を投げかけてくる。

「アリサ。あのおじさんに何をされたか、言える？ 言えるのなら、教えてくれるかな」

「えとね、気がついたらベッドに寝かされててね、近くにあの人があいたの」

「うん、それで？」

「あの人、私知らないでしよう？ だからね、怖くなつたの。あたりを見回しても、どうせまたち、誰もいないからね、怖かつたの」

私のそばには、いつだつてかあさまやにいさま、ねえさまがいてくれた。どうせまも、家にいるときは仕事中以外は何度も私の部屋に来てくれた。

だから、いないことに違和感があつた。そして今回は、誰もいなかつた。それが、怖かつた。自分を守ってくれる絶対的な存在がな

いというのが、とても怖かつたんだ。

「そつか、そうだよね。不安だつたろ？ アリサ。助けに来るのが遅くなつて、悪かつた」

にいさまたちは、そう言つて私の頭を撫でる。それが、とても心地よい。

ああ、なんだか眠たいよ。眠つてもいいだろ？ もう、大丈夫だよね。私は一人じゃない。

右手の感覚を確かめる。右には、かあさまがいる。
左手の感覚を確かめる。左には、ねえさまたちがいる。

だから、もう大丈夫だよね。そう思いながら、私は眠りの世界へ旅立つた。

それから目を覚ますと、そこは見慣れた自分の部屋で、そばにはかあさまやねえさまたち、そして、シャーナがいた。

「目が覚めた？ 調子はどう？」

ぼうつとする頭。働かない思考。その中で、何とか私は思い出していた。 誘拐されていたと言つ事實を。

このぼうつとする頭は、あの男爵家で思い切り泣き叫んだが故の発熱のせいだろ？ 何も、考えたくない。だるい。

「アリサ、大丈夫？ 話すのも億劫？ そうなら、首縊に振つて」

「クン。私は首を縦に振る。もう、話すのも何か考えるのも、全部が億劫だから。

そう思いながらかあさまたちのほうを見てみると、かあさまがシャーナに向か指示を出していく。何だろ。

そう思っていると、しばらくしてシャーナは、お盆を持って戻つてくる。お盆の上には、懶らべ麦を煮込んだお粥。……ご飯か。

「アリサ、口を開けて。少しだけでも食べて、お薬飲もうね」

「お薬飲んだら少しは楽になるから。ね？」

ねえさまたちはそういつて、お粥を乗せたスプーンを横になつたままの私の口元へ運ぶ。

樂になるのならば。そう思いながら、私はだるい体に命令を下し、口を開いた。そして、少し嘔ただけで嚥下する。

うー、食べるのもだるい。

「アリサ、もう一口へらへ食べよ。」

だから、私はねえさまのその言葉に首を横に振る。もう十分。すると、今度はねえさまの手から飲みなれた薬が現れる。飲

めば確かに樂になるだろ。だが、苦い。でも、飲まなくちゃ。ミアねえさまは横になつている私の体の下に手を入れ、何とか起き上がらせる。リンねえさまは、その間に水に薬を溶かしていた。

……飲まなくちゃなあ。

そして、薬がしつかり水に溶けたことを確認したねえさまは、ツブの口を私の口に運ぶ。

覚悟を決めて、薬の溶けた水を口に呑んだ。苦い。苦い。

苦い。

でも、しつかりと飲まなくちゃ。これ以上、ねえさまたちに余計な心配をかけないためにも。

でも、やっぱり苦い。

薬を頑張って飲み干した後は、ねえさまが用意してくれていた甘い飲み物を口に含む。その甘いものおかげで、口に残った苦味が飛んでいく。

そしてそれが、眠気を誘つた。眠つても、大丈夫だよね。

だって、ここは私の家。そして、ねえさまたちがそばに付いてくれている。なら、大丈夫だ。

「お休み、アリサ」

私はねえさまたちのその声を子守唄に、眠りに落ちていった。

Hの決断

アリサの誘拐事件が起つて数日後、ドーリス公爵家は、焦つて

いた。何故か。それは来客者にあつた。

この日、王が宰相や護衛の騎士以外には内緒で、ドーリス公爵家を訪れていたのだ。

「陛下。御用がございましたら、私が城へ上がります。ですので、無茶をなさらないでください」

「いいえ。此度の事件、原因は私にあります。私が悪いのですから、直接謝罪に訪れさせていただいたのです」

今回、王がドーリス公爵家を訪れた理由は、先日のアリサ誘拐事件にあつた。

自分がアリサを王子の婚約者としようとしていたことを間違つて知られたが故に、起つた事件。その原因は自分にあると、王は思つてゐるのである。

故に、宰相や護衛の騎士たちに無理を言つて、直接ドーリス公爵家を訪れた。

公爵家の全員が、依然としてアリサの誘拐事件のことで奔走しているがために、誰も仕事には行つていなかつた。

故に、家族の誰かに言付けることも出来ず、直接訪れることがなつたのであつた。

「本当に、申し訳ございませんでした」

王は、そう言って頭を下げる。その様子に、ドーリス公爵家全員

が焦つたことは言つまでもない。

家族は、急いで王の頭を上げさせる。だが、王は中々頭を上げないため、家族はさらに焦つた。

そして、しばらく頭を下げていた王がようやく頭を上げたかと思つて、そのまま口を開く。

「アリサ嬢は、事件の日からずっと臥せつて居ました。これではお詫びにはならないと思ひますが、栄養満点の食材を手に入れてしまひましたので、アリサ嬢にどうぞ」

本当は直接謝りたいのですが、熱が下がつていないと言つのならば、誰かと会うのも苦痛でしょつから、無理でしょつ。王が言つと、父や母は少し考へる。主の頼みなのだから聞くべきか、アリサの将来を考え、会うのを諦めてもらつべきか。そして、答えが出たのか、父が静かに口を開いた。

「お詫びの品に関しては、アリサの父として深く、御礼申し上げます。ですが、臥せつしているアリサに会つことは、申し訳ございませんが、ご遠慮ください」

「謝らないでください、ドーリス公爵殿。それが普通ですか？」

その後、王は一拍置いて、今回のにお詫びの本題を切り出した。

「此度は私の失態のせいで、アリサ嬢に辛い思いをさせてしましました。王妃とも話し合つた結果、アリサ嬢と王子の婚約を、一時的に凍結せます」

王のその言葉に、ドーリス公爵家の面々は、嬉しそうな表情を見せる。だが、先ほどの王の言葉を考えて、引っかかる言葉があつた。

「一時的に？」

「凍結？」

「どうこいつ」とです？」

その疑問は、セインやルウェイン、父が王に尋ねる。すると、王は苦笑しながらも、こう答えた。

「やはり、私も王妃も、アリサ嬢を諦めきれないんです。ですが、今ままだと間違いなくアリサ嬢は危険に晒される。だから、危険分子を取り除いた後で、また、アリサ嬢を王子の婚約者として発表させてください」

その言葉に、父や母、兄、姉たちは完全に停止した。せっかく、王や王妃がアリサを諦めたかと思つたら、実は諦めておらず、いつの日かまたアリサを王子の婚約者として発表するなんて……。

彼らの先ほどの喜びは、塵と化し風に乗つてどこかへと飛んでいくのであつた。

そして、しばし放心状態に陥るのであつた。

シャーナが、非礼を詫びながらも、アリサが泣いて目を覚ましたことを知らせに来るまで。

「非礼はお詫びいたします。ですが、お嬢様が大泣きで、奥様を呼んでいらっしゃるので……」

それを聞いて正気に戻つた母は、同様に王に非礼を詫びた上で、シャーナと共にアリサの部屋へ向かう。泣いている我が子を泣き止ませるために。我が子に安心を^下えるために。

「さて、では私もそろそろ失礼します。アリサ嬢が早く元気になることを祈っていますよ」

「ありがたいお言葉です」

そして、王を見送った家族は、急いでアリサの眠る部屋へと向かう。心なしか、全員が駆け足だ。

『アリサッ！』

そうして父や兄、姉がアリサの部屋の扉を開くと、そこには母に抱きしめられているアリサがいた。もう既に泣き止んではいるらしい。父たちは、そのことにひとまず安堵する。

「アリサ、怖い夢を見ていたの？」

「大丈夫だよ。それは、夢であつて現実ではないんだから」

「うん、ありがとう、ねえさまたち」

アリサは顔だけは優しく言葉を紡いだ姉たちのほうを見るのだが、それでも母からは離れない。母は、アリサが移動したいのならば移動できるよう、手を離しているのだが、アリサ自身が母の元を望んだのだ。

兄たちは、そんなアリサに近寄り、頭を撫でる。そして、口を開いた。

「それにね、アリサ。仮にその夢が現実になつても、僕たちがアリサを守るから」

「アリサに害を成すものは、僕たちが許さない。絶対に守るよ」

アリサは、そんな兄たちの言葉に、笑顔で頷いた。嬉しそうに微

笑む。

その後、母がアリサに眠るよつ促し、ベッドに横にさせると、少しの時間ですぐに健やかな寝息が聞こえてくる。

母たちはそんなアリサを優しく見守り、そして、シャーナたちにせつかく王からもらった栄養満点の食材をアリサの食事に使うよつ、指示を出す。

そうして栄養満点の食材を使った食事を食べ、薬を飲んで眠ると言う生活を数日間続けたアリサは、すっかり元気になり、いつもの調子に戻った。

だが、事件のトラウマが消えたと言つわけでは、無かつた。アリサは目を覚ますとすぐこ、ここがどこであるのか、そばに誰がいるのかを確認するよつになった。

そして、その場所が自分の部屋や見慣れた場所ではないと、恐怖に体を震わせ、泣き叫ぶよつになつた。

可哀想なアリサ。絶対に、君は守る。守つてみせる。
君に害を齎すモノを、絶対に許してたまるか。

怖い。怖い。怖い。

誘拐されたあの日のことを思い出して、怖い。思い出したくもないのに、何故か頭の中にはそのときのことを思い浮かべる。

突然、私に何かをして眠らせ、攫つたメイド。その顔は、よく覚えている。優しそうな顔をしたメイドだった。

それなのに、彼女は私の誘拐に加担した。私を眠らせ、私を屋敷から出した。

人は、どうやって信じればいいの？ 信じて裏切られたらどうするの？

裏切られたら、何を信じて生きていけばいいの？

怖い。怖い。怖い。

シャーナ以外のメイドみんなが怖い。執事たちも、みんな怖い。

誰が、裏切るの？ 誰も裏切らないの？ 信じられない。

私は一人では何も出来ない。自分の身を守ることすら、出来やしない。だから、余計怖い。

今回は、とうさまたちが早く助けに来てくれたから、生き延びることが出来た。

だけど、次があったとき、とうさまたちが早く助けに来てくれるとは限らない。

そのとき、私は生き延びることが出来るのだろうか。

頼つてばかりでは生きていけない。私自身が、生きる術を覚えては、生きていけない。

私の身は、自分で守らなくてはならない。頼つてばかりで生きていくては、いけない。

自立しなくては。いつまでも両親や兄弟たちに頼つて生きていってはいけない。

私は、生きる。生き延びてみせる。

パシン。

その瞬間、私の中で何かが音をたてて弾けた。
それと同時に、体の中から何かよく分からぬものが出てこいつとする。これは、何だ。

「アリサ！」

そう思つてみると、ドタバタと廊下を走る音が聞こえて、扉が乱暴に開かれる。開いたのはかあさまだ。
扉を開いたかあさまは、私の姿を見て焦る。でも、どうして焦つてるの？ 分からないよ。

「アリサ、今、魔力を発しているのが分かる？ 分かるのならば、放出を止めなさい。これ以上は、危ない」

「まりょく…………？」

「そう、魔力。分かつたら、抑えなさい」

抑えるって言つても、どうやって抑えるの？ 分からない。何もかも、分からぬ。

「前、本で読んで教えてあげたでしょう？ 人には生きるために魔

力が必要だつて。そのときに、話したはずよ？」

そういうえば、聞いた。小さい頃に強請つて読んでもらつた本にそう書いてあつたつけ。

人間は生きるために魔力が必要で、魔力が無くなつたら体が持たなくなつて、死ぬんだつて。

今私は、魔力をどんどんと外に出している状態。このまま出し続ければ、いずれ枯渇する。

そこで待つているのは、『死』だ。

死？ 私は死ぬの？ さつき、生きると決めたのに。
魔力の放出は、どうやつたら収まるんだ？ 念じればいいのかな。
とにかく、放出が止めばいい。

「アリサ。その調子よ、アリサ。その調子で魔力の放出を止めようね」

そつか、これでいいのか。そう思いながら念じ続けると、体から何か、いや、魔力が出て行くような感覚は消える。
それと同時に、私はベッドへ倒れこんだ。

「アリサ！ 大丈夫？ 今、アレグラを呼ぶからね」
「かあさま……、へいき。ちょっと……疲れただけだから」「ダメ。初めて魔力を使ったときは、みんな無理をするものだから診てもらわなくちゃ」

かあさまはそう言つてアレグラを呼ぶ。

それから然程時間を空けずに、アレグラが急いで部屋へやつてきた。……そこまで急がなくてもいいのに。

「遅くなりました！ お嬢様の様子は……？」

「魔力を抑え込んだら、倒れたの。魔力切れを起こしているかもしれないから、しっかり診てくれる？」

「分かりました。お嬢様、力を抜いて、警戒しないでくださいね」

アレグラはそう言つて、私の服を捲り、心臓の辺りに手をかざす。
……何だろ？

「大丈夫です、魔力切れは起こしていません。ですが、魔力を相当出したみたいですね。 お嬢様、起き上がる」とは出来ますか？」「ん」

言われて体を起こす。 起こせない。何でだ。

うりやつ！ えいやつ！ 必死で体を起こそうと足搔くのだが、起こせない。

というか、あまり体を動かすことが出来ない。

「もう結構ですよ。疲れたでしょ？ 今は魔力が命を保てるぎりぎりくらいしかありませんから、体が命を守るために、動かさないようにしているんですよ」

ですから、魔力が回復するまでは絶対安静ですね。体が動かせるようになつたから大丈夫、と思っていたら痛い目見ますからね。アレグラは私の目をじつと見て告げる。……怖いな、おい。

「これからは、少しづつ魔力のコントロールを覚えてくださいね。そうすれば動けなくなるほどまではならないでしょ？」「はーい。 かあさま、いいよね？」

アレグラの言葉に、一応かあさまに許可を得る。許可を得ずにはや

れば、絶対に後が怖い。

「魔力のコントロールは必要だからね。かあさまが教えてあげる」

「ホント！？」

「ええ。かあさまならアリサの調子も分かるし、アリサは知らない人に教えてもらつの、怖いでしょう？」

ぎくり。図星だ。

だつて、知らない人は怖い。あのときのメイドや男爵のよう、元の私を使ってどうさまやにいたたちを陥れようとするかもしない。そんなのは、もう嫌だ。あんな怖い目に一度と遭いたくない。私がそう考へていることが分かつたのか、かあさまは私の頭をくしゃりと撫でた。そして、優しく微笑みながら告げる。

「アリサはかあさまたちが守るからね。もつあんな怖い目に遭つことはないよ」

「うん……、うん」

かあさまの笑顔は、優しい。その優しい笑顔は、私に落ち着きを、安心をくれる。

大丈夫。大丈夫。私は、大丈夫だ。

どうせまたちが守ってくれる。だから、次は無い。次があつても、魔力のコントロールを覚えて、自力で何とか出来るようになつてやる。

私は、生きるんだ。

ちなみに、これは余談なのだが、メイドたちの噂を小耳に挟んで

知つたこと。

私を攫つた男爵は、王命により死刑となり、男爵の家族、係累のものは爵位取り上げの上、王都追放になつたそつだ。

本氣で怒つたとつさまたちの恐ろしさを知つた瞬間だつた。

やつと、タグに偽りなしになりました。
魔法が、魔術がやつと出せました。

祝・覚醒

この日のドーリス公爵家は、めでたいムードに包まれていた。理由は、アリサの魔力の覚醒にある。

この国では、魔力の覚醒は大人に一歩近づいた印とされ、順調に成長している証となつてているのだ。

普通の子供は、七・八歳ごろに魔力を覚醒させ、そこからコントロールを覚えていく。

事実、ルウインやカイン、エルミナは七歳のときに、ジャスリンとセインは、八歳のときに魔力を覚醒させた。

だが、アリサは普通の年齢を過ぎた九歳になつても覚醒しなかつた。医者に相談した結果は、病弱ゆえの、体の小ささから遅れるのだろう、とのことだった。

そして、十歳にしてようやく魔力を覚醒させた。

魔力の覚醒は、成長の証。父たちは、末の娘の成長を心から喜んでいた。

その当の本人は、現在魔力の消費のし過ぎで完全に自室のベッドでダウンしているが。

「魔力覚醒のお祝いは、アリサの魔力が回復してからだな」

「だね。さて、アリサには何をあげよつかな」

「いっそ、みんなでお金出し合つて、いいものを買つ?」

「それもありだね。でも、何を買ってあげるのさ?」

「アリサの属性が分かれれば、それにあつものを買うんだけど

「私は自分で作った魔力回復剤あげよ」

エルミナの言葉に、兄弟たちは過敏に反応した。

「エルミナ、それは別にやつたらどうだ？ 今回は、全員でいいものをお送りつ」

「んー、まあ、それでもいいか。アリサ、何が喜ぶかな」

兄弟たちはそうやって楽しそうに話しあつ。父は、そんな子供たちを微笑ましげに眺めていた。

そして、父自身もアリサに送るプレゼントを何にするか、真剣に思案していた。

ルウインが魔力を覚醒させたときは、父は魔術本をルウインにプレゼントした。

ジャスリーンが覚醒させたときも、ルウイン同様魔術本をプレゼントした。

セインとカインは、小さい頃から騎士を目指すと言っていたため、父は一人に剣をプレゼントした。

エルミナには、魔力の媒体となるピアスをプレゼントした。

さて、アリサには何をあげよつか。

そして数日後、魔力が回復し、いつものように過ごせるようになったアリサは、再びアレグラのお世話になっていた。

とは言えど、熱を出したわけではなく、父や母たちの希望により、アレグラにアリサの適正属性を調べてもらおうとしたのだ。

「お嬢様の属性は、風と水のようですね。二属性とは、さすがです」「二属性？ それってすごいの？」

アリサの属性を知ったアレグラは、目を見張らせ告げる。だが、アリサはそのすこさに一切気がついていないらしい。

アリサは首を少し傾げ、アレグラに尋ねた。そんなアリサに、アレグラはゆっくりと説明を始めた。

「この国では、大体の人が一属性しか持たないものなのです。二属性持っているのは、今、分かっているだけで国に十人もいないでしょう」

「ふえーえ。そ、うなんだあ」

ちなみに、数少ない多属性の持ち主の一人は、今の国王であり、国王は何と三属性も持っている。そして、その息子である第一王子が一属性持ちなのだ。

故に、多属性を持つものは、国に申請すればそれ相応の名誉が与えられるようになっている。

アリサはそんなものには一切興味を抱いてはいないが。

ちなみに、この家ではエルミナが炎と水の一属性持ちである。そして、ルワインが光属性。ジャスリーンは雷属性。セインが土属性。カインが水属性となっている。

そして翌日の晩、アリサを囲んで、ドーリス公爵家では祝いの席が設けられることになった。

参加者はもちろん、父、母、兄、姉、メイドたち、執事たちであり、ほかの人間は一切いない。だって、アリサが怯えるから。それが、兄たちの言葉である。

「魔力覚醒おめでとう、アリサ」

「これでアリサも大人に近づいたわね」

「ほら、アリサ。風属性の媒体の翡翠石と、水属性の媒体の蒼玉石の入った腕輪。^{ブレスレット}僕たちみんなからだよ」

ルワインはそう言って、兄弟みんなでお金を出し合って、買ってきた魔力媒体となる腕輪^{ブレスレット}をアリサに手渡す。

それを受け取ったアリサは、翡翠石の腕輪を右腕に、蒼玉石の腕輪を左腕にはめた。そして、それをくれた兄たちをじっと見つめる。

「似合つ?」

「よく似合つてるよ」

兄たちのその褒め言葉に、アリサは更に笑みを深める。そんなアリサを見る兄たちの笑顔も、既にやばいところまで来ているが。そうしていると、次は父と母が、アリサにプレゼントを手渡した。それは、新品の魔術本だった。

「これで勉強しなさい、アリサ」

「でも、かあさまの見ていないところで、実践に移そうとはしないようにな。するなら、絶対にかあさまの前ですること。約束できる?」

「うん! ありがとう、とうさま、かあさま」

アリサはそう言って両親から受け取った本をぱらぱらと捲る。その目は、完全に釘付けだ。

始めて見る魔術本。家の図書室には、魔術本は置かれていなかつた。

正確には、アリサが本に興味を持ち始めた頃に、父が全てアリサの知らない場所に隠した。

理由は単純。子供と言つものは、いろいろなものに興味をもちやすい。特に、魔術などと言つものは、子供にとつては最大の興味の

対象だろつ。

だが、魔力はある程度大きくななくては覚醒しない。つまり、それまでは絶対に使えない。

それでも、本で学ぶことは可能だ。 それが、諸刃の剣となる。

なまじ知識として知つてゐるが故に、いざ魔力を発動させたときに、油断して大惨事を招きかねないのだ。

事実、昔、ある貴族の家でそんな事件も起こつていた。

だから、父は子供たちが小さい間はとにかく、魔術本には触れさせなかつた。

カインやエルミナが大きくなると、魔術本を図書室に置くようにもなつたが、アリサが生まれてからはまた隠した。

それが、子供を守るためにだから。父は、そうして子供たちを守つてきたのだ。

そして、魔術本に読みはまるアリサを、両親や兄弟たちは優しい瞳で見つめ続けるのであつた。

魔力コントロール

「アリサ。落ち着いて、魔力を感じて『こらん』

家で魔力の覚醒の祝いを終えた翌日、アリサは早速母を教師に、魔力のコントロールを覚えようとしていた。

「魔力を放出させたらダメだからね。あくまで、感じるだけだよ」「…………むう」

アリサは母の指示に従い、実践してみようとするのだが、どうしても感じるだけではなく放出されてしまう。そのたびに放出を抑え、また魔力を感じるという作業に戻つていた。

それが、何度続けられるだろうか。

「疲れた……」

「相当魔力を放出しちゃつたからね。じゃあ、実践はここまでお終い。後は知識ね」

魔力の覚醒と言うものは、大人に近づいた証であり、そして、それは子供の体から大人の体へと、少しずつ変貌を遂げる印でもある。子供が大人になれば、できるようになることが増える。その一つが、魔力。

魔力を放つのは当然だが、魔力を受けるのにも耐性ができるようになっている。

故に、大人になると、治療用の魔術を受けることができるようにな

なる。

子供に治療用の魔術は、使つことはできない。大きすぎる力は害しか齎さない。

だから、今回の魔力の覚醒を一番喜んでいたのは、父や母なのだ。魔力が覚醒すれば、治療に魔術が使えるようになるため、治るのが早くなる。アリサの苦しみを減らすことが出来る。

ちなみに、アリサが魔力を覚醒させた日、アレグラがアリサの魔力値を調べた方法も、魔術によるものである。

そして、魔力は生きるのに必要なものである。覚醒していない子供でも、一応魔力自体は持つている。だが、それは生きるためだけのものであり、その容量は小さい。

だが覚醒すると、生きるのに必要な魔力以外にも余裕が出来る。その力を使って、人はいろいろなことをしているのである。

「かあさま、魔術見せて」

「んー、じゃあ、こんなのはどう?」

たとえば、このように。

母は魔力を使って、指先に小さな火を灯す。そして、少し暗くなり始めたアリサの部屋の燭台に火を灯す。

そんな母の魔術に、アリサは完全に興味津々だ。

「かあさま!」
「私もそりやつて使えるようになる?」

「アリサの属性は風と水だけど、こんな小さな火くらいなら、熾せるかもね。頑張ろうか」

「うん! 頑張る!」

でも、今日はもう魔力は使わないからね？ 優しく告げる母に、アリサは不満げだ。大丈夫なのに。そう呟いていた。

そんなアリサに、母は頭を撫でてやりながら優しく微笑み、告げる。

「いきなり無茶はいけないわ。ゆっくり、きちんと覚えて行こうね
「ん 分かった」

アリサの答えを聞いた母は、ホッとした表情を見せる。何せ、アリサは少し無茶をするとすぐに熱を出す。それに、今回は魔力が関わっているため、無理をして使いすぎれば、それは生命すらも脅かす。

だからこそ、素直に聞き入れた娘に、母はいい子いい子と、声をかけながら頭を撫でてやつた。

アリサは、嬉しそうに、気持ちよさそうに微笑む。

「さ、疲れただらうから、しばらく休んでなさい」

「そんなに疲れてないよ？ 大丈夫」

「いいから休んでなさい。ほーら、いい子いい子」

母はそう言ってアリサを小さな子供扱いし、寝かしつけようとする。アリサはその子供扱いは嫌なようだが、ここで無理をして体調を崩したくはないらしい。

アリサが母の言葉に従い、ベッドに横になり毛布を肩までかけると、母はそんなアリサを優しく見守る。

そして、アリサは母の見守る安心できる空間で、気持ちよく夢の世界へと落ちていった。

それからアリサは毎日魔力のコントロールに励んだ。とにかく励

んだ。

その甲斐もあつてか、数日後にはアリサは指先に小さな炎を灯すことができるようになっていた。

本人の持つ属性以外でも、きちんと魔術を使うことが出来る。これ便利だ。これが、炎を灯すことに成功したアリサの感想だった。

「アリサは覚えるのが早いわねー。じゃあ、次はアリサの属性の水の魔術を使ってみましょーか」

アリサの魔術の覚え方の早さに喜ぶ母は、そう言って指先から水を出し、その水を「ツップ」に半分ほどためる。

そして、その水に少し命令をしたかと思つと、その水はあつとう間に蒸発してしまつた。

「まあ、これは炎属性との組み合わせだけだね。アリサは、まずは水を出して『じらん』

「うんー」

アリサはそう言って、水を出すために集中する。 のだが、いつまで経つても水は出てこない。

「かあさまー、水、出ないよお

「水をきちんと感じなさい。水は、この辺一体にあるんだから「むー」

アリサは、魔術を行使する。だが、水は一向に現れない。そして、またも魔術を行使する。何度も何度もそれを繰り返した。

「んー、よし、もう一回」

「今日はもうダメ。予想以上に魔力を使つちやつたでしょう

「う…………。もう一回。もう一回だけ！」
「だ一め。今日はお終い」

ほら、たくさん魔力を使ったから疲れたでしょう。夕飯まで休みなさい。

魔力を使うための集中を止め、その疲労により床に座り込んだ娘に、母は優しく告げる。そして、手を貸し立ち上がらせ、そのままベッドへと向かった。

そして、ベッドに横になったアリサは、毛布をかける余裕すら残つていなかつたのか、あつといつ間に眠りに付く。そんな娘を微笑ましげな瞳で眺めながら、母はきれいに毛布をかけてやるのであつた。

夕飯時。眠っていたアリサが起き上がり、母たちのいる部屋へとやつて来る。

「どうせま、かあさま、お腹すいた。」はん、まあだ？

「もう少しだよ。アリサ、こつこにおいで。一緒に待つてこよう

父は眠たそうに、されど空腹に耐え切れずやつて来たアリサを微笑ましげに眺めながら、自分のほうへと呼び寄せる。

呼ばれたアリサも微笑みながら父のそばへと駆けて行つた。父は、駆け寄ってきた娘をしっかりとその腕で受け入れる。

「今日も頑張つたみたいだね、アリサ。疲れただろ？？」

「うん。でもね、どんなに頑張つても、水出てきてくれないんだよね

ね

私の属性、水なのにな。呟くアリサに、父は頭を撫でてやりながら、優しく告げる。

「そう簡単に出来るものではないさ。何事も基本がなつていないと、何もできない。基本が固まれば簡単に水を出すよくなれるや。今は、頑張つて基本を覚えるんだ」

「ちつちつやい炎は結構簡単に出たのこ……」

そう告げるアリサの表情は不満たらたらだ。

だが、その直後のメイドの言葉で、その不満そうな表情はじくやらか飛んで行つた。

「旦那様方、夕飯の支度が整いましたよ」

その瞬間にアリサの瞳は輝く。アリサの表情は歓喜のそれに変わる。

そして、アリサは父や母たちと共に食事を取りるために移動をするのであつた。

そして翌日。中々起きて来ない主の末の子供を心配したシャーナが、アリサの部屋へ様子を見に向かう。アリサは、眠っていた。すやすやと、気持ちよさそうに眠っている。シャーナ個人としては、そのまま寝かせておいてあげたいところなのだが、シャーナは職務を遂行するために、アリサを起こす。

「お嬢様、朝ですよ。起きて下さー」

シャーナは力を込めてアリサの体を揺らしているのだが、アリサが起きる気配は無い。

まさかと思ったシャーナは、アリサの額に手を当てる。ア

リサの額は、熱かった。

それを知ったシャーナは、急いで主夫婦の下へ報告に駆ける。アリサの発熱を知らせに、急いだ。

田を開くと、いつものように見慣れた天井が目に映つているはずなのに、どうしてだか、えらく歪んで見える。グラグラと、田の前が揺れる。

ああ、また熱が出たのか。ここまで視界が歪むのならば、結構高いのだわつ。

体を起こそうとする。だが、起こした瞬間に田の前がぐらりと揺れ、私の体はベッドに戻される。

そのまましばらく天井を眺めていると、ドタバタと足音が響いてきた。 かあさまたちに知られてたか。

「アリサ！ 大丈夫？」 「めんね、昨日無理をさせすぎたのね」「かあさま……、へこきだよ。ちょっと、クラクラするだけだから」

「無茶をしないの。辛いでしょう？ 辛いときは、正直に辛いと言いまさい」

かあさまは少し厳しい表情でそう告げる。 「うーん、確かに辛いけど、小さいときと比べると結構楽だから、そんなに激しく無茶はしてないと思うんだけどな。

小さい頃は、こんなことを考える余裕なんて全くなかったのだから。あの頃は、熱を出すとともにかく何も考えずに、深く、深く眠つていたかった。

でも、今は考える余裕がある。だから、大丈夫だよ。

だから、かあさま。そんな顔をしないで欲しい。私は大丈夫だよ。

「かあさま、本当に大丈夫だから。 大丈夫」

「…………アリサ。後でアレグラを呼ぶから、それまで眠つてなさい」

私が言つと、かあさまは溜め息をついて、そう告げる。えつと、何で溜め息？ 私、大丈夫だつて言つてるのに。

でも、眠つていろと言つ命令は、聞いておく。だつて、だるい。クラクラする。

今日を瞑れば、そのまま夢の世界へ直行しそうだ。

「奥様！ お嬢様がまた高熱を……！」

アリサの高熱に気がついたシャーナは、急いで母や父、兄弟たちにアリサの発熱を知らせる。

それを聞いた家族は、揃つてアリサの部屋へ、急いで足を向けた。

母たちがアリサの部屋の扉を開くと、アリサが目を覚ましていることに気がつく。

そして、そうして目を覚まし、されどベッドに横たわったままのアリサに母が声をかけると、アリサは大丈夫だと、平氣だと告げる。強がりを言つ。アリサの言葉を聞いた母たちは同時にそう考えた。

だから、母たちは主治医であるアレグラに連絡をつけることを考える。同時に、アリサを再び寝かしつける。

母に命じられたアリサは、辛いのか、あつといつ間に眠りに付いた。

「本当に、無理をさせすぎたわね。ごめんね、アリサ

母は、眠っているアリサの頭を撫でながら、優しく告げる。そんな母の様子を、家族は心配そうに眺めていた。アリサは大丈夫だろうか、と。

だが、やがてずっと眺めておく時間は無い。父や兄姉たちは、急いで食事に向かい、仕事に遅れないよう هنا 家を出るのであつた。

しばらくして、アレグラがアリサの発熱を聞き、公爵家へやつて

来る。それを確認した母は、アリサを起した。

「アリサ。アレグラが来たから起せなれ。ちやんと診てもおりね」
「ね」

「ん……んう」

「おせよみがい」これこそお嬢様。今日はどうんな調子ですか?」

ら、アレグラの質問の意味を考える。

アレグラもそれが分かっているからか、アリサに回答を急かすこ
二は、ぐつぐつうに待つ二。

卷之七

「だるい。頭も少し痛い」
「そうですか。では、失礼しますね」

アリサが答えると、アレグラはアリサの服を捲り、胸のところに手をかざす。

そんなアレグラをアリサは不思議そうに眺め、尋ねる。

「何、してるの？」

「お嬢様の魔力の反応を見ているんですよ。相当辛いでしょう？」

1

一回復の魔術をかけておきますからね。……注射よりはいいでしょ

アリサが言つと、アレグラは微笑み、いつものように手に薬を手

渡して帰つていいく。

母がアレグラから薬を受け取り、アレグラを見送った後にアリサの部屋へ戻ると、アリサは眠っていた。

母は、そんな娘を優しく見守る。
早く善くなることを祈りながら、ずっと見守り続けた。

対価は大きい

「ねえ、かあさま。何で、小さいときは治癒魔術を使っちゃいけないの？」

アレグラを見送った後、アリサを見守っていた母は、目を覚ました娘に突然問われ、しばし考える。
そして、優しく微笑みながらアリサに答えを返した。

「どうしたの？ 突然そんなことを聞いて」「だつて、気になるんだもん……」

今まで熱が高いときは注射だつたけど、今日は治癒魔術だつたでしょ？？ どうせなら、小さいときも治癒魔術で治して欲しかつたなあつて。

アリサが告げると、母は微笑む。そして、娘の頭を撫でてやる。
「大きすぎる力は害にしかならないからね。だから、子供のときは注射で熱を下げていたの」「むー

母が答えると、アリサはそつやつて呻る。そんなアリサを、母は再び寝かしつける手に出た。

アリサの額に濡れた、冷たいタオルを置いて同時にアリサの視界も奪う。

「ほり、考えすぎたら熱が上がるから。今は何も考えずに眠りなさい

い

そうして少しすると、アリサの健やかな寝息が母の耳に届く。そうしてようやく安心した母は、眠る娘を優しく見守るのであった。

アリサの考えていることも、もっともだと母は思う。母も、小さい頃は熱を出すとよく注射を打たれていた。それが、嫌いだつた。母の場合はアリサほど頻繁に熱を出すことが無かつたため、注射を打たれる回数は僅かではあったが、それでも嫌いなものに代わりはなかつた。

だが、大きすぎる力は害となる。小さな魔力しか持たない子供に、大きな魔力を送り込んだらどうなるか。

それは、限界まで膨らんだ風船に無理やり空気を送り込むようなこと。最後は、風船が送り込まれる空気をその内部に溜めきれず、

破壊される。

風船が割れると同時に、無理やりにでも溜め込まれていた空気は魔力と一緒に放出される。

そして、生きるために必要な魔力すらも失い、死に至るのだ。

だから、大人は子供に魔力を使ふことを絶対にしない。この公爵家に於いては、見せることすらしない。

見せれば、子供は絶対に興味を持つ。そして、破滅への一歩を踏み出すことになるのだから。

熱が下がつたら、そことこもきちんと説明をしてあげなくちゃ。アリサの寝顔を見つめながら、のんびりそつ考える母であった。

それから少しして。

「ん……う……」

眠っていたアリサが目を覚ました。目を覚ましたアリサは、母に声をかけることなく、ただただ、何かを探していました。

母はそんなアリサに声をかける。何を探しているのか、尋ねるためにも。

「んー、お水、欲しいなって思って」

「なら、言つてくれればいいのに。はい、お水」

母はそう言いながら、コップに水を汲み、アリサの体を起します。そして、水を汲んだコップを手渡した。

「ありがとー、かわわわ」

アリサはそう言つて、コップに入っていた水を一気に飲み干す。
よほど喉が渴いていたらしい。

そうして水をもつと欲しいと強請るアリサ。そのアリサを見た母は気がつく。アリサがずいぶんと汗をかいていることに。

「シャーナ、たらいにぬるま湯を入れて持つてきて。あと、タオルを数枚お願ひね」

「畏まりました」

母はアリサに水のおかわりを手渡した後に、シャーナにそう命じる。アリサは不思議そうな表情をしながら、母を眺めていた。

そして、母に、シャーナに命じた内容について尋ねる。

「かあさま、どうしてたらいとかが必要になるの?」

「だって、アリサ、今汗だくでしょう。汗をきりと拭かなければ、

冷えて熱が上がるから」「

「……ああ、なるほど」

母の言葉を聞いたアリサは、ようやく得心がいったらしく、熱のせいでもここまで頭が働いていなかつたようだ。

そして、ベッドに横になり、再び眠りに付くために目を瞑つた。が、もちろん、母はまだ寝かせない。

「アリサ。汗を拭かないで熱が上がるでしょう。それとも、アリサが寝ている間に勝手にやつてもいいの?」

アリサの体もどんどんと大人の女性に近づいてくるみたいだし、ちょうどいいから、今のうちにアリサのサイズを測つて、服を注文しておきましょうか。

母が言つと同時に、アリサの瞳はぱっちりと開かれた。その目は、恨みがましい。

「かあさまのいじわる」

「あはは。ごめんね、アリサ。冗談だから」

母とアリサがそんな会話を展開させていると、ぬるま湯を張つたらいを持ったシャーナと、タオルを持つたメイドがアリサの部屋へとやって來た。

それを確認した母は、アリサを起こし、服を脱がせていく。

「本当に、汗でびっしょりね。よかつた、気がついて」「んー、だつて、熱いもん」

アリサはそう言いながらも、大人しく母に体を拭かれていた。が、途中で完全に寝入つた。

「シャーナ、アリサの体を支えていてくれる?」

そして母は、寝入ったアリサの体をシャーナに支えてもらい、アリサの体の汗をきれいにふき取り、服も着替えをせ、ベッドに横にするのであった。

その後、昼食のためにアリサを起こし、きちんと食事を取らせ、薬を飲ませるとアリサは再び眠る。

早く熱を下げて元気になるためにも、アリサはぐっすりと眠っていた。深く。深く。

そんなアリサを、母は優しい瞳で見つめる。

つい最近まで小さくて、幼くて、何かあるとすぐに泣いていた末娘。そのたびに、翌日は発熱した。
兄や姉と遊ぶのはいいのだが、無理をしそうな熱を出していた子供。

それが、ずいぶんと大きくなつた。

魔力も覚醒し、体つきも少しづつではあるが、大人のそれに近づいてきている。

この子は、いつまでもやつて世話を焼かせてくれるだろうか。
反抗期が来たら、そのときはどうしようか。

アリサの寝顔を見ながら、真剣に思案する母であった。

妹よ、君を泣く

仕事を終え、急いで家に帰ってきた兄弟たちは、皆一様にして同じ場所を指していた。

指す場所は、アリサの部屋。兄弟たちは急いでアリサの部屋へと向かう。

『アリサつー』

「つるわー』

アリサの部屋の扉を開け、アリサを呼ぶ兄弟たちだが、母の一言であつやつと黙らされた。母、強し。

「アリサは寝てるから、静かになさい。起きたらびっくりするの」

兄弟たちは母のその言葉に従い、口を噤み、静かにアリサの部屋に足を踏み入れる。

アリサは、母の言つとおり、眠っていた。気持ちよさそうに、心地よさそうに、すやすやと寝入っていた。

そんなアリサを見た兄弟は、ホッとする。意外と元気さうであることに。

それからは、母はアリサの部屋を去り、代わりに兄弟たちがアリサを優しく見守る。

時に、無意識にアリサの顎をつづいたりしながら、それでも優しい瞳のままであった。

「ん……うつ」

そうしてしばらくすると、アリサが目を覚ます。そして、そばに大好きな兄や姉がいることに気がついて、嬉しそうに微笑んだ。

「おはよう、アリサ。調子はどう?」

「おかえりなさい、にいさま、ねえさま。もう大丈夫だよ。元気元気

アリサはそう言って微笑むが、兄弟たちはこいつ微笑みながらも、信じていなかつた。

アリサは、苦い薬を飲みたくないがために大丈夫だと強がることを兄弟たちはよく知つていたからだ。

それを知つているがために、代表してジャスリーンがアリサの額に手を当てる。もちろん、その額はまだまだ熱い。

「まだ、熱高いね。本当は大丈夫じゃないでしょ?」

「…………、大丈夫! 大丈夫だよ! 今日は、いつも熱出したときよりも楽だもん! !」

アリサがそう言つと、兄弟たちは「アリサ、君つて子は本当に強がりばつかり言うんだから」と、生暖かい眼差しをアリサに向ける。アリサもそんな目で見られているのに気づいていたため、「本当に大丈夫だよ! 」とベッドから起き上がり、兄弟たちにアピールする。

だが、兄弟たちの生暖かい視線は止まない。そして、兄弟たちはその目で見つめたままで、元気だとアピールするアリサをベッドに戻し、寝かしつける。

「アリサ、まだ熱が高いんだから、休まなくちゃ」
「眠たくないもん。……何か、お話して?」

アリサのその言葉に、兄弟たちは軽く溜め息をつくのだが、話をすれば、それで聞きつかれて眠るかもしないと考えたのか、口を開く。

「何の話がいい？ アリサ。リクエストして」

「んーっと、神様のお話聞きたいな」

「神様の話？ それならジヤスリーーンが一番詳しいか。頼むぞ、ジヤスリーーン」

「分かつた。じゃあ、簡単なところから説明しようね」

この世界では、神様をとても神聖なものと考え、祀っている。神は一人ではなく複数おり、一人一人に能力がある。

例えば、火の神ミカエル、水の神ジブリール、地の神ウリエル、風の神ラファエルのように、一人一人、司る能力が違うのである。

「アリサ。転生する前に神様に会つたって言つてたよね？ どんな人だったか、覚えてる？」

「んとね、金髪のお兄さん

「金髪のお兄さんかあ」

アリサの属性を考えれば、多分、その神様は水の神、ジブリール様だろうね。

水の力は、回復の力。多分、ジブリール様はアリサの前世の魂の傷を癒して、転生させてくれたんだと思う。

そして、多分アリサはジブリール様の加護を受けてるよね。だから、今まで何度も死にかけても生き延びてきたのだと思う。水は、回復だから。

「ああ、だからか。それは、ジブリール様に感謝しなくては」

ジャスリーンが言うと、ルワインたちが揃つて手を合わせ、水の神ジブリールへ感謝の言葉を、心の中で告げる。

そうしていると、横になつたままのアリサがうとうとし始めた。話を聞いて眠くなつたのだろう。

兄たちは、そんなアリサを寝かしつけるために、きれいに毛布をかけてやる。すると、アリサはあつという間に眠りに落ちていつた。だろう

「アリサは、ジブリール様とラファエル様に好かれているんだろうね。属性が二つだしね」

「ああ。アリサの前世が前世だから、神様も気にしてくれているんだろう」

アリサの前世は、二度の事故で命を落とした。人生を好きだと思えなかつた有紗。だから、神様はそんな有紗を可哀想に思つたのか、死を待たずして転生させた。

生きたままで、次の人生を歩ませると言う荒業に出た。結果、アリサの体は弱くなつたが、それでも人生を楽しむことが出来ていた。

「この複数属性が、アリサに負担を掛けることにならなければいいんだけど」

「大丈夫だ。何があつても、僕たちが守つてやればいい」

「それも、そうか。そうだね」

「それに、複数属性に関しては私もいるしね」

ジャスリーンの言葉に、ルワインたちは優しく告げ、そして、エルミナは微笑みながら告げる。それが、ジャスリーンを安心させた。そして、兄弟たちは新たに決意する。絶対にアリサを守ると。アリサを守るのは自分たちであると。

魔力属性が複数であることは、貴重であるが故に、どうしても国

中で評判になりやすい。

アリサの場合は、それが負担になる可能性が極めて高い。

だから、

兄弟たちはアリサを守る。それがアリサのためだから。

アリサを守る。それが、兄弟たちの役目でもあるから。

神との再会

「」の日、夕飯を食べたアリサはあつとこいつ間に眠りについていた。そして、夢を見た。

「久しぶりだね、アリサ。魔力が覚醒したそうじゃないか」

「久しぶり、お兄さん。……いや、ジブリール様？」

アリサが言うと、お兄さん、訂正、ジブリールは目を見張りせる。そして、優しく微笑んだ。

「確かにそうだけど、アリサには今までのよつにお兄さんと呼んで欲しいな」

「んー、じゃあ、今までどおりお兄さんて呼ぶね」

「ああ。そのほうが嬉しいな」

アリサの言葉に、ジブリールは嬉しそうに微笑む。そして、アリサの頭を撫でた。自分が転生させたが故に小さくなつた少女を優しく見つめながら。

それでも、最後にこいつやつて合見えたときと比べると大きくなつてているのが分かる少女。

「それとね、今日は紹介したい人を連れてきたんだよ」

ジブリールはそう言つて、一人の少女をアリサの前に立たせる。

「彼女は風の神、ラファエル。もう一つの君の属性を司る神だ」
「はじめて、アリサ。私は風の神ラファエル。ジブリールがお

兄さんだから、私はお姉さんって呼んでと嬉しいかな」

「うん。 よりしぐね、お姉さん」

アリサがラファエルにっこりと微笑みながら告げる、ラファエルは萌える。萌え、そして、顔を両手で覆った。

その様子を、アリサは不思議そうに眺める。お姉さん、何でこんなことをしているんだろう、と。

「アリサ。気にしなくても大丈夫だよ。もう少ししたら元に戻るからね」

そしてアリサがジブリールと共にしばらべラファエルの奇行を眺めていると、しばらくしてラファエルが元に戻る。そして、ジブリールと共にいるアリサに手を伸ばした。

「アリサちゃん、ジブリールとばっかり一緒にいないで、こっちに来て」

「うん」

ラファエルに言われたアリサは、ジブリールのそばを離れ、ラファエルの元へと走る。そして、自身の元へよつてきたアリサを、ラファエルは優しく抱きしめた。

そして、アリサの頭を撫でる。小さな子供をあやすよつこ、優しく撫で続けた。

「アリサ、君にはジブリールの加護がある。だけど、それだけじゃ危ないよね」

「…………そう?」

「うん。だから、私の風の加護もあげようね。風の力が、君の身を守ってくれるよつこ」

ラファエルが言つと、アリサは不思議そうな表情を浮かべる。そして、その表情のままラファエルを見上げた。

そのアリサの表情に、ラファエルは再び萌える。萌えて、再びその両の手で顔を覆つ。

「本当に、アリサちゃんは可愛いなあ。ジブリールが前代未聞の生きたままで転生させた理由が分かつた気がする」

「ふえ？」

ラファエルはそう言つて、アリサを思い切り抱きしめた。思い切り、ぎゅうっと抱きしめる。そんなラファエルの様子に、アリサは完全に不思議そうな表情のままだ。

そんなアリサを、ジブリールは優しく見守る。

「水の加護は体内に宿つてゐるけど、風の加護はもう体内に宿らせられないからね……。うーん、そうだ」

ラファエルが言つと、いつの間にかラファエルの手の中にネックレスがラファエルの手に現れる。そしてその手にあるネックレスをアリサの首にかけた。

アリサはかけられたネックレスをまじまじと眺める。

「これ、もうつてもいいの？」

「もちろん。これは君のためのネックレスなんだから」

ラファエルが言つと、アリサは嬉しそうに微笑む。そんなアリサを見るラファエルやジブリールも嬉しそうだ。

「受け取つてくれてありがとう、アリサちゃん。さ、そろそろ起きなくちゃね」

ラファエルが言つと同時に、アリサの視界は真っ暗になる。そして、次に視界に光が戻ったとき、そこにはアリサの愛する母がいた。アリサが目を覚ましたことに気がついた母は、アリサの首元に光るネックレスに気がつく。そして、尋ねた。

「アリサ。このネックレスはどうしたの？」

「ラファエルのお姉さんがくれた」

「ラファエルって、風のラファエル様のこと?」

「うん。お兄さんが紹介してくれたの」

アリサが若干寝ぼけ眼で告げると、母は驚いた表情で娘を見つめる。

今まで、生まれる前に神に会い、加護をもらつたものはいても、生れ落ちた後に神に加護をもらつたものなど一人としていなかつた。だというのに、母の可愛いアリサはそれをやつてのけた。それが、どんなに驚くことだろうか。

これが、アリサに負担を掛けることにならなければいい。母はそう考えるのだが、それは無理だろう。

ただでさえ、複数属性持ちというものは国中から見られることが多い。アリサの場合、それに生まれた後に神の加護を受けたと言つ、更に貴重なものまで付く。

そうなると、アリサはどうなるだろう。国中から注目され、持てはやされ、どうなるだろうか。

その中でも元気に過ごしていくんればいい。だが、それで体調を崩したりしたらどうしたらいいのだろう。

そのときは、権力を以つてアリサを守ればいいのだろうか。権力を無視して、とにかくアリサを守ればいいのだろうか。アリサに害を齎そうとするもの、全てを倒せばいいのだろうか。

「かあさま、どうしたの？ 大丈夫？」

その思案が、アリサを不安にさせたらしい。アリサは黙つている母に、心配そうに声をかける。

そんなアリサに、母は優しく微笑みかけ、大丈夫だと伝えるのであつた。そして、アリサを安心させたところで再び寝かしつけるのであつた。

昨日は間違つて、予約を入れた夜に更新をしてしまいました。
その件については、活動報告にて謝罪しておりますが、
ここでも記載させていただきます。

「おい、知ってるか？ つい最近魔力が覚醒したらし」「ドーリス公爵家のお姫様、多属性持ちらしいぜ」

「本當か？ さすがは公爵家じゃないか。あそこ、すぐ上の姫様も多属性じゃなかつたか？」

「エルミナ様だろう？ の方は水と火の一属性だろう」「で、そのお嬢様は？」

「風と水の一属性らしい」

ドーリス公爵家のある王都。その城下町では庶民たちがつい最近魔力が覚醒したドーリス公爵の末の姫、アリサの噂をしていた。体が弱いという理由の元、社交界に一切顔を出さない公爵家の末の姫。

よつて、庶民の誰もが、いや、殆どの人がアリサの顔を知らない。知っているのは、僅かな人間だけ。

知っているのは、アリサがほんの僅かな回数だけ出てきた街で見かけた人間だけだ。

「噂では、美少女だつて話だろ？ お目にかかるみたいのだ」「だなー」

街中でのアリサの噂は、そんなものである。とにかく、一度くらいはアリサの顔を見てみたい。噂の美少女を見てみたい。そんなものである。

とにかく、アリサの顔を見たいという話で、街中の噂は広まり続けていた。

そしてある日。噂の張本人であるアリサが、両親に外出を強請つていた。

「どうせま、かあさま。お外行きたい

「え……？ えっと……。どうしようか？」

「あなたがどうするかによるでしょう」

父の言葉に母が返すと、父はたじろぐ。そして、真剣にどうするかを考え出した。その間、アリサは潤んだ瞳で両親を見つめ続ける。アリサのその目は、やはり凶悪的で父は勝てそうに無い。完全に負けそうだ。

「ア、アリサ。その目は、ちょっとキツいな……」

「ふえ？」

「アリサの目は可愛すぎるんだよ。ちょっと、やめてもらいたいか？」

父が言つと、アリサは不思議そつに父を眺める。そんなアリサを、父は優しく微笑みながら頭を撫でる。そして、その目に勝てず、許可を出した。

「かあさまと一緒に行つてくれるのなら、かまわないよ。そして、護衛の兵士もきちんと連れて行くんだよ？」

「うわあい！ ありがとう、どうせま」

「すまないが、頼んだぞ」

「分かりました」

父の言葉にアリサは喜び、そんなアリサを眺めながら父は母にアリサを頼む顔を伝える。そして、母もそんなアリサの外出を快く受け入れた。

その後、アリサは喜んで外出の準備に向かい、母もそんなアリサ

と共に外出の用意のために移動をする。

そして、アリサや母の用意の間に父は護衛の兵士に声をかけ、アリサの外出の旨を伝えに走る。アリサのために、急いだ。

その後、アリサと母、そして護衛の兵士は馬車に乗つて街へ急いでいた。

「アリサ、そろそろ降りようか」

街に着いた馬車は、あつといつ間に降りるべき場所へと着き、アリサと母は護衛の兵士と共に馬車から降りていた。

そこには、街の人間がぞろぞろと集まつてくる。その様子に、アリサが驚いた。驚いて、母の背に隠れる。

それを見た護衛の兵士は、しつかりとアリサと母をその背に庇い、街の人間を追い払う。

「散りなさい。奥様とお嬢様に害を齎すようでしたら、手加減しませんよ」

「今すぐ離れなさい。お嬢様が怯えておられます」

護衛の兵はアリサと母を守るために、急いで街の人間を散らす。だが、街の人間は散らない。

兵や母たちがその理由を尋ねると、街の人間たちは嬉しそうな表情をして、口を開く。

「普段からお嬢様を見ることは叶わないのです。ですから、たまには見たいのです」

「そいつの言つとおりです。たまには、ご尊顔を拝したく存じます！」

庶民たちが兵士たちに告げると、母が溜め息をついて、アリサを後ろから引つ張り出す。そして、庶民に顔を見せた。

「この子がアリサよ。アリサ、挨拶なさい」

「アリサ、です」

アリサは母の横で自己紹介をすると、すぐに母の後ろに隠れる。それと同時に、護衛の兵たちは再び街の人間を追い払いにかかりた。

「さあ、もういいでしょ。お嬢様が怯えていらっしゃいますから、退きなさい」

「だな。目的はお嬢様を怯えさせる」とじやない、全員、退けり

街の人間たちは、そう言つて散つていく。それで、よつやくアリサは安心したらしい。母の後ろから横に移動し、母と手を繋ぐ。それから、アリサは母や護衛の兵士と一緒に街を巡り始めた。

「アリサ、今日はお外で何がしたかったの？」

「今日は……

「何となく、お外に出たかっただけ」

アリサが言つと、母は軽く溜め息をつく。だが、すぐに微笑み、アリサの頭をくしゃりと撫でた。そして、言つ。

「なら、今日はどうする？ 適当に街を見て、お家に帰る？」

「ん……うん」

そうして母とアリサは、手を繋いだままで街と一緒に巡る。護衛の兵士は、一人の一人歩ほど後ろだ。

「アリサ、何か欲しいものはある？」の機会に買つてあげるわよ？」

「本当！？ なら、新しい本が欲しい！ 魔術の本が欲しい……！」

「うーん、でも、まだ無茶をしちゃダメよ？ 無茶をしたらまた熱を出してしまうからね」

「分かつて。今は読むだけだよ」

アリサが言つと、母は優しく微笑む。そして、そのアリサの手を引いて本屋へと足を向けた。

「いらっしゃいませ、アリサお嬢様、公爵夫人様」

本屋に着くと、本屋の店主が来たのがアリサだと気づいたのか、店主は名指しでアリサと母を歓迎する。

そして、母はそんな主に声をかけ、アリサの属性にあつた魔術本を購入し、屋敷へと戻るのであつた。

その後、家に帰ってきたアリサが、母に買つてもらつた魔術本に読みはまり、分からぬところを兄や姉に聞いていたことは、最早言つまでもない。

魔術本は面白い

街に出て、母に新しい魔術本を買つてもらつたアリサ。そんなアリサは、食事を終えて、お風呂にも入り、その後は自分の部屋のベッドで楽な体勢をとり、買ってもらった本を読んでいた。アリサが本に読みは待つてゐるためか、この部屋には兄や姉たちはない。アリサが読みはまつてゐることに気がついた時点で自分の部屋に戻つたのだ。

風の魔術。それは、風の神ラファエル様の力の一部をお借りし、使う魔術。

例えば、風の力を借りて自らの体を浮かし、早く目的地に着くと言つ方法も、風の魔術である。

だが、それは初心者は使つてはならない。ある程度風に慣れたものでなければ、この魔術は大怪我を伴うものとなる。

初心者が使う風の魔術は、例えば小さな竜巻等を召喚し、物を浮かせる等である。これならば、消費魔力も少ないし、失敗しても自らの身に返る負担はない。

だから、初心者が風の魔術を使うときは、まずは小さなものを浮かせる魔術の練習から始めよう。何か、軽いものから浮かせられるよう、頑張ろう。

魔術の基本は、全てが集中である。物を浮かせる際にも、軽いものだらうがなんだらうが、とにかく集中することだ。

集中して、目の前の浮かせたいものに意識を向けてみよう。うまくいけば、目の前のそれは浮いてくれるだらう。

後は、練習あるのみだ。練習して、とにかく練習して使えるようにならう。

だが、初心者は無茶は禁止だ。初心者が無茶をすれば、簡単に魔力が尽きて、命を危険に晒しかねない。魔力の残量を考えて、練習に励んでくれ。それが、説明をする私からの願いである。

「風は……といひが確かそうだつたよね。見せてもらつてこよつ

風の欄を読み終えたアリサは、本を閉じて父の元へ向かうため、ベッドから降りる。

そして、ベッドから降りたアリサは、父のいる寝室へと一目散に駆け向かつた。

「どうわが」

両親の寝室へと現れたアリサは、驚く両親をよそに、父のそばに駆け寄り、いつものように潤んだ瞳で見つめる。

そして、静かに口を開いた。

「どうさま、風の魔術見たい。かあさまに買つてもらつた本読んだんだけどね、実際に見たくなつたの」

「へ？」

「どうさまの属性、風でしじう？ 風の魔術見せて欲しいな」

アリサが言つと、父は目をまん丸にする。確かに、父の属性は風。だが、突然そういうわれるとは思つてもいなかつたのだらつ。ちなみに、母の属性は火である。

風と火の相性はとてもいい。だから、この二人は日常生活でも、戦闘のときともとにかく相性がいいのだ。

「どうさま、…………ダメえ？」

父は、やはり娘の潤んだ瞳には勝てない。軽く溜め息をついた父は、アリサのリクエストに従い、風の魔術を使う。

父は、手のひらを上にし、その手のひらの上に小さな竜巻を発生させる。

「危ないから、触ってはいけないよ」

「うん。ありがとう、とうわま」

父が竜巻を発生させると、アリサはその竜巻に田を奪われる。そんなアリサに、父は危ないから絶対に触らないよつ告げ、そして少しして、その竜巻を消し去る。

その後は、アリサの背を押し、アリサを部屋へといざなつた。

「さ、もういいだろ? アリサはもうおやすみ?」

「えーっ! まだ大丈夫だよ!」

「いいから休みなさい。もうじやないと、明日の魔力のコントロール、禁止するよ?」

「え? とつても、それする?」

父の言葉に、アリサは過敏に反応した。とにかく魔術に興味を持つていてるアリサにとつて、魔力のコントロールのを禁止するという脅しの一つで、アリサは素直に従うことになった。

そして、アリサは父と手を繋ぎ、大人しく部屋へと戻る。部屋に戻つたアリサは、父の言葉に従い大人しくベッドに横になつた。それと同時に、父は部屋の明かりの火を消す。

「さ、アリサはもう寝よ? ね。おやすみ」

「はい。おやすみなさい」

父に眠りを促されたアリサは、父の言葉に従つてそのまま眠りに

着いた。

アリサの健やかな寝息が、室内に響く。父はそんなアリサにきれいに毛布を着せ、風邪を引かないようこしたあとで、自身も部屋へと戻る。

アリサが、明日魔力のコントロールの練習に励むだらつことを楽しみに考えながら。

そしてそのアリサはとくに、父が部屋を出て行くのを確認すると、寝たふりを止め、起き上がる。そして、先日覚えたばかりの火を魔術で出し、部屋に明かりを灯す。

そして、先ほどの本を取り出して再び本を開いた。

水の魔術。それは、水の神ジブリール様のお力の一部をお借りし、使う魔術。

水は回復の力。水の魔術は攻撃にも使えばするが、メインは回復のための力となる。

水の力は、体内に宿る水の流れを操作し、体の不調を治す。医療系魔術師の使う魔術は、それである。

だが、この力は子供には絶対に使つてはならない。魔力の覚醒していらない子供に治療系の魔術は、善いものであるはずがなく、寧ろ、害にしかならない。

水の魔術で回復の魔法を使つときは、まず、そのことを覚えておいて欲しい。

回復の力を使うときは、まずは体内の水の流れを知るべきである。体内の水の流れを知らないままでは、回復など出来るはずもない。

「お嬢様、まだ起きていらしたんですか

そうしてアリサがずっと本を読んでいると、アリサの部屋の明かりに気がついたシャーナがアリサの部屋に入り、アリサを寝かしつ

けようとする。

「もう遅いですから、いい加減お休みになつてください。本は没收です」

シャーナはそう言つと、アリサの持つていた本を取り、アリサの届かない場所へ置いて、そして、アリサの部屋の明かりを消す。

その後、アリサにきちんと毛布をかけて、シャーナはアリサの部屋から出て行く。そしてもちろん、その後は主夫婦の寝室へとアリサの夜更かしの報告へと向かうのであった。

それと同時に、アリサの夜更かしの対価として翌日に熱を出さないかが心配であることを、シャーナは主夫婦へ伝えるのであった。

夜更かしの後で

シャーナがアリサを寝かしつけた後、アリサは素直には眠らず、ベッドの上で横になつておくだけにとどまつていた。

眠らうにも、魔術に対する興味が勝つて眠れないらしい。だが、暇つぶしの本はシャーナによつてアリサの届かない場所へ移動されている。

「眠れない……」

アリサは呟くが、当然ながらアリサのその言葉に返す言葉は無い。だがそれでも、アリサにベッドから降りるという選択肢はないのか、大人しくベッドの上で横になつたままでいろいろと考えていた。

「眠れないけど、どうしよう。今どうせまたちのところに行つたら、勝手に魔術使つたことバレちゃうよね……」

アリサは呟くのだが、シャーナが父や母に報告をした次点で、すでにそれはバレてしまつていて。だが、アリサはそれを知らないため、大人しくベッドの上でだ。

だが、それも一時の間だった。しばらくベッドの上にいたアリサは、さすがに限界が来たらしく、ベッドから起き上がり、両親の部屋へと足を向ける。

「とつとま、かあさま、眠れない

えぐえぐ。アリサは涙を溜めながら両親の部屋へ向かい、両親に甘える。

そうして甘えられた父や母は、優しくアリサを受け入れ、ベッド

の真ん中に寝かす。但し、若干のお説教は含んだ上で、だ。

「アリサ。勝手に魔術を使つたでしょ？」「

「え？ つ、使つてないよ？ かあさま、何でそんなこと言つの？」「

「本当にーー？ なら、お父さまが消したはずの明かりが、またついていたのはどうして？」「

「あ……あうあう」「

容赦なく攻め込む母に、アリサはたじたじである。横になつたままのアリサは、母に攻められるため、母から視線を外すのだが、すると、次は父が攻め込んだ。

「アリサ。勝手に魔術を使つたらダメだと言つていただろう？ 約束を破つてはいけないよ？」「

「ごめんなさい」「

「勝手に魔術を使つたら危ないと、教えたでしょう？ アリサ。今度からは絶対にしたらダメだからね」「

視線を変えた先では、父に攻められ、再び視線を戻すと、今度は母からの容赦なき攻撃が降つてくる。その状態では、嘘を突き通すことは出来なかつたらしい。アリサは素直に謝罪した。

すると、アリサが謝つたことで満足したらしく両親は、アリサの頭を撫でる。

その撫で撫でが、とても気持ちがよくて。その気持ちよさが、アリサに睡魔を呼び込んだ。

「眠たくなつたかい？」「

「うん……眠たい……」「

「なら、眠るといい。寝ている間に部屋に運んでおいてあげようね」「

「うん……、とうせま、好き……」「

そうしている間にアリサは眠りに落ち、父はそんなアリサを優しく抱き上げ、アリサの部屋へと運んだ。

気持ちがよさそうに眠り続ける娘。そんな娘を微笑ましげに眺めながら。

そして翌朝。アリサの部屋には兄弟たちが集まっていた。

「アリサ、朝だから起きて」

「んー、眠い。もうちょっと、寝るうー」

「ダメ。起きるんだ、アリサ」

「やーあ。にこさまたちの、けちんぼお」

アリサはそう言ひながらも、再び眠りに落ちかけている。兄弟たちはそんなアリサを容赦なく起こすのだが。

「けちで結構。いいから起きるんだ」

「母さんたちもアリサが起きるのを待つてるんだ」

兄弟たちはそう言つてアリサを起こす。が、やはりアリサは起きない。故に、兄弟たちは咄嗟にアリサの体調を調べる。アリサの額に手をあて、熱が無いか調べたのだ。

結果は、微熱。高いわけではないが、黙つて見過ごしておいていい熱ではない。

「アリサ、調子が悪いかな？ 微熱気味のようだけど、どうだい？」

「んー、眠い……」

そんなアリサを見た兄たちは、微熱気味であるが故に眠たいとい

「……」ともあるのだからと判断し、部屋を出て行く。そして、両親にこのことを伝えてに向かった。

アリサは起きていないと、そして、微熱氣味であることを。

そして、それを聞いた両親は急いでアリサの部屋へとせりつて来、そして、アリサへ駆け寄る。

「呼吸……は正常。昨日の夜更かしのせいでだらつな」

父が言うと、母もそれに同意する。そんな両親や兄弟たちの見守る中で、アリサは依然として眠り続けている。

両親や兄たちは何度も何度も起きているのだが、それでもアリサは起きないのだ。

「アリサー、起きてよ。朝なんだから」「だつて、眠い……」

そう言いながらも、アリサは目をこりながらも目を開く。その目は、まだ虚ろ気だ。

「おはよう、アリサ」「むはや……。おはよお……」

何とか目が開いてはいるのだが、まだまだ眠たそうで、下手をすれば再び眠りに落ちてしまいそうである。

そんなアリサに、父や母は微笑みながら声をかける。

「アリサ、調子は悪くないかい？ 悪いのなら、強がりずに正直に言つんだよ？」「ん……、眠い、だけえ……」

だから、寝かせてえ。アリサは言つたが、父たちは寝かせない。今寝かせたら、間違ひなく夜に眠れなくなることが決まつてゐるからだ。

オマケに言つならば、アリサは昨晩も本の読みすぎで寝付けず、両親の部屋へ来て、泣きついた。そして父たちのおかげでようやく寝付いたのだ。

「今寝たらまた夜に眠れなくなるだらう? 起きるんだ」

「やーあ……。眠たいもあん」

「起きなさい、アリサ。じやないと……どうしようかなー?」

中々起きない娘に、母は嫌な笑みを浮かべながら告げる。だが、アリサはそんな母の言葉に反応する余裕も無いらしい。

完全に眠りに落ちた。

結果、母は起きないアリサで遊ぶのであった。

そして、目を覚ましたアリサは母のいたずらに驚くことになるのであった。

母のいたずら

中々起きない娘に、母は遠慮なくいたずらを実行する。何をしても起きないアリサ。それは、母にとっては絶好のおもちゃだった。

「母ちゃん、これ、アリサが起きたらびっくりするだろ」

「起きなさいこの子が悪いの。私はちやんと予告したわよ？」

「いや、でもさあ……」

この日、折りよく休みだつたカインは、母がアリサにいたずらをする様を、どう止めようか考えつつ、眺めていた。

母は、その間もアリサにいたずらを加え続ける。

アリサの顔にちょっとした落書きをしたり、そのまま服を捲り、お腹のところに落書きをしたりと、アリサが見たら本気で驚くであろういたずらを何度も何度も繰り返していた。

そして数十分後、アリサは母のいたずらによつて、見事な状態になつていた。

それに満足した母は、容赦なく娘を叩き起^レこす。

「アリサ、いい加減起きなさいー 起きなさいつたらー」

「んむ う

そうして田では文句を言つてゐるアリサだが、それでもぐつすりと眠れてすつきりしたのか、先ほどと比べると簡単に田を覚ます。

そして、田を覚ますと同時に、お腹の辺りが冷えて^レいることに気がついたらしい。そこに田を向ける。……母のいたずらに気がついた。

「かあさま、このよく分からぬ絵、何？」

「まあ、よく分からぬとは失礼な。 カイン、鏡持つてきて」

そしてカインが鏡を持って戻ってきて、己の顔にかかれた落書きを見たアリサは、再び不思議そうな顔をする。

「かあさま、この絵も何か分かんないよ？」

「再び失礼な。よく見て考えなさい」

「カイにいさま、この絵、何だと思つ？」

「うーん、僕にも分かんないな」

アリサは兄と二人で、この絵が何なのか真剣に思案する。だが、二人とも答えは出ないらしい。

しばらく考えて限界が来たらしい。一人は、母に答えを尋ねた。

「かあさま、この絵、何？」

「んもー、一人ともどうして分かってくれないんだか」

母はそう言いながら答えを教えてやる。が、その答えを聞いた二人は、「は？」と言う顔をした。一人とも、そんな答えは一切考えていなかつたらしい。

その後、アリサはシャーナたちに濡れたタオルを持ってきてもらい、顔とお腹をきれいに拭いて母のいたずらを消す。

「きれいに消えた？」

「まだだよ。アリサ、貸して。拭いてあげる」

シャーナに持つてきてもらつたタオルでアリサが顔を拭きながら、兄にきれいに拭けたかどうか尋ねる。

そんなアリサに、カインはきれいに拭けていないと言いながら、

アリサからタオルを受け取り、アリサの顔のいたずらをきれいに拭つていった。

「ほうら、きれいになつた
「ありがとう、にいわせ」

その後、アリサはお腹にも書かれた落書きをせつせと拭つていく。
その様を、母は面白そうに眺めていた。…………またやりかねん。
そして、アリサの落書きがきれいに落ちると同時に、母はアリサ
に朝食を手渡す。

「はい、アリサ。お腹が空いたでしょ？？」

「あ、ありがとう、かあさま！ お腹空いたっ！」

母が食事をアリサに渡すと、アリサは嬉しそうに微笑み、渡された食事を膝の上に置き、にこにこと微笑みながら朝食をとり始めた。
カインと母は、そんなアリサを嬉しそうに微笑みながら眺める。

そして、食事を終えたアリサは、満足そうに微笑み、食器をシャーナに預ける。

その後、アリサはベッドから降りて、シャーナに追いやられた本を取りに向かう。……のだが、シャーナはアリサがどう頑張つても届かない高さの場所に置いているらしく、アリサの身長では届かない。

アリサは、必死で背伸びをして本を取りと頑張るのだが、やはり届かない。
結果、アリサは兄や母に助けを求めた。

「にじさま、かあさま。本、取つて？」
「ちょっと待つて……」

「ダメよ。今日はその本を読むのは止めなさい」

アリサに頼まれたカインは、その頼みを受け入れ、アリサの希望の魔術本を取ろうとするのだが、母がそれを止めた。
それを言つた母を、アリサはどうして？ という顔で見つめる。
その目は潤んでいた。

「アリサにそれを渡したら、また夜更かししゃべりそつだからダメ」

「今日ははちゃんと寝るよー！」

「ダメ。どうしても読みたいんなら、 カイン、 読んであげて

その瞬間、アリサの潤んだ瞳はカインに向けられた。

「にいさま」

「分かった。えっと、どこから読めばいいのかな？」

「水の魔術のところー」

アリサが言つと、カインはその言葉に従つて本をパラパラと捲る。
そして、目的のページで手を止めて、アリサの希望通りに本を読み始めた。

「水の魔術つってす」こね。にいさま、水の魔術見せて」

本を読み進めていくうちに、アリサはどんどんと水の魔術に興味を抱いていく。そして、読み終えると同時にアリサは兄に水の魔術の実演を強請つた。

何と言つても、カインの属性は水。双子の妹であるエルミナの属性の一つと同じ水だ。

「水の魔術とは言つても、僕は回復魔術は苦手なんだけど……」「じゃあ、回復じゃなくていいから、水の魔術見たい」

アリサが潤んだ瞳のままで見つめると、カインは溜め息をつき、メイドにコップを持つてこさせた。

そして、水の魔術を用いて、そのコップに水を溜め込んだ。

「簡単な奴だと、こんな感じだね。まあ、僕は魔術よりは剣術のほうが得意だからねえ」

「じゃあ、今度剣術も見たいな」

「あー……母さん、いいのかな？　見せても」

アリサのおねだりに、カインはたじろぎながら、母に助けを求める。

そんな息子に、母は微笑みながら答えを返した。

「見るだけなら大丈夫でしょう。アリサ、するつもつはないんでしょ？？」

「うん。だつて、剣術つて怖いもん」

「なら、いいわ。カイン、今度セインと一緒に見せてあげなさいな」

母の言葉に喜んだアリサは、ぴょんぴょんと飛び跳ねる。そんなアリサを母が諫めた。

「アリサ。飛び跳ねたりしたら熱を出すでしょ？　止めなさい」

母に止められても喜びを隠せないアリサ。カインは、そんなアリサを微笑ましげに眺め続けるのであった。

アリサが母のいたずらを受けた数日後、全員が休みの日に、セイントカインはアリサに剣術の様子を見せるために、稽古に励んでいた。

そのそばで、危なくないよう公爵家の兵たちに守られたアリサや、そのアリサを同様に守りうとしているルウインたちがいた。ジャスリーンはアリサを抱きしめながら二人の稽古の様子を眺め、エルミナは怪我をしたときに一応自分の作った薬を用意しておき、ルウインは何かあつたときのために、アリサのたてとなるべくアリサの前に立っていた。

「アリサ、危ないから絶対に僕や兵の前に出ちゃいけないよ?」

セイントカインは、あれでも剣術に関しては国中で注目されるほどに強いんだから。

ルウインがアリサに言つと、アリサは元気に頷き、大人しくルウインや兵の後ろでしつかりと剣術を眺める。

辺りで、二人の操る刃を潰した剣のぶつかる音が響き渡る。その音を立てながら、剣でバトルを続ける。

アリサは、その剣戟を繰り広げる兄たちに完全に夢中である。

「セイにいさまとカイにいさま、すごい」

「うん。ホント、セイントカインは剣術に関しては国内でも最高レベルにいるだけあるよね」

そう言ってアリサとジャスリーンは話を続ける。だが、アリサの目はセイントカインの剣術に向かっている。よほど楽しそう

い。

ルウインやジャスリーン、エルミナはそんなアリサを微笑ましげに眺め、そして、そのまま一人の剣戟を眺める。

「やあっ！」

「甘いっ！ 脇ががら空きだ！」

カインがセインに切り込むのだが、セインはそんなカインをあつさりといなす。だが、カインは逆に返してくるセインを、必死で避けた。

「うおわあっ！」

「お、成長したな、カイン。あれを避けるとは」

「それはっ、皮肉にしかつ、なつてねえ……！」

カインはそう言いながらも、必死でセインに切りかかる。だが、仮にも近衛隊三隊大隊長を任せられているセインは、一般の近衛兵であるカインを一切寄せ付けない。とにかく、剣でカインの操る剣を右へ左へ動かし、避ける。

表情も、二人は全然違う。セインの表情にかなり余裕があるにも関わらず、カインの表情に余裕は全くない。とにかく必死だ。

「カイン、そろそろ攻めるぞ」

セインが言うとすぐ、カインに切りかかっていく。しばらくはその攻撃を必死で避けたり、防御をしていたのだが、だが、耐え切れなくなつた。

「くあっ！」

「ほい、終わりつと」

セインがカインの首筋に刃先をあて、二人の剣戟は終了する。そして、降参の意思を見せたカインを確認したセインは、静かに剣を仕舞い、アリサの元へやつて来る。

そうして来た兄を、アリサをキラキラとした瞳で迎え入れた。

「にいさまたち、すゞいー、かつこいー！」

「んー、そうかな？ でも、アリサにかつこいと言わわれるのは嬉しいな」

「アリサ！ 僕はどうだった？」

「カイにいさまもかつこよかつたよ」

アリサが素直に一人の兄を褒めると、褒められた二人は喜び、褒めてくれたアリサをよしよしと撫でる。その表情は、とても嬉しそうである。

そして、よしよしと撫でられているアリサは、気持ちよさそうな表情のまま、兄の目をしつかりと見つめる。そして、口を開いた。

「ねえ、にいさま。にいさまたちの剣、持つてみたい」

「え！？ アリサには重たいよ？」

「持つてみたい」

潤んだ瞳で訴えるアリサ。アリサは、日本でも基本的に剣に縁が無かつたため、剣に興味を持つていた。故に、アリサは兄たちに持ちたいと強請つたのである。

そして、強請られた兄たちは、アリサの売るんだ瞳にあつさりと負けた。

セインが鞘から剣を取り出し、アリサに握らせる。だが、セインはその手を剣から離さず、支えているままだ。

「にいれま、ちょびつと離してみて？」

「限界だと思ったら、すぐに手を離すんだよ？」

セインはそう言って、一度アリサの持つ剣から手を離す。その瞬間、アリサの腕がガクッと落ちた。

「重たいねえ……、剣つて」

「だろう？ だから、そろそろ手を離そうか」

アリサのそばで手を添えたまま待機しているセインは、アリサが重たいと言った後で、そろそろ下ろすよう促す。

促されたアリサも、素直にセインの練習用の剣を下ろした。そして、自身の腕を押さえる。ずいぶんと重たかったようだ。

そして、剣を鞘に仕舞ったセインは、優しくアリサに言葉をかける。

「アリサ。アリサは剣術なんて覚える必要はないんだから、剣を持たなくともいいんだ。アリサは僕たちが守るからね」

「でも、私も自分の身くらい、自分で守れるようになりたいもん」

「うん、その心掛けはいいと思う。だけどね、アリサは僕たちに守らせて？ そう、決意したんだから」

セインが言つと、それに、カインが続く。そして、その後にルウィンやジャスリーン、エルミナも続いた。

「セインにいの言つとおりだよ。僕たちは君を守ると決めたんだ。守ってくれ」

「セインやカインの言つとおりだな。アリサ、僕は剣術は苦手だけど、権力の使い方はよく分かってる。何かあつたら相談しておくれよ？」

「兄さんたちに相談し辛いことなら、私たちに相談してね。でも男には相談出来ないこともあるでしょう。」

「言つてくれれば、すぐに時間作つて相談に乗るからね」

自分に向く優しい瞳。それを見たアリサはとても嬉しそうに微笑む。

自分に優しい兄と姉。そんな兄姉たちにかく愛される日々。

それは、愛おしき日々。

いつまでも続いていくあるいは、愛おしき日々。

そんな日常と、愛を感じる幸せを噛み締めるアリサだった。

それは愛おしき日々。

兄妹や両親と共に過ごす、それが愛おしき日々。
愛し愛される、そんな愛おしき日常。

「けほっ、けほっ」けほっ

げほげほげほっ、こふっ。

セインとカインの剣戟を見て、興奮冷め止まぬ内に部屋に戻ったアリサは、げほげほと咳き込む。

そして、一度咳が出ると、中々止まらない。何度も何度も咳き込み続けていた。

「アリサ！ 大丈夫じゃないね、早く横になつて」「だいじょ……」

兄たちの言葉に返事を返すアリサだったが、その途中で息を呑む音が兄たちの耳に届く。そしてその瞬間、アリサは再び激しく咳き込んだ。

「自分でも大丈夫じゃないのが分かつたでしょ？ アリサ。早く横になつて」「ん……」

さすがにあれだけ咳き込んで疲れたのか、アリサは素直にベッドに横たわる。だが、アリサの咳は止まらない。何度も何度も苦しそ

うに咳き込み続ける。

「ああ、熱が少し出でてくるのか。興奮しそぎたのかな？」

「アレグラに来てもらえるよう連絡してくる。それまでアリサをお願いね」

「ああ。頼んだ」

咳き込むアリサの額に手を当てたルウインは咳き、それに反応したジャスリーンはアレグラに連絡をしに向かう。

それからしばらくして、ジャスリーンはアリサを診にやつてきたアレグラと共に、アリサの部屋へと戻つてくる。その間も、アリサの咳は止むことがなかつた。

「アリサお嬢様、失礼いたします。ルウイン様方は申し訳ございませんが、退室願います」

そうしてルウインたちが退室すると、アレグラは咳き込むアリサの服を捲り、胸元に手を当てる。

「無理をし過ぎましたね、お嬢様。ずいぶんと酷使しているようです。しばらくは、絶対安静ですよ」

「わかつ…………げほつごほいほ」

「一応、治癒魔術で一時的にはありますが、咳は止めておきますね」

返事をしながらも咳き込むアリサに、アレグラは治癒魔法を使い、アリサの咳を止める。だが、それは一時的な処置にしかならないらしい。

だが、一時的にでも咳が止まつたからか、アリサはアレグラに微笑みかける。感謝の気持ちのようだ。

そしてその後、アリサは部屋に残っていた姉たちの命令で眠りにつく。体調不良を早く治すには寝るのが一番だと言つことは、アリサ自身、今までの経験上よく分かっているからだ。

早く咳が止まないと、苦しむのは自分なのだから、それを避けるためにもぐっすりと眠る。

それから目を覚ますと、アリサのベッドのそばには、先ほどからずっといた兄弟たちのみならず、両親まで揃っていた。そのことに、アリサはまず驚く。

だが、その表情もすぐに消し去り、そして微笑んだ。

が、その瞬間、激しい咳がアリサを襲う。

「 」

激しく咳き込むアリサに、家族たちは心配そうな表情を見せ、そして水を用意させ、アリサに手渡す。

「あ…………りがとー…………」

礼を言つてアリサが水の入ったカップを受け取ると、アリサはすぐさまその水をぐいぐいと飲み干した。そして、おかれりを要求する。それからは落ち着いたのか、呼吸も正常に戻り、今度こそアリサは家族に淡く微笑んだ。

「アリサ、大丈夫？」

「うん。へいきへいき。咳もしばりへ出さうしないし」

アリサが言つと、家族たちはホッとした表情を見せる。そして、家族たちは未だ平氣だとは言えない娘をベッドに横にさせる。

「寝れないからやーだあ」

「眠れなくても横になつてているだけでいいからね、アリサ」

無理やり横たわられたアリサは、文句を返すのだが、それを父が黙らせた。

そして、黙られ、横たわられたアリサは、渋々と言つた形ではあるが、ベッドに横になりきれいに毛布を肩までかける。だが、アリサは自身が言つたように、眠らない。眠れない。

「眠れないから、何かお話しよー。それか、お話して?」

アリサが言つと、母たちが静かに口を開く。それに兄たちも続いた。

「何のお話をする?」

「リクエストをして、アリサ」

「アリサの希望があるなら、その希望に沿うからね

「魔術の話がいい! 魔術の勉強するから」

「元気になるまで、絶対に魔術を使わないって約束するなら話してあげよう」

アリサがリクエストを出すと、父がアリサに針を刺した上で話を始める。

父は、魔術の基本となる話から話を始めていく。魔術と命の関わりや、魔術の基礎の話を進めていった。

「アリサ、魔術を使うときは、加減を忘れてはいけないよ? 魔力は、深く命に関わっている。魔力が尽きたら人は死んでしまうんだ。アリサは、とうさまたちを悲しませないでくれ。約束できるね?」

「 うん。約束する。絶対に、無理しきゃない。とつせまたち
を悲しませたくないもん」

アリサが言つと、父は優しく微笑み、アリサの頭を撫でる。そして、その父の手が離れると同時に、今度は母の手がアリサの頭を撫でた。

その後、母の手が離れると今度は兄弟たちの手が、代わる代わるアリサの頭をよしよしと撫でていく。

「 な、何! ? どうれど、かあさま、こいつれど、ねえれど、何なの
? 」

「 気にしないで、アリサ」

「 お母さんの言つとおりだよ、アリサ。アリサがいい子だから撫で

たくなつただけなんだからね」

「 アリサが可愛すぎるのが悪い」

アリサの疑問には、エルミナが一番正確に答えた。母の回答は氣にするなであるし、カインの答えは、最早誤りである。

アリサに落ち度は無いはずなのだから。

そんな家族のアリサ可愛がりの余は、アリサが再び咳き込んだことによつて、終焉を迎えた。

「 あ、もう一度休もうね、アリサ
「 けほつ。…………うん」

やつして父や兄弟たちの休みの日は、いつもアリサに付きつ切りの一日となるのであった。

愛おしき日々（後書き）

激しく咳き込むのは、本気できついですよね。
何となく、書いていて苦しくなりました（笑）

咳き込むと、たまに胸まで痛くなるので、
私自身は咳き込むのは嫌いなんですね。

でも、何となく主人公を苦しめてみたかった。

少しくらこ苦しめても、
罰は当たらんでしょう。

愛おしき日常

愛おしき日常。

それは、家族がみんな自分のそばにいて、みんなで愛を確かめ合う日々。

家族たちに、愛とは何か教えてもらいつ日々。

そして、同様に家族を愛する日々。

そんな日々が、アリサにとつては愛おしき日常だった。
愛を見、愛を受け、愛を見せ、愛を感じる。

それが、今生における、一番の幸せ。

だから、アリサはこの人生を楽しいと考えていた。

前世を嫌っていた少女は、今生では人生をこよなく愛していた。

人生を好きだと言わせてくれたのは、彼女の大事な家族。優しい
大切な家族。

「アリサ、調子はどう?」

「リンねえさま。咳も止まつたからへいきだよ」

「本当に?」

アリサの様子を見に来たジャスリーンは、平氣だと云ひアリサに
微笑みかけながら、アリサの額に手を当てる。

「ひやつ」

額に手を当てられたアリサは、ジャスリーンの手の冷たさに驚き、
奇声を上げる。ジャスリーンはそんな妹を微笑ましく眺め、そして、

その頭を優しく撫でてやる。

頭を撫でられているアリサはとても気持ちがよさそうで、そのアリサを見るジャスリーも幸せそうだった。

「ほり、まだ熱も下がっていないみたいだから寝なさい。具合、まだ悪いでしょ?」

「ん……」

「いつ」と、アリサはベッドに横たわる。

「いい子だね、アリサ。ゆっくり休んで早く元気にならうね」

「うそ」

そして、アリサは姉の言つとおり、目を瞑り、眠る体勢を取る。早く元気になるためにも。家族たちに余計な心配をかけないためにも。

その後、夢の世界に旅立ったアリサを、ベッドの空いていたところに座つたジャスリーは、優しく見守る。時折気持ちよさそうに眠るアリサの頭を撫でながら、それでもずっと見守っていた。気持ちがよさそうに眠っているアリサ。熱が高くはあるが、それでも幸せそうに眠っているアリサ。家族の愛に、とにかく幸せを感じてこむアリサ。

それからしばらくして、昼食の支度が整つたらしく、シャーナが食事を持つてアリサの部屋を訪れる。

「アリサ、お昼だよ。」(「)飯食べなきゃだから、起きて

「んう……」

「起きて、きちんと栄養を摂らなくちゃ」

ジャスリーンが告げると、アリサは眠たそうに、目を開ける。

「おはよっ、アリサ。『」飯食べなくちゃね」

「うん……」

アリサが起きたのを確認すると、ジャスリーンはシャーナからアリサの昼食を受け取り、スプーンでその食事を掬い、アリサの口元へ運ぶ。

まだ眠たそうにしているアリサではあったが、それでもおこまでされると食べないと言つ選択肢は無いため、口を開き、その食事を受け入れた。

「よしよし、いい子だね、アリサ。しつかり栄養を摂つて、元気になろうね」

「ん」

そして、食事を摂つたアリサは、その後、いつもより苦い薬を飲む。飲んだ後のアリサの表情は、危険だ。

「うえー、苦いー、苦いー」

「うん、そうだね。でも、元気になるためにも、我慢して飲まなくちゃね」

「分かってるけど、苦い……」

そんなアリサに、ジャスリーンは甘い飲み物を用意させ、差し出す。アリサのために。可愛いアリサの笑顔を見るために。

その後、口の中の苦味が消え去つたアリサは眠り、ジャスリーンは一度部屋を出、自身も食事を摂りに向かう。

「お母さん」

アリサの部屋を出て、母のいるリビングへ向かったジャスリー^ンは、母の姿を確認し、声をかける。

「どうしたの？ ジャスリー^ン」

「今からご飯食べるから、それまでアリサについておいてもらおうと思つて」

「ああ、そういうことならいいわ。ゆっくり食べていらっしゃい」

「ありがと」

そうしてジャスリー^ンは食堂へと向かい、母はそれと入れ替わりにアリサの部屋へ向かう。

母がアリサの部屋につくと、アリサは気持ちがよさそうに寝ついていた。すやすやと、アリサの健やかな寝息が部屋に響く。

「よしよし。いい子ね、アリサ」

母は眠る娘の頭を撫でながら、愛娘を褒める。それが聞こえたのかどうかは分からないが、その瞬間、アリサは寝ていながらも嬉しそうに微笑んだ。

母はそんなアリサを微笑ましそうに眺める。可愛い可愛い愛娘。眞向は悪くとも、それでも気持ちよさそうに眠つている娘。

それからもアリサは眠り続ける。その後、昼食を食べ終えたジャスリー^ンもアリサの部屋へ戻り、母と共にアリサの寝顔を眺める。……それこそ、ほかの兄妹や父が帰ってきて、アリサの部屋を訪れるまで、ずっと。

「ただいま。アリサは眠つてるのかな？」

「おかえりなさい、あなた。アリサなら、ずっと眠つていてますよ」

そのほうが、早く元気になれますしね。続ける母に、父は微笑みながら寄り添い、共にアリサの寝顔を眺める。ちなみに、それは兄妹たちも同じである。

帰ってきた兄妹たちは、みな一目散にアリサの部屋を訪れ、眠っているアリサの寝顔を眺めていたのだ。

結果、アリサが目を覚ましたときは全員がアリサの部屋に集まり、アリサを眺めていた。

「おはよう、アリサ。調子はどう？」

「お……はよひ、とうさま、かあさま、にいさま、ねえさま」

アリサが目を覚ましたことに気がついた母は、微笑みながらアリサに問い合わせ、そしてアリサの額に手を当てた。アリサの額はまだ熱い。

「まだ調子は悪そうね」

「んー、でも、咳が出ないから大丈夫だよ」

アリサは言うが、だが、顔色だけで考えるとまだ調子は悪そうである。

結果、家族の考えは一致した。『アリサ、また強がりを言つて』といつものに。

「むー。大丈夫だよ、咳が出ないから」

「でも、まだ熱は高いよ？ 本当は大丈夫じゃないでしょ？』
「大丈夫だつたらあ！」

いつも熱を出したときと比べると、大分楽だから、大丈夫だよ！
アリサは言うのだが、家族はそんなアリサを微笑ましげに眺め、

そして、代表して父が抱きしめた。

突然抱きしめられたアリサは、当然ながら、驚く。

「どうせま、どうしたの？」

「気になくてもいいよ、アリサ」

父は言うのだが、アリサは気になるらしく、そして、気になると寝付けないのか、家族が眠るよう促しても寝らない。

「だって、気になるもん」

アリサはそう言って眠らず、結果、熱が下がるまでの時間を長くすることになったのであった。

そして、家族はそんなアリサを献身的に世話をし、互いに愛を知る「ことになるのであった。

悪夢再び

何だらうね、私のこの運の悪さ…………、って言つか、悪の貴族どもの多め。

私は、再び誘拐されています。

まあ、またベッドの上だけどね。誘拐とは言つても、私を誘拐した貴族は私に害を成すつもりはないようだし。

「本日はこのような強硬手段を使用することになり、大変申し訳ございません、ドーリス公爵家の末の姫君」

「…………帰してください」

「申し訳ございませんが、それは出来ません。公爵殿が我々の要求を飲んで下されば、すぐさまお返し致しますが」

…………つまり、私をエサにとつたまに脅しをかけようとしているわけか。どうやって逃げよつかな。とつたまたちに変な迷惑をかけるわけにはいかない。

どうさまで迷惑をかけるくらいならば、死んでやる。

そう思つた私は、すぐに手に火を出す。この火で燃え死んでやる。そう考えたのだが、それは当然誘拐犯に止められた。

「末の姫君。申し訳ございませんが、しばし、お休みください」

そして、その言葉を最後に、私の記憶は途切れた。

ドーリス公爵家。そこでは、怒りに顔を真っ赤に染めた家族がリビングに集まり、アリサの救出計画を練つていた。

「今回の誘拐犯は誰だらうねーえ」

「誰だつてかまわなーいさ。 どうせ、死ぬんだからね」

「まあ、すぐには死なせないがな。…………ほかに関わっている貴族の名を聞きだすまでは、待つているんだぞ？」

騎士であるセインやカインが告げると、それに静かに父が言葉を返す。

が、父のその言葉は危険で、さらに危ない言葉が続く。

「聞き出したら後は勝手にしてかまわない。切り捨ててもいいし、陛下に処断を任せてもかまわん」

「やだなあ、父さん。決まつてるだろ？」

切り捨ててやる

そして、ドーリス公爵家では、アリサを誘拐した犯人の末路が完全に確定した。

ちなみに、この間も父の手足がアリサの行方を捜索している。彼らは、待っているのだ。がむしゃらに探すよりは、場所が確定してからみんなで乗り込んだほうが話が早いのだから。

だが、彼らにはその待ち時間が半端なく長かった。時間にすればそこまで言つほどに長くはなかつたのだろうが、だが、彼らには相当な時間に感じられた。

「公爵様。アリサお嬢様の居場所が判明いたしましたつ！」

「どーだつー?」

彼らが知らせを待つてしばらくして、ようやくアリサの居場所を判明させた父の手足が、彼らに姿を見せることなく、アリサの居場所を告げる。

これからは、手足たちの役目ではなく家族の役目である。彼らは、田で会話を交わし、立ち上がりがつた。向かうのは、公爵家の男性陣だ。

「ここにちは、伯爵殿。可愛い妹を返していただきに参りました」「おやおや。何のことですか？ どなたのことを話しておられるのでしょうか、宰相補佐殿？」

いけしゃあしゃあと。伯爵の言葉を聞いた彼らは同時にそう考える。そして、問答無用に屋敷に足を踏み入れた。

「宰相補佐殿とあらうものや、公爵を名乗るあなた方が、不法侵入ですか？ 陛下にお知らせせねば」

「そうなつたら、あなたもお終いですね。 父の手足が、アリサがこの屋敷にいると知らせました。観念しなさい」

ルウインが言つと同時に、伯爵は僅かではあるが顔を歪ませる。それが、父たちこの屋敷にアリサがいることを知らせた。

「アリサがどこにいるか、吐きなさい」

セインは佩いていた剣を鞘から抜き、伯爵に突きつける。

「…………怖いですね、セイン大隊長殿」

「そんなことを話す余裕があるのでしたら早くアリサの居場所を言いなさい」

「…………客間の一つに寝かせてますよ」

「どの客間ですか」

「教えません。自身でお探しなさい」

その瞬間、セインとカインの瞳に炎が灯る。同時に、カインも剣を抜きセイン同様に伯爵に突きつけた。

「アリサを殺したいのですか？ あなたは」「クククッ。それも面白いですね」

……伯爵の命、終アフラグが立ちました。

「父さん、こいつ、今すぐ殺す。樂には死なせるものか。散々苦しませてから殺してやる。……カイン、アリサを探しておけ」「分かった。ルワインに、行こう」「セイン、聞きたいこともあるから、一応話せるレベルで痛めつけろ」

そうしてカインは剣を鞘から出したままで、メイドを捕まえ、アリサのいる客間を聞き出そうとする。だが、メイドの殆どはアリサの存在は知らなかつた。この屋敷にアリサがいることなど、客がいることなど知らなかつたらしい。

カインは、ならばと、客間をすべて案内させることにしたらしい。手に持つ剣で脅しながら、案内をさせた。

だが、客間のすべてを順に探しても、中々アリサは見つからない。そうしてついに、次の部屋が最後の客間となつていた。

「ここに、アリサがいるのかな？」
「……あの伯爵だ。素直に教えているとは思えない」

カインとルワインはそう話しながら、静かにその客間の扉を開く。その部屋のベッドには、アリサが静かに横たわっていた。

ベッドに横たわるアリサの姿を確認したルワインとカインは、急いでベッドへ近寄る。ベッドに横たわるアリサは眠つていた。

「アリサ。……怪我とかは。ないみたいかな?」

「ああ。呼吸音を聞いていても、異常は感じられない。大丈夫だろ
う」

その後、カインが眠っているアリサを背負い、セインや父の待つ場所へと戻る。戻ると、すぐに父やセインは、カインの背中に眠るアリサを確認する。

「ああ、アリサ。大丈夫そうだね、よかつた」

「カイン、ルゥイーン。アリサを連れて帰つてくれ。後で、戻つて来
い」

「分かつた。カイン、一度帰ろつ」

そうして馬車を呼んだルゥイーンとカインは、アリサを抱きかかえたまま馬車に乗り、家に帰る。そして家に帰ると、帰りをずっと待っていた母や姉たちが、アリサを抱えた課員たちを出迎えた。

「カイン! アリサは! ?」

「怪我も無い様だし、大丈夫だと思つよ。でも、一応アレグラさん呼んで、診てもらおう」

「ええ、今呼ぶから、カインはアリサを寝かせてあげて」

それから母はアレグラを呼びに向かい、カインやルゥイーン、そしてジャスリーンとエルミナは、アリサを寝かせるために、アリサの部屋へと向かう。

その間、アリサはずつと眠りっぱなしで、全く目を覚まさない。少しくらい、何かの反応を返してよさそうなものなのに、それでもアリサは全く反応を見せなかつた。それが、兄弟たちの不安を誘う。

そして、ベッドに寝かされたアリサは、アレグラの到着を待つことになるのであった。

眠り姫

眠り続ける姫。その名は、スリーピング・エムーライ眠り姫。

数日経つても以前の目を覚まさない、小さな眠り姫。体に異常は現れず、ただただ眠り続ける姫君。

物語では、眠り姫は王子のキスで目を覚ました。では、現実の姫は？

「遅くなりましたっ！ お嬢様の、様子は…？」

母がアレグラを呼んで少しして、アリサが誘拐されたことを聞いたアレグラが急いで駆けつけた。

急いで駆けつけたアレグラは、ルワインやカインを部屋から追い出し、アリサの診察にかかる。そして、診察と同時に、服を着替えさせた。

「怪我はしていませんし、熱もありません。ですが、嫌なにおいがします」

アレグラが詫び、ジャスリーンやヒルミナ、母はその言葉に反応しアレグラに問い合わせる。

「嫌なにおいで、何においなの？」

「薬のにおいです」

「一体、何の薬のにおい？」

「……睡眠系の薬のにおいです。しかも、結構強いものですね」

その瞬間、母たちは目を見張らせた。そして、咄嗟に眠っているアリサを見つめる。

「 ですので、お嬢様はしばらく眠り続けると思われます。使われた薬が何の薬か分からぬ以上、下手中和剤は使用できません。エルミナ様、薬はあなたの専門のはずです。何か、お分かりになりませんか？」

「 ゴメン、分からない」

そう告げるエルミナの表情は悲しげだった。自分の力が至らないばかりに、アリサの治療が難しくなる。処置が辛くなる。

結果、彼女たちは直接伯爵の元へ出向き、アリサに使った薬の名前を聞くこととなり、その後ようやく中和剤を使うこととなる。

もちろん、その際はエルミナが魔法で伯爵を脅し、殺そうとしたことは言つまでもない。

だが、中和剤を使うときが遅かつたのか、薬を中和してもアリサは目を覚まさない。そのまま眠つたままだ。

とにかく、深く、深く、昼夜と眠り続けていた。

父たちは、アリサを起こすために頑張る。必死で、とにかく考え付く方法をとにかく試す。

アレグラ以外の王宮医師を呼び、仕方なくではあつたが異性であるこの国最高峰の医師に診せても、それでもまだアリサは目を覚まさなかった。

「 薬は中和できているようですから、後はお嬢様と、家族の方の力しだいですね。毎日、声をかけてあげてください。お嬢様が反応するような言葉を、かけ続けてあげてください」

それからは、家族の用事が定まった。母は基本ずっとアリサについていて、世話をし、声をかけ続け、父たちは仕事に行く前にアリサに話しかけ、そして、帰ってくるとすぐにアリサの部屋にやってきて、話しかけ続けた。

アリサが早く用を覚ますように。早く、元気なアリサを見るために。

「アリサ。朝だから起きよう?」

「さすがに寝坊すぎるよ。いい加減起きなくちゃね」

「ほひ、起きて」

家族は毎日そうして声をかけるのだが、アリサは用を覚ます気配を依然として見せない。眠りっぱなしだ。

そんな日が数週間続いた頃、突然アリサは用を覚ました。

「か……あさま?」「……お家?」

「ええ。ええ、そうよ。」アリサのお部屋よ

用を覚ましたアリサに、母は涙をその用に浮かべながら答えてやる。そんな母の様子にアリサが不思議そうな表情をする。だが、母は娘のそんな様子に気がつかない。

結果、気づいてもらいたいアリサは母の服の袖を引いて考えた。ようだが、その際にうまく体を動かせないことに気がついた。結果、とりあえず声をかけるだけにとどまつたようだ。

「かあさま、やつしたの? 私、大丈夫だよ?」

「え、ああ、ごめんなさい、アリサ。 何があつたか、覚えている?」

「……また、誘拐されちゃったんだよね」

母の問いに答えたアリサの表情は、暗い。また、両親に、家族に迷惑をかけたことが、アリサに罪悪感を感じさせていた。

「「めんなさい。」「めんなさい、かあさま」

「どうして謝るの？ アリサ。アリサは何にも悪くないのよ？」

「だつて、また迷惑かけちゃつたもの。……」「めんなさい」

しょんぼりとしながら謝罪する娘を、母は優しく抱き上げた。そして、その頭をよしよしと撫でる。

「悪いのはあの伯爵だからね。アリサは全然悪くないの」「あの人、伯爵だつたの？ ……言葉遣いは丁寧だつたけど」「そうよ。それでね、アリサはずつと眠つてたの。だから、体がかしづらいでしょ？」「ずつとつて、どのくらい？」

そうして母に眠つていた期間を聞かされたアリサは驚きで目を見張らせる。

そしてその後、目を覚ましたアリサをベッドに戻し、母は家族たちにアリサが目を覚ましたことを知らせるために、人を飛ばす。

もちろん、全員があつとて聞に家に帰ってきた。

『アリサ！』

「おかえりなさい、とつたま、にこやま、ねえやま」

「ただいま、アリサ。大丈夫かい？」

「うん。心配かけて、ごめんなさい」

「謝りなくていいよ、アリサ。悪いのは全部あの伯爵だし、それに、きちんととしかるべき罰は与えたからね」

それが、一族郎党誰もが被害にあつたものであることを、アリサは知らない。

そして、主犯である伯爵の罰が処刑となつたことは、誰もアリサに知らせてはいないが、アリサは何となくで予想はしていた。

それが、アリサを悲しませたことを、家族たちは知らない。自分のせいで誰かの命が奪われることを、アリサは望んでいない。

だが、家族は絶対にアリサに害を成したものは許さない。アリサもそれを知っているから、家族に何も言えず、ただただ、自分の心の中にその気持ちを押し込め続けることになる。

閉じ込めた気持ち

私が一度目の誘拐をされてしばらくして、私を攫つた伯爵の処刑が完了したと、耳にした。私を誘拐した伯爵。だけど、そこまでしなくてもよかつたのではないかと、私は思う。

でも、それじゃダメらしい。ここでの伯爵を許せば図に乗つた貴族が増え、再び私に害を成そうとするかもしれない。そう言われて、私は仕方なく反論を諦めた。

でも、伯爵の件に関しては、聞きたくなかった。残酷な話は嫌だつた。でも、聞かなくては無らなかつた。私は当事者なのだから。

とうさまやにこなまたちに伯爵のことを聞かされたとき、とても悲しかつた

「アリサ、おいで」

そんな私の気持ちを分かつてくれたのか、かあさまが静かに私を呼ぶ。その言葉に甘えて、私はかあさまに抱きついた。私を優しく抱きしめてくれるかあさまは、同じように、優しく私の頭を撫でる。その撫で撫では気持ちがよくて、それだけでさつきの悲しい気持ちの一部が飛び去つていくような感じがした。

かあさま恐るべし。たつたの数秒で私の気分を変えてしまふだなんて……。

でも、いいか。気持ちいいし。といつか、かあさまだけじゃなくて、みんな頭なでの上手だよねえ。

そう思つてみると、突然頭を撫でていた手が離れ、別の手が私の頭に伸びてきた。とうさまだ。同時に、私はかあさまの腕の中からとうさまの腕の中に移動させられた。

「アリサ、悲しいだろ？ それが貴族なんだよ。貴族は、いつだって危険と隣合せだからね。何かあつたら、しつかりと罰しなくてはこんな事件が続いてしまう。だからね、今回の判断は仕方の無いことなんだよ」

分かつてゐる。分かつてはいるんだけど、心の奥底ではやつぱり反論を返してゐるんだ。『そこまではしなくて、何とかする方法はあつたんじやないか』つて。

私は俯きながらそんなことを考へる。

「分かつてくれ、アリサ」

「分かつてゐる。でも、やつぱり悲しい」

頭では分かつていても、やつぱり悲しい。でも、これ以上は言わないほうがいいだろ？ やうしなくちや、とつさまたちが後悔しそうだから。

だから、私は俯いていた顔を上にしてとつさまににっこりと微笑んだ。それだけで、とうさまたちはホッとした表情を見せる。

単純だな。何だか私が腹黒くなりかけていると思う瞬間。

そして、私は悲しい気持ちを心の奥底に封印して、とつさまたちに笑顔を向け続ける。これ以上、余計な心配をかけないためにも。……まあ、ずっと私を見てきたかあさまくらいになら、バレるかもしれないけど、それでもとうさまくらいなら騙せるだろ？ ねえ、だから。だから、心配しないでよ。私はだいじょぶだから。

それからはみんなでお茶やジュースを飲みながら話をする。家族団らんの時間だ。

ちなみに、私がジュー。いつものことだけど、私だけ。そ

れもちよつと悲しいんだけじね。

ちなみに、現在の席の状況。私の右に、かあさま。そして、正面にとうさま。心なしかとうさまが悲しげにしてこるよう見えるのは
うん、放置しよう。

だつて、私はつきり言えばとうさまよりはかあさまのほうが好きだし。だつて、いつもかあさまのほうが一緒にいるわけだし。いやいやいや、とうさま、そこまで悲しそうな顔をしなくていいですよね？ 私、何も言つてないよ？

「とうさま、その手は痛い…………」

私が言つと、瞬間にかあさまがとうさまを睨む。睨まれたとうさまは蛇に睨まれた蛙ようしく縮こまる。だが、かあさまの表情は依然として怖いらしい。とうさまが縮こもつたままだ。

今のかあさまはどんな表情をしているのだろう。そう思いながら、かあさまの顔をこそーっと盗み見る。だが、かあさまのほうが一枚上手だつた。かあさまは私が盗み見ることを察知したのか、瞬間的に笑顔に戻る。

「どうしたの？ アリサ」

「…………何でもない」

結果、かあさまに問われてもそうしか返せなかつた。

そして、かあさまの表情が完全に元に戻つてからは、にこやかに団らんの時を楽しむ。とうさまやかあさまは、私の勉強のためも兼ねてか、たくさん魔術の話をしてくれた。

それは、とうさまやかあさまの昔の話らしいが。

「アリサは、昔この国が戦争をしていたのは、ルヴィンたちから聞いているわよね？」

「うん。ここにまたちは生まれる前に、隣の国と戦つてたんだよね？」

「そう。かあさまはね、とうさまとその戦場で愛を確かめ合つたのよ？」

「何となく、聞かないほうがいいような気がするのは気のせいでしょうか。その……いわゆる、ひとつ……年齢制限をつけるべき話になるような気がするのは、私だけ？」

ちなみに、その話を聞かされているとうさまは、昔を懐かしんでいるのか、遠い目をしている。いやいや、こんなときはとうさまがかあさまを止めなくちゃでしょ。」

だが、とうさまはかあさまを止めようなどではない。その結果、かあさまの話が始まった。

「アリサは、魔術の相性は分かる？」

「相性？ 火と水は相性が悪いとか、そうなるのかな？」

「その通り。で、アリサ。かあまたちは属性はなんだったか、言える？」

「んと、とうさまが風で、かあさまが火」

「その通り、よく出来ました」

意外とまじめな話でした。おかげでホッとする。そして、魔術の相性が、どう、愛を確かめ合つことになるんだひとつ。私は首を傾げる。

すると、かあさまは淡く微笑みながら私の頭を撫でる。そして、続きを話してくれた。

「風と火は、とても相性がいいの。だからね、とうさまとかあさま

は基本、セツトで戦場に送られていたのよ

「かあさまも戦場に行つてたの？」

「ええ。あの時はね、貴族だらうが庶民だらうが、男だらうが女だらうが、みんな戦場に駆り出されていたのよ

……それは、大変だ。それで、相性がいいからセツトで戦場に送られて、一緒に戦つたから仲良くなつたのかな？

ためしにどうさまに尋ねてみると、その通りだと返つて来はするのだが、どうさまは目線を合わせてくれない。どうして？ 私はかあさまに尋ねる。

「その話は、アリサにはまだ早いから、もつと大きくなつたらしてあげるわ。や、今は少し休みましょうか」

年齢制限来ましたね。それは、聞かないほつが正解だ。

だつて、生まれ変わる前の前世でも、ひきこもりの登校拒否だつたせいか、そう言つた話には全く縁が無かつた。

だから、いざ聞くとなると、何となく恥ずかしいんだ。だから、今は聞かないようにしておこう。

だつて、今の私はまだ小さな子供なワケだし。うん、聞かないほうがいいよね。

そう思いながら、私はかあさまの指示に従つて部屋に戻り、ベッドに潜り込んだ。 それからはあつという間に眠りに落ちた。

気持ちで左右されます

伯爵が処刑され、父や母がアリサと共に団らんの一時を楽しんだ翌日、アリサは熱を出して寝込んだ。理由は、家族の誰もが予想していた。

伯爵の処刑が原因である、と。

アリサは基本的に人の生死に^{関わること}を嫌っている。それは、突然家族を奪われた悲しみを、お兄さん越しに聞かされ、知つているからだ。

彼女が前世でその命を失った後の、彼女の叔父や叔母の様子をジブリールから聞かされていた。故に、アリサは人の生死に^{関わること}は大嫌いだった。

自分のせいで、誰かを悲しませる。自分のせいで、その命を奪われてしまう。

残されたものは、どれだけ悲しいだろう。どれだけ辛いだろう。アリサは、結局は体験したことが無いので、詳しくは分からぬ。聞いた話でしか知らない。だけど、それは悲しい。

そうして、自分一人で全てを抱え込み、抱え込みすぎた結果がこの発熱だった。

アリサは、伯爵の処刑が決まったその日から、熱を出したこの日に至るまでずっと、悪夢に魘されていた。

夢に出てくるのは、処刑の決まった伯爵と、顔も知らない伯爵の家族、親類たち。アリサは、いつも夢で伯爵が殺される場面を見る。そして、伯爵の家族や親類に責められる。

アリサは、顔も知らない伯爵の人間に、何度も何度も責められ

るのだ。それが何日も何日も続いた挙句、伯爵が殺されたその日はいつも以上に夢で責められた。

その結果が、この発熱だつた。連日の夢における精神的ダメージ。それが、アリサにかなりのダメージを与え、発熱を促すことになった。

「アリサ。辛いときは相談なさい。何でも一人で溜め込もうとしないの」「いいの？」

「全くだ。それとも、僕たちは信用できないの？ 信頼してくれていいの？」
「そんなはず、ないよ……。私、にいさまたち、大好きだもん。信頼、してるもん」

母やルワインの言葉に、息も絶え絶えに返事を返すアリサ。そんなアリサの頭を、部屋に揃つた両親や兄妹たちは優しく撫でる。彼らの可愛い小さなアリサ。彼らはそんな小さなアリサを優しい目で見守る。

アリサが眠りに落ちて、兄たちが仕事に遅れると、急いで屋敷を出て行くまでの間、ずっと。

その後は、アリサについているのは母だけとなり、母は、シャーナに冷たい水を張つたらしいとタオルを用意させ、濡らしたつめたいタオルをアリサの額に置く。

その冷たい感覚が気持ちいいのか、眠つているアリサは眠つていながらも淡い微笑みを見せる。

母はそんなアリサを微笑ましげに眺め、同様に微笑を見せる。

そして、その後は母はシャーナにアリサを任せ、あれ裏を呼ぶためにアリサの部屋から立ち去る。

それからしばらくして、母がアリサの部屋に戻ってきたときは、母の横にはアレグラが控えていた。

「アリサ、アレグラが来たから起きなさい」

「お嬢様、お眠いかとは思いますが、お起きくださいませ」

母とアレグラが揃つてアリサを起こすと、アリサは呻りながらも、起きようとはしない。だが、母はアリサに対して容赦はしなかつた。

「起きなさい、アリサ。……注射してもいい?」

「やだつ!」

母がその言葉を放つた瞬間、アリサは本能か何か分からないが、飛び起きる。そして、その言葉を返したときはまだ寝ぼけていたのか、完全に目が開いたのは今だつた。

そして、目を覚ましたアリサは、目を白黒させながら辺りを見回す。

「おはよひざります、お嬢様。診察をさせたいのです
が、よろしいですか?」

「んあ? アレグラ、いつ来たの? 今日はそんなに辛くないから、
大丈夫だよ」

「無理をしないの。アレグラ、アリサをお願いね」

母が言つと、アレグラは畏まり、了承の意を見せる。そして、にこやかにアリサに声をかけながら服に手をかけ、捲り、魔力を以つてアリサの体調を探る。

胸の上に手をかざし、魔力の返り値を測つていた。そして、その魔力を以つて、アリサに治癒魔法をかける。

「本当に、無理はいけませんよ？ 強がりを仰りす、辛いときは辛いときちんと口にしましょうね？」

「……そんなに辛くないもん」

「魔力は嘘を言いません。強がりを仰らなくとも大丈夫なんですよ」

アレグラの言葉に必死で言葉を返すアリサだったが、その反論はアレグラによつて黙らされた。そして、そのアレグラの指示で再び寝入る。

そして、アリサが再び寝入つたことを確認したアレグラは、いつものようにアリサの薬を出し、母に手渡す。

「苦いですが、きちんと飲んでいただいてくださいね？」

「分かってるわ。アリサが嫌がつてもきちんと飲ませます」

そうして寝入つたアリサを眺めながら、母とアレグラはそやつて話をし、その後、アレグラは母に挨拶をして帰つていく。

それからは母はずっとアリサを見守り続けた。熱のせいで辛そうではあるが、それでも気持ちがよさそつに眠つてゐる愛娘。

そんなアリサの寝顔を見ながらも、母は考える。アリサの優しさを。

自身を誘拐したが故に処刑された伯爵。自分に害を成したものだというのに、それでも殺されたという話を聞くのは相当辛かつたようだ。

辛いのならば、言って欲しかつた。言ってくれれば、存分に甘やかし、可愛がり、アリサの心から、伯爵のことを消し去るつもりだつた。

だが、アリサは言わなかつたが故に、自分一人で抱え込むことが出来なくなつて熱を出した。

「本通り、無理をしちゃさよ　　アリサ」

やがて母は既に続ける愛娘に、優しく瞳を向けながらやがて母が
る。

返つてくる言葉など、無ことかが分かっていないながらも

。

この日の夕方、帰ってきた家族たちは急いでアリサの部屋へ向かう。そしてアリサの部屋に入ると、すぐにアリサのいるベッドへと向かつた。

父たちの帰ってきたとき、アリサはちょうどよく田を覚ました。だが、まだ田はボーッとしていて、うまく焦点が合っていないよう、父たちには見えた。

「ただいま、アリサ。調子はどう？」

「おかえり、なさい。とつとまたち。具合、大分いいよ？」

アリサは言うのだが、それも強がりであることを父たちはよく知っている。アリサが強がりを言うことが珍しくないことを、父たちは知りすぎるほどに知っているのだ。

だから、父たちはアリサの言葉を完全に信用することをせず、何も言わずにアリサの額のタオルを取り、アリサの額に手を当てる。アリサの額は、濡れタオルによつて大分冷えてはいたが、それでも十分に熱かつた。

「アリサ、強がりを言わないで」

「強がりじゃないもん」

「熱が高い以上、強がりにしか聞こえないよ」

「　　リンねえさま、嫌い」

その瞬間、ジャスリーンの表情は驚愕のそれに変わる。アリサに嫌いだといわれたことが、相当のショックを与えたらしい。ジャスリーンはふらつきながら、アリサの部屋のソファーへ飛び込む。そして、そんなジャスリーンをルヴィンが慰めに向かう。嘗て、

アリサに嫌いだと言われたルワイン。ルワインはアリサに嫌いだといわれたときのダメージを知っているからこそ、ジャスリーンを慰めることが出来たのである。

「ジャスリーン、アリサの機嫌が戻るまでは、耐える。今度アリサを説得してやるから」

「 ありがとう、兄さん」

それからは、ジャスリーンとルワイン以外の兄妹たちはアリサに付き添い、そして、それからも強がるアリサに優しい声をかけ、生暖かい視線を向ける。

その視線に、アリサは大丈夫であることを必死でアピールしようとするとのだが、それでもやはり無理は辛かつたらしく、あつさりと、起き上がっていた状態から横たわりの状態へと戻った。

「無理しちゃダメだつて言つたろ？ ほら、しばらくお休み？」

「ん 、おやすみなさい」

それからは素直に目を瞑り、寝入る。アリサの部屋で、あつとう間にアリサの健やかな寝息が響き渡ることとなつた。
下がつていな熱。依然として高いままの熱。それでも、自分は元気だと言い張る、強がりばかりの愛し子。

でも、そんなアリサが心の底から愛おしくて。可愛くて。

だから、彼らは熱が高い状態で気持ちよさそうに眠るアリサを、優しく見守り続ける。アリサに嫌いだと言われたジャスリーンすらも、優しくアリサを見守つていた。

アリサに無償の愛を捧げ続ける家族たち。その愛に答えようと、気づかずとも努力をしているアリサ。

アリサのまわり、家族のまわりはいつだって愛に包まれていた。

アリサを愛おしく思う家族たち。自分を愛しんでくれる家族を、心から愛しているアリサ。

嫌いだと口にしたといえど、それでもアリサは家族全員を愛している。結局は口先だけなのだ。

アリサが心の底から家族を嫌うことは絶対にあり得ない。同様に、家族がアリサを嫌うこともあり得ない。

それが、ドーリス公爵家の家族愛。

「んい……」

「目が覚めた？ 調子はどう？」

「リンねえさま……？」 んー、ボーッとする

田を覚ましたアリサに、ちょいとぐそばで見守っていたジャスリンが問いかけると、アリサは寝ぼけ眼ながらも、素直に返事を返す。

先刻、ジャスリンに嫌いだと告げたことを、すっかり忘れた上で。

「よしよし、アリサはいい子だね。早く元気にならなくちゃね」

「んー、はっ！ ねえさま、さつき嫌いって言つたじやんか

！」

「うふ、でもね、私はアリサのこと大好きだから」

ジャスリンが言つと同時に、アリサは顔を真っ赤に染めた。直接大好きだと言われたことはあまり無かつたためか、アリサは耳まできれいに染めていた。

「あーもう、アリサは可愛いねー」

そんなアリサを、ジャスリーンはにこにこと微笑みながら抱きしめる。容赦なく、顔を耳まできれいに染めこんだアリサをぎゅっと抱きしめ続けた。

「ねえさま、嫌いだつて言つたじやん！ はーなーしーてーつ！」

「だーめ。私はアリサが大好きだから、抱きしめるの」

そんなアリサに、ジャスリーンはずっと微笑みながら、照れ続けている妹を優しく抱きしめ続けることにしたらしい。アリサが反論を返しているようだが、それでもジャスリーンはそんなアリサの反論を無視し、抱きしめ続けていた。

「アリサは本当に可愛いね。だから、大好きだよ」

「……私が可愛くなかったら、嫌いなの？」

「ううん。アリサがアリサでいる以上、私はアリサが大好きだよ」

「 つ！」

恥ずかしさに耐えられなくなつたアリサは、自身を抱きしめる姉から離れようと暴れるのだが、暴れるアリサをジャスリーンがしつかりと止める。

思い切り抱きしめて、アリサを止めたのである。アリサが無理をして、熱を出さないようにな。

「ねえさま、離してえつ！」

「ダメ。暴れたら熱を出すじゃないの」

「ねえさまが離してくれれば暴れないもん！」

アリサは言うのだが、ジャスリーンはアリサを離すことしない。離したら自分の下から去ると分かつていて、離すような愚行に走る

ジャスリーンではないのだから。

まあ、結果としてはアリサは暴れることを止めず、姉の手から逃れようと足掻き続けるのだが。

そしてその後、疲れ疲れたアリサは再び眠りに落ちる。嫌いだと言った、だけれど愛する姉の腕の中で深い眠りに落ちていった。

滅びの歌

アリサが新たに見つけた愛。

愛する家族に教えてもらつた愛。

嫌いだと口にしても、本当は愛している家族。

何度も嫌いだと言つても、愛していると告げてくれる家族。

愛とは何か。それは、家族が教えてくれた。
失う恐怖は、新たな家族が奪つてくれた。

両親を失い、その数年後に命を落とした自分を後悔する気持ちを、
新たな家族が奪つてくれた。

死にたくなかつた。それなのに、死んでしまつた。
悲しませたくなかつた。それなのに、悲しませてしまつた。

後悔した。あの日、出かけて事故に遭つた自身を、深く後悔した。

でも、そんな嫌な気持ちは新たな家族が奪つてくれた。
そんなことを考える余裕も無いほどに、無償の愛を注いでくれた。
何があろうとも、自身を愛してくれた。

だから、アリサは家族を愛した。

「目が覚めた？」
「ん……、かあさま？」

アリサが目を覚ますと、そばにいる母の存在に気がつく。そして、

まだ少し寝ぼけ眼で母に抱きついた。突然抱きつかれた母は少し驚く。

だが、その驚きが消え去った後は、抱きついてきたアリサを優しく抱きとめる。

「どうしたの？ 嫌な夢を見たの？」

違う。そう言うかのように、アリサは首を横に振る。だが、それでも母に抱きついたままで離れはしない。

母は一体どうしたのだろう、と不思議そうな顔をしてはいたが、それでも可愛い愛娘を優しく抱きとめていた。

アリサが自ら離れるつもりになるまでの間。

「よしよし。何にも怖くないからね、大丈夫よ

優しく告げながら、母はアリサの機嫌が戻るのを待つ。それからしばらくして、ようやくアリサの機嫌は元に戻つたらしく、母から離れる。

「もう、大丈夫？」

「うん。かあさま、ありがとう」

自身から離れたアリサに母が優しく声をかけてやると、アリサは微笑みながら母の質問に答えた。そして、礼を言つ。そんなアリサを、今度は母が抱きしめた。アリサに可愛いと言いながら、ぎゅっと抱きしめる。アリサは、何が何だか分かつておらずに頭上に疑問符を出していたが。

「か、かあさま？」

「アリサ、絶対に一人でいろいろ抱え込んだダメよ？ 約束して

「…………どうして？ 私、大丈夫だよ？」

「抱え込んだ結果が、この発熱じゃないの？」

それでも、本当に大丈夫だつて言える？ 母の問いにアリサは視線を逸らす。

何せ、抱え込んだが故の結果が、この発熱なのだから。それで熱を出さなければ大丈夫だと言えただろう。だが、熱を出してしまった。だからこそ、母もこうして攻め込んでいるのだ。

何も言葉を返せないアリサ。母の腕の中で黙り込んでいる愛娘。母はそんなアリサをぎゅっと抱きしめた。優しく、丁寧に、されども愛が伝わるようだ。

「よしよし、攻めすぎたね。ごめんね、アリサ」

「…………かあさま、いじわる」

「うん、ごめんね。でも、覚えておいて。かあさまたちはアリサが大事だから、一人で抱え込まないで欲しいの。相談して欲しいの。分かってちょうだい？」

母が静かに問いかけると同時にアリサは小さく頷く。

家族がアリサを大事に思つてくれていることは、アリサはよく分かっていた。分かりすぎるほどに分かっていた。

家族は自分に惜しみなく愛を注いでくれる。本当に惜しみないくらいの愛を自分に注いでくれるのだ。この状態で家族の愛に気づかないほど、アリサは愚かではない。

「今度からはきちんと相談してちょうだいね」

「…………うん。心配させてごめんなさい」

「分かってくれればいいの。さ、早く元気になるためにも、そろそろ休みなさいね」

アリサが分かつてくれたことを理解した母は、早く元気をさせるためにもアリサを休ませる。冷たいタオルをアリサの額に置いて視界を奪つたのだ。

そして、視界を奪われたアリサは、昔のようにあつとこう間に眠りに落ちていった。

深く、深く眠りにつこうとするアリサ。そんなアリサの頭を、母は優しく撫でる。

アリサの熱い頭。その頭を冷ましてやるためにも、母は時折手を冷やしながらアリサの頭を撫で続けた。

そうして撫でられているからか、アリサの表情は落ち着いていて、気持ちがよさそうである。その表情は穏やかなもので、悪夢を見ている気配など、一切感じられなかつた。

だが、アリサは悪夢を見た。正確には、前世の夢を見た。あり得ない夢。これは、真実か妄想か。分からぬ。ただ一つ分かることは、これが夢であること。

何故、夢で自分の葬儀の場面を見なくてはならない。何故、叔父や叔母の泣き顔を、今更私に見せる。何故。何故。何故。

別れは、告げた。直接耳に届かずとも、心の中で告げた。一度と会うことの叶わぬ存在であるはずだった。

それなのに、どうして今、夢の中とは言えど、じつして会い見える？

いや、違う。会い見えるという表現はおかしい。だって、じつらの言葉は、叔父たちには届かないのだから。

ただただ、叔父叔母が自分を亡くし、悲しんでいる様を聞くだけ。聞かされるだけ。

耳をふたごでも聞く
叔父叔母の聲。その泣き声は懸鳴のよ
うだ。

感動が響き渡る。直接、脳裏に響く。

聞きたくない。

聞きたくない。

聞キタクナイ。

「アリガ。アリガ?」

「アリサ!? どうしたの!?」

突然驚かされたアリサを起こした母は、アリサの悲鳴を聞いて驚く。だが、すぐに正氣に戻り、アリサを抱きしめた。

だが、アリサの焦点はまだ合わない。合わせずにいるままで、尚叫び続ける。

「見たくない！　聞きたくない！　やだやだやだやだやだつ！」

アリサ！」

「じめんなさいじめんなさいじめんなさい！ だから、もう止めてえつ！」

「聞きたくない聞きたくない！　もう見たくないっ！」

アリサの叫び声は、止まらない。母の言葉が耳に残く」ともなく、

叫び続ける。

今のアリサの耳に届くのは、自分の選択のせいで泣いている叔父

叔母の慟哭。

今のアリサの田に映るのは、その叔父叔母の泣いている姿。

そこに、母の姿も、声も存在しない。あるものは、絶望に満ちた過去のみ、だ。

滅んだ愛

私は、誰？

私の名は、アリサ・クライシス・ドーリス。
違う。私の名は 神埼有紗。

ならば、アリサ・クライシス・ドーリスと言つ少女は、一体誰？
私はそんな人ではない。私は神埼有紗なのだから。
ならば、目の前にいるこの女性は誰？ こんな人、私は知らない。
ならば、ここはどこ？ こんな場所、私は知らない。

この手は、誰のもの？ 私の手がこんなに小さいはずがない。
この肌は、誰のもの？ 私の肌がこんなに白いはずがない。

ならば、この体は誰のもの？

「アリサ？ アリサ、どうしたの？」

「 誰？」

私は、あなたを知らない。母に声をかけられたアリサは表情を
変えることなく告げる。

その言葉は、母を動搖させた。母は、表情を変えずにその言葉を
放つた娘の肩をしつかりと掴み、自分と目を合わせる。
だが、それでもアリサの表情は一切変わらなかつた。表情を一切
変えずに、アリサは再び問う。「あなたは誰？」と。

「アリサ、ふざけないで！ 何を冗談を言つてゐるの！？」

「知らない。私は、知らない。あなたは誰なの？」

「あなたが私を知らないと言つのなら、あなたは一体誰なの！？」

「私は、有紗。神崎有紗」

それを聞いた母は目を見張らせる。その名が、以前聞いた覚えのある名前だったからだ。

それは、彼女の愛娘、アリサの前世の名前。彼女の子として生まる前の、アリサの名前だ。

「ここ」、どこ？ 叔父さんと叔母さんのところに帰らなくちゃ」

「ここは、あなたの家よ、アリサ」

「……？ 違つよ、ここ、私の家じゃない。だって、こんな場所

知らないもん」

「いいえ、ここはあなたの家、あなたの部屋よ」

「違うつてば。っていうか、あなた、誰？」

アリサの言葉は母を完全に絶望に陥らせた。深い、深い悲しみに落ちた母。アリサは、そんな母を心配そうに見ていた。

「あの、大丈夫、ですか？」

だが、母は反応しない。結果、アリサは自力でここがどこか判明させようとしたらしく、ベッドから降りる。だが、足を進めようとした瞬間に、体がふらついた。

そして、ふらついたアリサは、そのまま床に座り込む。何故こうも体がふらつくのか、理解が出来ないまま。

その後、アリサは壁に身を任せながらも、部屋から出ようとすると、

「お嬢様、何をなさつておられるのです。まだ熱が高いのですから、お休みになられてください」

「……誰？」

アリサが壁に寄りかかりながら部屋を出ると、ちょうどアリサの部屋に食事を持ってきていたシャーナとほかのメイドが、アリサが部屋を出て歩いていることに気がつく。もちろん、につこりと微笑みながら、アリサに部屋に戻るよう促した。アリサの質問を完全に無視して。

「ダメですよ、お嬢様。熱があるのに無理をしては、もう熱が上がってしまいます」

「だから、誰？」

アリサが再び問い合わせると同時に、シャーナはアリサの額に手を当てる。アリサの額が予想以上に熱いことに気がついた。

「熱が高いのですから、お辛いでしょ。きちんと食事をお取りになつて、しっかりとお休みになられてください。よろしいですね？」

「は……ハイ……」

アリサはシャーナの無言の圧力に勝てなかつた。周りにいる人間が誰なのか理解できぬまま、一応と言つた形でシャーナの言葉に従い、ベッドの上に上がつた。

それを見たシャーナは微笑み、自分たちが持つてきた食事を、アリサのひざに置く。そして、無言で食べるよう促した。

そして、シャーナに無言で齧られたアリサは、恐る恐る食事に手をつける。恐怖に襲われながらも、一応食事をきつちりと摂る。

「はい、お薬です。きちんと飲んでくださいね」

「ハイ」

アリサはシャーナに逆らえない。恐る恐るで薬の溶けた水の入ったカップに口をつけ、一気に水を呑んだ。苦い。

苦味で、表情が一気に歪む。そんなアリサにシャーナは甘い飲み物を差し出した。

「お嬢様、どうぞ」

そうして甘い飲み物のおかげで何とか口の中の苦味が消えた頃、ずっと茫然自失状態だった母が、もとの状態に戻る。

そして、すぐさまベッドに座り込んでいるアリサを捕まえた。そして、その目をしっかりと見る。

「な、何ですか？」

「アリサ、私が分かるよね？　かあさまを知らないって言つたら今度こそ怒るからね」

「かあ、さあ？　えと、それって、母親つて意味でしたっけ？」

絶望の歌。娘をこよなく愛する家族を絶望の淵に追いやる悲しい歌。

その歌を、アリサは歌う。何も知ることなく、無意識のつむにその歌を言葉に紡いだ。

その後、アリサはさすがに辛くなつたのか、出て行くことを諦め、眠りにつく。

母は、祈つた。目を覚ましたらこつものアリサに戻つていいことに。神崎有紗という前世ではなく、今生の娘である、アリサ・クライシス・ドーリスに戻つていることに。

そして、母はそう考えながらも、このことを父たちにどう説明をしようか、真剣に思案していた。

アリサを心の底から愛している家族たち。それなのに、知らないと言われたらどう思うだろう。

悲しいだらつ。切ないだらつ。辛いだらつ。その悲しさを、家族たちにも背負わせることになる。

だから、母は田を覚ましたアリサがいつものアリサに戻っていることを、強く、強く願い続けた。

彼女の愛する家族のために。そのために、強く、強く。

結局、あの後日を覚ましたアリサは、アリサであり、アリサではなかつた。

彼女はアリサであり、神崎有紗だつた。そして、生まれ変わり、アリサとしてすゞした日々を全く覚えていなかつた。

『あなたたち、誰?』

父たちが帰つてきて、みんなでアリサの目覚めを待つていたのだが、目を覚ましたアリサはまず、その一言を放つた。それが、父たちに深い悲しみを与えたことを、アリサは知らない。知り得ない。アリサは今、神崎有紗であり、ドーリス公爵家のアリサではないのだから。

「アリサに、何があつたんだと思つ?」

故に、彼らは家族会議を行つ。アリサが自分たちを思い出してくれるように。前世に縛られず、今生を樂しませるために。

ちなみに、アリサは現在、やはりシャーナには逆らえずに夕飯を食べ、薬を飲まされて眠つてゐる。そのそばには、シャーナが付いていた。

「お母さん、アリサに何があつてああなつたの?」

「分からぬの。突然、魘されてて、起こしたと思つたらああだつたから」

それは、眞実。事実、アリサが今生の記憶を失う原因は夢にあつた。結果としては、心因性なのである。

アリサの夢の中での辛い経験が、事故のことを忘れさせた。付隨して、事故の後に起きたことも全て忘れ去った。これが、アリサの記憶を奪った原因。

そして、この状態でアリサの記憶が戻った場合、アリサはどうなるだろうか。

事故のショックで、精神が壊れるかもしれない。あの夢の中にアリサが囚われているとしたら、アリサを元に戻すのは相当の力が必要になるだろう。

それまでに、アリサを封じる力は強いのだから。

アリサを封じているのは、死んだ後の叔父と叔母の慟哭と、その姿。

だが、家族たちはそんなことは一切知らない、知り得ない。だからこそ、アリサがアリサたり得なくなつた理由が分からぬ。絶望的だ。

絶望の歌は、アリサが歌わずとも誰かが歌い続ける。

滅びのときが来るまで、ずっと流れ続ける。リフレインだ。

「とにかく、アリサを元に戻さなくちゃ」

「アレグラさんに一度診てもらひう?」

「それがいい。母さん、呼んでくれる?」

子供たちの話し合い、それでひとまずアレグラを呼ぶことが確定する。その決定後、母は急いでアレグラを呼びに向かった。

だが、アレグラに診てもらつても結果は変わらない。アリサの体

に見られる異常は、発熱のみ。ほかに異常は見られないのだ。

故に、家族たちは更に焦つた。異常は見られない、だが、事実アリサはおかしい。

アリサは、アリサでありながらもアリサではないのだから。

「どうする？ どうしたら、アリサの記憶が戻る？」

「そんなの、私たちに分かるわけないじゃない！」

「なら、どうするんだよ！？ アリサから、僕たちの記憶が消えた今までいいのか？」

「いいわけないじゃないの！ 思い出してほしいわよー！」

解決方法を見出せない兄妹たちの喧嘩が始める。醜いバトルが勃発する。

何も覚えていないアリサ。事故に遭ったことすら記憶に無い、死んだ記憶など一切ないアリサ。

だから、彼女はアリサ・クライシス・ドーリスではなく、神埼有紗なのだ。全てを忘れた少女。転生した記憶を失った少女。前世の、今の彼女は既に存在しない人間だと言つのに。

「本当に、何があつたんだろうね、アリサ」

「ジブリール様に、お尋ねすることが出来ればいいんだけど……」

「……それだ！ きっと、ジブリール様なら何かご存知のはずだ。神殿へ行つてくる。お前たちはアリサを見ておれ！」

そう言つて父は急いで支度を整え、神殿へと向かう。神の祀られし神殿。その地で祈れば、ジブリールに愛されたアリサは何とかなるかもしれない。

父はそう考えながら、神殿へと向かつた。

だが、結果は無残なもの。返ってきた答えは。

「これは、あの子が何とかしなくてはならない。乗り越えなくてはならないんだ。これは、試練なんだよ」

故に、父は諦めざるを得なかつた。そして、決意した。必ずアリサの記憶を戻して見せると。それが、乗り越えるべきものならば、何をしてでも乗り越えさせて見せる。それが、父の新たな決意となつた。

彼らの可愛いアリサ。彼らの愛するアリサ。必ず元に戻してみせる。記憶を戻してみせる。それが可愛いアリサのためだから。

だから、彼らは記憶を失つた可愛い、可哀想なアリサと話をしてみることにしたのだ。もちろん、体調は考慮した上で。

「アリサ。君の名前は、アリサだね？」

「私の名前は、神崎有紗。……これって、異世界トリップつてヤツ？」

「その、いせかいとりつふとやらが何か分からぬが、そんなものではないと思つや」

だつて、君は私たちの可愛い娘だから。父は、続けようとしたその言葉をすんでのとこりで押し戻す。今のアリサに、それを言つてもよく分からぬまま焦るだけと言つじがよく分かっているからだ。

だが、言いたい。父たちはそんな気持ちに襲われる。それでも、何とか抑えた。父たちはアリサには告げない。

「ま、まあ、熱が下がるまではゆっくりと休むといい」

「ハア……ありがとー」やこます

そうして父たちはアリサの部屋から去る。そして、各自の部屋に戻つた父たちは激しく泣いた。

この日のドーリス公爵家内で、激しい慟哭が轟いた。

取り返しの決意

アリサが記憶をなくして、時が流れた。アリサの熱は下がり、アリサは早く帰る「と」考えたのか、母たちに返らせてもらひえるよう頼む。

「叔母さんたちも心配していると思つから、帰つたいんですねが」

熱も下がったし。続けるアリサに、母たちは焦つた。焦つて、何とかしてアリサをこの屋敷にとどめようと説得を開始する。

「だけど、ここはあなたのいた世界と違つてんじょ? なら、ここにいてもいいんじゃない?」「でも……」

「いいから。慣れない世界は疲れるでしょ? 少しお休みなさい」「でも、迷惑だしちゃ……」「そんなことはありませんから、お休みなさい」

母の言葉に、アリサは観念したのか休ませても「うつ」としたらしぐ、皿を瞑る。そんな娘を、母は優しく見守る。早く思に出してくれることを祈りながら。

「久しぶりだね、アリサ」

「……誰?」

そのまま寝入ったアリサ。その夢の中に、あの日、父に乗り越えなくてはならないと言つ「と」を伝えた神、ジブリールが現れてい

た。

あれから時は流れても、アリサの記憶は戻らない。そんなアリサを見ておくのが忍びなくなつたらしい。

「僕を覚えていない？ 思い出して、アリサ。あの日、何があつたか思い出すんだ」

ジブリールが言つた瞬間、アリサの脳裏に何かの映像が「写る」。嫌だ、見たくない。アリサは田を瞑るのだが、脳裏に「写つた映像は消え去らない。

「田を閉じるな、アリサ。思い出すんだ」

「嫌だ！ 見たくない！ こんな、私は知らない！ 私は死んでなんかいない！」

「認めるんだ！ お前が認めないと、どれだけの人間が悲しんでいると思う！？」

「知らない！ 知りたくもない！」

「お前は、自身の家族をどれだけ悲しませるつもりだ！？」

家族？ そんなの、もういない。亡くした。失つた。私の家族は、叔父と叔母の二人だけ。だから、帰りたい。叔父さんたちの下へ。

「この馬鹿！ お前は、もう死んだだろ？ が！」

「死んでない！ 生きてる！ 私は叔母さんたちのところに帰るんだ！」

その瞬間、ジブリールの顔が悲しみの色に染まる。とても悲しきうで。とても切なそうで。

「思い出せ。認めるんだ。 お前には聞こえないのか？ お前の

両親の、兄たちの泣き声が聞こえないのか？」「知らない。そんなの、聞こえないよ」

アリサはそう言いながらも耳をふさぐ。アリサの耳にはしつかりとその声が届いている。耳をふさいでも聞こえる声。だが、今のアリサの耳に届く声は、叔父叔母の慟哭のほうが強かつた。

「私は死んでない。帰るから、泣かないでよ、叔母さん」

アリサの瞳から一筋の涙が零れ落ちる。限界だ。

「今は戻りなさい、アリサ。また会おう」「もう、嫌だ。会いたくない。一度と来ないで」

そうして目を覚ましたアリサの瞳には、一筋の涙が浮かんでいる。アリサは、その涙を服の袖できれいに拭つた。

その後、アリサは夢で聞いたことを反芻させる。自分は死んでいるということ、叔父叔母を泣かせたと言つこと。

そして、今現在進行形で両親や兄たちを泣かせていると言つこと。

今のアリサには何も分からぬ。今生の記憶が全くないのだから。

だが、進展はあった。ジブリールがアリサに理解をさせた。自分は死んでいるということ。だが、転生しているということまでは理解していない。次の課題はそこになる。

それさえ理解できれば、アリサは記憶を取り戻すだろう。転生を認めるということは、自身が神崎有紗ではないと理解することなの

だから。

それは、自身がアリサ・クライシス・ドーリスであることを認めると同義となる。

そうしていると、アリサの様子を見に来たらしいエルミナが、アリサの部屋を訪れる。

「調子はどう？」

「……おかげさまで」

「ねえ、アリサ。まだ何も思い出せない？」

「……私が死んだことだけ、思い出した。でも、あなたたちが誰かは知らない」

ねえ、死んだのならば私は誰？ 尋ねるアリサを、エルミナは優しく抱きしめた。そして、静かに口を開く。

「アリサは、アリサだよ。神埼有紗の来世であり、私たちの可愛い妹」

「来世……？ そつか、私、死んだもんね」

転生、したのかあ。叔母さんたち、泣かせちゃつたなあ。泣かせたくなかつた。死にたくなかつた。でも、死んだんだね。

そう告げるアリサの表情はとても冷たい。だが、アリサを抱きしめているエルミナには、全く見えていない。だが、大体の予想で判断をしていた。

「大丈夫。ゆつくり、思い出して行こうね」

「思い出したほうが、いいんだよね？ なら、頑張るよ」

「うん。……うん、頑張ろうね、アリサ。ねえさまたちも手伝つからね」

アリサ。それが、今の私の名前。神崎有紗じゃない、アリサ。

私の名前は、アリサ・クライシス・ドーリス。ドーリス公爵家の末の姫。

転生したが故に、幼くなつた私の体。私の今年の年は、十。十歳だ。私は、十五歳で事故に遭つた。その五年後に、帰らぬ人となつた。

私は、転生したんだ。ドーリス公爵家の末っ子として、転生したんだ。

私の名前はアリサ。アリサ・クライシス・ドーリス。

もう、叔父や叔母の慟哭は聞こえない。私が、全てを受け入れたからだ。

迷いはない。私は、全てを認め、全てを思い出した。

「ミアねえさま、『ごめんね』

「え？ アリサ？』

「思い出した。心配かけて、『ごめんねねえさま』

「本当に、アリサ？』

「うん。ぜーんぶ思い出した。私が死んだこと、転生したこととかね』

それは、喜びの歌。ようやく思い出したアリサの歌つ、無意識の歌。

喜びに包まれたドーリス公爵家。そこでは、いつまでも歌が響き渡つていた。

取り返しの決意（後書き）

すみません。

あつという間に不幸終了です。

長引かせると、私の筆力上、

とんでもなく不幸になりかねなかつたので……

過保護にて極まれり

アリサが記憶を取り戻したその日、帰ってきた家族たちは愛娘が自分たちを思い出してくれたことに喜び、順に抱きしめる。

「アリサ、僕の名前、言える?」
「私の名前はつ!?」
「僕! 僕も!」
「セインにいたちずるー! 僕も!」
「アリサー、私もね」
「アリサー、私もね」

兄妹たちが順にアリサに問いかけると、アリサは一人ひとり、指差し確認をしながら、順番に兄たちの名前を告げていった。

「ルウにこわま、リンねえさま、セイにこさま、カイにこわま、//
アねえさま
「アリサ! 君つてば可愛いんだから!」
「にいさま、痛いよ。力弱めてよお」

答えを返したアリサを、兄は嬉しそうに微笑み、ぎゅうっと抱きしめる。だが、それが力の入れすぎだったらしい。アリサは痛みを訴える。

だがそれでも、優しい兄が嬉しいのかアリサは微笑みっぱなしだ。にこにこと微笑み続けている。

それが、兄たちをさらに喜ばせ、抱く力を強めさせた。

「ああ、僕たちの可愛いアリサ。思い出してくれて本当によかった」「心配かけてごめんね、にいさま、ねえさま。もう大丈夫だよ。思い出したから」

そしてその後、アリサの身は母たちの元へ移動し、母に抱きしめられることになる。

「最初に誰かと問われたときは、本当に壊れてしまつかと思つたわ」「だつて、本当に誰だか分からなかつたんだもん。今は、大丈夫だよ」

「そうね。ねえ、アリサ。今日は久しぶりにかあさまたちと一緒にベッドで休まない？」

「…………うん」

しばし考えたアリサだが、笑顔で肯定の返事を返す。その瞬間、母も嬉しそうな表情を浮かべ、兄妹たちは面白くなさそうな表情をする。だが、母はそんな子供たちを一睨みだけであつさりと黙らせた。

それから、久しぶりに家族全員で話をしながら夕飯を食べ、久しぶりに母とジャスリーン、エルミナ、アリサが一緒にお風呂に入り、両親と共に寝室へ向かつた。

「アリサ、今度私と一緒に寝よつね」

「うん、また今度ね、ねえさま」

そして両親と共に寝室へ来たアリサは嘗ての定位置である真ん中に横たわる。

大きくなつた体で一緒に寝ても、まだ十分に余裕のある両親の使うベッド。狭さなんて一切感じられず、とにかくのんびりと休むことが出来た。

そうしてベッドに横たわり、あつという間に寝入つたアリサを、両親は優しい瞳で見つめる。もう一度と、あんな思いをしたくない。そう思いながらずつと見守り続けていた。

可愛い愛娘。一度、今生の記憶を全てなくしてしまった哀れな子供。記憶を取り戻したと言えども、それが完璧なのかどうかも分からぬ、小さな愛娘。

だけど、彼らのアリサへの愛は一切変わらない。変わるのはずもない。彼らはアリサを心から愛しているのだから。

その後は、父たちも眠りにつく。一人で可愛い愛娘を挟み、一度と失わなくてすむよう祈りながら眠つた。

そして、夜が明けて目を覚ました父と母は、まず、アリサの存在を確認する。きちんといふかどうか、第一にそれを確認した。
ちやんといふ。

それが、両親を安心させた。そして次の憂いを無くすために、二人はアリサを起こす。きちんと思い出しているかどうか、確認したかったが故だ。

「アリサ、起きておくれ？」
「朝よ。起きてちょうどいい」
「んー、もう、ちょっと……寝かせてえ」
「ダメよ。一度起きてちょうどいい」

母の言葉に、アリサは諦めを覚えたのか泣々ながらも目を開く。だが、その目はまだ途轍もなく眠たそうだ。

「なにい？ どうしたの？」
「朝だから、起きなくちゃ」
「かあさまたちの起きる時間、早いもん。まだ寝る」
「だめ。起きてちょうどいい」

母が言つと、アリサはやはり泣々ながら起き上がる。

「おはよ、アリサ」

「おはよ、とうじゅま、かあじゅま」

寝起き状態のアリサは、うまく呪律が回つていない。だがそれでも、きちんと両親に朝の挨拶をする。

が、その瞬間再び眠りに落ちた。アリサの瞼は唐突に閉じられる。そんな娘の様子に両親は驚き、焦るのだがアリサの様子を見てその焦りは消える。何せ、アリサの呼吸はいたつて穏やかで、眠つているだけだったのだから。

「起ひすの、早すぎたかしら?」

「そうなんだろ? もうじまへ、寝かせておこせやう!」

そうして母たちはぐっすりと眠るアリサを時間の許す限り、優しく見守る。起きなくてはいけない時間になるまでの間、ずっと。

それから然程経たずに起きるべき時間となる。二人は名残惜しそうではあったが、アリサの眠る自分たちの寝室から出て行く。その前に、アリサの額に手を当てて熱がないことを確認した上で。

「先に起きてるからね、アリサ」

「朝食まで、ゆっくり休んでいなさい」

「ん……」

それからしばらくして、朝食の支度が整つと、子供たちが揃つてアリサを起こしに両親の寝室を訪れる。アリサを起こすだけなので、本来は一人でもよかつたのだが、兄妹たちがアリサを起こす役目を奪い合い、結果、全員で起こしていくことになったのである。

「アリサ、朝」ほんの用意が出来てるよ。起きて、食べに行こ。」

「ほり、起きてよ、アリサ。朝なんだから」

「アリサ。朝」ほんを食べた後ならまた休んでもかまわないだろ。だから、今は起きてくれ」

兄妹たちがアリサの体を揺らしながら声をかける。体を揺らされているアリサは、まだ眠たいのか揺らされない位置まで寝返りをうつて移動するのだが、兄妹たちはそれを追いかけ、更に揺らす。

「いやあん、まあだ、寝る」

「だめ。起きなきゃ、お母さんが怒るよ。」

その言葉はアリサを起こすのにいい薬だつたらしい。アリサはすぐパチッと目を開く。その動作は、紛れもなくアリサ彼の妹であることを教えてくれる。

母の恐怖に怯えるのは、彼らの妹であるといい証拠なのだから。

「おはよ、アリサ」

「おは、み、て、おは、おま、ねえわま」

「さ、行こさま、ねえわま」

「おはよ、アリサ。手を貸して」

そして兄たちは両端からアリサの手を取り、エスコートする。ちなみに、仲間はずれはカインである。カインは面白くないそつない表情をしながら、アリサの後ろを追う。

それから、朝食を食べに向かったアリサは、母の愛を存分に受けることになるのであった。

「アリサ、あーんして」

「かあさま、自分で食べるつてば」

「いいから。ほら、あーん」

「自分で食べる」

「いいからあーんつてしなさい」

「自分で食べるからいい」

「ダメ。ジャスリー、アリサの腕掴んで」

「おつけー。アリサ、ほら、口開けなさい」

「リンねえさま！？ 裏切り者あ！」

ジャスリーが母の指示の従い、アリサの腕を掴んで自力で食べられないようにすると、アリサは怒つてジャスリーを裏切り者と叫び、母とジャスリーはにっこりと微笑む。

そして、叫ぶためには開かれた口に、母は食事を乗せたスプーンを入れた。

「アリサ、叫ばないで、食べなさい」
「むーっ」

呻りながらも、口の中を空にしなくては叫ぶことは出来ない。そう考えたのか、アリサは大人しく口に入れられた食事をしつかりと噛み、嚥下した。

そして、飲み込み終えて反撃にかかるつと口を開いたアリサ。それは、狙いやすいターゲットでしかなかつた。母はアリサに叫ぶ暇を与えず、再び口にスプーンを入れる。

「まだあるからね。しつかりと食べましょう」

「なら、コンねえさま、離してよつ！　自分で食べるからあ…」

「だつて。お母さん、どうする？」

「わづかよつと食べたら、離してもいいわ。アリサ、あーん」

母の言葉に、アリサは深い溜め息をつく。そして、早く離してもらうためには食べるしかないことを悟ったのか、大人しく口を開いた。そして、口内に侵入するスプーンを受け入れる。

そうしてしばらく食べていると、ようやく母からのオッケーが出たのか、ジャスリーンがアリサの拘束を解く。そしてそれと同時に、アリサはスプーンを取り、食事にかかった。

「アリサ、食べさせて欲しくなつたらいつでも言いなさい。食べさせてあげるからね」

「うん、遠慮します」

とてもこじやかな答え。それに母は若干落ち込みはするのだが、然程激しいダメージにはならなかつたらしい。すぐに正気に戻る。そして、未だに食事中のアリサ以外の家族に声をかける。

「何をのんびり食べているの？　時間を考えなさい。ほら、急いで」「え？　……」「うわっ！　兄さんたち、時間、本気でやばい！」

「うわっ！　全員、急げ！」

「じゅわっわまつー！」

母の言葉を受けた兄妹たちや父は、急いで食事を摑り、仕事へと向かう。かなり急ぐことになつた兄妹たちだった。

そして、家に母とアリサ、メイドたちになつたドーリス公爵家では、母がアリサのそばに付いていた。アリサは若干迷惑そうにしていたが、母はそれもお構い無しだ。

「アリサ、本を読んであげましょうか?」

「いい。それより、一人になりたいな」

「あら、アリサはかあさまが嫌い? もしそうなら、かあさま悲しいわ」

「嫌いじゃないよ。でも、今は一人で考え方したいの。かあさま、ダメ?」

アリサがその瞳を潤ませながら訴えると、母は軽く溜め息をつく。そして、アリサの頭を一撫でしてアリサの部屋から去つていった。アリサは母に聞こえないよう、小さく礼を言つて、母に言つたとおり、考え方事に没頭する。

考え方事の内容は、あの日の夢だ。

アリサがアリサである記憶を失うことになつた原因。アリサの前世の保護者である、叔父叔母の泣いている姿、慟哭。田を瞑つても、~~写~~る叔父叔母の泣き姿。耳をふさいでも、聞こえてしまう慟哭。

あれは、なんだつたのか。現実なのか、夢に過ぎないのか。だが、あれが現実だらうが夢だらうが、そんなものはアリサには関係ない。問題は、アリサに届いたもの。

あの、泣いている姿。慟哭。それが一番の着眼点なのだから。

見たくない。そう思つて田を瞑つた。

聞きたくない。そう思つて耳をふさいだ。

それが一番の過ちだつたのだ。田を閉じじず、耳をふさがずに受け入れるべきだつたのだ。

受け入れず、拒絶した結果があれだつた。アリサは今生の記憶を全て無くし、神崎有紗としてすゞすことになつた。それに付随して、家族たちを悲しませた。

自分は、ただ不安がり、そして「」とを聞いてさえいればよかつた。いろいろなものを見せられ、記憶を揺さぶつていればよかつた。

だが、家族たちはどうだつただのう。今までずっと愛してきた娘に、突然誰か尋ねられ、パニックに陥つただのう。

私が、させた。アリサは後悔する。それと同時に、アリサのその瞳からは止め処無く涙が流れ落ちる。

「アリサ」

そうしていると、部屋の扉のところに人が寄りかかり、立つていることに気がついた。母だ。

「何を泣いているの。無理はしちゃダメだつて、いつも言つているでしょう?」

「か……あさま?」

アリサは涙でびっしょり濡れた睫毛を服の袖で拭いながら、扉のほうを見る。そこにいたのは、やはり母だつた。

扉から体を離した母は、躊躇いもなくアリサの部屋に足を踏み入れ、アリサのそばへとやつて来る。そして、アリサを抱きしめた。

「何を考えれば、そんなに涙が流れるの。相談してみなさい、楽になるから」

ぶんぶんつ。アリサは首を横に振る。

「いつまでも苦しんで、また熱をだすつもりなの? それで、またがあさまたちに心配をかけるの?」

ぶんぶんつ。アリサはまたも首を横に振る。母は、そんな強情な娘をぎゅっと、強く抱きしめる。娘が痛いと訴えてきても、それでも力を弱めたりはしなかった。とにかく、アリサを抱きしめ続ける。アリサが、話す気になるまで、ずっと。ずっと。

「 まあ アリサ、 話しなさい 」

あれから数分後、 大きくなつたアリサを抱えたまま、 少し息を切らしながらリビングへと運んだ母はアリサを横に座らせそつ切り出した。

そう言いながらアリサをじつと見る母の目は冷たくて、 言わなければどうなるか分からぬ、 と暗にその瞳が訴えていた。

これ、 何の尋問？

アリサが本気でそつ考えるのも、 無理もないことだらう。 それほどに母の瞳は恐ろしいのだから。

だが、 母にアリサを害する気持ちは一切ない。 あるものは、 アリサの不安を取り除こうとついで、 完全なる親心である。 其れ、 時に過保護とも言ひ。

「 人に話したほうが楽になるでしょ。 言いなさい 」

「 かあさまに話すようなことじやないから、 嫌 」

「 あら、 ジやあお父さまが帰つてきたら、 アリサが泣いていたこと、 包み隠さず話をしてあげましょ 」

「 えー？ ちよ、 それ反則！ 」

父に知られると、 自動的にそれはほかの兄妹たちの知るところとなる。 そうなると、 母単体からの尋問の比ではなくなるのが容易に想像できる。

それは避けたい。 父母兄妹全員からの尋問は、 間違ひなく、 地獄を見る。

でも、話したくない。これは、自分のかけた迷惑だ。それを掘り返す必要など一切ないはずだ。

だが、今の母に逆らえる人間など、どこにもいない。

「思い出してくださいだけだよ」

過去を。前世を。夢を。思い出したくない、私の死んだ後の日本。あの夢で見た姿、聞いた慟哭。思い出したくなかったが、それでも思い出そうとした。

すべてを、吹つ切るために。その過程で、悲しくなった。涙が溢れた。

そのタイミングで、母が来て、涙を見られてしまった。本当にタイミングが悪かったと言つか、何と言つか。

「それで、どうして泣いちゃったの。それよりも、あの日、あなたは何の夢を見ていたの？」

あの日。それは、アリサがアリサの記憶を失った日。

何の夢。それは、アリサが死んだ後の日本。アリサを失い、泣く叔父叔母の姿、慟哭。

全てを拒んで、狂つた。全てを受け入れれば、狂わなかつたのか。

「たら、ればを言つたら何にも出来ないでしょ？ 過ぎたことない、そんなに考え込まないの。いいわね？」

「…………うん。『ごめん、かあさま』

「謝る必要なんてないわ。それよりも、笑つてちょうつだい？」

「うん。ありがとう、かあさま。 大好き」

自分を優しく慰めてくれる母。大好きな母。アリサは母に愛を告げ、抱きついた。抱きつかれた母は、微笑みながら娘を抱きしめる。そうやって抱きしめられているアリサは嬉しそうで、気持ちがよさそうだった。

そうしていると、そんな主親子に微笑ましげな視線を向けながら、メイドが昼食の用意の完了を知らせにやって来る。

知らせを聞いたアリサはお腹が空いていたのか、瞬時に目を輝かせ、そんなアリサを優しく見つめた母は、一度アリサから手を離し、そして立ち上がってアリサの手を握る。

「ご飯を食べに行こうか」

「うん！」

それからの二人は仲睦まじく話をしながら食事を摂り、その後は疲れているであろうアリサを母が無理やり休ませる。

アリサは大丈夫だと言い張るのだが、先ほど思い切り泣いていたのを見ていた母としては、楽観視は出来なかつたのだ。

「熱を出したりしたら大変だから、休んでいなさいね」

「大丈夫なのにイ」

「いいから。かあさまを心配させないためにも休んでおいてちょうだい」

アリサは母に逆らえない。母に逆らったときの恐怖はこの身に刻まれているのだ、逆らえるはずがない。それは、兄妹たちも同様だ。無論、父も。

幼い頃、兵士時代からの長い付き合いである家族は、昔から何度も何度も母に叱られている。だからこそ、全員母の恐怖が身に刻み込まれているのだ。

ちなみに、アリサが始めて母の恐怖を身を持つて知ったのは、七歳のときだつた。それまでは怖い思いをさせたらすぐに熱を出すだろつ、と家族が考えた結果、母のお叱りは一応手加減されていた。だが、七歳になると、その手加減が少しづつ減つていつたのだ。

そのとき、アリサは熱を出して寝込んでいた。母にもきちんと休んでおくよう命じられていたのだ。だが、アリサは眠れず、退屈だつたためベッドから降りて部屋を探索していたのだ。

熱も大体下がつていて微熱状態であつたため、アリサは体調的にはかなり普通だつた。それ故の行動だつたのだが、それが母の怒りの導火線に火をつけたのだ。

そのあとは散々だつた。戻つてきた母に強制的にベッドに戻らされ、動かないように母の威圧で拘束し、お説教が開始された。

「アリサ。熱があるときは安静にしていいといけないつていうことは、分かるよね？」

「ウ……ウン、ワカル」

「なら、どうして部屋を歩き回つていたの？」

「タ、タタタタタ、退屈ダッタカラ……」

母に問われたアリサは、じどうもどろで、片言になりながらも一応理由を告げる。だが、無論母は許さない。

「ふうん、退屈だつたから、ねえ。それだけで、無茶をしたの？」

母はそう言いながらアリサの額に手を置く。もちろん、熱は上がつてゐる。それを確認した母は、深い溜め息をついた。

「だから、無理はしちゃダメだつて言つてるのに……」

「あ、……」

それからアリサは母によつてしつかりと寝かしつけられる。無理をした分、アリサに反論を返す余地もなく、眠りたくなくても眠ることになった。

それが、アリサが始めて母の恐怖をその身に刻みつけた日の記憶。

あの日以来、アリサは極力母を怒らせないように努力してきた。一度と、あんな怖い日には遭いたくないから。

母の恐怖は、いつまでも子供たちに刻み込まれていくのであった。

仕事を終え、帰ってきた家族たち。家族たちは、家に着くと同時に一目散にアリサの待つ部屋へと飛び込んでいった。アリサは眠っていたが。

『アリサ、ただいまっ！』
「すー」

家族たちは嬉しそうにアリサの部屋に飛び込み、アリサに声をかけたのだが、返ってきた返事はアリサの寝息でしかなかつた。だが、家族たちは気持ちよさそうに眠るアリサを優しく見つめる。ただ、その部屋には先に母がいたわけだが。

「おかえりなさい。アリサは眠つてるから静かになさいね」

夫や子供たちの姿を確認した母は、優しく微笑みながら、人差し指を口にあて告げる。そんな母の行動を見た父たちは、口を噤み、音を立てないよう静かに部屋に足を踏み入れた。

気持ちよさそうに眠つている彼らの妹姫。泣いていたのか、鼻の頭がほんのり赤い、彼らの最愛の子。そんなアリサを彼らは見守り続けた。

……お腹が空いたらしいアリサが、きゅるるるる、といつ子犬の鳴き声のような音をお腹から発し、潤んだ瞳で空腹を訴えてくるまでの間。

「お腹空いたよお。『』飯、まあだあ？」
「はははっ。もひすぐ準備は出来るだろ？が、今のうちに移動しておぐかい？」

「うん」

アリサがそう答えると同時に、カインがアリサを抱き上げた。いきなり抱き上げられたアリサはびっくりとした表情を見せる。

「カイにいさま？ 重たいでしょ？ 下ろしてよ」

「全然重たくないよ。アリサ、僕は鍛えてるんだから、アリサくらい軽々だよ」

「その通りだよ、アリサ。カインは騎士なんだから、アリサくらい持てないとクビ」

にっこり。セインとルワインは黒い笑みを浮かべながらカインに告げる。その言葉に、カインに抱えられたアリサは若干引き、当の本人は引きつた笑いを浮かべていたが……。

そうして抱えられ運ばれているアリサは、その間にもお腹は空くらしく、何度も何度も子犬の鳴き声は屋敷に轟いていた。

「よしよし、もうすぐ着くからね。それまで我慢我慢」

「うん。でも、やっぱりお腹空いたあ」

そうして話をしながら、彼らは食堂へ向かう。そして彼らが食堂に着くと、父と母が椅子に座つて待機しており、席には夕食の支度がなされている。

それを見たアリサは目を輝かせ、そんなアリサを兄妹たちは微笑ましげな瞳で見つめながら、アリサを椅子に座らせる。

その後、彼らも席に着いたのを確認すると、まだ？ まだ？ と潤んだ瞳で見つめてくる末娘に苦笑しつつ、食事開始の挨拶をした。

その瞬間、アリサは喜びに目を輝かせ、食事に手をつけた。……
……すごい勢いで食べ進めていく。

「詰まらせないよう、気をつけるんだよ？」

「ん！」

食事を取る手の止まらないアリサに、父と母が優しく声をかけ、アリサは元気いっぱいに返事をする。だが、まだ口の中に物が残っているらしく、口を開かずの返事ではあったが。

だがそれでも家族たちには微笑ましく見えるらしく。皆が皆、アリサを暖かい瞳で見つめる。

そして食事終了後、彼らはリビングに移動し、飲み物と共にお話、兼、家族団らんの時間となつた。

だが、それは一種の尋問の時間だった。

「アリサ。かあさまに聞いたが、どうして今日泣いていたのかな？」
「…………かあさまの嘘つき」

話をしたら、とうとうまに話さないんじやなかつたの？ アリサは恨みがましい瞳で母を見つめながら告げる。それに対する母の返答は飄々としたものだつた。

「とうとうまには話さない、とは言つてないわよ？ それに、包み隠れずは話していないから、約束は守つていいわ」
「…………屁理屈だよ、それえ」

そういうながらも、アリサは少しづつ逃走体勢に入りつつとし始めている。だが、それは兄妹たちが許はしなかつた。

「アリサ、泣いたの？」

「どうして泣いたの？ 大丈夫？」

「あれ？ 逃げようとしてるのはどうして？」
「話を聞かせてくれるまでは逃がせないよ」
「観念して話しちゃいなさい」

それは、純然たる尋問であった。アリサは逃げようにも逃げられない状態に陥り、それでも少しずつ、逃げようとタイミングを図っていた。

だが、もちろん逃げられるはずもない。アリサは逃げなによつて、アリサのひざの上に乗せられていたのだから。

「アリサ、観念して包み隠さず話をしなさい」

「かあさま、いじわる。ずるい。卑怯者」

「アリサのためならどれだけ卑怯な人間になつてもかまわないわ」

アリサの体調を崩す要素になるものは、みんなかあさまたちが排除するからね。そのためには、その要素を知る必要があるでしょう？

そう告げる母に、アリサは面白くなさそうな表情を見せるが、それが自分のためと云うのが効いたらしく。すぐに表情が元に戻った。

「観念したのなら、話なさい。お父さまたちが待つてたわ
「んー、夢のことを考えてただけだよ」

ちょっと、思い出してただけだから、そこまで気にするよつなのじゃないよ。心配しないで。アリサはそう告げるのだが、父たちは信用していない。

アリサの答えを聞いた父たちは、アリサのその言葉がとにかく信じられないらしく、疑いの瞳を見せる。

だが、アリサもそれ以上に答えよつはない。何せ、それが全ての真実なのだから。

「大丈夫だつてば。本当に、大丈夫なんだよ」

まっすぐな瞳でアリサは告げる。家族たちは、その目に負けた。そんなにまっすぐな瞳で見られることはこれ以上追求するのは難かつたらしい。父たちは立ち上がり、母のひざの上に座らされているアリサの元に近寄り、頭をくしゃりと撫でる。

その後、ようやく開放されたアリサは、お風呂に入りしつかりと髪を乾かして眠りに着いた。

……熱を出すと怖い人がいるため、その辺に關してはアリサはしつかりとしていたそうな。

咲き乱れる愛

アリサです。愛が重いと思う今日この頃です。どうせやかあさま、にいさまたちの愛がとにかく重たいです。

つていうか、今まで以上に過干渉になりました。

「アリサ、一緒に本を読もうか」

「僕が読んであげるよ」

「アリサ、私が魔術講習してあげよしね。多属性の心得を教えてあげる」

「変な人に襲われたときの対処法を僕たちが教えてあげるよ」
「そういうのは僕たちしか教えられないしね」

順に、ジャスリーン、ルヴィン、エルミナ、セイン、カインである。五人はアリサを奪い合つように声をかけ続ける。

そして、兄妹たちは結果としては喧嘩となつた。肝心のアリサを放つておき、五人で喧嘩を始める。

その隙に、アリサはこそそそと兄たちの喧嘩の場であるリビングからこそそそと抜け出していた。こつそりと抜け出し、兄たちの目の届かないであろう両親の寝室へと逃げ込んだ。

誰もいない両親の部屋。アリサはそこで、のんびりと落ち着く。誰の干渉も受けないであろう部屋。受けても両親だけである寝室。落ち着く場所は、何故か激しい睡魔に襲われる。両親の部屋で落ち着くアリサは、うとうとしながらも、必死で起きていた。が、限界は近かつた。

「ふああっ」

一度欠伸をこぼしたアリサは、もそもそと両親のベッドに上がり、横になる。それからはあつといつ間だった。数分後にはアリサの寝息が寝室に響き渡る。

「アリサー、どこにいるんだーい？」

「いるんなら、返事してー」

アリサが両親の寝室に逃げ込んでしばらくして、よみややく喧嘩を終えた兄妹たちがいつの間にかいなくなつたアリサを探しに、屋敷中を駆け回る。

まずは最初にアリサの部屋を確認し、次は図書室、父の書斎と、順にアリサを探して駆け回つていく。

だが、アリサは中々見つからない。探しても、探してもアリサは見つからなかつた。

「アリサ、どこにいるんだよーお

「あなたたちは、何をしてるの？」

「お母さん、アリサを見なかつた？」

「アリサ？ いないの？」

「見当たらないの。ずっと探してるんだけど」

ジャスリーンのその言葉の後、母も兄妹たちのアリサ捜索隊に入り、捜索にかかる。

「アリサ、いるのなら返事をしなさいー」

母は大きな声でアリサを呼ぶのだが、眠つているアリサの返事は、もちろんない。その様子に、母は焦りながら屋敷を巡る。

それからしばらくして、残り探していない部屋は一室だけになつ

ていた。それは、両親の寝室。残された唯一の部屋。母と、揃つた兄妹たちは恐る恐る、両親の寝室の扉に手をかける。

いて欲しいと願いながら、彼らは扉を開く。いなければすぐに公爵家の私兵に街を探させる予定の、母と兄妹たち。

閉ざされた扉を開くと、その部屋のベッドには、アリサが気持ちよさそうに眠っていた。

両親のベッドに眠るアリサを見た母たちが、ホッと息をつき、そしてベッドの空いている場所に座る。

その際のベッドの揺れが気になつたのか、アリサは「んう……」と呻しながら寝返りをうつ。だが、まだ眠たいらしく、完全に目を覚ます気配はない。

「こんなところにいたんだね」

「見つけられないはずだわ」

「まあ、見つかつたからいいわ。本当に、心配をせてくれて……」

母たちはそう言しながら、アリサの頭をよしよしと撫でる。よつぽど眠たいのか、何をしても目を覚ます気配を見せないアリサ。とにかくぐっすりと眠り続けていた。

目を覚ましたのは、眠っているアリサを見て同様に眠くなつた母たちが、アリサに寄り添つて眠りについて少しだけ頃だつた。

「よく寝たーあ」

アリサがそう咳きながら目を開けると、まず、びっくりした。何

故母たちが揃つてこんな場所に寝ているのか。

起こすべきか、起さざるべきか。

起こせば、再び過干渉の渦に飲み込まれる運命にある。だが、起さなければ彼女の愛する家族たちが自分のよつに風邪を引いてしまうかもしれない。

「かあさま、にいさま、ねえさま。きらんと毛布着て寝ないと、風邪引いちやうよ?」

結果、彼女は家族の苦しむ姿を見るのが忍びなかつたらしく、眠つている母たちを起しつこにしたらしい。母たちの体を揺らし、とにかく起しつ。

「かあさま、にいさま、ねえさま、起きてえつ!」

起一きーてーえつ! 中々起きない母たちに必死で声をかけ続ける。

アリサはとにかく必死である。そして、ようやく目を覚まし始めたらしい母たち。それを確認したアリサは、過干渉の渦に巻き込まれる前に逃げることにしたらしく、物音を立てずに部屋から抜け出した。

その後、目を覚ました母たちはいつの間にかいなくなつたアリサを探して、再び東奔西走することになる。

ちなみに、逃げ出したアリサは、今度は図書室にいた。自分の部屋に戻つてもどうせ母たちの襲撃を受けることになると言つことは、何も考えずとも理解できることであるからだ。

「おや、お嬢様お一人ですか? お珍しいですね」

「そう? 今日は、魔術本が見たいと思つてきたんだ。初心者用の魔術本、紹介して?」

「魔術本ですか。旦那様や、奥様の許可はお取りになつておられますか?」

「え?と、取つてゐる、よ?」

「そうですか。では、人をやつて確認させてきましょ?」

魔術本を読むために図書室へやつてきたアリサ。司書に魔術本の紹介を頼むのだが、思いもよらない質問が返ってきた。

両親からの許可。まさか、図書室で魔術本を読むためにそれが必要になるとは。

まあ、それくらいなら嘘をついても大丈夫だらう。その考えが甘かつた。人をやって確認されると、嘘だと言つことがすぐに分かり、間違いなく後から母のお叱りを受けることになる。

それを避けるためには。

「じめん、嘘。許可取つてないけど、許可いるの？」

「やはり嘘でしたね。アリサお嬢様は、まだ魔力のコントロールに慣れていませんからね。危ないですから、一応許可を取つてからにしてください」

司書のその言葉を聞いたアリサは悲しそうな顔をし、そして、渋々ながら普通の本を探しに向かつ。それからは、ずっと本を読み続けた。

母や兄妹たちが、再び自分を探していくことに気がつくこともなく。

辟易する過干渉

図書室で本を読んでいたアリサだったが、アリサを探しに来た兄妹たちに見つかり、強制的に部屋に戻らされる。

「心配したよ、アリサ」

「にいさまたち、過保護すぎるよ。大丈夫だて」

兄たちの過干渉に遠まわしに文句を言つアリサ。だが、兄妹たちはその文句を笑み一つで弾き飛ばした。

兄たちは優しく微笑み、アリサの文句を華麗なまでに弾き飛ばす。

「ああ、アリサ。本当に探したんだから」「まつたくよ。めいつぱい探したわ」

……過干渉激ウザ。瞬間にアリサは微笑みながらもそう考える。笑顔の後ろに隠れたその言葉は紛れもなく兄たちに向けられていて、その言葉を向けられた兄妹たちはそのことに気がついていない。

……私、こういう感情を隠すの上手になつたなあ。にこやかな微笑の下でそんなことを考えるアリサだった。

「そ、体調を崩す前に部屋に戻る」

「今日はかあさまたちの部屋で寝たから大丈夫だよ」

「いいから。アリサは簡単に体調を崩しちゃつからね。保険よ」

エルミナが言うと同時に、セインとカインが揃つて両端からアリサの腕を掴む。そして、アリサの両足を浮かせたままで部屋へと連行した。

「セイにこさま、カイにこさま、離してえつー。」

「大人しく一緒に部屋に戻るんならおろして上げる」

「セインにこいのまつとおつだよ。どうする? アリサ」

むう。アリサはそう呻つた後で渋々ながら頷く。そんなアリサを見たセインとカインは、微笑みながらアリサを下ろした。そして、一緒に歩き出す。

が、瞬間的にアリサが逃走体勢に入る。猛ダッシュで逃げ出したのである。未遂ではあるが。

逃げ出せうとしたアリサはすぐに兄たちに捕まり、しつかりと抱き上げられる。足掻いても足掻いても、兄たちの腕からは逃れられない。

「残念でした。僕から逃げようなんて甘いね」

「まつたくも。無理をしたら、また熱を出しちけやつでしょ? むー」

兄たちに抱えられたままのアリサは、最早逆らう意味もなく、兄たちの手によつて自分の部屋に戻されベッドに下ろされる。

それからは、起き上がろうとするたびに兄たちの手によつてベッドに押し戻された。面白くない。アリサの表情は、明らかにそれを語っている。

それ故か、アリサは諦めない。諦めずに何度も何度も起き上がり続ける。何度も起き上がり、その度にルウインやエルミナたちにベッドに押し戻されていた。

「アリサ、いい加減諦めるんだ」

「ここで無理をしたら、明日注射うつことになるかもしねないよ。いいの?」

「注射は嫌。でも、大人しく寝ておくのも退屈だから嫌」

ベッドに横たわられたままのアリサは、兄たちに困るわけにもいかないとでも言うかのよう、喰いかかる。

アリサは、どこまでも諦めない。根性で喰らいつき続けていた。

「暇暇暇暇暇あつ！ 遠屈遠屈遠屈遠屈あつ！ にじさまたちのいじわる」

「いじわるでもなんでもないよ、アリサ。僕らはアリサを思つしているんだから」

それが一番たちが悪い。自分のためと言つ理由が一番たちが悪いのだ。自分のためだと言つのならば、自分の望む行動を許して欲しい。

兄たちは、あまりにも自分の行動を制限しすぎた。制限だらけなのだ。束縛だらけの日々は、嫌だ。

だからこそ、足掻きだ。絶対に束縛の日常からは逃げてやる。アリサはそう決意し、さらに兄たちに喰いかかった。

「だつて、私、大丈夫だもん！ 元気だもん！」

「でも、今日はいっぱい動き回つたろ？ 疲れたろ？ から、少し休もう」

「や！ 大丈夫だつて言つてるじゃん！ 絶対寝ない！」

「ダメ！ 休みなさい！」

「やーだつ！」

休め、嫌のバトル勃発。にいさまも、ねえさまたちも諦めないな。でも、私も諦めないからね。大丈夫であるときに休むつもりはないんだ！

それでもまだまだバトルは続く。にいさまたちも諦めないし、同様に私も諦めない。アリサはそう考えながら、何度も何度もベッド

から起き上がる、戻されるを繰り返していた。

「アリサ、いい加減諦めようよ。ね？」

「ヤだ！ にいさまたちこそ、諦めてよ」

アリサは必死で、兄たちの目をしつかりと見ながら告げるのだが、兄たちはそんなアリサをにっこりと微笑み、その笑み一つで黙らせた。

「諦めるわけないだろ？」

その笑みは、アリサにとつては悪意の籠つたものでしかなくて、兄たちにとつては純粋なまでの善意だった。

アリサを思う兄と姉の純粋な気持ち。兄と姉を愛してはいても、今は言つことを聞きたくないが故に逆らい、反発するアリサ。だが、そんな反発を続けていたアリサにも体力の限界が訪れた。何度も起き上がり、ベッドに戻される、を繰り返して疲れたのだろう。息を切らしながら、完全にベッドに横たわった。

「ああ、疲れたのね。いいから、休みなさい」「ねえさまたちの、せい、だもんつ！」

横たわったアリサの頭を優しくなでながら言葉を放つエルミナに、アリサは息を切らせたままで言葉を返す。

その目は若干剣呑ではあるが、兄たちはそんな妹を優しい、温かい瞳で見つめる。アリサの剣呑な目つきが変わることはないし、兄たちの優しい瞳が変化することもない。

過干渉、本氣でウザい。

アリサはその剣呑な目つきの下でそう考へる。そして、その過干渉から一時的にでも逃れるために、アリサは眠ることを選択したらいい。剣呑な目つきを解除し、そのまま目を瞑る。

それからさほど経たずにアリサは眠りについた。目を覚ましたら、兄たちの過干渉から逃れられることを祈つて。

……反抗期到来？

ストレスは敵

ストレスが溜まる。

嫌なほどにストレスが溜まる。

むかつくほどにストレスが溜まる。

気持ちが悪い。

気持ちが、悪い。

吐きそくなぐらいに気持ちが悪い。

起きたくない。

目を覚ましたくない。

起き上がりたくない。

今は眠っているはずなのに、それでも気持ちが悪い。

起きたくないのに、起きなくてはいけないと体のどこかがそう訴える。

なら、起きなくちゃいけないのか。ああ、面倒くさい。

「アリサ？ どうしたんだい？」

突然表情を歪めはじめた眠っているはずのアリサ。彼らはそんなアリサを起こすために声をかけ、体を揺らし起こしにかかる。だが、何度も声をかけても、何度も体を揺らしてもアリサは目を覚まさず、表情を歪ませたままだった。

「どうしたんだ！？ 起きて！ 起きるんだ、アリサ！」

「起きるー。起きるってばー。」

「アリサー。」

兄妹たちは必死でアリサを起こさうと体を揺らし、声をかけるのだが、アリサは一向に田を覚まさない。それが、兄妹たちをより不安にさせた。

その不安を吹き飛ばすためにも、兄たちは田を覚ますまでずっとアリサを呼び続けた。何度も名を呼び、体を揺らす。

「アリサ、起きてー。」

「にいさまたち、うるさい。」

「アリサー。」

「う、ええええええええええ」

静かに田を開いたアリサは、兄たちに文句を言い、そしてその後、移動する暇も与えられることなく、吐き戻した。器等を用意する暇ももちろん無いため、アリサの吐瀉物はアリサの手に留まりきれず、毛布に落ちていく。

「アリサ、大丈夫ー？ ちょっと待ってー。」

未だ少しずつではあるが、吐き戻し続けているアリサ。兄たちはそんなアリサを見、焦ってアリサのために器やタオル等を取りに向かう。

その間、ヒルミナだけは動かずアリサの背を優しくさすり続ける。吐き出すものを全て吐き出してしまえるよう、優しくさすり続けた。

「うえええええええ」

「アリサ、出すものは全部出しちゃおうね」

そうして戻し続けていると、アリサの部屋に兄妹たちが戻つくる。アリサの吐き戻したものを受け器を持ち、アリサの手を汚した吐瀉物をふき取るためのタオルを持ち、そして、アリサ用の替えの毛布を持つて戻ってきた。

ちなみに、そのときに母も一緒にアリサの部屋を訪れていた。アリサが吐き戻したと聞いて、いても立つてもいられなくなつたらしい。

「アリサ！」
「か……ああ……、　うえええ」

既に胃には吐くものは残つていらないだらうに、アリサは戻し続ける。エルミナに背をさすられながら、何度も何度も戻し続けた。兄たちによつて毛布を替えられたアリサのベッド。アリサはそのベッドの上に座り、器に顔を埋めて何度も吐き戻し続けていた。それからしばらくして、ようやく戻すものがなくなつたらしく、アリサの吐き気がおさまる。

そして、吐き気がおさまり、吐き戻すことがなくなつたアリサは、一瞬にして氣を失う。そのままベッドに倒れこみ、家族たちを心配させる。だが、アリサにそんな家族のことを考える余裕があるはずもない。

アリサは氣を失つた状態で、兄たちにしつかりとベッドに寝かしつけられる。変な体勢で倒れこんだアリサは、毛布などあつて無きが如し状態だつたため、兄がアリサを抱き上げ、しつかりと毛布を掛けたのだ。

すべては、アリサのために。アリサの体調が、これ以上悪くならないように。

その後、しつかりと休ませたアリサの額に、母が静かに手をあて熱を測る。あれだけ吐き戻したのだから、恐らく熱が高いだろうと母は考えたのだ。

そしてその予想は当たることになる。アリサの熱は母の予想以上に高かつた。

「ルウイン、ジャスリーン、セイン、カイン、エルミナ。アレグラを呼んでくるから、それまでアリサをお願いね」

「任せて」

「早めに呼んであげて。アリサが辛そう」

「分かってるわ」

そうして母は担当医であるアレグラを呼びに向かい、兄妹たちは氣を失ったアリサを心配そうに見つめ続ける。

彼らの可愛いアリサ。大事なアリサ。アリサは絶対に守ると決意した彼らにとって、今のアリサの状態は見過せんはずもない。

「今日は、何が原因だろうね」

「うーん、あのときの言い合いかなあ。あれ、かなり体力を削っただろうし」

そう言いながらも、彼らは濡れたタオルを氷を袋に入れたものを用意し、アリサの額に置く。ひんやりとしたタオル。それが気持ちがいいのか、アリサは眠つていながらも淡く微笑む。

それでも、目を覚ますことはないアリサ。とにかく眠り続けるアリサ。アリサは昏々と眠り続けていた。

「今は、ゆっくり休んで早く元気になろうね、アリサ」

兄たちは優しく声をかけ、アリサの頭を撫でる。濡れタオルや氷

に邪魔をされながらも、それでも優しく頭をなで続けた。

それからしばらくして、母がアレグラを連れ、アリサの部屋に戻ってくる。それを見た兄たちはアリサに声をかけ、起こそつとするのだが中々起きない。

「アリサ、一旦起きて」

「ほら、起きるんだ、アリサ」

だが、アリサは目を覚ます気配を見せない。

「かまいません。寝つたままで診察をさせていただきますから。ルウイン様方は、部屋の外でお待ちください」

そうしてルウインたち男性陣を部屋から追い出したアレグラは、母たちの了解を取つて、アリサの服を捲つて診察を開始させる。

「ずいぶんと魔力が減っていますね。それに、乱れています。この魔力の乱れが吐き気を齎したのでしき」

魔力の乱れは私が調合するよりも、エルミナ様のお薬のほうが効くでしょう。アレグラが言つと、エルミナは急いで部屋を出て行く。そして戻ってきたときは、何か薬らしきものを持っていた。

「魔力調整剤持つて来た。アリサにこれを飲ませれば魔力は安定するはずだよ」

「では、私はいつものように熱に効く薬だけ出しておきますね」「ええ、ありがとう、アレグラ」

そうして帰つて行くアレグラを見送つた後は、彼らは全員でアリサを見守り続けた。

突然、魔力が激減し、乱れた彼らのアリサ。そして、今は昏々と眠り続けている愛娘。

彼らは、いつまでもアリサを見守る。アリサの体調不良の原因に、自分たちがあることに一切気づきもせず、とにかく見守り続けている。

限界到来

ああ、気持ちが悪い。さっきたつぱりと吐き戻したはずなのに、それでもまだ吐き気がするんだ。

どうしてだらひ。どうして、こんなにも気持ちが悪いのか。

今まで、吐き気に襲われることはあっても、ここまで頻繁ではなかった。それ以前に、眠っている夢の中でここまで気持ちが悪くなることなんて今までなかった。

「この、異常は一体何なのか。どうして、ここまで異常が現れるのか。

分からぬ。何もかも、分からぬ。

それ以前に、もつ何も考えたくない。考える余裕すらない。

今は、とにかく眠つていい。

何も考えず、とにかく深い眠りについていい。

それなのに。それなのに、頭は起きると命令を下す。起きたくないのに起きせざるを得ない状況に陥る。起きたくない。でも。でも。

「田が覚めた?」

「ミア、ねえさま?」

「吐き戻す?」

「ええ。田を開ぐと同時に、とんでもない勢いで吐き気に襲われる。私が言つと同時に、ねえさまたちは焦りだし、急いで私が吐き気を催したとき用に用意してあつた器を手に取る。

「アリサ、これに吐こちやいなさい」

「う……ん。うえええええ」

うー、口の中に胃液の味が広がって気持ちが悪い。口の中にすっぱい味が広がり、大量の唾液を分泌させる。

その、大量分泌された唾液すらも気持ちが悪い。何もかも吐き出してしまえ。私はねえさまの持つ器をしつかりと掴み、その器に胃液も唾液も何もかもを吐き出してしまう。

それでも、口の中に胃液のすっぱい感じはいつまでも残り続ける。それが更なる吐き気を誘うのだが、私の胃に戻すものは既に残されていないらしい。

「お水用意したから、口の中をすすぐといいよ。気持ち悪いでしょ？」

「うん……。ありがとー」

私は礼を言いながらねえさまから水の入ったカップを受け取り、その水で口の中を漱^{すす}ぐ。それだけで一気に口の中の酸味が薄れいく。

そして、口を漱いだ水を器に吐き出して、それからはまたベッドに仰向けに横たわる。

が、そのまま眠ることはミアねえさまが許してくれなかつた。ミアねえさまは、眠ろうとする私を寝かせまいと足掻き、そして何かを取り出した。

「アリサ、これ飲んで。これ飲んだら、吐き気があさまるからね」「何、これえ？」

そう言つてミアねえさまに見せられたものは、小瓶に入った真っ黒の液体。……余計吐き気が増しそうなんんですけど。

「大丈夫、ちゃんと薬くなるから。私の作った薬を信じなさい」

……ねえさまの作った薬か。なら、大丈夫そうな気もするけど、でも、その液体の薬が何だか毒々しい。それを飲んだら逆に体調を崩しそうな、ぶつ倒れそうな感じがしなくもないです、はい。

「いいから飲んで。はい、口開けてー」

ねえさまは言つと同時に、瓶の蓋を開き、その口を私の口元へと運ぶ。飲まないという選択肢はないらしい。

毒々しい。でも、飲まなくちゃ。

飲みたくない。でも、飲まないという選択肢はない。逆らつてみる? いや、でも後が怖い。

結果、大人しくそれを飲むことにした。だつて、逆らつの怖いし、それに、もう何か考える余裕もないわけだし。すつごい苦い。

この薬、本当に効くの? ものすごく苦い。気が……遠く……なつ……てき……た。

きゅう。

ニアねえさま開発の薬の苦さに、完全にノックアウトです。

薬のあまりの苦さに、私は完全に気を失った。といふか、ねえさまの薬は、いつも熱を出したときに飲むあの薬よりも苦かった。あの薬も十分に苦いのだが、ねえさまの薬はその上を走っていた。そして、完全に気を失った私は、夢を見ていた。

懐かしき、幼き日々。何も考えず、ただただ家族の愛を受け続け

ていた幼き日々。何かを考えようと思つても、体の幼さ故が、何も考へることがかなわなかつた幼き日々。

「アリサ、今日は調子はどう?」

「リンねえさま。アリサ、きょうはげんきだよ」

「本当にーーイ?」

「ほんとうだもん! それよりもねえさま、きょうのおじいじと、もうおわったの?」

「うん。今日は早く終わつたからね」

「これは幼き日々。私の年がまだ三歳にもなつていない、幼き日々。まだ、うまく舌が回らなかつたあの頃。上手に話が出来なかつたあの頃。」

話の意味を理解することは容易だつた。日本で十数年生きてきた私には簡単に理解できる内容で、にこさまやねえさまちは話をしていくくれたから。

そんな私の幼き日々。転生したばかりで、まだこちらの世界をよく知らなかつた。とにかく、かあさまやにこさまたちの愛に甘えた。それに、かあさまたちに甘えると、嬉しそうにしていたからそれでいいんだろうな、つて考へてた。

純粋な親からの愛に飢えていた私。私の、有紗の両親に愛された記憶は、あの事故の日に失つた。事故の記憶が強すぎて、その前の両親からの愛を忘れてしまつた。

失つた愛。新たな家族は、その隙間に溢れる母の愛を注いでくれた。

欠けた隙間に愛を注ぎ込んだ大好きなどりさま、かあさま、にいさま、ねえさま。

大好き。
愛してる。

だけど、過干渉は遠慮して欲しいな。そう思いながら、私は純粋に夢を楽しみにかかつた。

薬を飲ませ、再び眠りについたアリサを、兄たちは優しく見守る。薬が効いてきたのか、顔色が少し善くなつたアリサ。

それでも、まだ調子が悪そうであることに変わりはない。それが、兄妹たちを悲しませた。アリサを守ると決意したのに、アリサの体調を崩させた原因の一部に自分たちがあるかもしれないとなると、それは完全に悲しみだつた。

「「めんね、アリサ」

ジャスリーンはアリサに謝罪の言葉を零しながらも、眠るアリサを抱きしめる。ベッドの空いている場所に座り、優しくアリサを見守り続けた。

それから少しして、眠っていたアリサが目を覚ます。そして、目を覚ましたアリサは寝ぼけ眼で辺りを見回し、兄たちの存在に気がつく。

「おはよう、アリサ。調子は善くなつた?」

「んー、気持ち悪いのは善くなつたかなあ。あの薬は毒々しい感じがしたけど」

まあ、確かに漆黒の薬は毒々しさを感じさせるだろう。だが、事実アリサの吐き気はおさまったわけだから、ホルミナの作った薬の効果は確実だということがわかる。

だが、それでも一度とあの薬は飲みたくないと考えるアリサであった。

「顔色もすいぶんと善くなつたね。熱も下がつてきたかな?」「んー、どうだう。でも、結構元気になつたと思つよ」

アリサの回答に微笑む兄妹たち。 そうして微笑む兄妹たちを見て、何だか嬉しい気持ちになるアリサ。 今現在のアリサの部屋では愛が溢れかえっていた。

ほのぼのとした雰囲気の漂うアリサの部屋。 優しい空気に包まれたアリサの部屋。

それは、アリサを幸せにさせるもの。 少なくとも、アリサを不快にするものであることはない。

奏でられるは幸せの歌。 奏でるはアリサと愛する兄妹たち。 穏やかなる奏で。

「熱も下がつてきたみたいだね。 でも、早く元気になるためにも、また休もうね」

「んー、でも、今はわつきと比べるとかなり調子がいいんだけどなあ」

「それでも、まだ熱は下がつてないからね。だから休まなくちゃ」「…………分かった。おやすみなさい、にこさま、ねえさま」

その穏やかな奏での中で、姉たちはまだ熱が下がりきれていらないアリサを寝かしつける。早く元気になるよつに。また、みんなで遊ぶためにも。

彼らの愛しいアリサ。 可愛いからいや、一緒に遊びたい、いろいろ教えてあげたいと思う兄妹たち。

生まれてすぐからずっと体の弱かつた彼らの小さな姫。生まれたときからとにかく守るべきものだと、無意識のうちに理解していた。

だから、ずっと守つてきた。 普段から慈しみ、可愛がり、愛を注

ぎ込んだ。アリサが望めばたくさん遊んでやり、体調を崩せば付きつ切りで看病をした。

アリサが家を出たときは、連れ戻すために全力でアリサを探し回つた。そして、連れ戻した。

彼らの可愛いアリサ。前世で辛い目に遭い、生きたままで転生を果たしたと言う可哀想な子。

それを聞いて、より一層アリサを守つたいと言う気持ちは強くなつた。絶対にアリサを守ると決意した。アリサのためならば、何でもしようとしたに決意した。

「アリサ、君は僕たちが絶対に守るからね」

兄たちは眠つてゐるアリサを見つめながら優しく告げる。そして、同様に思い出していた。あの日のことを、アリサが誘拐されたあの日を。

あれは、兄妹たちのみならず家族、メイド、執事たち全員にショックを「え、そして同様に家族全員の怒りを買った。

だから、あの日は全員で男爵の家に乗り込んだ。男性陣が男爵を脅し、その間に女性陣がアリサを抱きしめた。

母たちの姿を確認した瞬間、激しく泣き出したアリサ。大好きな母たちが抱きしめてもアリサは中々泣き止まず、それが父たちの怒りを増させた。

だから、兄たちはその場で切り捨てようとした。だが、父がこの場で切り捨てるだけは反対したため、温情を「え、国王に判断を委ねた。

まあ、結局国王の判断を以つても彼らと判断は殆ど変わらなかつたのでかまわないのだが。

穏やかな寝息と共に眠るアリサ。それが彼らを穏やかにさせる。

田の前にいることが嬉しくて、いなくならないで欲しいと、元気でいて欲しいと思う反面、自分たちから離れないよう束縛してしまいたいとも考えてしまう兄妹たち。

だが、理性が働き、何とかそれを止める。束縛したくても、そうすればアリサから元気がなくなることを兄妹たちはよく分かっている。だから、彼らは欲望に任せて行動しない。

全ては、アリサのために。

「みゅー」

「アリサ？」

そうして兄たちがいろいろと思い出していると、寝言か田を覚ましたのか、アリサがよく分からぬ言葉を呟く。

成長したとは言えども、兄妹たちから見ればまだまだ幼いアリサ。その寝顔もとても可愛くて、兄妹たちの頬を緩ませる。

「うひ……おいで、みゅー……」

一体何の夢を見ているのだろう。兄妹たちは考える。アリサは夢の中で何か動物でも飼っているのだろうか。そうして呟くアリサは微笑んでいる。

だが、突然アリサは田を開いた。その突然さに兄妹たちは驚いた。そして、田を覚ましたアリサは、兄妹たちを見つけ、つかみかかった。

「みゅーはー？ みゅーはゞこに行つたのー？」

「アリサ、落ち着いて？」

「みゅーはゞこー？ みゅー！ みゅー！ 出でおいで、みゅー！」

アリサは完全に夢と現実が混同してしまつている。夢に出てきた

みゅーとこの名の動物を探して兄たちにつかみかかっている。

「みゆー！ みゆーうー！」

「アリサ、『めんね』

た。そして、未だに夢から抜け出せないアリサを、兄妹たちは才とし

アリサの意識は、再び深い場所へと落ちていく。みゅーを探しながら、再び夢に落ちていった。

大切なものの

みゅー。私の可愛い猫。抱きしめると嬉しいのが、「口口口口」と喉を鳴らす可愛い子。

愛しいと思う。今まで守られてばかりだった私が、唯一守ることが出来る存在。

私の可愛いみゅー。それなのに、突然姿を消した。ビルに行つたの、みゅー？ 私は、あなたを見つけてみせるよ。

「にいたま、みゅーは！？ みゅーはどう？」

「みゅー？ それは、一体何なんだ？」

白々しい。にこさまたちがみゅーをどこかに隠したんじゃないの？ 私の可愛いみゅー。大事な大事なみゅー。

「みゅーを返して！ みゅー！ みゅーーー！」
「 アリサ、」めんね

その謝罪は、何に対する謝罪？ みゅーを私から奪つたことにに対する謝罪？ そんなの、聞きたくない。言うのならば、みゅーを返して。

そう、考へているのに。それなのに。私の目の前は真つ暗になる。闇に包まれる。

その後、ようやく光が射したかと思つと、やけにせみゅーがお座りをして待つっていた。

「みゅー！」
「みやあーん」

私の田の前にいるみゅー。みゅーは私が名前を呼ぶと、一鳴をしてすぐに私の足元へ移動してくる。そして、私の足に体を擦り寄せた。

可愛いみゅー。君の望みなら、私は叶えてあげたいと思つ。

「みゅー、どこのに行つてたの。探したんだから」

「みあーん」

「そう鳴かれても分からないよ。……みゅーは何をして欲しいの?」「ここおやー」

私が問うと、みゅーは「撫でて」とでも言つたのかのよつて、まん丸な瞳で私を見つめてくる。

みゅー、君は本当に可愛いね。私はその考え方ながら、みゅーの体をよしよしと撫でてやる。それだけでも十分に嬉しいのが、みゅーは「口、口」と喉を鳴らした。

いつまでもこうしていたい。いつまでもこうして撫でていても、飽きが来ない可愛い子。

「みゅー。みゅーはずっと一緒にいてくれるよね。可愛いみゅー。

大事なみゅー。もう、いなくなつちや嫌だ」

「みあーん」

私が言つと、みゅーは分かつたとでも言つたのよつてうなづける。

でも、またいなくなつた。

「どこのにいるの? みゅー。やつしてずっと探していく、気づいてしまつた。気づきたくなくても気づかざるを得なかつた。

みゅーなんて名前の猫は、実在しないということを。

よくよく考えれば、みゅーをこの家でかまつた記憶がない。みゅー

ーをかまつたのは、何もない世界でのみだ。みゅーを可愛がるのに必死で周りのこと気に向かなかつたが、よくよく考えればそうなのだ。

つまり、みゅーは、私の夢物語なのである。

それが悲しみを増幅させた。悲しさしか感じられなくなつた。今まで以上に猫を恋するよつになつた。

それ故、だらうか。私の熱は急激的に上がつた。何も考えられないくらい、口を開くことすら億劫なくらいに、熱が上がつた。

「今、アレグラを呼んだからね、アリサ。それまでは我慢してちゅうだい」

かあさまはそう告げる。だが、返事を返す余裕は無い。呼吸がし辛い。苦しい。私の熱は、今、どれだけ高いんだ。

みゅー、会いたいよ。会いたい。お願い、会いに来てよ、私の可愛いみゅー。

『みあーん』

みゅーの鳴き声。みゅー、ギーにしてくるの？

「……みゅ……、ギー、こる……の？」

「アリサ？」

「会い……たいよ……、みゅ……」

それが、私の記憶の最後。氣づいたら真つ暗な世界にいて、周りには誰もいなかつた。とつとまも、かあさまも、にいさまもねえさまもない。私だけ。

さつきまで聞こえていたみゅーの鳴き声も聞こえなくなつた。み

みゅー、どこに行っちゃったの？ 会こに来てくれたのに、もうこなくなつちやつたの？

「アリサに、いるだらう？ アリサ」

「誰？ その声、だあれ？ 知らない。知らないよ。

「知らないはずないよ。さつきまで、一緒にいただろ？」

「さつきまで一緒にいた？ なら、みゅー？ みゅーなの？」

「ああ。こうして会い見えることが出来て嬉しいな」

「うん。私も、嬉しい。これからはずつと一緒にいてくれるんだよね？」

「アリサが、僕の世界の人間になつてくれると決意してくれたらね」

みゅーの世界の人間？ それってどこのこと？ 私はそう考えながらみゅーに尋ねる。すると、みゅーはけらけらを笑いながら答えを返した。

「君の大事な家族たちと離れる覚悟はある？ それなら、ずっと一緒にいてあげられる。僕が、君を守つてあげる」

「さつきもやかあさま、にこさまとねえさまたちと離れる？ それは無理だと思う。でも、そうすれば、みゅーが一緒にいてくれる。一度と離れない。みゅーが、守ってくれる。

私の可愛いみゅー。今度は、あなたが私を守つてくれるの？」

「アリサが決意してくれたら、絶対にアリサを守つて約束するよ。この約束は絶対に違えない」

なら。ならば。私は、みゅーとともに歩む。そう決意した。でも、すぐにその感情は揺ゆかれることになる。

『アリサ！　アリサ！』

『目を覚ましてよ、アリサ！　たつたの十歳で死んだらダメよ！』

『アリサ、戻ってきて』

『生きて。死なないで、アリサ』

『私たちの大事なアリサ。起きて。目を覚まして。こんなことで死んだりしたら、一生アリサを許さないからね』

『起きて。起きなさい、アリサ』

『早く目を覚ますんだ、アリサ。君は、ひとつまたちを悲しませるつもりか？　あの日の言葉を忘れたのか？』

揺ゆかぶるのは、大事な家族たちの言葉。家族全員が、私の生を祈つていて。

……「じめんね、ひとつね。でもね、思い出したよ。あの日の言葉。ひとつまたちを悲しませたくないんだ。本当に、じめんね」とつまたちを悲しませたくない。確かにあの日、にいさまたちの剣術の稽古を見た後で体調を崩したときに、私はそう言つたはずなんだ。

「じめん、みゅー。やつぱり、私はみゅーよりも家族を取る。ひとつまたちを、悲しませたくないんだ。本当に、じめんね」

「　いいわ。最初から、そう予想していたんだ。でも、これでさよならだね、アリサ。幸せに生きてね」

「うん。ありがとう、みゅー。　さよなら」

私にひとつ、みゅーは大切な存在だった。でも、家族のほうが大切であることを、じの日理解した。

大好きなひとつも、かあさま、にこさま、ねえさま。私はあなた

たちを悲しませたくない。

だから、今から戻るよ、あなたたちの元へ。待っていて。絶対に、
戻るから。

大好きじゃないよ

家族への愛を表すときは、どういう言葉を使う？ そう尋ねられて、みんなはどう答える？

『大好き』って答えるんだろうね、きっと。でもね、私は大好きなんて言葉で済ませるくらいじゃないんだ。私はね、『愛してる』よ。家族を心から愛してる。

ああ、でも愛してるだなんて陳腐な言葉では表せないかもしだい。それ以上に、私は家族を愛しているのだから。

「申し訳ございませんが、私の力ではここまでが限界です。あとは、お嬢様次第になります」

アリサがありえないほどの高熱を発したこの日、アリサを見たアレグラは息を呑み、そして治療に当たった。だが、アレグラの治癒魔法を以つてしても、アリサを命の危機から脱させることは出来なかつた。

アレグラは自身の持つ最大の治癒魔法を使って尚、危険な状態から抜け出せないアリサを悲しげに見つめながら、母たちにそう告げた。

生きて欲しい。そう願うのに、自分の力ではここまでが限界だった。

これで意識が戻らなければ、間違いなくアリサは死ぬ。

それが分かつていても、手の施しようが無いということが、アレグラを悲しませた。そしてそれ以上に、家族を悲しませた。

「アレグラ、本当に、手の施しようがないのー?」
「申し訳、『じやこせん』

彼らの愛する末娘アリサ。幸せに生きて欲しい、そう思つのに、今現在生命の危機に陥つている。守ると決めた可憐い子。愛しむと決めた愛しぐ。

彼らに出来るアリサを守る方法は、声をかけ、アリサに生きるという意志を持たせることだけだ。だから、彼らはとにかく声をかけ続けた。

「アリサ! アリサ!」
「目を覚ましてよ、アリサ! たつたの十歳で死んだりダメよ!」
「アリサ、戻ってきて」
「生きて。死なないで、アリサ」
「私たちの大事なアリサ。起きて。目を覚まして。 こんなこと
で死んだりしたら、一生アリサを許さないからね」

兄妹たちが、まず続けざまにアリサに声をかけ続けた。それは悲痛の叫び。心から願う、アリサの生還。それが、彼らの祈り。

「起きて。起きなさい、アリサ」
「早く目を覚ますんだ、アリサ。君は、とうせまたちを悲しませるつもりか? あの日の言葉を忘れたのかい?」

次に声をかけるは、父と母。母は泣くのを堪えながらアリサに呼びかけ、そして父はあの日の言葉を思い出させる。

アリサが言つたあの言葉。自分たちを悲しませたくない、父たちにアリサが告げたあの言葉。

そのままアリサが意識を戻さなければ、アリサは父たちを悲しま

せることになる。それを、アリサに分からせようとした。アリサが田を覚ますよ。」

家族全員が「」。アリサの未来を。とにかく祈り続けた。

「と……さま、かあ……ま、に……せ……、ね……ま」

『アリサー?』

「心配……させて、『め……なさい……』」

「ああ、よかつた、アリサ」

田を覚ましたアリサは、息を切らしながらも、家族たちに心配をかけたことを謝罪する。家族たちはそんなアリサを優しく抱きしめた。

アリサが無事だったことを喜びながら、アリサの未来の平和を祈りながら。

未だ呼吸が辛そうなアリサ。彼らはそんなアリサのために急いで、緊急時に備えて別室に待機していたアレグラを呼び戻す。

アリサの意識が戻っているのならば、アリサのその辛そうな呼吸はアレグラが何とかできるだろ、そう考えたのである。

「アレ……グラ? く……るし……。何とか……でき……る?」
「はい。すぐに楽しにしておじ上げます」

いきなり焦ったメイドに呼び出されたアレグラは、呼吸が辛そうなアリサに駆け寄り、すぐに治癒魔法をかけた。

それで、アリサの呼吸が僅かではあるが落ち着きを見せるようになる。それでもまだ、苦しそうであることに変わりは無いのだが。

「さあ、お嬢様。今はお休みください。まだお辛いでしょう。それ

に、休まないと善くなりませんからね」

「ん……。おやすみ……なさい、みんな」

「ああ、お休みアリサ」

そうしてアリサは再び眠りに落ちていく。深い深い眠り。弱りきった体を癒すための深い眠りだ。

家族たちはそんなアリサを優しく見守り続ける。きちんと目を覚ますことを祈りながら、それでも優しい瞳で見守り続けた。

が、数分後、アリサが目を覚ましたことへの安堵感からか、いつの間にか家族たちは眠りについていた。アリサの部屋で、何かに凭れかかりながら、いつの間にか完全なる眠りに落ちきっていた。アリサの無事を願っていた家族。その無事を確認できたが故か、家族たちは安心していたのだ。

だから、彼らはアリサと共に眠る。そして、同じ夢を見る。たとえアリサが悪夢を見ていたら、自分たちがそれを追い払う。そんな気持ちの中で彼らは眠っていた。

ただ、眠っている自覚はきわめて薄かつたのだが。

それでも彼らは気にしない。アリサを守るためにならば何も気にしない。アリサのためである以上何も気にすることなど無い。

全ては、彼らの可愛いアリサのためなのだから。

「どうでも、かあさま、にいさま、ねえさま……。みいんな、愛してる……、むにゃ」

そんな、アリサの寝言を聞く人間はこの場にはいない。アリサの寝言は静かに空気に溶け、風に舞い、飛び散つていった。

恐怖を見ました

いつぞやかの悪夢が再び。これは、生命の危機に陥った後、粗方体調が善くなつたアリサの気持ちである。

アリサは今、怒った母を田の前に、ベッドに座らされていた。そして目の前にはにっこりと微笑んでいながらも、それであつてアリサに恐怖感しか齎さない母がいた。

怖い。逃げたい。でも、逃げたら後が余計怖い。

これは、今のアリサの心境。今のアリサにある感情は、母を恐れる気持ちのみ。それ以外の感情を持ち合わせる余裕などどこにも無かつた。

「さあ、アリサ。今日はどうして、まだ完全に善くなつてないのに無理をしていたのかな？」

「あ……の、その……『一と……』

回答を迷うアリサに、母はにっこりと微笑んだままで急かすことなく、アリサに回答を促す。それが、アリサに更なる恐怖を植え込んだ。

恐怖を埋め込まれつつあるアリサ。それ故か、中々言葉を発することが出来なくなつていた。

母は、アリサのその様子に気づいてか、一度立ち上がり、ベッドの脇に腰かけ、アリサを抱きしめた。少しでも恐怖を取り除いて、アリサの無理の理由を尋ねるためにも。

そうして抱きしめられたアリサは、にじしてくれたのならば、怒りは少しひくこねをまつてゐるだらつ。アリサはそう考えた。故に、口を開く。

「んとね、熱も下がつたし、退屈だから魔術本取つて、読もうと思

つたの」

「読みたいのならば、誰か来るのを待つて取つてもうらえばよかつたんじやない？」

「だつて、いつ来るか分からぬもん」

母がアリサの答えに返事を返すと、アリサはその返事に文句を告げる。確かに、いつ来るのか分からぬまま待つておくのも辛かろう。アリサはだからこそ、自分で本を取りに向かつたのだ。

そして、そうやって取りに向かつているときに、ちょうどよく母が訪れ、その後の結果がこれなのである。

「あなたが体調を崩しているときは、基本的に誰かがついているでしょう。そのときには、すぐに誰か来るわよ」

「分かつても、退屈なものは退屈なの！」

アリサは少し強めに文句を放つ。が、その瞬間に母から冷たいオーラが流れ始めた。その冷たさに、アリサは震える。

震えているアリサを見た母は、まずは毛布をとり、アリサの肩にかける。そして、お説教を再開させることにしたのか、再びにっこりと微笑んだ。

「ねえ、アリサ。あなたはちゃんと分かつてる？」

あなた、今回は本気で死にかけたのよ？ どれだけ危ないところにいたと思ってるの。母のその言葉に、アリサは下を向いて俯く。アリサとて、死にかけたという事実は重く抱えている。それが、どれだけ家族たちを心配させたのかも、それはそれはよく分かつているのだ。

だからアリサは何も言い返せない。言い返すことも返す言葉が思いつかないのだ。

「だからね、完全に善くなるまではさきうちとビッグで休んでいてちょうどいい。約束してくれる?」

「んー、でも、寝てばかりなの、飽きた」

「アリサ?」

母の恐怖、再び。母は静かに、アリサの名を呼ぶのだがそれがアリサに恐怖を与えた。

「ねーえ、アリサ? サッキ、飽きたって聞こえた気がしたけど、かあさまの氣のせいがしら?」

もちろん氣のせいよね? だつて、体調を崩してゐる子がそんなことを考える余裕なんて、無いはずでしょ? う?

母の言葉はとげを持ち、そのとげはグサグサとアリサを突き刺していく。

「うう……、かあさま、容赦なさずさ」

「あら、あなたの自業自得でしょう? いいから、横になりなさい」

「でもおーー

「でもも何もないの。完全に善くなつたら誰も止めないからね」

そして諦めたのか、アリサは渋々ながらもビッグに横たわる。それからは目を瞑りはしたもの、眠りにつくことはなかつた。そして母も、娘のその様子に氣がついていながらも、無理に寝かしつけようともしなかつた。

ただただ、目を瞑つたままのアリサと、そのアリサを優しく見守る母。こうして二人の時間は過ぎていくのだった。

だが、アリサの恐怖を受ける時間はこれで終わるわけではない。

それは、兄妹や父たちが帰つて来たときに再開されるのである。

「へーえ、アリサつてば、まだ善くなつてないのに無理したんだあ
「アリサ、アレグラを呼んで注射をしてもらつ? そうすれば早く
元気になつて、動き回れるよ?」
「いやいやいや、注射はイヤだつて!」

アリサの無茶を聞いた父や兄、姉たちはしつかりと怒つた。一度
生死の境を彷徨つたアリサ。そんなアリサにこれ以上の無理をさせ
たくなかつた。

再び、生死の境を彷徨つようなことは、絶対にしてほしく、させ
たくもなかつた。

だから彼らは怒る。それがアリサのためである限り。アリサを守
るために、とにかくどんな手を使つてでも、無理をさせないつもり
だつた。

「注射が嫌なら、もう無理はしないよね?」

「まあ、するつていうんなら、止めるための手段は問わないんだけ
どね」

「にこね、ねえさま、とうさま、…………怖い」

「アリサが悪いんだよ? アリサが無理をしないと約束するのなら、
そんなことを考えたりしなくてもいいんだから」

そうしてアリサは、母のみならず父や兄、姉たちとも、完全に善
くなるまではベッドで横になつておへ、とこつ約束を結ばれることになるのであつた。

熱が下がり、かあさまたちの許可も下りた私は、ようやく自由を謳歌していた。とは言つても、自由に庭に出ることすら出来ないが、それでも家中では自由でいられる。それが嬉しかった。

「どうれま、お仕事大変?」

だから、私はのんびりと家を歩き回つ、この日は家で仕事をしていたといつさまの執務室へ足を向ける。

だって、一度はといつさまの仕事、見てみたかったんだ。今まで一度も見せてもらえなかつたし。

「どうしたんだ? アリサ。かあさまからの許可はもうつて来たかい?」

「んー、ベッドから降りてこいつに書つて許可はりやんともらつたよ?」

「やうか、ならかまわないよ。といつさま、どうしてこいつに来たんだ?」

「どうれまの仕事、一度くらべ見てみたから」

私が言うと、といつさまはこいつと微笑み、自分のひざの上に私を乗せてくれる。そして、といつさまの決裁をしていた書類を見てくれた。

でも、意味が分からぬ。何とか読めはするのだが、言葉の意味がよく理解できない。

日本で一応、まあ、引きこもつだけじつかりと勉強をしてきたのに、意味が分からぬと嘆かへるが少し悲しい。

「これは私の仕事だ。アリサが分からなくて当然だよ」

「でも、少しくらい理解できると思ったのに……」

「今はまだ理解しなくてもいいさ。成人してから理解できるようになればいいよ」

「うたまはそつやつて励ましてはくれるが、それでもやつぱり悲しい。今度、しつかり勉強させてもらおつかなあ。

私が頼めば、うたまもかあさまもオッケーしてくれそうだよね。……うん、『ご飯のときにでも頼んでみようつと。

「ちなみにアリサ。このことが理解できるようになりたいからつて、新しく勉強を始めたいと言つても、うたまは許さないからね？」
「えーつ！？ どうしてえ？ 今の勉強だけじゃ、理解できないもん。理解できるようになりたいよ」

「ダメ。これが分かるようになるのは、成人してからでいい。成人したら新しい勉強をしようね」

「うさま、けちんぼだ。大体、今の勉強だつて私がすぐ体調崩すから遅れがちだつて言つのに。それでも、勉強スピードは速くしてくれないんだよね。

大体さ、一応日本で中学三年生までは自宅学習だけど、ちゃんと勉強はしてきたんだよ？だから、今の勉強の基礎くらいは出来てるんだから、勉強のスピード速くしてほしいよ。

「ダメだよ。勉強の速度を速めたら、アリサの頭がそのスピードについていけず、体調を崩すかもしないじゃないか」
「だいじょぶだよ！ 前世で基本は勉強してるから！」

「アリサ、うたまたちは心配なんだ。君が無理をすることだが。無理をして熱を出してしまつことが」

「この間は、その熱が悪化しすぎて生死の境を彷徨うことになっただろ？　あんなの、とうさまはもう見たくないんだ。

とうさまは告げる。でも、それとこれとは別じゃないの？　私は、ちゃんと私の体調を知ってる。無理だと思つたら、すぐに先生に言うようにしてる。

ねえ、とうさま。それでも、ダメなの？

「ああ。アリサには悪いとも思うが、諦めてくれ
「とうさまのいじわる」

とうさま、本当にいじわるだ。私は学びたいのに。勉強したいのに。魔術だけじゃなくて、いろいろなことを学びたい。

それなのに、どうしてとうさまは反対するの？　私は大丈夫だって言つてるのに。

「りゅー。涙で視界が滲む。そして、それ故にとうさまが焦り始めた。

「な、泣かないでくれ、アリサ。アリサが成人したら絶対に勉強をさせるから。ね？」

「成人してからじゃ、遅いもん。もっと早く勉強したいもん！」「いいから、成人するまで待ちなさい。それがアリサのためだ」

「りゅー。目の前がさらに滲んでいく。目に溜まる涙が邪魔で、完全に前が見えない。

とうさまは、そんな私を見ながら焦りに焦っているようだ。そしてとうさまはその焦った状態のままで、私の目に溜まる涙を拭つていいく。

勉強を許してくれないとうさまは嫌いだけど、じつして優しく涙を拭ってくれるとうさまは好きだ。

そしてとうさまが涙を拭てくれたおかげで、今の私の視界は

はつもつと、鮮明になつてこむ。だから、とつもむをじつと見つめた。

とつもむが許してくれるよつと、とつもむがやめてくれと叫つたあの田ですつと見つめ続ける。

「あ、アリサ？ その田は、何なのかな？」

「懇願」

「な、何のかな？」

「とつもむが勉強のスピードを速めてくれるよつと

「…………」

じーつ。私はとつもむをじつと見つめ続ける。とにかく、何があの田を外さないとこつ心意氣でとつもむを見つめ続けた。ちなみに、結果としては

「ほ、ほんの少しだけなら早くするよつ先生に話しておこつか」

「うわあー。とつもむ、ありがとつ」

私の勝ち。やつたね。

そうしていると、突然とつもむの執務室の部屋がノックされた。それと同時に、にこにこまたちの声が聞こえる。帰つて来たのか。

「アリサ、行つておこで」

「うふー！」

とつもむに言われた私は、とつもむのひざから降りて、扉へと駆け寄る。そして、扉を開くと同時に、にこにこまたちに飛びついた。ちなみにターゲットはルウにこだま。さほど鍛えていないルウにこだまは、私の飛びつきを受けた瞬間に後ろに倒れこむ。

普通に考えればにこだまに飛びついた私にもにこだまと一緒に倒れ

るはずなのだが、私に限ってはそれがない。

何故か？ だって、騎士であるセイにいさまやカイにいさまが支えてくれるからだ。

「お帰りなさい、にいさま、ねえさま」

「ただいま、アリサ。今日は何だか嬉しそうだね。何かあった？」

「うん！ あのね……」

こうして私はにいさまたちと共に自分の部屋に戻りながら、私のこの喜びの内容をにいさまたちにも話す。

「へーえ、よかつたね、アリサ」

「うん！」

「よしよし、アリサは可愛いね」

私の喜びと一緒に喜んでくれる兄と姉。私の大事な兄姉。大好き。
愛しててる。

だから、失くさせないで。

愛してるだけじゃ、足りないけれど

愛してる。でも、それだけじゃ足りない。アリサの家族への愛を語るには、そんな言葉じゃ足りない。でも、愛してるの上は一体何なんだろう。とっても愛してない？
違つよね。

「ねえ、にいさま、ねえさま。愛してるの上は、一体何だと黙つ？」
「愛してるの上？ 突然どうしたんだい？」
「んー、だつて、にいさまたちへの愛を語るのに、愛してないじゃ足りない気がするんだもん」

アリサ、君は本当に嬉しいことを語ってくれるね。兄や姉は口を揃えてそつ抜け、アリサを抱きしめた。
兄たちは、アリサが苦しまないよう力の調整をしながらも、それでも思い切り抱きしめた。

「言葉にこだわる必要なんてないわ」
「やつそつ。それよりも、行動で示して？」

兄たちが言つと、アリサは微笑んで自分を抱きしめる兄たちに、思い切り抱きついた。

アリサが抱きしめても兄たちは無論、びくともしない。セインやカインは鍛えているので当然ではあるが、非力なアリサの力では、基本的に何の問題もないのである。

「にいさま、ねえさま、だあいすき」
「僕たちもアリサが大好きだよ。だから、アリサは僕たちが守つてあげようね」

アリサの愛の告白に、ルウインが兄妹を代表して答える。そして、兄妹たちのアリサを抱きしめる力が、強まった。

ちなみに、強めたのはセインとカインの騎士コンビ。結果としては。

「セイ……にこさま、カイにい……わも。……く……るし……」「え？ ああっ！ ゴメン、アリサ。つい嬉しくて……」

そう言ってセインとカインがアリサから離れると、すぐさまジャスリーンとエルミナがアリサを自分たちのほうへと抱き寄せる。野蛮な男共のそばに、自分たちの可愛いアリサを置いておきたくなかったらしい。しっかりと、奪われないよう抱きしめた。

「姉さん、エルミナ！ アリサを一人占めするのはずるい！」
「知らないわよ、そんなの。大体、あんたたちがアリサを苦しめたからでしが」
「姉さんの言ひとおり。自業自得ね」

アリサを抱きしめているジャスリーンとエルミナに、セインとカインは揃って文句を放つ。ちなみに、ルウインは傍観の立場を貫いている。

そして、ジャスリーンとエルミナは、文句を飛ばす一人をあつさりといなし、より一層アリサを抱きしめた。

「あー、アリサは本当に可愛いわー。アリサ、ねえさまたち、好き？」

「うん！ リンねえさまも、ミアねえさまもだあいすきー」「私もアリサ、大好きだよ」

問うたジャスリーンに、にっこりと微笑んで答えるアリサ。そんなアリサが可愛いのか、エルミナはアリサの頭に優しくキスを落とした。

その瞬間、ルワイン、セイン、カインの男性陣が過敏な反応を見せる。

「エルミナあつ！ 何やつてんだ、お前はつ！」

「何つて、キス。お風呂とかでよくしてるしね」

「うん。別に珍しくないよ」

マジギレしたのは、カイン。嫉妬に狂つた男とは、かくも醜いものか。そして、そんな弟や兄を、ジャスリーンは冷めた瞳で眺めていたと言つ。

ちなみに、アリサとエルミナのキスに関しては、本当に珍しいことではない。もともとはエルミナがふざけ気味にしていたのだが、それをアリサが喜んだので定着したのである。

ついでに言うならば、ジャスリーンもアリサが喜ぶので、よくキスをしてあげたりしている。同様に、アリサも姉たちにキスをしたりしていた。

だつて、ねえさまたちが喜ぶから。

アリサに何故姉たちにキスをするのか兄たちが尋ねると、アリサはあつさりとそう答えを返す。

「にいさまたちも、してほしいの？」

尋ねるアリサに、兄たちは大きく首を縦に振る。それを見たアリサは、期待に答え、兄たちにキスをしようとしたが、それは姉たちが阻止した。

「アリサ。異性にキスをするときは、結婚してもいいと思える相手

としかしちゃダメよ」

「兄さんたちとアリサは、結婚できないでしょう？ だから、だめ

め

あ、されるのも同じね。本当に好きじゃない相手にキスされそうになつたら、全力で逃げなさいね。

姉の言葉に静かに頷いたアリサは、残念だったね、と嘆息のような声を兄たちに向ける。兄たちは、本当に残念そうだ。

「さ、馬鹿な男たちは放つておいて、『飯食へに行こうか』

「う……うん」

「さ、一緒に行こ」

そうして残念そうにしている兄たちをよそに、ジャスリーンとヒルミナはアリサの手を取り、一緒に食堂へと向かう。兄たちは完全に置いてけぼりだ。

ジャスリーンとヒルミナは、アリサにそれを気にかけさせないとなく、ただただ、一直線に食堂へと向かうのであった。

「……お腹空いた」

きゅるるー。アリサは空腹を訴える子犬の鳴き声と共に、姉たちに口でも空腹を訴える。

それを聞いた姉たちは微笑み、そして完全に空腹なアリサのために、食堂へ向かう速度を速めるのであった。アリサが疲れない範囲内ではあるが。

その後、家族揃つての食事となり、空腹を訴えていたアリサはあつという間に平らげる」とになるのであった。

「アリサ、今日は一緒にお風呂に入る?」

そして食後、一人の姉がアリサにそう声をかけると、アリサは目を輝かせ、兄たちは恨めしそうな目でジャスリーンとエルミナを見る。

その目はいろんな意味で毒々しく、いつも簡単に母のお叱りを受けることとなる。

「ルウイン、セイン、カイン。いい大人がそんな目をしないの」「だつて!」

「だつて、何よ?」

「ジャスリーンとエルミナばかり、アリサといろいろ仲良くなっているじゃないか」

「そうだよ。僕たちだって、もつとアリサとふれあいたいの」「元

兄たちのその言葉に、母は溜め息をつく。そして、あつさうと解決策を出した。

「なら、今日は兄妹みんなで寝なさい。客間の一つに、あんたたち全員が寝れる位の大きさのベッドがあつたでしょう?」

『それいい!』

母の案に、兄たちのみならず、姉たちも賛成する。姉たちと、アリサと一緒に寝たいのだが、さすがにそれだけは出来なかつたのだ。

そしてこの日、兄妹たちは初めて兄妹全員で、同じベッドで床に就くことになった。

『おやすみ、アリサ』

「ねやあみなやこ、いじれやが、ねべれやが」

穏やかな時間（前書き）

すみません！

9時に予約するのを
忘れてました！

遅ればせながら、
更新します

穏やかな時間

初めて兄妹みんなで同じベッドで休んだその翌朝、兄や姉は既に

目を覚まし、未だ眠り続けるアリサの寝顔を眺めていた。

気持ちがよたそうに眠るアリサ。心地よさそうに眠り続ける可愛

い妹。

彼らはしづらしくアリサを見続け、そして、しづらしくして朝食の時間が近づくと、容赦なくアリサを起こし始めた。

「アリサ！ 朝だから起きて」

「もうすぐ朝」はんの用意が出来る。起きてくれ

「お腹空いたでしょ？ 起きて朝」はん、食べに行ひつ。

「ん んう……」

兄たちに容赦なく起されたアリサは、依然として目は開かないが、それでも何とか目を覚ましているのか、淡くうめき声を上げる。それから数分後、ようやく目が覚めたのか、アリサは目を開いた。

「おはよー、アリサ」

「おひやよ、にこしゃま、にこひやま」

大分目が覚めてきてるとはいって、まだ目が冷め切れていないらしいアリサ。舌がうまく回らず、変な言葉になりかけていた。

「まだ、ねみゅい……」

もつと、ねりゅう。ねかしえてよお……。

目は覚めたが、未だに眠たいらしいアリサは、目をしょぼしょぼさせながら、兄たちにもつと寝かせてくれるよう頼む。

……とこゝか、既に再び眠りの渦に巻き込まれている。

「あ、じ、ひ。寝ちやダメだよ、アリサ」

「セイインの言ひつとおりよ、起きなやー」

「らつて、ねみゅいのよ……」

「だからつて、こまま寝てたらお母さんに怒られちやひよー。」

それは、アリサを起こすための鍵言葉。[#]『母』・『怒られる』。

その一つの言葉がアリサを起こす鍵となるのだ。

そして、そのキーワードを放たれたアリサは、あつとこゝに飛び起きた。やはり、母の怒りは怖いらしく。

「今度こゝ、おはよひ、アリサ」

「おはよー、こゝでま、ねえま。晝し紅調ひどい」

アリサは文句の言葉を放ちながらも、空腹ではあるらしく、姉たちと一度部屋へ戻り、着替え、洗顔等を済ませてから食堂へと向かう。

やつして食堂へつぐと、こゝでは既に兄と両親が揃っていた。

「おはよう、アリサ。よく眠れたかい？」

「おはよ、ひとつま、かあさま。ぐつすり寝たよ」

そうかそうか。父はそう言つて微笑み、そして娘たちに着席を促す。そして三人が席に着くと、父が食事開始の挨拶の言葉を発した。それからはみんなで楽しく朝食の時間である。今日は全員が仕事が休みであるが故に、時間を気にする必要もなく、焦つて食べる必要もない。

結果としては、食べながら家族の会話を楽しむことになるのである。

「ルウイン、ジャスリーン、セイン、カイン、エルミナ、アリサ。初めてみんなで一緒に寝て、どうだつた?」「んー、楽しかったんじゃない?」

「寝る前にあれだけ話をしたの、初めてだわ」

「アリサはあつという間に寝ちゃつたけどね」

「アリサ、可愛かった」

「普段聞けない話がたくさん聞けたわ」

「眠かつたんだから、仕方ないもん!」

兄妹、各自感想を述べる。ただし、セインは事実を述べているだけであり、アリサの場合はセインの言葉に対する反論ではあるが。それでも楽しかったのか、兄妹たちからは笑顔が溢れている。それを見る母たちも楽しそうだ。

それからも兄妹たちは昨晩のことを楽しそうに話し続ける。感想や、ちょっとした文句、そして、喜びの声。

姉たちは、純粹にアリサと一緒に眠ることが出来たことを喜び、兄たちはアリサとふれあう機会が増えたことを喜んでいた。

そしてアリサは、前世では一人っ子であつたがためか、兄妹一緒に布団で眠ることに、憧れを抱いていた。今回、その憧れが叶い、本当に喜んでいた。

「またいつか、一緒に眠りたいな」

アリサのその弦きは、しっかりと聞きつけていた兄たちによつていずれ、また叶えられることになる。

ただ、この兄妹たちの話を聞いていて、面白くないのは父である。父とて、アリサと一緒に寝たい。

貴様はこの間一緒に寝ただろうが。誰かにそう突っ込まれようが気にならないほどに、父もアリサと一緒に寝たいと考えていた。

そして父のその考えは、母には見事なまでに筒抜けだったらしい、

母が助け舟を出す。

「アリサ、昨日はルウインたちと一緒に寝たんだし、今日はかあさ
またちと一緒に寝ましょつか」

「うん。とうさま、いい?」

「…………もちろんだとも。ひとつまが嫌だと言つははずないだろ?」

「本当? じゃあ、今日はとうさまとかあさまと一緒にだね」

嬉しそうに微笑むアリサ。その様子を、兄妹たちは穏やかな瞳で見つめていた。その瞳に、父が一番安堵したという。父は、はつきり言えば、子供たちが恐ろしいと感じるとそれがあった。

長男、ルウインは宰相補佐といつ、国のトップ付近に君臨する職務についている。

長女、ジャスリーンは、司書として城で働いている。

次男、セインは近衛大隊長として、その腕を国内に轟かせているし、三男、カインもセインと同様、騎士としては国に名を馳せている。

次女、エルミナも、国の薬剤所で天才薬剤師と言われている上に、多属性魔術保持者だ。

父からすると、この子供たちは出来すぎるくらいに出来た子供なのだ。故に、時折父は子供たちに恐怖を抱くことがあった。

その中で唯一、アリサはそのような恐怖感を一切与えない。幼さも手伝っているのかもしれないが、穏やかなよい子だった。

だから父はアリサを可愛がった。病弱であることも手伝い、父はほかの子供たち以上にアリサを慈しんだ。

だが、ほかの子供たちを無下にすることはありえなかつた。彼に
とつては、ほかの子供たちも可愛い子供。いくら恐ろしくても、可
愛い子供たちだから。

「今度、床にシーツを敷いて、家族みんなで一緒に寝るのもいいかも
しれないな」

父は、家族たちの前で、小さくそう呟いた。

今回の敵は？

うとうとう。ぐらぐら。 ぐう。

朝食を終え、リビングに移動して家族で話をしていたアリサだつたが、興奮して疲れたのか、突如船をこぎ始めた。

そして、家族たちがその様子に気づくと同時に、アリサは眠りに落ちる。が、その反動で目を覚ましたのか、目を開いた。

「疲れたの？ アリサ。なら、お部屋で休みなさい」

「んー、だいじょぶ。眠いだけだから」

そんなアリサの頭を優しく撫でながら、母は告げる。が、アリサは大丈夫の一点張りだった。

今、家族全員が揃つたこの空間が愛おしいらしい。

「ううやつてみんな揃つてるから、私だけいないの、いや「みんなが揃う機会なんて滅多にないわけじゃない。いつだつて揃おうと思えば揃うよ」

「でも、一人だけなの、ヤだもん」

「なら、かあさまがつこつこしてあげるかい。ね？」

「…………はあい」

そこまで言われると休まないわけにもいかないだろう。そう考えたアリサは、渋々ながらも、首を縦に振つた。

そんなアリサを愛おしく思つたのか、家族たちは揃つてアリサの頭を撫でる。そこで、アリサの頭が少し熱いことに気がついた。

そして、代表して父が、改めてアリサの額に手を当てる。

「アリサ、調子は悪くないかい？ 少し、熱が出てるようだが」

「熱？ でも、元気だよ？」

「微熱だから、そんなに辛くないのかな？」

「うん。だって、元気だもん」

「なら、しっかり休めば大丈夫だわ。でも、部屋に戻つて休もうか」「うん」

それからアリサは、父や母、兄姉たちと共に自室へ戻る。そして部屋に着くと、家族全員からベッドを示され、抵抗する意思を見せることなく、ベッドに横たわつた。

熱があるときはぐっすりと休むが賢明であることを、アリサはよく分かつてゐるのだから。

それに、今日は少し熱が出ただけなので、少し休めば善くなるであらうことなどが目に見えてゐる。だからこそ、アリサは素直に休んだのだ。

だつて、早く元気になつて、勉強したいし。アリサはそれを目的に、元気になるためしっかりと休むことを選んだのであつた。

「さ、しつかり休んで早く元気になりましょうね。……これ以上熱が上がつたら、アレグラを呼ぶからね」

「ちゃんと寝るよ。おやすみなさい」

『おやすみ、アリサ』

そうしてアリサは愛する家族の温かい視線の中で眠りにつく。気持ちよさそうに、すやすやと眠りについていた。

気持ちよさそうに眠るアリサ。父たちはアリサの寝顔を見ながらも、そこで家族の会話を楽しんでいた。

田を覚ましたアリサが寂しがらないよつて。アリサに何かあったら、すぐに対応できるよつて。

幸い、眠つてゐるアリサは魔されることもなかつたのだが。

そしてお姉。毎食の支度の完了をメイドに聞かされた家族たちは、気持ちよさそうに眠るアリサを起します。

「アリサ、もうお姉だよ。よく眠れたらうれしい。それから起きあがめ

「兄さんの言つとおりよ、アリサ。ご飯、食べよう

「えつ……、まわ？」

「わづだよ、まよ、起きあ

起こされたアリサは、田舎のすりながらも何とか田舎を開く。だが、まだまだ眠たそうだ。

「はー、降りてー。一緒に食堂に行こわー

「ん……」

それから家族たちはまだ田舎を開ききれていないアリサの手を取り、一緒に食堂へと歩いていく。アリサは若干引き摺られ気味ではあるのだが。

「ひら。アリサ、しつかり歩きなさい」

「眠い。動きたくない。……ここまでは、おんぶして？」

「いいよ、ほら」

「カイン、アリサを甘やかしきるなーの。このへりこ歩かせなさい

アリサに頼まれたカインは、快くその頼みを聞こつとする。だが、母がそれを止めた。

まあ、それもそうだろう。アリサの部屋から食堂までは、そこまで距離はないのだから。

やつした結果、アリサは兄妹たちに少し引き摺られながらも自分の足で歩き、食堂へとたどり着いた。そして、毎食のいこいを

嗅いだアリサは、そのにおいのおかげか、ぱちりと田を開く。そして、その開いた田で食事を確認したアリサは、キラキラと田を輝かせた。

「お腹空いたよう」

「そうだね。僕たちもお腹が空いた。父さん、早く食べよっ。」

「そうだな。さあ、食べよっか」

それからは食事の時間だ。空腹を訴えていたアリサは、喉に詰まらせない程度の速度ではぐはぐと食べ進めていく。

嬉しいのか、とってもイイ表情で食べ進めていくアリサ。そのアリサを微笑ましげに眺める家族たち。

幸せが漂う食堂。幸せな空気に酔っている家族たち。無論、アリサもその空気に酔っていた。

その結果が、コレである。

「どうでも、かあさま、にこさま、ねえさま 気持ち悪い」

告げるアリサに、家族たちは焦る。焦つてメイドにアリサが戻したときのための器を用意させ、その間アリサはずつと口元を手で押さえていた。

その後アリサの口元に器が用意された瞬間、限界が来たらしく、アリサは吐き戻した。先ほど食べた食事も全てが器に吐き戻されていく。

「うええ……。気持ち悪い」

「もう、戻すものはない？ なら、部屋に戻つて休みましょう」

「うん……」

それから部屋に戻ったアリサはベッドに横になり、すぐに眠る。眠りについたアリサの額は、先ほどと比べると、ずいぶんと熱くなっていた。

熱い。熱い。熱い。

頭が熱い。体が熱い。全身が熱い。

はあ、はあ、はあ。息が苦しい。きつい。

頭が痛い。頭がボーッとして何も考えられない。

何も、考えたくない。

「アリサ」

「に……さま、ね……ま?」

「ああ、ずいぶんと熱が上がったんだね。辛そうだ」

「さつきアレグラを呼んだから、もうすぐ来るよ。それまでは我慢してね」

エルミナのその言葉は正しかつたらしく、エルミナが言つてさほど立たずくに母がアレグラと共にやつて来る。それと同時に、ルヴィンたちは部屋から去つた。

それを確認して、アレグラはアリサの診察を開始する。

「今回戻したのは熱のせい、でしようか。魔力は乱れていませんし。お嬢様、今日はどんな症状がありますか?」

「頭痛い。ボーッとする。何も考えたくない。以上」

「そうですか。……では、失礼します」

そうして診察が終わると、アリサはあつといつ間に眠りについた。そして眠るアリサを家族は見守り、そしてその間に母はアレグラからいつものように薬を受け取つていた。

アリサの嫌いな苦い薬。何故、薬とは全てが苦いのか。アリサはそのことをしようつりうつ考へる。もつと飲みやすい薬はないのか、

と。

苦い薬はとにかく、飲むのに躊躇つ。だが、当然ながら飲まないと言つ選択肢は無い。そもそも、選択肢に飲まないと言つものを考えられることが無い。

気にしたらダメか。

アリサはそう考へながら、完全に夢の世界へと旅立つて行つた。

「ルウにいしゃま、あしょんで？」

「ノンは昔の夢。私が三歳くらいのときの話。私は、無邪気にルウにこさまに遊んでと強請る姿を、上から眺めていた。

……違和感あるなあ。自分はノンにいるし、下にも自分がいる。

「何をして遊ぶ？ 何をして遊びたいの？」

「かあしゃまにカードもらつたから、しょれであしょぼ？」

「いいよ。それにしても、ノンのカード懐かしいな」

幼い私は遊んでくれると言つにこさまに微笑みながらカードを取り出す。それにしても、この頃の私はさ行がうまく発音出来てなかつたのか。自分ではちゃんと言つていると思っていたのに。

それから幼い私とルウにいさまは、カードをテーブルに並べていく。それにしても、今の私が見ても何だか懐かしい。

そうて遊んでいると、リンねえさまも私の部屋へとやつて來た。それが嬉しいのか、幼い私は嬉しそうに微笑みながらリンねえさまに飛びついた。

「アリサ。何して遊んでるの？」

「カードだよ。ねえしゃまもこつしょにあしょぼ？」

「いいよー」

それからは三人でのカードゲームだ。ちなみに、このカードゲームは日本のトランプのようなものである。模様があつて、数字がある。

遊び方はさまであるのだが、あの頃の私も、今の私もよく知らない。だからどうしても一定の遊びしかすることができないくなるのだ。でも、楽しいんだろうね、幼い私。終始笑顔のままだ。

あ、だけど、すつゝい嫌な予感がする。あの頃って、これだけはしゃいだりしたら、基本的に熱を出していた覚えがある。

そして、その予感は当たる。幼い私は軽くではあるが、咳き込み始めた。

今も昔も、本当に変わらないのが若干悲しい。

「アリサ、もうお皿よ、起きなさい」

「ん……」

昼食の用意が整つたことを、メイドたちが主に知らせに走る。それを聞いた母たちは、眠るアリサを起こし始めた。

しつかりと昼食を摂らせ、薬を飲ませるために。早くアリサを楽にさせるために。

「ちゃんと」と飯を食べて、薬を飲みましょうね

「うん……。分かつてゐる……」

そうは答えるのだが、まだまだ眠たいのか、目は開かない。目を開つたまま返事をし、そして再びベッドに横たわった。

「言つてこゐる」としてゐることと、言つてゐることとが完全に矛盾している。

「アリサ、言つてゐる」としてゐることが合つてないよ。やはり、起きて」

「うひて、眠い……もん……」

「」飯を食べて薬を飲んだら眠つていいから、今は起きなさい」

「やひあ。ねりゅのあ……」

アリサ、幼児化現象発生。寝ぼけているためか、アリサは舌足らずに、まだ眠ることを家族に訴えた。その訴えが聞き入れられることは無いが。

「ダメ！ 起きなさい、アリサ！ いい加減にしないとかあさま怒るわよ！」

「やーらあ！ かあしゃま怒るのも、やらあ」

必殺・幼児語攻撃。寝惚けた瞳、そして舌足らずなしゃべり方。まさに、小さい子供。

アリサはそれで懐かしさを感じさせ、『氣を逸らさうとしたかったのだ』。寝惚けている割に、よく考えたほうだ。

まあ、そんなもの、一時しのぎにしかならないのだが。

「ほひ、いい加減起きなさい。早く食べて、早く薬を飲んで寝ようね

「ちえーつ

結果、諦めたらしいアリサは大人しく体を起こす。それからは何の抵抗の意思も見せることなく、大人しく昼食を摂った。例によつて、全部は食べられないのだが。

「はい、薬

「苦いー。不味いー」

そしていつものごとく、薬を飲んだアリサはその苦さに顔を顰めさせる。母や姉はそんなアリサに甘い飲み物を差し出し、その苦味を消せるようにしてやる。父や兄たちは、そんな母や姉、そしてアリサを微笑ましげに眺めていた。

その後、アリサが再び寝付くと、今度は彼らの食事の時間らしい。母を残して、静かにアリサの部屋を去つていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1708v/>

掴んだ新たな希望

2011年10月10日12時47分発行